
真・恋姫十無双 ～王平伝～

若輩侍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双 ～王平伝～

【コード】

N6486T

【作者名】

若輩侍

【あらすじ】

守るのに必要なのは戦いに勝利する事ではなく、戦いに負けぬ事である。

それがこの、乱世に再び生を受けた男……王平の持論である。

男は再び生を得た（前書き）

（自業自得）

自ら作った善悪の業の報いを自分自身で受ける事。

男は再び生を得た

ある所に一人の男がいた。

その男は戦っていた。平和に見える世の中の裏で、大切な物を…
…守りたいものを守るために。
かりそめの平和の下で、世界に見えない裏側で、その男は何時も
勇敢に戦っていた。

しかし現実には非情だった。

その男の上司と思われる人間が、功を焦って無謀とも思える行動
をその男と男の仲間たちに命令した。

男は上司に言った。

その様な事、する意味もなくただ犠牲を増やすだけだと。

だが、それがいけなかった……。

男の上司は戦いの狂気に飲まれていた。そしてあるうことが、男を従わせるため男が守りたいものを人質に取った。

だから、男は戦った。

戦って戦って、無謀と思われた作戦を次々と成功させた。

自分がどれだけ傷ついても、仲間がどれだけ倒れても、ただ守りたい者のために人とは思えぬ戦いを見せた。

何時からか男は不敗の将と呼ばれた。

そしてまた一つ、無謀な作戦に勝利を収めた時だった。男に最悪の知らせが入る。

男が戦っている場のその後ろ……守りたいものがあるその場所が、敵によって襲われたと。

男はすぐさま急行した。そして目にする事となる。

惨殺された人々を。その中に含まれていた、自分の守りたいものを……。

男は泣いた。泣いて泣いて、涙が枯れるまで泣き続けた。

そして男は思った。

ああ、こんなことなら、勝利など求めずにただ愛する人たちを守るためだけに力を振るえば良かったと。

上司などに従わず、戦の勝利など知らず、ただ守るために…戦えば良かったと……。

自分は戦に勝って、本当にしなければならぬ事に負けたのだと……。

その日以来、男の姿を見たものはいない。

ただ、この戦いの元凶となった存在が、男と時を同じくして姿を消した事が記録に残るのみである……。

〜王平〜

夢が終わるのと同時に目を覚ます。

ふああ…今日はまた、とても懐かしい日の夢を見たものです。

懐かしくて……けど思い出したくない、自分が今の自分になった出来事。

消す事の出来ない、自分の過去そのもの。

ふう……今日である日から、どれほどの月日が過ぎたのでしょうかね。

そんな事を思いながら、自分は床からのっそりと起き出す。うん、やっぱり朝は苦手なのです。

手早く身だしなみを整えて、荷物を持って部屋から出る。早くしなければ、今日と言う日が無駄になってしまいます。

部屋を出て宿の主にチェックアウトを告げる。

おや、どうやら路銀が大分少なくなっていましたね。

これはそろそろ、どこかで調達もとい稼ぐ必要があります。

さて、朝早くと言うには少し遅い時間ですから、町は既に活気があふれていますね。

通りを歩くオシドリ夫婦に、元気に走り回る子供たち。

良いですねえ、目覚めの光景がこれほど素晴らしいなんて。

きつと今日の自分の運勢、最高なんでしょうね。お星様五つくらいでしょうか？

自分ですか？

そう言えばまだ名乗っていませんでしたね。

自分は王平、字を子均と申します。

真名は黎明ですので、以後お見知り置きを。

ちなみにですが、自分は俗に言う転生者と言う奴です。

前世の名前は……語る必要はありませんね。

でもまさか、そんな夢物語みたいな話を、こうして自分が体験するとは思いませんでした。

でも自分、よくある神様とやらには会ってません。

ただ奴らを潰した後に普通に死んで、そしたら前世の記憶だけを保持して、なにやら三国志の世界に生まれてました。

あ、自分は男ですよ？

ちゃんと下に息子もありますので。

しかし、どうやらここは、自分の知っている三国志の世界とは大分違うようです。

だから自分も、今はまだ登場しないはずの王平なのに、こうして一人でぶらり旅をしているのでしょう。

第一に、自分が王平である事実には驚きなのですが、それについてはもう慣れました。

こちらで王平として生まれて育ってきた訳ですが、幼少の頃の話は、あの時の出来事と同じくらいに出来れば思い出したくないです。

理由としては……まあ、色々あるのです。

一つ言うなら、色々な意味でかなりスパルタンな幼少期でした。

まあ、そのおかげでこうして、危険もなく一人旅をする事が出来ているのですけどね。

前世での経験もこちらの世界では良く役立っています。

「おつおつ、兄ちゃん。何やら腰に良いもん下げてんじゃないか」

って、言ってるそばからエンカウントですか。

自分の目の前にはいかにも小者っぽい雰囲気の方が一人、いえ、

物影に仲間が三人ですか。

面倒ですね、自分は荒事はあまり好きではないのですが……。

まあ、これよりも荒事の中をひたすら生きてきた自分が言うのもおかしいですね。

「それはどうもありがとうございます。ですが、生憎これはそこま
で高価なものではありませんよ」

自分の腰に下げている柳葉刀…いえ、日本では青竜刀とも呼ばれ
てましたか。

どちらにしる、この価値は、正直自分も分かりません。拾い物
ですからね。

「へっ、嘔吐くんじゃねえよ。どっから見ても業物じゃねえか」

「そうなのですか？ まあ、仮にそうだとして、あなたは自分に何
の用なのでしょうっか？」

「決まってんじゃねえか。その剣、頂きに来たのよ」

予想はしていましたが、あまりにベタすぎてため息すら出ないで
すね。

鑑定させてくれ、くらいの捻りは欲しかったです。残念ですね。

「そうですね。でも、ダメですよ。これは自分の大切な物ですから」

「そうかいそうかい。じゃあ、力づくで奪うだけよ」

男が手で合図すると、物影にいた三人が剣を片手に出て来ましたね。

全く、いくらここが小さい村だからと言って、真つ昼間から剣を片手に強盗だなんて。

基礎教養の欠落がもの凄いですね。

闇討ちくらい考えつかないのでしょうか？

あ、闇討ちは基礎教養ではありませんか。

「おい兄ちゃん。痛い目見たくなかったら、その剣と有り金置いてけや。そしたら、命だけは助けてやるぜ？」

「お断りします。自分にはそんな筋合いがありませんので」

それに、置いてくだけの有り金も持っていないませんしね。

「そうかよ。……おい、野郎共。やれ！」

これはこれは。部下にやらせて自分は高みの見物ですか。本当に期待を裏切らない小者ですね。感心します。

「自分は荒事は好まないのですが、仕方ありません。少しお仕置きして差し上げましょう」

「死ねやあー！」

賊の一人が剣を振り上げがむしやらに突っ込んでくる。

速さはそこそこありますが、腰が入っていませんね。それでは剣筋がぶれますよ。

「ぱじっ、ゴキーン！」

「へっ？」

賊が何の音か分からないって顔をしていますね。

まあ、そうでしょうね。

剣を振り下ろそうとした手がいつの間にか自分に取られていて、そしてそのまま背中に戻されて肩の関節を外されていたのですからね。

「い、ぎゃあああ！！」

肩を抑えて地面を転げまわる賊。

まあ、関節を無理やり外されたら当然痛いでしょうね。

「お、お前、一体何をしやがった！」

「肩の関節を外しただけですよ？ さて、お次はどちらの方ですか？」

自慢じゃありませんけど、自分は朝は得意じゃないのですよ。

これ、さつきも言いましたね。

それなのに、宿を出て早々絡まれたものですから、少しイライラしてるのです。

ですから、今回のお仕置きは通常の三割増しですよ。

「く、くそっ！！」

おや、そのあなた。今、自分に剣を向けましたね？

ありがとうございます。

ゴキン！

「あがああああ！」

容赦なく肩の関節を外す。これで残るはあと二人。

「ひ、ひいい！」

敵前逃亡ですか。あなたたちから仕掛けてきておいて、流石にそれは無いでしょう。

「と、言うことで、三人目は貴方です」

シュバツと逃げる賊の目の前に回り込む。

「ひっ！？」

ゴキン！

「ぐああああ！」

これで三人。

賊が腕を変な方向に曲げながら地面に伏せて叫ぶ光景は、子供達にはあまり宜しくない光景ですね。

ほら、騒ぎを聞きつけた老若男女の人々がガン見してるじゃない

ですか。

あ、そのお母さん。子供さんの目はしっかりふさいでください
ね？

はい、宜しい。

さて、それでは手っ取り早く終わらせましょう。

「ま、待ってくれ！ 悪かった！ 俺が悪かったから！ 頼む、許
してくれえ！」

剣を捨てて土下座をする賊のリーダー。

「謝るくらいなら最初からしなければ良いのですよ。まあ、今回は
反省も込めて……」

ゴキーン！

「ひぎゃああー！！」

皆さん、等しくお仕置きです。

部下の人だけ痛い目を見て、リーダーだけが無傷なのは不公平で
すからね。

さて、最初に外した方から順番に間接をはめてっつと。

「はぎゃー！！」

「ひぎゃー！！」

「ふぎゃー！！」

となると、リーダーは、へぎゃー！！ になるのでしょうか？

ゴキーン！

「にぎやあぁー！！」

おやおや、最後の最後で期待を裏切ってくれましたか。
どこまでも予想の斜め上を行ってくれる方です。

っと、何やら向こうから誰かが駆けつけて来ますね。恐らくは警備の人でしょう。

なら、あとの事は警備の人たちに任せてしましましょう。面倒は嫌ですから。

「それでは皆さん、牢屋でしっかり反省してくださいね」

それだけ言って、人ごみの間をスルスル、さっさとその場を後にする。

なんだか紆余曲折がありました。早速仕事を探しましょうか。

さて、稼ぎの良い日雇い先が見つかるの良いのですけど……。

男は再び生を得た（後書き）

どうも若輩侍です。

懲りずにまたもや恋姫を書き始めてしまいました。

連載いくつも抱えてるのに……。

こんな作者ですが、どうぞこの作品を宜しく願います。

お守り一辺（前書き）

く急いては事を仕損ずるく

あまり急ぐと帰って失敗を招きやすい。

投稿時に連載と短編を設定ミスしたので、再度投稿し直しました。
本当に、申し訳ありません。

お守り一辺

そう時間もかからずして、自分は無事に日雇い労働を見つけた。

内容は、いわゆる工事現場と言う奴ですね。

筋骨隆々とした大工さんたちが木材を肩に担いでのしりし歩いてます。

かなりの肉体労働ですけど、その分稼ぎは良いですし、それ以前に自分は肉体労働はしてませんからね。

それじゃあ何をやっているのかって？

自分は何故か、現場監督をやっています。

いやあ、たまたま覗いた設計図面の間違いを正して、それから効率の良い作業法を提案したら、大工の親方に現場指揮を任せられました。

いやはや、これも全部、前世の知識のおかげなんですけどね。

でもまあ、任されたからには全力でやりますよ？

そうじゃないと自分の気がすみませんし。

それに、やっぱり稼ぎがいい分は、仕事をしないといけませんよね。

「あ、そこはですね。この設計図の」

恐らくはまだ新米の大工さんに、設計図通りに作業するよう指示を出す。

指示を出すだけなんですけど、全体を見渡してないとダメですから、結構疲れるものですね。

ええ、目と脳が凄く疲れます。

けどその分、なんだか色々な部分が活性化しそうですね。

やってみて初めて分かる事です。良い経験になりそうですね。
いやあ、見ていて楽しいですね。

でも決して「ウホッ、良い筋肉」とかそんなんじゃないやありませんか
らね？

これ、重要です。

「うむ、お前さん、本当にウチで働く気は無いか？」

「いえ、自分達は旅をしている途中ですから」

「そうか、それは残念だ」

などと、親方からお誘いを受けたりしてます。

定職につけるいい機会なんですけど、そこはやはり断ります。

だって、ここで職についたら旅ができなくなりますから。

そんなこんなで時間は過ぎて、日が高くなってきた頃に仕事を終
えさせてもらいました。

予定より仕事が進んだためか、それとも自分が役に立つアド
バイスを提供したからか、アルバイト代の方は結構色を付けても
りました。

親方、ありがとうございます。

ホクホク顔で今朝分かれた広場へと戻ってくると、さっきの出来
事はもう忘れ去られたような賑やかさでした。

哀れ、小者四人組。

自分は一週間ほどは覚えておきましょう。

しかし、今日は日も高くて空は快晴。

気持ちの良いお昼時ですね。

こうして見ると、案外世の中、平和な所もあるのかもしれない。その証拠に、今ここは、こうして平和な時間が流れていますし。

でも、この平和はかりそめのもの。

一時に過ぎない儂い平和。

何時まで続くかもわからない、そんな夢幻の様な時間なのでしょ
うね。

最近、町に情報収集に出ると、賊の話をよく聞くようになりまし
た。

黄色い布を体の何処かに巻いた賊たちの話。

いわゆる、黄巾党の話ですね。

いえ、何時かこの日が来るとは思っていました。

自分の持つ三国志の知識は、多少のズレ、違いがあつたとしても、
結構役に立つ事は判明しています。

もちろん、それを誰にも言っはけません。

第一、そんな突拍子もない話は気味悪がられるだけですからね。

しかしどうしましょう。

三国志では王平が登場するのはまだまだ後の事ですし、なのに自
分はここにいます。

自分は何をすればいいのか、皆目見当もつきません。

いつその事、さっきの親方に弟子入りでもしましょうか？

……何故か、いきなりあのお誘いが魅力的に感じて来ましたね。

自分がうんうん悩んでいると、何やら町が急に騒がしくなってきたね。

はて、何かあったのでしょうか？

「賊だー！ 賊の大群が、町に向かって来てるぞー！」

一人の町民が大きな声を出して町の中を走りぬける。

それと同時に巻き起こる町人の混乱の嵐。

恋人や子供連れ、皆一様に慌てふためいていますね。

しかし……ふむなるほど、賊ですか。これはまた、大変な事になりましたね。

はてさて、どうしたものでしょうか。

「もし、その人。その賊と言うのは、何人くらいなのでしょう？」

道の真ん中でオロオロしている男性を捕まえて問いかける。

情報収集は何時どんな時代でも大事です。

「見た限りだと三百はいた！ けど、この自警団は百人もいない。早く逃げないと皆殺しにされちまうぞ！」

ふむふむ、戦力差三倍ですか。

なるほど、それくらいなら何とかなるかも知れませんか。

「もう一つ、その自警団の拠点は何処でしょうか？」

「この通りを真つすぐ行つた所だ。あんたも早く逃げろよ！」

そう言うと脱兎のごとく走っていく男性。

彼、オリンピック走者になれるんじゃないでしょうか？

足、凄く速かったですね。

「はい、ありがとうございます」

聞こえてはいないでしょうけど、混乱の中に消えた男性にお礼を言っ。

さて、それではその自警団の様子を見に行きましょうか。

言われた通りに歩を進めると、そう時間もかからずに自警団の拠点につきました。

貧弱ではありますが、一応それらしい装備を纏った人がひい、ふう、みい……ざっと八十人ですか。

「くそっ！ このままじゃ賊に村を奪われて終わりだ！」

「洛陽には救援の早馬を出したが、ここは郊外よりも外れにある村だ。間に合うかどうか……」

「隊長！ どうするのですか！」

おやおや、どうやら随分と揉めているようですね。

しかし洛陽には既に救援要請を出したのですか。

隊長殿、良い判断です。

「誰か、この状況を打破できる奴はいないのか！」

ふむ、これは自分、名乗りを上げてても良いのでしょうか？

「ん？ おい、その男！」

と、思っていたら向こうから声を掛けて来ましたね。

「はい、何でしょう」

「見た所、お前、腕が立ちそうだ。俺たちに協力してくれ」

「それは構いませんが…お役に立てるか分かりませんよ？」

「戦力は少しでも多い方が良い。頼む！」

そう言っ頭を下げる隊長殿。

まあ、自分も手伝いをしようと思っていた所ですし、断る理由はありませんね。

「分かりました。それでは早速」

自警団の人たちをかき分けて、広げてある地図の前へ移動する。

「自警団の皆さん、自分に一つ、負けないようにする作戦があるのですが、聞いてもらえますか？」

自警団の人たちが驚いた顔をしていますね。

でもこの戦い、？負けない？だけならいくらでも方法はあるのですよ。

「この村は小さいながらも堀と簡易の砦を備えた、なかなか防御力

のある村です。村の入り口は東西南北の四つ。入り口は全て堀の上に掛けられた橋を使って出入りします。間違いありませんね？」

自分の言葉に、隊長殿が頷く。

「ああ。だが、それが一体、どのように賊に勝つ方法に関係しているんだ？」

「ここで重要なのは、自分たちの目的が賊に勝つのではなく、賊に負けない事です」

「賊に負けない？」

隊長殿が首を傾げる。

「そうです。先程、隊長殿は洛陽に救援要請の早馬を出したと言っていましたね。それで、洛陽太守は必ず救援に来てくれますか？」

「それは間違いない。董卓様は民たちの事をよく考えてくださっているからな」

ほうほう。自分は王平に生まれて、まだ他の三国志の有名な方とは会ってはいませんが、この世界の董卓はどうやら名君の様ですね。

「それならば宜しい。洛陽からの救援が来てくれるのならば、自分たちは救援が来るまでただひたすら守りに徹すれば良いだけです。そうすれば勝つ事はできなくても、負ける事はありません。しかし門が四つもあっては人目的にも守りにくい。なので……洛陽方面の門以外の橋、全部焼いて落とすしちゃいましょう！」

……。

おや、何でしょう、この無音の空間は？

などと思っていたら、

「「「な、なんだって————！！」「」」

そのすぐ後に、自警団の皆さんの絶叫による不意打ちを食らいました。

うーん、耳が痛いですねえ。

お守り一辺（後書き）

無理なく連載出来るよう、一話辺りの文量を抑えています。
それでも書き溜めが減っていくのは恐怖ですけど……。

それでは、次回も宜しくお願いします。

守りのち勝利（前書き）

く活潑地かつぱつはじちく

勢いが良い様子。生き生きとして元気が良い様子。

守りのち勝利

さて、ほどなくして賊を迎え撃つ準備は整いました。

洛陽方面の北門以外の橋が、煌々としながら燃えてますね。もちろん、堀の中ですよ？

「いやはや、自警団の皆さん、手が早いですね」

もしかして、あなた方は何処ぞ工兵隊か何かなのですか？

「自警団の中に大工が数人いてな。彼らが一役買ってくれた」

となると、先程の親方も自警団の一員なのでしょうか？

そうだとすれば、この手際の良さも分かります。

彼には自分がアドバイスしましたしね。

「しかし、籠るだけなら北門の橋も落とせば良かったんじゃないか？　そうすれば、賊共を手を出せないだろ」

「もし賊が何としてもここを襲おうとしていた場合だと、その方法では賊たちの動きを制限出来なくなるのですよ。全ての橋が落ちていたら、賊は何処の門を狙うか分からない。何処を狙っても苦労が同じですからね。けれども、一つでも橋が残っていれば、賊たちはそこに集中します。人間、楽な道を選ぶ事を好みますからね」

それに、洛陽方面の門を残した事にもしつかりと意味があります。

洛陽方面から攻めるとなれば、自然背中への注意がおろそかになりますからね。

救援部隊に気付かれにくくなります。

「賊が来たぞー！」

ふむ、どうやらお出ましの様ですね。思っていたよりも遅くて助かりました。

「それでは皆さん、作戦開始と行きましょう」

「」「応！」「」

さてさて、この負けないための戦い……どうなる事やら。

～賊頭～

前から目を付けてた村がもうすぐだ。

なんせ、ここはアジトにするにはもってこいな作りだし、何より下見に来た時、良い女が沢山いた。

「頭！ 前の奴らの報告だと、奴ら北門以外の橋を全部落として徹底抗戦するみたいですぜ！」

「ふん！ だったらその残った北門を破って、奴らを皆殺しにすれば良いだけの事よ。もちろん、女は殺さずにな」

「流石は頭！ よっ、最強！」

「がはは！ そう褒めるな！」

さて、気分も良くなった所だ。

なんならもつと気分をよくしてやるぜ。

「野郎共、掛かれ！」

「「「うおおおおおー！」「」「」

三百人の部下が一斉に北門を責め始める。

だが村の奴ら、やぐらの上から矢やら石つぶてを投げつけて来やがる。

「てめら、やぐらを狙いやがれ！ 火矢だ、火矢！」

部下共が一斉に火矢を放つ。

だが、やぐらにあらかじめ水が用意されていたのか、刺さったそばから消火されて行く。

「だったら門だ！ 門を燃やして、さっさと破っちまえ！」

「お頭！ それが、門がやたらと湿ってて、上手く火が付きません！」

「なにに！」

くそつ、今日は雨なんか降ってねえぞ！ こっちの手を読んでやがったのか。

「頭！ 前の方で死人が沢山出てます！」

「良いから早く門を破れ！」

「は、はいい！」

「頭！」

「今度は何だ！」

「う、後ろから……後ろから軍隊が！」

「なにに！？」

畜生、なんだよ……なんなんだよこの状況はよオ！

〜王平〜

「いやはや、賊たちが見事に慌ててますねえ。」

「まあ、ことごとく打つ手を封じられたら焦りもしますか。」

「まさか、ここまで上手く行くなんて……」

「まあ、これは相手が賊だからこそ有効な作戦なんですよ」

「いえ、賊の中でも知恵のある者なら、その限りではないですか。」

「隊長！ 遠方に軍勢です！ 救援部隊が来てくれました！」

「本当か！」

「どうやらこの戦い、自分たちは負けなかった……いえ、勝ったとも言えますかね。」

「それでは皆さん、最後の仕上げと行きましようか？」

「」「」
「」
「」

「自警団の人たちが網を持ってやぐらの上に登る。」

「漁師の皆さん、やっちゃってください」

「」「」
「」
「」

「自警団の漁師たちが素晴らしい網投げを披露する。」

「橋の上に密集していた賊たちは、投げられた網に絡まり身動きが

取れなくなつた。

「さて、後は軍隊の皆さんにお任せしましょう。とりあえずこの戦い、自分達は負けませんでしたね」

そう自分が言った途端に、自警団の人たちが喜びの声を上げる。まあ、気持ちは分かります。絶体絶命の危機を死者を出すことなく乗りきつたわけですからね。

「ありがとう、王平殿！ あなたのおかげで、この村は救われた！」

「いえいえ、自分はただ方法を示しただけ。それを実行移して村を守つたのは自警団の皆さんですよ」

それに、自分のおかげだなんて言われてしまうと、照れるではありませんか。

照れ隠しにやぐらから橋を見下ろすと、到着した軍隊によって賊たちが捕えられていく。

さて、ここには後々面倒に巻き込まれそうですから、早々に立ち去る事にしましょう。

幸い、路銀も荷物も手元にありますからね。

「おや、王平殿。どちらへ？」

隊長殿が自分の動きに鋭く気がつく。

「このままここには、あとで軍の方に色々と聞かれそうですからね。それはちょっと面倒なので、立ち去ります」

「そんな、今回の勝利は王平殿のおかげだ！　せめてお礼くらいは」

「いえ、お礼ならいりません。さっきも言った通り、勝利は自警団の手柄ですよ」

「だが！」

それでも引かない隊長殿。

うーん、いつその事、この場で気絶させてしまいませんか？

「それに、今この村から出るには、軍隊がいる北門を通る以外に道がないぞ！」

……。

……。

あ、そうでした。北門以外の橋は、全部落としてしまったのです。

となると、自分は今、この村から出られないわけですか。

「ふむ……」

とすれば、取る方法は一つですね。

「隊長殿、何処かに隠れる所は」「この責任者は誰かしら？」……

……

「どうぞやら、一歩遅かったようです……。」

「ここだ！」

隊長殿が素晴らしい拳手を見せてくれましたね。

お礼にそのまま、蹴り飛ばして堀に突き落としてやりたいです。まあ、死んでしまうのでやりませんが。

観念して隊長殿と一緒にやぐらから降りる。

「アンタがこの自警団の責任者？」

そう言つて、降りた自分の前に進み出てきたのは、緑色の髪をした、気の強そうな女の子。

ちなみにメガネ属性です。

「いえ、自警団の責任者は」

「この方です！」

隊長殿、あなた……いつペン死んでみる？

「そう。ボクの名は賈馱。今回ここに救援に来た董卓軍の軍師よ」

賈文和。

董卓の懐刀と言われる軍師。

……ちよつと待つてください。

あれ？ 自分の記憶では、たしか賈馱は男だったはずでは？

.....。

まあ、気にする必要はないですね。

男が女になるくらい、現代ではよくある事でしたし。

ええ、そうですね。

自分は至って冷静ですよ？

だから.....うん...きっとこの三国志の世界は、そういう事なので
しょうね。

守りのち勝利（後書き）

さて、三話にして恋姫登場。記念すべき最初の恋姫は詠です。

まあ、最初だからと言って特に意味はありませんけど。

それでは、次回も宜しくお願いします。

勝利のち仕官（前書き）

（後は野となれ山となれ）

自分にとって大事な事さえ終えてしまえば、後は人任せ、どうなる
うと意に介さないと言う事。

勝利のち仕官

「え、今日からここで働く事になりました王平です。以後、お見知り置きを」

拍手の音が広間に響き渡る。

さて、今の自分の状況を簡単に説明しましょうか。

賈馱と接触

状況説明

賈馱の目が光る

ヤダ、なんか怖い

洛陽に連行

董卓軍に即登用

今に至る

これで理解してもらえたでしょうか。

無理ですよね、自分もイミフと叫びたいです。

まあ、もう少し詳しく語ると、今回の戦いで作戦を立案したのが

自分だと知った賈馱が、「アンタ、ウチに来て手伝いなさい！」と言って自分を無理やり引っ張っていかうとしたんですよ。

もちろんそんなわけにもいかない理由の説明を求めたら、どうやら洛陽では文官の手が圧倒的に足りていないのだとか。

それで、今回の作戦を立てた自分に目を付けて、自分を洛陽に引っ張っていかうとしたと。

そう言う事らしいです。

さて、旅を続ける自分としてはこれは少し困ったことなのですが……しかしまあ、色々確かめたい事もありましたし、何より自分の腕をギリギリと掴む賈馱の目がもの凄く怖かったので、大人しく連行されることにしました。

だって本当に怖かったんですもの。

こうして思わぬ形で洛陽にやってきた訳ですが、何故か着いて早々、買収に董卓軍に登用させられました。

あの眼は軽く脅しです。怖すぎですよ本当に。

自分の職業選択の自由意思はいずこに？

ああ、そんなものはあの眼の前では無いに等しいですか。

ともかく、なし崩し的に董卓軍に入ることになった自分は、今こうして皆さんの前で挨拶をしていると言う訳です。

「詠が連れてきたちゅうからどないな奴かと思ったんやけど、案外普通やな」

「詠の事ですから、もっと陰湿な奴かと思ってたのです」

「アンタたち、それボクに喧嘩売ってるの!？」

うむ、目の前で女の子たちがキヤイキヤイしている光景は、凄く目の保養にはなるのですが、いかんせんその人たちが驚くべき人物なので、それも言っつてられないです。

関西弁で話していた女性がああ張遼で、学ランを着ている女の子が陳宮ときて、その向こうに立っている女性が華雄と来ました。

王座の上で笑っている女の子が董卓で、そして一番驚いたのが、赤毛で無口な女の子です。

なんと、あの三国無双の呂布でした。

もうね、ビックリし過ぎて逆に冷静でいられます。

そしてどうやら……自分が生きているこの三国志の世界、三国志の有名どころが軒並み女の子になっているみたいですね。

ニューハーフじゃありませんよ？ 純正女の子です。しかもみんな可愛いです。

もしかしたら買収だけかもしれないと思っていたのですが、流石に六人もそうだとそう思わざるを得ません。

この分だと、劉備や曹操、孫策辺りも女性なのでしょうね。全く、トンデモ三国志があったものです。

まあ、例外としては自分は男なんですけど。

やはり、王平は有名どころではないからでしょうか？

それなりに知名度はあると思うのですが……。
あ、決して自分が女になりたかったとかそういうことじゃありませんよ？

「おい、王平と言ったか？」

なんだかんだ考えていると、突然華雄が口を開く。

「はい、何でしょう華雄さん」

極めて普通に返事を返す。

ただ、今までだんまりだっただけに、華雄が喋ったことに内心少しびっくりした自分がいます。

「お前、なかなかの使い手と見た。一つ、手合わせをして欲しい」

「……はい？」

たぶん、今は自分はもの凄くアホの子な顔でポカンとしているはずです。

だって、この状況でどうしたらその様な発言が出来るのでしょうか？

手合わせって、ようは戦えって事ですよね。

確か、自分は文官として呼ばれたのでは？

まあ、それも半強制的にですけど。

「そうね。もし武官としても働けるなら、その方がありがたいわ」

そして買駆さんもどうして便乗して頷いているのでしょうか？

ハッキリ言って、そんなの嫌ですよ、自分。

「自分は武の腕などありませんよ。これはあくまで護身用です」

「護身用って言う割には、随分と大層なもんやと思うんやけど？」

「はははー、面白そうなものを見る目で言いやがりますね、張遼さん。」

「アレですか？ あなた、自分を戦わせようとしてますか？」

「……」

そして呂布さんはどうして自分をガン見しているのでしょうか？

……なんだか、果てしなく不安になってくるのですが……。

「まあ、何にしてもここじゃ話も進まんし、中庭の方に行こか」

「そうね。月、行こっ」

「うん」

「え、あの、ちょっと？」

何で自分が戦うことが決定しているのでしょうか？

自分はまだYESとは言ってませんよ!?

「お前も一緒に来い」

「ですから！ 自分はまだって、襟を引っ張らないでください！

首が…首が締まりま……」

何て理不尽！ どうして人の話を聞いてくれないんです！
って、ああ……なんだか目の前が真っ暗になって来ました。

……これ、なんてポケオンでしょうね……。

勝利のち仕官（後書き）

一話一話短いですが、感想、アドバイス、評価当をお待ちしています。

それでは、次回も宜しくお願いします。

お気に入り登録に感謝！

中庭のチラリズム（前書き）

（死中にチラリズムを求めろ）

絶望的な状況の中で、窮してじっとしているのではなく、必死にチラリズムを求めろ。

上記は王平が考えた創作ことわざです。リアルで使うと笑われま
すから、注意してくださいね？ BY 王平

中庭のチラリズム

さて、自分……何の因果か華雄さんと戦う事になってしまいました。

戦う理由ですか？

そんなの自分を知るはずありません。

なぜならいきなり、華雄が戦おうと言ってきたのですから。

困りましたねえ。

何度も言いますが、自分は荒事があまり好きでは無いのですよ。そりゃあ、ちよっとしたお仕置きくらいならしますけど、命のやり取りはどれも苦手です。

いえ、苦手と言うよりも、もう勘弁してくれと言った方がいいでしょう？

だと言うのに、まさかいきなり手合わせとは。

下手したら死んじゃいますよ？

模擬刀って言っても立派な鈍器。

打ち所が悪ければ死んでしまう可能性だって

「さて、奴は私の金剛爆斧を受け止められるか……楽しみだ」

前言撤回です。

模擬刀じゃ無くてガチ戦斧でした。

当たったら斬れちゃうモノホンでした。

「冗談もほどほどにして欲しいですよ。
軽い手合わせじゃ無かったんですか？

これじゃあ、本当に命のやり取りになってしまいます。

「あのお、流石に刃引きしていない武器を使うのはちょっと……」

「なに、気にするな。私も本気でお前と戦いたいのだな」

あははー、話が噛み合っていないですねー。

自分は嫌だと言いたいですよ？

人の話は最後まで聞きましょう、お願いですから。

「諦めい、王平。こうなった華雄は止められへんから」

「張遼さん、それは笑いながら言うことでは無いですよ？」

「あ、しもた。顔に出てしもった」

おやおや、本音が丸出しですね。

ちよっと怒って良いですか、自分。

「男だったら覚悟を決めるのです！」

「あの、頑張ってくださいね」

ああ、董卓さん。そう言ってくださるのは貴方だけです。

そして陳宮さん、そんな死亡フラグの様なセリフを吐かないでください。

むう、胃がキリキリしてきました。うう、痛いです。

「構える王平。お前の武、この私が試してやる」

試さなくても良いです……と、言いたいところですが、そう言っても見逃してはくれないのでしょうかね。

だってそんな、やる気満々笑み満々で構えられちゃ、断るに断れませんし。

はあ、凄く憂鬱です。

ですが仕方ありませんね。

「分かりました。そうまで言うのでしたらこの王平、お相手させていただきます」

腰の青龍刀を抜き放つ。

何時見てもこの青みがかった刀身は、凍てつくような鋭さを感じさせますね。

ですから、あまり抜きたくなかったのです。

「ああ、先に言っておきますが、自分は恐らく華雄さんには勝てませんよ?」

「当たり前だ。この猛将華雄の武、舐めてもらっては困る」

え、それじゃあ、もしかして自分がザックリとされてしまうのも想定済みで手合わせを申し込んだのですか?

それはちょっと酷すぎます。
全自分が泣きます。

「ああでも、自分は負けない事には自信があります」

「ほう、この私に勝つと言っか」

「いえ、たぶん勝つのは無理です」

「……どう言っことだ？」

うーん、これはどうやって説明したら良いものか……。

ああもう、面倒ですね。

「言葉で語る事に意味は無いと思うので、それは戦いの中で語りましょっ」

「いいだろう。来い、王平！」

「え、嫌ですよ」

ズルウ！って感じの音が聞こえるような勢いで、自分と呂布さん以外の皆さんがずっこけました。
素晴らしいシンクロ率ですね。
皆さんに花丸です。

「自分は守るため以外には剣を振るわない主義なんです。なので、華雄さんから掛かって来てください」

そうすれば、自分を守るために剣を振るえますからね。
自分は、もう自分から誰かに剣を振るうことは絶対にしたくない
のですよ。

自分は守るために再び力を付けたのですからね。

「ふっ、ならばこの華雄の一撃……受けてみる！」

おー、血気盛んですね華雄さん。

これは冗談抜きで、命の危機を感じます。

さて、どうしたものでしょうか。

とりあえず剣を正眼に構える。

対する華雄は戦斧を腰だめにして構えている。

恐らく初撃は、下から上への薙ぎ払い……ですね。

「行くぞ！ はああーっ！」

想定通りの軌道を描き、戦斧が唸りを上げながら自分目掛けて戦
斧が凄い勢いで迫ってきます。

武器の重さと華雄の力を考えると、とてもではありませんが受け
きるのは不可能ですね。

うーん、まあ、ここはとりあえず……。

「受け流しましょう」

ギャリン！

華雄の戦斧が火花と自分の剣が火花を散らし、金属のこすれる耳
障りな音が中庭に響く。

「なにい!?!」

おや、華雄さん。

そこまで驚く事は無いでしょう。

自分はただ、剣の腹で戦斧の刃を滑らせて受け流しただけですよ？

「私の一撃をいなしただと…!」

「はい、いなしました!」

だから今、こうして自分は立っているのですよ？

と、言いつつも、若干腕に抜けた衝撃に、腕がピリピリしています。

これ、クリティカルでもしようものなら、自分お星様の仲間入り決定ですね。

「ならば、これならどうだ!」

おお、今度は横に薙ぎ払いですか。これはまた厄介ですね。

「だったらこれは、避けますね」

その場にしゃがんで戦斧を避ける。

ゴウン!!

おおー、頭の上をスレスレで戦斧が通り過ぎて行きました。

ちょっと怖かったですね。ドキッと思いましたよ。

でもどうせだったら、可愛い子を見てドキッとしたいですね。

男にとってはそれが心の潤いになります。

今現状でも、華雄が戦斧を振る度に発生する、華雄の翻った腰巻の絶妙なチラリズムがつ！！

そして戦斧の余波で巻き起こる風が、後ろの見学女子たちにチラリズムをつ！！！！

くう、董卓さんは残念ながら服装的に期待できないですが、張遼さんならまだ望みがつ！！！！

陳宮？ あー、あの子は色々な意味で除外です。

「ちい、ならばこれで！」

つて、おおっ！？

チラリズムに思いを馳せていたら、華雄さん、いきなり戦斧の連撃を大盤振る舞いです。

もしかしてチラリズムを堪能しているのがバレました？

これは流石に…おっと！ 避け続けるのは危なっ！ い、ですねえってちよ！？

ガギン、ギャリギャリン、ギギイン！

回避が間に合わない戦斧の剛撃を、鍛え上げた動体視力を持って受け流す。

ああもう、この分だと後で剣の手入れが大変な事に……。

でもそれ以上に、今は自分の命が大変な事一步手前。

「先程からちょこまかと！」

はい、ちょこちょこ見える、ぎ・わーなどを堪能しています。

「いや、負けないように戦うと、どうしても避け中心の戦い方になってしまうのです。それからチラリズム」

「くっ……うおおおーっ！」

うわあ、戦斧のスピードが上がりましたね。さっきとは比べ物にならない速さです。

これもう、堪能する余裕が無くなり申した！

台風です！ 今、自分の目の前だけ局地的な台風です！
名づけて華雄二号。予報は薙ぎ払いによる突風の後、血の雨が降るでしょう。

「よっほっはっ！ よいしょー！」

ギン、ギン！ ギギギイイーン！

あ、追加で火花が散るでしょう。もう散ってますけど。

「ならばこれで！」

「まだ、まだ終わらんよ！」

って、カッコつけて言ってみましたが、正直限界寸前です。
まだ回避といなしで何とかなってますけど、このままだとちょっと大変ですね。

仕方がないです。そろそろ自分も攻めに出ましようか。

あ、これは正当防衛ならぬ正当攻撃ですよ？

なので「お前の主義はどうした！」とか言わないでくださいね？
これは自己防衛のために攻撃を仕掛けるのです。
なので主義には反してません。

ええ、してませんとも。

それでは、ここからは自分のターンです。

中庭のチラリズム（後書き）

書き溜めがー、消えていくー……。

マジ、恐怖っす！

それから王平が大好きな読者の皆さん。
当作品の王平は健全な男子です。
言いたい事は……それだけです。

それでは、次回も宜しくお願いします。

お気に入り登録に感謝！

王平の戦い方（前書き）

（能ある鷹は爪を隠す）

優れた才能を持っている人ほど、平素はその才能をひけらかすような真似はしないというたとえ。

王平の戦い方

く賈馱く

本当に驚きの連続だった……。

村からの救援要請が来た時、正直ボクは間に合わないと思っ
ていた。

それは距離的にもそうだし、救援があつた村の状況から考えても
そうなる事が確実だと思っていた。

けど、その予想は大きく裏切られた。

村は無事に持ちこたえていた。

確かにあの村はそこらの村よりも防衛設備は整っていたかもしれ
ない。

しかしそれを踏まえても、ほとんど被害を出さずに持ちこたえて
いるなんてありえないはずだった。

しかしそれを成し遂げたのがこの男。今、目の前で華雄と戦って
いる王平と言う名の男。

「ぬう、何故当たらん！」

華雄の戦斧をひらりひらりと舞うように避け続ける王平。

避け続けるだけでは、何時まで経っても戦いに勝つことはできな
い。

しかし、それが王平の戦い方なのだろう。

負けないための戦い。

王平は洛陽への道のりの途中、ボクにあの戦いの事をそう言った。

勝てもしないけど負けもしない。それがきつと、この王平の戦い方。

けど、何故その様な戦い方をするのだろうか？

「王平！ 逃げてばかりでは何時まで経っても私には勝てぬぞ！」

「それで良いんですよ。自分は、自分が負けないように戦うだけです。その結果、勝利してしまつたとしたら、それはそれでまた別の話です」

勝利をつゆほども求めない思考。

確かにこの男は優秀かもしれない、しかし軍という団体の中では悪影響を及ぼす存在なのかもしれない。

それは、今この場では判断のつかない事。

なぜなら、ボクはまだ王平の事を理解できていないから。

華雄が戦斧をさらに素早く振り、そして王平に向かって叫ぶ。

「勝たず負けず、勝負のつかない可能性のあるその先に、一体何が
あると言つのだ！」

王平は戦斧の一撃を今度は避けずに、手合わせ当初からやっているよう、剣を使って上手く受け流す。

もう何度もそんな事を繰り返した所為か、王平の剣には数えきれないほどの傷が走っている。

王平は戦斧を受け流した後、華雄から間合いを取って言う。

「さて、何でしょうかね。可能性の問題ですから、何かあるかもしれないし、何もないかもしれない」

ますます訳が分からない。

この男は一体、なにを考えている？

この男の主義とはなんだ？

何のために戦い、何故その様に戦うのか。

軍師である前にボクは、人としてこの男の考えが読めなかった。

……いや、たぶんそれはボクには分からず、王平自身にしか分からない事なのかもしれない。

王平と華雄の剣と戦斧の応酬が続く中、一つの違和感を覚える。

先程から、華雄の動きが全く変わらない。戦斧を振る速度も、振る時も、振る格好さえも同じ。

そして王平は、守り一片だった行動からほんの少しだけ、剣を華雄に向けて届くか届かないかくらいの距離を保つ程度に突きを繰り返している。

そのほんの些細な変化に気を取られていると、華雄が再び口を開く。

「そんな不確定な考えで勝てるほど、戦は甘くは無い！」

華雄の言う通り、戦いは常に勝利を目指して行うもの。

軍師はそのために策を練り、もっとも効率的かつ被害の少ない方法で勝利に導く。

しかし、王平に限ってはそうではない。

これはさつきも言ったように勝利に対して興味がない。

ただ、守ればそれでいい。そう言った雰囲気、洛陽へ連れて来る道中でボクは感じた。

そして今も、その雰囲気纏って戦っている。

きつとあの時戦いの時も、賊を倒すのではなく村人を守る事を優先して戦ったんだと思う。

今、王平は勝利のために戦っているのではなく、自己防衛のため戦っているだけ。

そんな中で、王平が華雄の言葉に対して口を開いた。

「自分は勝利に興味はありません。自分は守る事だけが全てです。ですからまあ……つまるどころ、自分は勝利よりも負けない事が第一で、その果てにもし勝利した場合は」

キーン！

「それは単なる……副産物です」

甲高い音が中庭に響く。その音と同時に華雄の手から戦斧が離れ、王平の傷だらけの剣が華雄に突きつけられていた。

一体、なにが起こったの!?

「手に力が入らなかったでしょう？ まあ、自分がそう言う風なるように仕向けましたからね。華雄さんの戦斧の振りを誘導して、少しずつ手に負担を掛けさせていたのですよ。だから、自分程度の腕力の一撃でも、武器が手からすっぽ抜けてしまったんです」

その言葉で先程の疑問が解消される。

さっきの華雄の同じような動作の繰り返しは華雄自身の意志では無く、王平のあの剣の突き出しによる誘導だったと言うこと。

武人ゆえに無意識に避け反撃しようとするのであるろう、そんな所を突いた王平の作戦だったのだ。

「くっ、まさかあの防戦一方にそのような意図が……」

華雄が悔しそうに言う。

「言ったでしょう？ 負けない事が第一、勝利はその副産物だと」

確かにさっき、王平はそう言った。しかしまさか、本当に守り一片で華雄に勝つなんて……。

あまりに予想外の出来事に、ボクは言葉が出なかった……。

〜王平〜

傷だらけになった剣を腰の鞘に納める。

いやあ、流石は猛将と名高き華雄ですね。

本当に、一撃一撃があの子への招待状に見えましたよ。

全く、肉体言語ならぬ肉体メールにも迷惑メール防止機能が欲しいですね。

もうあの世への招待状はこりこりです。

しかし、案外やろうと思えばできるものですね。筋肉の痙攣を狙うのも。

ようは筋肉の同じ場所に継続的に負担をかけさせればいいだけですからね。

華雄さんは両手持ちの戦斧をですから、同じモーションに誘導するのは少しばかり骨が折れましたけど。

「大丈夫ですか？」

大丈夫なのは分かっていますが、一応、華雄に声を掛ける。

「ああ。少し腕に力が入らないだけだ。問題ない」

軽く腕を閉じたり開いたりした後、華雄が戦斧を持って立ち上がる。

どうやら腕には、特に異常は見受けられないようですね。

でも……だからってもしかして、もう一戦なんて突拍子もない事

を言いだしたりしませんよね？

もしそんな事を言われたら自分、脱兎を超えて逃げ出しますよ？
こんな所で人生を終えるのは嫌です。

「守り一片で勝利を掴むか。……なるほど、それもまた一つの戦い
方か。……敵に回せばこれほど厄介な男はいないな」

ふつと微笑みながら言う華雄さん。

……。

おや、もしかして自分、今のつて褒められてましたか？

いやはや、そうだとしたらなんとも照れますね。どうしましょう？

とりあえず照れ隠しにちよつとそこまで散歩にでも

ガシィ！

なーんて事を思つてると、何やら腕に万力のような圧が掛かつて
つて……賈馱さん？

なんか目から光が消えている気がするのですが……。

「逃がさない……こんな逸材、絶対に逃がさないわよ……」

ギリギリギリ……。

どうしてそんなブツブツとつぶやきながら自分の腕を……痛い
です、マジで痛いです。

ミシミシミシィ！

「あ、あの……賈馱さん、あなたの手が先程からミシミシと音を立てながら自分の腕に喰い込んでいるのですぎやあああーっ！」

ベギヤベギヤベギヤアア！！

ヤバい！

これはヤバい！

何がヤバいって音がヤバい。そして痛みも半端なくヤバい！

マジ腕が死ぬ！ つぶれる！ メキヤメキヤ言ってへし折れるからアアア！！

王平の戦い方（後書き）

うわぁ、セコい！

そんな感想が来そうな王平の戦い方です。
格ゲーだったら間違いなく嫌われるキャラですね。待ち専ですからね。

まあ、そこも含めて王平を愛してやってください。

それでは、次回も宜しくお願いします。

お気に入り登録に感謝！

守る誓いを今一度（前書き）

（剛毅果断こつきかだん）

ゆるぎない意志を持ち、思いきって物事を行うこと。

守る誓いを今一度

うう、左腕が痛いです。

もう包帯ぐるぐる巻きです。

いや本当に、洒落にならないレベルの圧でした。

きつとあれです、ワニに噛みつかれたらあんな感じだろうな、って程のレベルです。

あ、でも幸い骨は逝ってませんでした。

アレだけ嫌な音がまくってたのに、良くこの程度で済みましたね自分。

いやはや、何気に頑丈な自分の体に感心しました。

ただ、腕に何かに掴まれたかのような手の痕が……軽くホラーです。

まあ、そのおかげで董卓さんのかわゆい笑顔と恥じらい顔をしっかりと、それも至近距離で拝む事が出来ました。

いやはや、まっこと眼福でした。

包帯を巻いてくれている時の天使の微笑みと、そのあと治療道具に足を引っ掛けて盛大に転んだ時の恥じらい顔が、自分の網膜にエターナル保存です。

ついでに見えてしまった何気におしゃれなデザインのアレは、トップシークレットなので自分の海馬に厳重保存です。

何を見たかって？ それは董卓さんの名誉のためにも言えません。

しかし、この時代の服装の平行さを改めて認識しました。

良いですよね平行。

何の捻りもない服装より断然良いです。
目の保養に困る事ありませんし。

さて、自分の戯言はこれくらいにして、何とも気まずそうな顔を
している賈馱さんのお話を聞くとしまししょうか。

「それで、王平には正式に武官と文官の両方を兼任して貰いたいん
だけど……」

「嫌です」

「即答!？」

はい即答です。

って言うか自分、最初に嫌って言いませんでしたっけ?
ああ、アレは自分の心の中だけで言っただけでしたか。
口の出さないと伝わらなものですよね、少し反省です。

「どうしてもダメ？」

引き下がらない賈馱さん。
ですが自分も譲りません。

「ダメです。もうこんな怪我はこりこりです」

包帯でぐるぐる巻きな左手をぶらぶらさせる。

うっと言葉に詰まる賈馱さん。

反則技なのは分かっていますけど、自分は武官だけは勘弁願いたいです。

調練くらいなら構いませんが、敵の矢面に立って戦うのは正直ゴメンです。

「その…さっきの事は悪かったわよ。だからその……」

申し訳なさそうな顔をして……やっぱり引き下がらない賈馱さん。ならば自分も一層譲りません！

「嫌です、ダメです、却下です。加えて言うなら拒否します」

決まりましたね、拒否する四連。これで賈馱さんも引き下がるはず。

「うう…この頑固馬鹿！　なんでそこまで嫌がるのよ！　って言うか、なんでボクがアンタにそこまで言われなきゃならないのよ！」

って、まさかの逆ギレですか！？

理不尽レベルが急上昇中。って言うか、自分だって武官になる筋合いありませんし、そもそも自分は半強制的にここに連れてこられたんですよ？

少しくらい、自分の要求を聞いてくれたって良いじゃないですか！
職業選択の自由は立派な人権の一つですよ。

基本的人権万歳！

まあ、この時代にはそんなものありませんけど。

「まあまあ。詠、王平も嫌がつとるし、そこまで無理強いしたらアカンよ」

「そうだよ詠ちゃん。王平さんは文官がいいって言ってるんだから」
「だけどお……」

張遼さんと董卓さんに諭され情けない声を出す賈馱さん。
ちなみに董卓さん。自分、決して文官の方も進んで承諾した訳ではありませんよ？

軽く賈馱さんに目で脅されてやってきましたので……。

しかしやはりと言うべきか、先に賈馱さんも言っていた通り、ここは文武官共に手が足りていないのでしよう。洛陽ほどの大都市を治めるのは、並大抵のことではありませんからね。

既に衰退が始まっているとは言え、いまだここは漢王朝のお膝元。
だと言うのに、かなりの数の役人が汚職をし、自分勝手にしているものだから、そりゃあいくら手があっても足りないはずです。

ただでさえ霊帝が死去し、劉協が献帝として即位したばかり。
まがりなりには言え洛陽を取り仕切っていた十常侍も、既に袁紹に討たれてお亡くなりになっているわけですからね。
軍部を預かる何進大將軍も暗殺されてますし、軍部と内政の両方もが柱を抜かれてガタガタな状態ですからね。

だと言うのに、よく今日まで治安維持を続けられたものです。

よっぽど董卓軍の人たちは仕事熱心なんですね。
頑張り具合がひしひしと感じられます。

まあ、自分がそれに付き合う義理も筋合いもありませんけど。
ただまあ、都の民たちを守ろうと必死になって力を尽くしている
所には共感を覚えます。

自分も守るために戦いますからね。

守る……ですか。

……はて、そう言えば自分……今、何を守るために戦っているの
でしょう？

自分を……いえ、それは当たり前です。でも、それだけでいいの
でしょうか？

確かにあの時、自分は町の人たちを守るために策を立てました。
それは、町を守ろうとするあの自警団の人たちを守りたかったか
らです。

なら、今この場で都の民たちの生活を守ろうとしている董卓さん
たちはどうなのでしょう？

働かず、害悪のみを振りまく老害多きこの都で、必死になって民のために働いている。

理由、それは民の生活を守るため。

しかしそんな人たちを守る人は、一体何処にいますのでしょうか？

煙たがりこそすれ、ましてや守ろうとする人が一体どれだけ……。

いえ、居ないでしょうね。それが今のこの洛陽。
いくら献帝と繋がりがあると言えど、献帝はまだ幼く、力などは
ありません。

誰も、守ろうとして戦っている董卓たちを助けはしない。

……。

全く、仕方がないですね。

「ふう……分かりました。そこまで言っなら文武官の兼任、やりま
しょう」

「本当に!？」

「はい」

自分が守りますよ。だって誰もやらないのでしょぅ? ならば自分がやらずして、一体誰がやるんです?

自分は大切なものを失う辛さを知っています。

そして大切なものを失う時は、その大切な人を守ろうとした人が 負けた時。

自分は、あの辛さをこの少女たちに負わせたくはありません。なので自分は、この少女たちを敗北の二文字から守りましょぅ。

誰かを守ろうとする人を守る。

どっちらそれが、自分の今の志の様な気がするので。

いえ、きつとこの思いは、かつて守れなかった人への罪滅ぼしの様なものなかもしれませぬね。

自己満足？

自分勝手？

自己中心的？

ええ、何とでもどうぞ。自分でもそんな事は分かってます。
頼まれてもないのに勝手に守ると決めて、その過程で、自分は
誰かの大切なものを奪うかもしれないのですから。

ですが、そんな事は知った事ではありません。自分がただ守りた
いと思っただから守るのです。

誰かの大切なものを奪った？
そんな事、大切なものを守れなかったその人が悪いのです。負け
たその人が悪いのです。

かつての自分の様に……。

ですから、自分は二度と負けません。自分が守りたいものを自分の全てをもつてして守るだけです。

なんて自分勝手に自己中心的でも、それが今の自分です。

他人の事まで気にしていたら、本当に守りたいものを守れなどしない。

皆、誰かの犠牲の上で生きているのが当たり前。

ならば、なんの遠慮を感じる必要がありますでしょうか？

「改めて名乗りましょう。自分の名は王平。真名を黎明れいめいと言います。あなたたちが誰かを守ろうとする限り、自分はあなたたちを守りましょう」

己の名を、改めて守りたい者たちへと告げる。

それは名乗りであると共に、自分に刻み込むべき誓いでもあるのですから。

今この瞬間、今日まで定められていたプロットは崩れ、新たな外史がプロットの黎明を告げた。

守る誓いを今一度（後書き）

ここで少し王平のキャラ説明。

王平は前世にて守りたい者を守り切れず、その事が一種のコンプレックスになっています。守る、と言う行動自体に非常に強いこだわりと言うか、一種の執念の様な物を持っています。どんな事にせよ、守る、と言う言葉が関連すると強く揺さぶられるわけですね。

それこそ、心変わりでもしてしまうレベルで。

今回の決断もそれゆえと言う訳です。

若干無理やりの感じもありますが、どうぞお許しを。

それでは、次回も宜しくお願いします。

平穩な町中で（前書き）

（平穩無事）

静かでも何も起こらず穏やかな事。

何事にも煩わされる事の無い心穏やかな状態。

平穏な町中で

どうも、王平こと黎明です。

この度自分、正式に董卓軍の文武官として仕官する事になりました。

まさか、定職にはまだ就くまいとつい先日まで思っていた自分が、いきなりエクストラハードな職場に就く事になるなんて思いもしませんでしたよ。

まあ、職場の皆さんは自分にすごく良くしてくれますし、給料も大分良いので後悔は無いです。

旅を続けられなくなってしまったのは、ちょっと残念ですが……。

「黎明、こっちの方もお願い」

ドスン！ つと追加の書簡を仕事机の上に置く詠。あ、皆さんとは真名は既に交換済みです。

これから一緒に働く同僚ですからね。

しかし……。

「詠、少し人使いが荒くありませんか？」

「良いじゃない。これくらい、アンタなら半刻で終わる量でしょ」

「それはそうですが……」

ふう、本当に…仕事はむやみやたらに張りきるものではないですね。

初日に政務を頑張りすぎたおかげで、詠に決められた自分の一日のノルマは大分多いです。

たぶん、普通の人の二倍はあります。

まあ、まだまだ余裕はありますけど。

「ボクだって、仕官したてのアンタにこんなにも仕事を押し付けることになって悪いと思ってる。けど、それがボクたちの現状。本当に、手が足りてないのよ……」

顔を俯かせて言う詠。

その表情からは申し訳なさが十分見て取れる。

「分かってますよ。ただ、少し意地悪を言いたくなっただけです」

自分なりに茶目つ気を含ませた笑みを浮かべる。

そのおかげか、詠も表情が少し軽くなった。

「……ありがとう」

「いえいえ、どういたしまして」

表情にはまだ少し陰りが残っていましたが、先程よりかは幾分マシな雰囲気にはなったようです。

人間、心の余裕は大事ですからね。

たまには、冗談の一つも聞くべきです。

特に詠は、なんでも自分で抱え込もうとする傾向がありますから。

「ほら、詠もまだ仕事が残っているのでしょうか。自分は大丈夫ですから、詠は詠の仕事をしたらどうですか？」

「うん、そうするわ。それじゃあ、追加の分もお願いね」

「了解しました、軍師殿」

「……フンッ！」

鼻を一つ鳴らして部屋を出て行く詠。

いやあ、流石はツンデレ。

本当に、詠の照れた顔は可愛いですね。眼福眼福

これで自分、あと十年……は言い過ぎですが、少なくとも半日は戦えます。

さて、それではこの萌えねるぎーを糧に、さっさと仕事を終わらせてしましましょうか。

自分も、何時までも机にかじりついていたくは無いですからね。

筆を動かすスピードを上げる。

詠には悪いですが、実はこの量でしたら四半刻で終わります。

現代で言う30分ですね。

それでは、自分の自由時間延長のためにも、もう一頑張りしまし
よう。

任された分の仕事を全て片づけ、鼻歌を歌いながら城下へと繰り出す。

町の活気にあてられて、自分もなんだかルンルン気分です。いや本当に、洛陽は賑やかですねえ。

子供は元気に走り回ってますし、腕を組んで歩く恋人同士も良く見ます。

地方の街では見られなかった珍しい物も多々ありますし。

単なる散歩にも、ウィンドウショッピングにも最適な街ですね。

歩いていて飽きが来ませんから。

これもみんな、月様たち董卓軍の皆さんの努力の結果ですね。

しかし、こうして素晴らしく見える町並みの中にも闇は紛れこんでいます。

今自分が立っているここ…大通りから少し外れた所にある、小さな民家。

一見何の変哲ありませんが、実はここ……地下室がありました。先日まで、そこで奴隷の売買が行われていました。

全く、ふざけてますよね。

なので自分、この前そこにお邪魔させてもらいました。

無論、奴隷を買いに行った訳ではありません。

そこにいた買い手と主催者に丁寧にお仕置きをしに行きました。今も彼ら、城の牢でうなされてるんじゃないですかね。

まあ、そんな過ぎた事は置いておきましょう。

ハッキリ言って、奴隷商人とその買い手の近況報告など言いたくもありませんし。

ちなみに奴隷になっていた方たちは、望む人は賃金を持たせて故郷に送還。

働く意欲のある人は、住み込みで城で働いてもらってます。

いやあ、文官の皆さん、人手が増えて嬉しそうでしたね。

詠なんかは一人物陰に隠れてガッツポーズしながら踊り狂っていましたがね。

アレは流石に自分もドン引きでした。キャラが違い過ぎです。

気持ちは分からなくも……ないんですけどね。

さてさて、自分もそこまで自由時間があるわけでもありませんし、手早く用事を済ませてしましましょう。

昼下がりの人ごみの中を、かき分けながら目的地を目指す。

到着したのは剣と鎧の形をした看板を出す店。いわゆる鍛冶屋です。ね。

来た理由は言わずもがな、青竜刀の修理です。

華雄との手合わせでかなりダメージを負ってしまいましたからね。

「もし、宜しいですか？」

「おう、いらっしやい！」

店の奥から出てきたのはいかにも鍛冶屋なナイスミドル。太陽に照らされた太い上腕がたくましいです！

まあ、それはどうでも良いですね。

「この剣の修理を依頼したいのですが」

とりあえず腰から剣帯ごと鞘を外して鍛冶屋の前に差し出す。鍛冶屋は青竜刀を受け取ると、鞘から剣を抜き、そして目を細める。

「一体どんな使い方したらこんな風になる。傷だらけじゃねえか」

「直せませんか？」

「いや、傷は多いが刀身の強度に響くほどのもんじゃねえ。一、三日で直せるぜ」

おお、それは良かった。

自分としても得物が手元にはいのは些か不安ですからね。いつ襲われてもおかしくない時代ですし。

「そうですか。では、宜しく願いますね」

「おうよ。こんな業物、滅多に見ねえからな。腕がなるぜ」

そう言っていそいそと工房らしき部屋へと引つ込む鍛冶屋。
あの時の賊も、あの青竜刀を業物だと言っていました。が、それほ
どまでにアレは業物なのでしょうか？

旅の途中で見つけた、ただの拾い物なんですけどねえ。

まあ、別に悪い事では無い。むしろ良い事なので、ラッキーと思
っておきましょう。

鍛冶屋を後に再び町中へ。

さて、今日はもう特にやる事もないですけど、どうしたものでし
ょうかね。

このまま城に戻って仕事に従事するものアレですし、夕暮れま
で警邏がてらの散歩でもしましょうか。

「お、黎明！ こっちやこっちー！」

と、思っていた矢先に誰かからお呼ばれしてしまいました。

この声は恐らく霞ですね。声が聞こえてくる場所が酒屋ですから
なおさらです。

「こんにちは、霞。……真昼間からお酒ですか？」

「ええやん。ウチ、今日非番やもーん」

茶目っ気たつぷりで応える霞。相変わらずのチラリズム精神を無

視した服装ですね。

自分はまだ良いですが、周りの男共は顔が真っ赤になってます。ちなみに霞のチラリズムの狙い所は袴の腰サイドだったりします。

しかし昼間から飲酒とは、本来ならば將軍にあるまじき行動ですがそれも、非番であるなら話は別。

休日くらい、羽を伸ばしたいのはいつの時代も同じですからね。

自分も仕事を手早く片づけて、今こうしてのんびりしているわけですし。

「黎明はこないな時間にどないしたん？ 確かまだ仕事中的はずやろ？」

「自分の仕事なら既に終わりました。今日は自分の得物を鍛冶屋に直しに出しに来たのですよ。今はその帰りです」

「あー、そう言えば華雄との手合わせん時、えらい無茶な使い方しとったからなあ」

若干呆れを含んだ声で言う張遼。

自分からしてみれば、真昼間からお酒をかつくらっている霞の方が、よっぽど呆れるのですけどね。

まあ、それは言いません。休日を満喫中の霞には野暮つてものですから。

「けど、そう言うことなら、頼もつ思つてた手合わせはしばらくは無理やなあ」

洒落にならない事を杯を片手におもしろくなさそうに言う霞。

本当に、剣を無茶に使って良かったです。

剣には悪いですけど、おかげで自分、しばらくは命の危機にさらされる事は無くなりました。

どうもありがとうございます。

「得物があっても頼まれませんよ。自分は手合わせは面倒なので嫌です」

「いやーや。絶対に黎明と手合わせするねん！」

「はいはい。お酒と冗談は程々にしてくださいね。それでは、自分はこちらで」

「あ、黎明も一緒にお酒飲も」

「却下です」

霞の提案をバツサリと斬り捨てる。

後ろから何やら罵り声が聞こえる気もしますが、きつと空耳です。すね。

自分、何も罵られるような事はやっていませんから。

さてさて、今日の夜辺りには黄巾党征伐に向かった恋と華雄が帰ってくるでしょう。

恐らく体中埃まみれでしょうから、温かいお風呂の準備でもしておきましようかね。

平穩な町中で（後書き）

はい、軽い日常でした。

二、三話の後、王平が本格的に動く事になるかも？

それでは、次回も宜しくお願いします！

お気に入り登録と感想に感謝！

平和と王平（前書き）

（一刻千金）

貴重な時や楽しい時が過ぎ去りやすい事を惜しんで言つ言葉。

平和と王平

時間の流れとは早いもので、今日で自分が董卓軍に仕官してから約一カ月になります。

いやはや、忙しくも楽しい仕事をこなしながらでしたからあっという間でしたね。

もう本当に、この世界は居心地が良過ぎて嬉しいですね。もう自分、毎日がウハウハです。

自分が求めてやまなかった平穏な時間が、今この場所では送る事が出来るのですからね。

自分でも最近、平和ボケが入ってるなあ、なんて自覚してしまうほどです。

本当に、自覚した時は驚きました。

ああ、驚いたと言えばもう一つ。

実はこの前の黄巾党征伐で、恋が黄巾党を三万人斬りして戻ってきました。

いや、三万人ってなんですか？

ちよっとした町の人口より多いじゃないですか。

確かに自分の知識でも呂布はとてつもない武将であるのは知っています。さすが、流石に万は驚きですよ。

まあ、相手は農民上がりの雑兵ですから恋が出陣すればそうなるものなのかもしれません。

あのいつもは純真無垢な恋の事を思うと、あまりそうは思いたくないのですけれどね。

いやはや、万斬りしたのもアレですけど、なにより恋が無事で良かったです。

まあ、華雄と二人で血まみれになって帰って来た時は肝を冷やしましたけど。

華雄なんかは、何処の大佐の専用機だ、みたいな状態でしたからねえ。

あまりに酷かったものですから、あらかじめ用意してあった風呂に帰って来て早々に二人をぶち込みました。

女の子たる者、身の清潔には常に気を配るべきですからね。

ただ、その時に恋と一緒に風呂に連れ込まれそうになったのは、正直焦りましたよ。

何故だか分からないですけど、自分は恋に凄く懐かれてるんです。確かにその事は自体は嬉しいですが、この歳になって一緒にお風呂は、流石に教育的指導が入りそうなので遠慮してもらいました。

ちよっぴり寂しそうにしていた恋の姿に罪悪感がビシビシでしたけどね。

でもそこは自分、恋の為にと痛みをこらえました。代わりに近くにいたねねを放り込みましたから、まあ大丈夫だと思います。

って言うより、あそこで一緒に入ったら、男としてもアレですが、自分が華雄に殺されてしまいます。

普段は結構男勝りな華雄ですけど、ああ見えて乙女な所もあったりするんですよ？

特に胸囲に関してはある種の禁句になっています。

これ、董卓軍全軍の掟です、法律です。

言ったが最後、華雄裁判長に死罪を直々に言い渡されます、実行込みで。

以前にあつた戦いで、黄巾党の可哀想な人が華雄の胸が小さい事を馬鹿にしたら、その時の戦場では血の雨が降ったそうです。

その時の華雄……まさに修羅か羅刹の様だったのだとか。

いやはや、まっこと怖い事ですねえ。

やはり女性は怒らせるべきではないです。それは誰にでも言える事ですけど……。

「ちょっと黎明、聞いてんの！」

そして怒らせてはいけない人が目の前にもう一人。

自分達の軍師、賈文和こと詠です。彼女は絶対に怒らせてはいけない気がします。

これ、本能が言ってるんですよね。いや、本当にです。

「はい、聞いてますよ。その件についてならこっちの書簡に詳細を纏めておきました」

「えっと、これね。……うん、完璧ね。ありがとう」

「いえいえ、どういたしまして」

そつえば最近、仕事が大分楽になりました。仕事の量が減ったんですよ。

やはり人手が増えたおかげですね。

自由な時間が増えて、自分も両手を上げて万々歳です。

「それじゃあ、今日はもう上がって良いわ。ご苦労さま」

「はい。それでは」

筆記用具を片づけて執務室から出る。

さて、今日は特にやる事ありませんし、どうしたものでしょう。

タツタツタツタツ……だきっ…。

廊下を悩みながら歩いていると、足音の後に自分の背中に軽い衝撃。

加えて柔らかな母性と温かい体温が背中にピッタリくっついて感じられます。

つまり、誰かが背後から走って来て自分の背中に跳び付いた訳ですね。

董卓軍の中でそれをするのは、自分が知る限りただ一人……。

「どうしました、恋。何か自分に用ですか？」

赤毛に二本の可動式アホ毛を持つ少女。

飛將軍呂布こと恋の顔が、自分の肩越しにありました。

「……………（フルフル）」

自分の問いに首を横に振る恋。

「では、どうして自分の背中に抱きついているのでしょうか？」

「……何となく」

そうですか、何となくですか。

それでは仕方がない……訳ないじゃないですか。

「ダメですよ恋。男女七歳にして席を同じうせずと言います。恋ももう少しその辺りを意識しなければ」

「……??？」

恋が首を傾げる。

ああ、癒されますね。マイナスイオン出まくりです。

って、そうでは無くて、

「あー、つまりですね。自分は男で恋は女です。ですから」

「……??？」

ふむ、ダメですねこれは。

まあ、恋はこう言うことに関しては全くもって興味がないと言っ
か何と言うか……。

つまりは恋は、この手の方がてんでダメな訳です。

ふーむ……ここは一つ、自分が勉強を見てやるのもありでしょうか？

「黎明、恋の家に行く」

「……ふう、分かりました。今日一日、付き合いますよ」
いえ、恋は今のままが一番ですね。
何処までも純粹で、一緒にいて癒される。
ほら、その証拠に、今の自分の顔は笑っていますから。

恋を背負いながら恋の家への道歩く。

町ですれ違う人たちの温かい視線に見守られながら無事に恋の家へ。

いやはや、なかなかどうして気恥ずかしいものですね。
妹を持った兄の気持ちとはこの様なものなのでしょうか。

「恋、着きましたよ。降りてください」

自分の背中で寝息を立てていた恋に声を掛ける。
しかしまあ、よく自分などの背中で寝られますねえ。
そこまで寝心地の良いものでもないでしょうに。

「起きてください、恋」

再度声を描ける。もぞもぞと動く恋。

これはもしかして、起きてくれませんか？

「……ん」

返事はすれども降りてはくれない。つまりはまだ寝ていますね。

ふう……この状態から恋を降ろすのは、正直言って困難です。

もし無理やり降ろそうとしようものなら、恋が自分に必死にしがみついてくるんですよ。

さらに悪い事に、寝ぼけた状態での事ですから力の加減がありません。

つまり恋の、あの方天画戟を軽々と振り回す力が自分の体に掛かる訳でして……。

以前無理やり降ろそうとしたら、それはもう、体が縦に真っ二つになるかのような万力で抱きつかれました。

ジークブリーカーならぬ呂布ブリーカーですね。

本当に、あの時は洒落にならなかったです。

仕方がありません。このまま家の中まで行くしかないようです。

恋を背負ったまま恋の家へと足を踏み入れる。そして聞こえてくる、いくつもの駆け足の音。

「ワンッ！」

そして自分の胸に飛び込んできたのは、スカーフを巻いた一匹のコーギー犬。

恋の飼い犬のセキトです。ちなみに足元には他にも動物が多数。

「ワンワン！」

「セキト、嬉しいのは分かりましたから、顔を舐めるのは止めてください。くすぐったいですよ？」

「ワンッ！」

ああもう、可愛いですねえ！ 思わず抱きしめたくになります。まあ、残念ながら今は出来ませんが……。

ちなみに自分、現在右手で恋のお尻を支え、左手でセキトを抱きかかえている状態です。

これ、大分と言うかももの凄くキツイんですね。流石に腕がプルプルしてきました。

「……ん、着いた？」

セキトの声にようやく恋が目覚めます。

「はい。着きましたから、そろそろ降りてください」

「……分かった」

今度は素直に降りてくれる恋。

さて、これでようやく右手が解放された訳です。

なので……。

「ス〜リスリスリスイイイ！」

「キャウウウーーン！」

猛烈な勢いでセキトに頬ずりをする。

ああ、この素晴らしい毛並みは何時頬ずりしても気持ち良いですねえ。

グッドです。もう最高です。セキト、お持ち帰りで良いですか？

「だったら、黎明がここに住めば良い」

「いやはや、恋。流石にそれはダメですよ」

まだ少し眠そうな目をしながら恋が言う。

ふむ、確かにセキト分を補給するのにこれ以上の条件はありませんが、やはり年頃の少女二人の住む家に、野郎が住みこむのはいただけません。

男女七歳にして……って、これさっきも言いましたね。

そういえばさっき、自分、恋にモノローグにツッコまれましたね。はて、恋は読心術でも使えるのでしょうか？

「ただいま帰りましたぞー！」

元気な声と共にねねが帰宅。

手荷物からするに、町に買い出しにでも行っていたのでしょうか。本当に、ご苦労さまです。

「む、来ていたですか、黎明」

「はい。お邪魔しています、ねね」

「ちょうど良かったのです。黎明、昼食を作るのを手伝うのです！」

「おや、もうそんな時間ですか。時が流れるのは早いですねえ。」

「確かにお腹の虫が空腹を訴えているようですし、そろそろお昼ごはんにするのでしょうか。」

「ほら、恋。昼食を作りますから手伝ってください」

「わかった」

「そうして三人で仕事を分担して昼食を作る。」

「セキト達の分も含めて大変な作業ですが、この充実した時間が自分には好きです。」

「生きてると言う事がしつかりと感じられますし、それに何より、こうして誰かと料理をするのは楽しいですから。」

「まあ、恋の独創的な調理には少し困る事もありますけどね。」

「って、言ってるそばから包丁がぎゃあああー！ー！」

「瞬間的に首を縮める。そしてその瞬間に自分の首があった場所を通り過ぎていく出刃包丁。」

「どうやら恋が、また力の加減を誤ったみたいです。」

「……こんな感じで、何気に危険で騒がしい呂布家の台所です。」

色々大変な事もありますけど、もし叶うのなら、こんな時間が何時までも続くと良いですね。

自分、恋にはもう少し、勉強のイロハを教えてあげたいと思っていますし。

いえ、別に自分の命が危険に晒されるのを防ぐためとかじゃありませんよ？

「黎明、こっちは完成したのですよ」

「恋も出来た」

「そうですね。それでは、自分もすぐに」

おや、少し考え事をしていたらいつの間にか二人の方が完成したみたいです。

これは自分も、早々に完成させなければ。

二人に負けないよう、炎の上で鍋とおたまを躍らせる。

さて、今日のお昼ご飯もじきに完成します。

セキト達も含め、みんなと一緒に美味しくいただくとしましよう。

そんな心の声が届いたのか、セキト達が一斉に、ワンツッ！と吠えた。

ふう、やはり今日も……この家は平和ですね。

平和と王平（後書き）

恋可愛いよ、恋。

今回の話が恋様ファンの皆様の逆鱗に触れないか心配……。

それでは、次回も宜しくお願いします。

お気に入り登録と感想に感謝！

時代が動き出す時（前書き）

（緊禪一番）
きんこんいちばん

気持ちを引き締め、固い決意で物事に取り組む事。

時代が動き出す時

洛陽に凶報が届きました。

はい、お察しの通り、反董卓連合が結成されたとのことですよ。

檄文の差出人は袁紹。内容は、悪政を敷き民を苦しめている董卓を打ち倒し洛陽を解放しよう……とまあ、嘘八百も良い所です。

この文の真意を語るとするならば、董卓が洛陽を治めているのが気に入らない、なので追い出してしまおう。袁紹の馬鹿らしい嫉妬……そんなところでしょう。

とりあえず、自分が今一番言いたいことは……自分の平穩を返せ！

なんなんですか一体。

人が折角、平穩な時間をのほほんと過ごしていたと言うのに、ふざけるんじゃないやありませんよ。

それに檄文のこの内容……悪政を敷いている？

はっ、洛陽をここまで復興させたのは自分達ですよ？

もしこれを悪政と呼ぶなら、世の全ての政は悪政と呼ばれることになるでしょう。

全く、自分達がどれほど苦労したかも知らずに、ただ気に入らないからとこんなでっち上げを流すなど……気に入らない、そんな奴らの方がよっぽど気に入らないです。

しかし、残酷なほどにこの檄文は、各地で息をひそめていた諸侯が動き出すのに、これ以上ないと言って良いほど都合のよいもの。

例え洛陽の実態を知っていたとしても、各地の諸侯は間違いなく

連合へと参加するでしょう。

本当に、どうしてこうも、人の歴史は残酷なのか……。

なぜ正しき者が滅せられ、欲ある者が利を得るのか……ふざけて
いる。

ふざけ過ぎているでしょう！　こんな事！

しかし、ここで叫んでいてもどうにもならぬ事。

既に時代は戦国乱世、群雄割拠へと動き出しました。

もはや、大陸の何処にいても平穩などと言うものはありはしない。
あるとしても、それは一時に過ぎない仮初のもの。

今は平穩に見えるこの街も、すぐに戦火へと巻き込まれるでし
ょう。

ならば、戦うしかありません。

向こうが牙を向けるのならば、自分は自分達を守るために戦うの
み。

それしかもう、術は無いのですから。

王座の間に將軍勢が集結する。

いつもは賑やかなこの集まりも、今は皆が顔を険しく、重い空
気が漂っている。

そんな中で、詠が一番に口を開いた。

「みんな、今日集まってもらったのは言うまでもないけど……袁紹を筆頭にして、反董卓連合が結成されたわ」

反董卓連合……その言葉に、月様が顔を悲しげに曇らせる。

他の將軍たちは、みな一様に怒気を纏っている。

「それで、どないするんや？」

「迎え撃つ、ただそれだけよ」

向こうから仕掛けてくるのですから、当然迎え撃つ権利が自分達にはあります。

正当防衛と言つ言葉がありますからね。

向こうが本気で攻めてくるのなら、こちらも本気で抵抗します。これ、当然です。

さて、遠征軍となる以上、連合も最短ルートで洛陽に向かってくるでしょう。

そうになると、自分たちが取る作戦は一つですね。

「？水関と虎牢関で迎え撃つのですか？」

「ええ。あの二つは大陸屈指の堅牢さを誇る砦だもの」

「それにこちらには恋殿もいるのです！ 連合などに負けるはずがないのです！」

恋が強いのは置いておくとして、確かに？水関と虎牢関は堅牢な

皆。

防衛戦をするにあたって、これ以上の場所は無いでしょう。

この二つがあれば、下手さえ打たなければ連合に負けることはありません。

まあ、戦場は何が起こるか分からない魔の空間ですから、絶対という言葉はありませんけどね。

「詠、確認されている諸侯はどうですか？」

「袁紹とその従姉妹の袁術。西涼からは馬騰と、それから幽州の公孫瓚。陳留の曹操と、最近活躍している、劉備軍にも気を付けた方がいいかもしれないわ」

なるほど、これから先に頭角を現す英雄たちが勢ぞろいですか。詠の口からは出ませんでした。恐らく袁術の下には孫策もいるでしょう。

全くもって、凄まじい編成ですね。驚きを通り越してしましますよ。

「大分厄介ですね。……兵数の差は？」

「ほぼ互角と言った所よ」

ふーむ、互角ですか。

微妙ですね。なにせ、兵数は同じでも率いる将の数が圧倒的に違います。

それに連合には、周瑜や荀？といった軍師たちもいるはず。

この戦い、そう簡単にはいかなそうですね。

「分かりました。して、詠はどの様に考えているのですか？」

「ボクは徹底した籠城戦で、連合の兵糧切れを狙うつもりだけど……黎明はどうなの？」

「自分も同じですよ。あえて正面からぶつかる必要性も感じませんからね。そんなのは面倒なだけです」

防衛の利を捨ててまで野戦に持ち込むなど、下策中の下策。

そんな自殺願望がある人は、今すぐ城壁から飛び降りてください。

「なので華雄、どんなに挑発されたとしても、決して飛びだそうなんて思わないでくださいね？」

「な、なぜ私に言う!？」

「いや、アンタ以外に言う相手おらんやん」

「そうですね」

おやおや、案外余裕があるのですね皆さん。

全く、もう少し緊張感を持ってください。ほら、詠が呆れた目でこちらを見えていますよ。

「はあ………本当に大丈夫かしら」

「でも、変に気を張っているよりは良いのではないですか？」

「……それもそうね」

詠と並んでギヤースカ言い合っている三人を眺める。
そんな三人のおかげか、月様も笑顔を浮かべていた。
ちなみに恋は相変わらず……自分の背中にくっ付いてますけどね。
本当に、何時の間について感じます。

「それじゃあ、配置について言うけど……？水関には黎明と華雄。
虎牢関には恋と霞、ねねを配置するわ」

「確かに、これ以上バツチリな配置は無いなあ！」

笑顔で言う霞。それ、自分に完全に喧嘩売ってますよね？
高いですよ？ 自分の喧嘩買い取りは。バイク王よりもずっと高
いですよ？

「黎明、華雄の抑え役……お願いするわ」

「分かりました。その代わりに、今度何か奢ってくださいね？」

「ええ、何でも奢ってあげるわよ」

「言いましたね、約束ですよ？」

「軍師に二言は無いわ！」

これはこれは、なんと素晴らしいお言葉。

此度の戦い、絶対に守り抜かなければなりませんね。
帰ってきたら、この前見つけた美味しそうな高級料理店で、是非
とも奢ってもらいましょう。

もちろん、月様たちも含めた全員分。

「ごめんなさい、皆さん。私の所為で……」

月様の申し訳なさそうな声が王座の間に響く。

「月の所為やない。悪いんは因縁ぶっかけてき連合の奴らや。それに、ウチらは月が好きやから、月のために頑張るねん」

「そうなのです！　ねえたちは月殿に何処までもついていくのです！」

「恋が絶対に、月を守る」

「我が戦斧は董卓様のために。董卓様のために戦える事こそ、我が喜び」

霞たちの言葉に月様が涙をこぼす。

本当に良い仲間を持ちましたね、月様。

そして霞たちも、こんなにも優しい上司のもとで働けて…幸せ者ですね。

ふと、詠に視線を向けると、そこには目を若干赤くした詠が。

「おや、詠。嬉し泣きですか？」

「う、うるさい！　目にゴミが入ったのよ！」

「おやおや、それは大変ですね」

詠の下手くそな嘘に、思わずくつくつと笑ってしまふ。

生きるか死ぬかの戦の前だと言うのに、何処までも緊張感が無いですね。

そう言う自分も大概なのでしょうけどね。

でもまあ、何時までもこうしている訳にも行きませんし。
ここは一つ、張り切り過ぎずに行きましょうか。

「さて、程良く和む事も出来ましたし……行きましょうか……」

……腹「こ」らえに「こ」

「「「「「はい?」「「「「「」

自分と恋以外の全員が、一斉に八毛る。

その直後にぐうぐうと空腹を訴える自分のお腹。

いや、実は今日は寝坊して朝食抜きだったのをすっかり忘れてました。

おかげで自分の満腹ゲージはレッド寸前です。

「って、おや？ 皆さん、どうしてそんな呆れ顔をしているのでしょうか？」

月様は目をパチクリさせてますし、霞と華雄とねねと詠は四人そろってため息ついてますし。

あ、恋だけは同意の顔をしていますね。良かったです。

「なんや、一番緊張感が無いんは、黎明やったんやな」

「うん、そうみたいね」

「……流石のねねも予想外だったのです」

「むう、王平は相変わらず良く分からん男だ」

なんだか散々な評価が聞こえてきますが、自分、何か可笑しなことでも言いましたでしょうか？

腹ごしらえは生活の基本。特に可笑しい事ではないと思うのですが……。

まあ、別に良いんですけどね。自分、あまりそう言うことは気にしないので。

さてさて、戦場に向かう前に、腹ごしらえをして英気を養うとしましょかね。

時代が動き出す時（後書き）

書き溜めが無くなってしまった……。

なので連投は今日で最後になるかも。

それでは、次回も宜しくお願いします！

読者の皆様の感想を心よりお待ちしております。
お気に入り登録と感想に感謝！

戦場に絶対は無し(前書き)

く忌諱に触れる(ききにふれる)く
人の忌み嫌う発言をして、その人の機嫌を損なう事。

戦場に絶対は無し

袁紹によって放たれた檄文をもとに、各地の諸侯によって反董卓連合が結成される。

根拠なき大義名分の裏に隠された諸侯たちの野望。

謂れの無い罪を被らされた董卓に迫る諸侯の牙。

そのあまりにも理不尽な行いに対するため、董卓軍の将たちは剣を取る。

決戦の場所は？水関と虎牢関。

この洛陽を守る要害の地で、今まさに董卓軍と連合軍の戦いの火ぶたが切って落とされようとしている。

そして……

そんな董卓たちを守るため、王平もまた、？水関へと姿を現していたのだった。

〜王平〜

？水関に布陣した自分たちが目にしたのは、それはもう溪谷内に溢れる人、人、人でした。

いやはや、城壁の上からだとある意味絶景ですね。

ヤマケイのピックアップに乗らないでしょうか？

いや、こんなゴチャゴチャした風景は絵になりませんか。

しかしまあ、立つ牙門旗の豪華な事で。

あまりに多過ぎて紹介する気力も起こりません。

数えることすら面倒です。流石、大陸全土から集まってきただけありますね。

さてさて、この中で事の真相を知って動いている野望家さんほどれだけいるのでしょうか。

まあ、どれだけいたとしても構いはしないのですけどね。

知ってしようといなかつと、攻めてきた時点で全て敵。

全力で迎撃しここを守り通すだけです。

城壁から溪谷をじっと眺めていると、背後に人の気配を感じた。

「王平、城壁の上でさっきから何をしている？」

「華雄ですか。いえ、敵の数が多いなあ、と思ひまして」

「ふん、数が多ければいいと言つものではあるまい」

いや、それはそんなんですけどね。その数多の兵を率いるのも、また優秀な多くの將軍なんですよね。

ホント、嫌になつてしまいます。面倒な事この上ないではありませんか。

「しかしまあ、いくら敵が多かろうとも、この狭い溪谷内で敵の全軍が一斉に動くのは不可能です。ゆえに、？水関が破られる事はありませんよ」

「当たり前だ。どんな敵が来ようとも、この華雄が打ち砕いてくれる」

いやはや、どうやらこの口ぶりだと、華雄は野戦をする気満々の様ですね。

なので、ここは一つ釘を刺しておきましょうか。

「華雄、言っておきますが……野戦をしようなどとは考えないでください。……いいですね？」

「なっ、それでは……お前は私に亀のように縮こまっていると」

「い・い・で・す・ね？」

「うっ……分かった」

ひるむ華雄。

このくらい少し強めに言っておかないと、華雄は絶対に聞いてはくれないでしょうから。

出来れば、自分は脅すようなことは極力したくは無いですけれどね……。

「む、王平。敵が動き出したぞ」

「おや、本当ですね」

華雄の言葉に連合軍の方へと視線を向ける。

はて、完全武装状態の？水関に果敢にも突っ込んでくる部隊は、何処の誰でしょうか？

「……ほう、牙門旗からして、劉備ですか」

平原の相、劉備。

数多の豪傑と名軍師を抱える事になる、仁君の呼称を持つ武将。今現在ではそこまで脅威ではないはずですが、さて……どうなのでしょう。

「奴らが、詠が気をつける言っていた部隊か」

「ですねえ。……さて、それでは……早速門前払いを食わせましょうか？」

右手を空に向かって高々と上げる。それを見た城壁の守備部隊が素早く配置についたのを確認し、掲げた右手を劉備軍に向けて振り

下ろした。

「第一守備隊、投石始め！」

守備隊の面々が一斉に投石を開始する。

劉備軍が肃々と城門に向かって進軍してくるのを待つ必要はありません。

城門に到達する前に、がっつりと兵数を減らさせていただきましよう。

「第二守備隊、投石始め！」

最初に続き、再び拳大の石つぶての雨が劉備軍に降り注ぐ。

慌てて回避行動に移る劉備軍。しかし避けきれなかった数十人が頭部に直撃を受け、その場に崩れ落ちる。

直撃では無いにしろ、腕や足に当たって骨折したらしき兵の姿も見える。

自分が提案したこの投石作戦は、日本のかの名将も使っていたものの。

彼はこれを敵軍の挑発のために使いましたが、高所からの投石は十分な殺傷力を持った強力な武器です。

縄と厚手の布で作った人力投石機を使えば射程は馬鹿にならない距離になりますし。遠心力の力は偉大です。

それに何よりのメリットは、石つぶての弾数はほぼ無限と云うことです。

城内から面する崖を削岩すればいくらでも補充はききますからね。

「一見ふざけているように見える投石も、使いようでは武器となるか」

「そうですよ。華雄もすっかりと覚えておいてくださいね？」

「……善処する」

「おやおや、その間がとても気になります。本当に大丈夫でしょうか？」

「申し上げます！ 左翼より孫の牙門旗を掲げた部隊が突撃を始めた！」

「孫だっ！？」

伝令の言葉に華雄が声を荒げる。孫と言うことは、袁術の客将である孫策でしょう。

しかし……ふむ、華雄は孫家のものと因縁があるようですね。これはあまり宜しくありません。

「分かりました。では、左翼方面の守備隊に弓矢の使用許可を出します。投石と合わせて対処してください」

「御意！」

さて、これで孫策軍の方も勢いと共に大きく戦力を削れるでしょう。

劉備軍の方もあたふたしてろくに前進出来ていませんし、これなら何事もなく決着が付きそうです。

「いやあ、楽で良いですね。防衛戦は」

「……私はこの様な所でじっとしているのは性に合わ」

「おや、何か言いましたか、華雄？」

「……いや、言っていない」

「ですよねえ」

ふふふ、と王平スマイルを華雄へと返す。

まさかこんなにも有利な状況を捨ててガチンコをしに行きたいだなんて、將軍たるものが言はずがありません。

ほら、こう言っている間にも劉備軍と孫策軍が一時撤退を始めたようです。

いくらか被害を受けた二軍と違い、こちらは全くもって無傷。

つまりは、前哨戦を無傷で勝利と言うことです。守りのち勝利、これ自然です。

「ん？ 王平、連合から数人、単騎で走り出てくるぞ」

「ふむ、舌戦を仕掛けるつもりでしょうか？」

となると、こちらも流石に無礼な事はできませんね。

この時代ではそれが礼儀であり、戦における一つのルールでありますから。

面倒ではありますが、自分は？水関を守る将。

連合軍の舌戦を受けるとしましょう。

「華雄、関にこもる事しか能の無い臆病者め！」

「貴様のその戦斧は飾りと言うことか？ 全く、過ぎた飾りだな！」

劉備軍から突出してきた黒髪に青竜偃月刀を携えた女性：関羽と、何やらナース服に酷似した服装に赤い槍を携えた女性：趙雲が城門の前で叫ぶ。

さて、舌戦を受けるべく城壁から顔を出したつもりなのですが…
…いやはや、酷い暴言と罵倒の嵐ですね。

まあ、自分はこのような戯言は気にしないタチなので、何とも思いませんが。

言いたい人には、好きなだけピーピー叫んでもらいましょう。
まあ、恐らく連合軍は、挑発で自分たちを？水関から引き出そう
とでも思っているのでしょうか……。

全くもって……あさはか、あさはかですなえ。

でも、もしこの場を守る将に自分がいなければ、この作戦も上手く行ったのかもしれない。

なにせ、先程から華雄は怒りのあまり城壁の上でのたうち回りますから。

ああ、何でのたち回っているのかと言つと、最初の挑発で早くも飛び出しそうだったので、自分が素早く亀甲縛りで捕縛しました。

え、なんで亀甲縛りなのか、ですか？

それはアレです。天からのお告げつてやつですね。

深くは追求しないでくださると助かります。

「くっ、ほどけ王平！ はうっ！！？」

「暴れば暴れるほどに食い込みますよ？」

「な、なんのこれしき！ ふっくう…！」

えー、華雄が艶っぽい声を出しながらジタバタもがいているのですが……これ、どうしましょう？

正直自分、笑いをこらえるのが凄く大変なんですけど……どうしたものか、って、その守備隊の人、なにを爆笑しているのですか！ 羨ましいいったらありはしません、全く。

「おや、あれは孫策？」

何とか笑いだしそうになる自分を抑えていると、視界に入ったのはチラリズム精神をこれまた無視した赤い衣に身を包む、ピンクの髪的女性。

恐らくは孫策。なるほど、纏う覇気がここからでも感じられます。さて、関羽と趙雲に続いて王直々に罵倒ですか。一体何を言うのでしょうか？

「我が母、孫文台に敗北し、今はまた我らに恐れをなして亀の様に関に閉じこもっている！」

ふむふむ、先程となんら変わらない罵倒ですね。

少しばかり捻ったものを期待したのですが……残念で……いや、まだ続きがある？

「流石だな、華雄。その意気地の無さは、無いに等しい貴様の胸と同じと言っことか！」

って、なにを言ってくれているんですか孫策！ それは絶対に華雄に言ってはいけない最大級の禁句

ブチッブチッ！！

あ、あー……遅かったですか。

今の音、何も華雄がキレた音だけではありません。

華雄を縛っていた縄が切れた音でもあるんです。

その証拠に、木っ端微塵切れた縄が、自分の足元にありますし。

そして華雄はと言うと、いつの間にか兵士を集めて出陣の準備を終わらせているんですよえ。

亀甲縛りから力技で脱出のち、神速で部隊編成を済ませる……。

華雄のスペックが今だけは三国無双に等しいかもしれません。

言うなれば、華雄怒りのスーパーモード、でしょうか。右手、光ったりするんでしょうかね。

「華雄隊、出るぞ！ 我が武と……ごによごによ……を愚弄した愚か者どもを八つ裂きにしてくれるっ！ 行くぞっ！」

「「「応っ!!」「」」

素晴らしく血気盛んな事ですね。そして華雄、ごによりたくなる
気持ちはよく分かります。

いやはや、これはもう止められません。

以前、戦場は何が起こるか分からない魔の空間だと言いましたが、
今この時が、全くもってその通りです。

「はあ……まあ、こうなる事も予測していなかった訳ではありません
んが……。仕方がないですね、自分も出るしかありませんか」

思わず独り言をつぶやいてしまう。

ここで華雄を死なせてしまえば、全軍の指揮に大きな影響が出ま
す。

城門を開いた事で、恐らく？水関は落ちることになるでしょう。

しかし、自分達にはまだ虎牢関が残っています。

自分としては？水関で全てを終わらせるつもりであったのですが、
こうなつては割り切るしかないでしょう。

「伝令。虎牢関に、？水関はじきに落ちる、と伝えてください」

「はっ!」

さて、伝令を虎牢関に向かわせましたし、一応はこれで良しとし
ましよう。

全く、ガチンコは自分の得意とする分野ではないのですが。

「王平隊も華雄隊に続いて出陣します。皆さんこの際ですから、自
分達も思いつきり暴れますよ!」

「「「応っ!」「」」

さて……自分も開き直って華雄を守りに出るとしましょうか。
本当に、手間のかかる人なんですから……。

戦場に絶対は無し（後書き）

ああ、やはり連投は間に合わなかった……。書き溜めとは偉大だと気付かされた今日この頃です。

それでは、次回も宜しくお願いします。

お気に入り登録と感想に感謝！

撤退、されど王平には敗北で無し（前書き）

（後の祭り）

時期を逃して手遅れになる事。

後悔しても遅い事を言う。

撤退、されど王平には敗北で無し

（関羽）

？水関から出てきたのは漆黒の華旗……猛将と名高き？水関の守将、華雄。

孫策のおかげで、どうにか董卓軍を関から引きずり出す事が出来た。

そこに至るまで、多少部隊に被害を受けてしまったが、大きく問題になる程でも無い。

桃香様の悲願のためにも、我らはこの戦いで何としても武功を上げなければならない。

それに、このまま袁紹に捨て駒として使われるのも私には到底納得できる事では無い！

華雄、奴を討ち取ってさえしまえば、董卓軍の士気も落ち、この戦を勝利する事が出来る。

ならば、ここは孫策軍との約束を信じ、華雄を討たせてもらおう！

「劉備軍の勇者たちよ！ 行くぞ、我が旗に続けー！」

部隊を鼓舞し、一丸となって華雄の牙門旗へと突き進む。

隣には、同じく部隊を率いた星がいる。この戦い、我らが負けるはずがない！

「うおおおおーっ！」

部隊の先陣に立ち、押し寄せせる董卓軍の兵士を数人纏めて斬り捨てる。

そしてたちまち乱戦になる戦場。味方と敵の兵士が入り混じって剣を交える。

「はあっ！」

また一人、敵軍兵士を斬る。

その時、友軍が数人、血をまき散らしながら宙を舞った。そんな事が出来る敵兵は、この場においてはただ一人。

「何処だ孫策！ 出て来い、八つ裂きにしてくれる！」

凄まじい怒気を纏わせ、修羅の如き形相で戦斧を嵐のように振り回す華雄。

次々と屍になっていく友軍を、黙って見過ごすわけにはいかない。

「待てっ、華雄！ 貴様の相手はこの私、関雲長だ！」

すぐさま華雄の前に躍り出る。それに気付いた華雄が私の方へ向き返る。

そして、その視線が私の胸に止まった様な気がした瞬間、華雄の纏う怒気がさらに大きくなった。

「貴様も……私の敵かぁー！ーっ！！」

「なっ！？」

突然、全身を血で赤く染めた華雄が咆哮し、練度の低い友軍が竦み上がる。

それと同時に、華雄が戦斧を振り上げ走り出す。血に濡れた戦斧が宙に赤い軌跡を残し、私の首に向かって振り下ろされる。

ギャリイン！！

偃月刀でその一撃を受け止める。

凄まじい衝撃が腕から肩に突きぬけ、鈍い金属音が響き渡る。

……想像以上に重い。

流石は猛将、華雄。

上からのしかかる重圧に、膝が折れないよう必死に耐える。

「おおおおおーっ！！」

「ぐっ……！！」

雄叫びと共にさらに強まる重圧。

戦斧の重さと体勢の悪さが相まって、完全な不利な状況。

押し返そうにも、のしかかられるように抑えつけられていては、とてもではないが押し返せない！

「このまま叩き潰してくれろ！」

「させん！」

その時、視界の端に赤い槍が突き出される光景が映る。

華雄に向けられた槍は、しかし華雄には当たらず華雄は飛び退って距離を取る。

その間に、赤い槍の持ち主…星が、私のそばに駆け寄ってきた。

「無事か、愛紗！」

「星か。済まない、助かった」

「気にするな。……して、奴が華雄か」

「ああ。なかなか手強い相手だ」

「その様だな」

星と並んで、再び武器を構える。

華雄は私の時と同じように星に視線を向けると、やはり胸のあたりを見た時点で、怒気が強まった。

「どいつもこいつも……そんなに大きいのが良いのかあ！！」

「ぬう、何て威圧感だ」

「ああ。それほど、胸がないのを気にして」

「貴様あーあーあーっ！！」

開いていた距離を一足飛びに詰め、華雄が戦斧で薙ぎ払いを放つ。

ガアアアン！

手が痺れるかの様な一撃。私がそれを受け、そして星が華雄の隙をつく。

「せいあつ!」

「ちい!」

身を捻り、星の槍を華雄がかわす。

しかしかすったのか、華雄の脇から鮮血が流れ落ちる。

「二対一とは、卑怯な!」

華雄が憎々しげな視線をこちらに向ける。

「そうかもしれん。だが、生憎と今はその様な事を言っていられる状況では無いのでな」

「悪いが、貴様の頸……貫い受けるぞ!」

星に続き、今度はこちらから華雄に仕掛ける。

星の槍が華雄を牽制し、そして私が華雄の隙をつき一撃を入れる。それらを戦斧で捌く華雄。

しかし、疲労の所為か少しずつ反応が鈍くなっていく。

ガギイイン!!

「ぬあつ!」

とうとう、華雄の戦斧を私の偃月刀が大きく弾く。

そして放たれる星の一撃。戦斧を戻しても最早間に合わない。

「はあっ！」

気迫の込められた赤い閃光。

それが、華雄の胴へと吸い込まれて行き

ギイイイイン！！

あと少しで華雄を貫く、そのほんの手前で……一本の剣が、赤い閃光の如き星の槍を弾き返した。

「ふう……間一髪ですか。いくらなんでも先行し過ぎですよ、華雄」

剣の持ち主が……男が、そう言って華雄を庇うように私たちの前に立ち塞がった。

〜王平〜

両軍入り乱れた乱戦の中で、ようやく華雄を見つける事が出来ました。

あの後すぐに城門が開いたのを見計らって、劉備軍と孫策軍と公孫贛軍が三方からなだれ込んで来ましたからね。

友軍が城外にいるせいで投石も弓矢も使えない物ですから、防衛力が大きく落ちた今の状態でこの三軍を止めるのは至難の業。

正直、抜かれないよう指示を出すのに手一杯で、華雄を探す暇なんかないませんでした。

まあ、人が宙を舞ってたり、轟くような咆哮が目印となってくれたおかげで探す手間は省けたのですが……。

とにかく、生きた状態で見つけられて良かったです。

しかし……いやはや、先程のは本当に間一髪でした。

王平隊の皆さんに大盾を装備してもらって、乱戦の中をこじ開けてもらい進んできたのですが……。

まさか劉備軍のエース二人と戦っているとは……。

正直な話、よく生きていられたなあ、なんて思ってしまった。

華雄も一流の武人ですから早々やられはしないでしょうけど、この二人を相手にして無事なのは称賛に値しますね。

それで？水関から飛びだした事がチャラになる訳ではありませんが。

「悪い、王平。助かったぞ」

「お礼ならば後で聞きます。今はここをいち早く離脱する事だけ考えてください」

「なっ、退くと言っのか!?!」

「そうです。反論は許しません。良いですね？」

「……分かった」

有無を言わず華雄に告げる。

華雄はそれに悔しそうな表情で応え、部隊を引き連れて撤退する。

「華雄、逃がさんぞ!」

「そつはさせませんよ」

追撃を掛けようとする関羽の前に立ちはだかり、その動きを牽制する。

流石の関羽も、自分とその後ろに控えている自分の部隊を無視して追撃をするような事はしないでしょう。

その予想通り、関羽は走り出した足を止める。

「どけっ！今は貴様に用は無い!」

「おやおや、初対面の人に向かって、些か失礼ではありませんか？」

「貴様の戯言に付き合っている暇も無い！ どかぬなら、今ここで斬り捨てる！」

関羽が偃月刀を構え、今度は自分に向かって突進してくる。

やれやれ、随分と血気盛んな事ですね。

そんなんですから、剣筋が簡単に読めてしまうのですよ？

「ふっ」

キイイイーン！

偃月刀の刃の側面に自分の青竜刀の刃をぶち当て、剣筋を自分の体から反らす。

「なっ!?!」

己の一撃を反らされたのが予想外だったのか、驚く関羽のガラ空きの胸に一撃、蹴りをくらわせる。

ドゴツ、と言う鈍い音と共に吹き飛ぶ関羽。

立ちあがるうとして、咳き込んで地面に片膝をつける。

「ぐっ……」

「敵と合い見える時は冷静に。そうでしょう、趙子龍殿？」

突っ込んできた関羽と違い、先程から探るような視線を自分に向けている趙雲に声を掛ける。

「どうやらその様だ。……確か、王平と言ったな」

「はい、そうですよ」

「この部隊の指揮も、どうやらお主が執っていたようだな」

「……」

「ふっ、やはりそうであったか」

無言を肯定と取ったか、ニヤリを笑いを浮かべる趙雲。

ふむ、面白くないですねえ。

口での戦いは自分の得意とする所なのですが、今回は趙雲に一本取られてしました。

正直、これは悔しいです。

「どうやらお主は、一筋縄ではいかなさそうだ」

目を細め、警戒心の滲みでた声で言う趙雲。

いやはや、自分も随分と嫌われてしまったのでしょうかね？

「そんなこと無いですよ。自分は普通のお兄さんですから」

「その普通のお兄さんとやらは、そんなにも隙の無いものなのですかね？」

「まあ、どうでしょうか？」

言葉での応酬を続ける傍ら、戦場の様子にも気を配る。

さて、どうやら他の部隊の退却は完了したようですね。

自分達も早い所退却しなければ、取り残されてしまいます。

「それではお二方……ご縁があればまた」

それだけ告げると、返事を待たずに踵を返して全速力で部隊を後退させる。

？水関の城門前で必死に退却線を維持していた守備隊を回収し、わき目も振らずに、自分達は？水関から退却した。

結果、初戦では連合軍の勝利。

？水関は難攻不落とは名ばかりの早さで落城した。

さて、この失態……詠にどう報告したものでしょうか。

防衛と華雄の抑えを任されていただけあって、本当に申し訳ない気分です。

とりあえず、虎牢関に入ったら華雄には、自分の私情による怒りも含めたお仕置が必要ですね。

自分の金城鉄壁絶対防衛をぶち壊してくれた事、しっかりと反省していただきましょうかね。

……ふふふ。

撤退、されど王平には敗北で無し（後書き）

ウチの華雄はマジギレ状態だと関羽を凌駕します。
ウチの華雄は強いんです。きっと特殊派生タイプ。

それでは、次回も宜しくお願いします。

溪谷の園（前書き）

く仏の王平は一度までく

いくら普段温厚な王平でも、自分の矜持に反されるのは一度まで。

二度目になると、王平も怒ると言ひ事。

B Y 王平

溪谷の戦

？水関での攻防にて、華雄の暴走により撤退を余儀なくされてしまった董卓軍。

そんな不幸中の幸いと言っべきか、王平の指揮による守備隊の活躍と、王平自身の活躍により、董卓軍は将と兵をほとんど失わずに撤退する事ができた。

しかし、未だ董卓軍に安心をする余裕はない。

連合軍の牙は、未だに董卓軍を食い殺さんと、第二の関である虎牢関へと迫って来ていた……。

自分は今……もの凄く怒っています。

何故かですか？

それはもう、自分の作戦を物の見事に、木っ端微塵にチャイサレてしまったからですな。

独断専行…命令不服従。将あるまじき行動の数々。
ぶっちゃけてしまうとこれ、優に斬首に値します。

ですが、自分は優しい同僚ですから、それらも踏まえて、自分の私怨もたつぷり含めてお仕置きを、手足を拘束して逆さ吊りにしている華雄にしようとしているわけです。

「全員……構えてください」

「……はっ！」「」

王平隊の皆さんが、それぞれの？得物？で華雄に向けて構えを取る。

その数は優に十を超える。向けられた？得物？の数に、華雄が息をのむを感じた。

「それでは……やりなさい」

「……うおおおおーっ！」「」

自分の合図と共に、華雄の逆さ吊りの無防備な腹に男たちの得物が突き付けられた。

「や、やめっ！ あはははははっ！ ひーひーっ、うやあははっ！」

華雄の無防備な腹をくすぐる羽毛、猫じゃらし、毛筆、その他工
トセトラ。

四方八方からくすぐられ、華雄が身をよじりながら笑い声を上げ
る。

縛られつつもなお、ぴよんぴよん跳ねる華雄の腹筋には脱帽です
ね。

おや？ 十人のはずが、何故か得物が十一ありますね。

……これがいわゆる、座敷わらしと言う奴ですか。出るんですね、
こんな戦場でも。

「くすぐり止めです」

「「「はっ！」「」」

一斉にくすぐるのを止める王平隊。

そして自分は息を乱してぷらーんとしている華雄に近づく。

「さて、華雄。先の独断専行、反省しましたか？」

「ふっ、私は武人だ！ 自分の行いに、後悔はしても反省はしてい
ない！」

「そうですか。……総員、第二くすぐり用意」

「って、待て王平！ 今のはただの冗談に決ま うわひゃはあ！

ひーひゃあははははっ！」

全く……残念ですが、今の自分は冗談を流せるほど余裕のある状

態ではありません。

華雄ももう少し、そこら辺の感情の機微を感じられるようになつて欲しいですね。

そうすれば、おのずと自分の感情の制御も出来るようになるでしょうに……。

「はあ……はあ……王平え、貴様〜！」

「華雄、怒るのは構いませんが……自分は貴方の数倍怒っている事を忘れずに」

「うっ……むう……」

怒気を放ちながら華雄に言い、反論を抑え込む。

華雄は少し、人の話を聞くと言う事をした方がいいですからね。たまには、強引にでも話を聞かせるべきでしょう。

でもまあ、自分がこうする前にも詠に説教を受けていましたしね。その所は大丈夫だと信じたいです。

ちなみに？水関での事を聞いて、詠が虎牢関に来てくれています。心強い味方が来てくれて、自分も一安心ですね。

それでは、そろそろ華雄を解放しましょうか。

華雄を拘束していた縄をほどく。

「全く、酷い目にあつた」

「アレで済んだ事を喜んでください。本当なら斬首なんですから」

「……そうだな。本当に、済まなかった」

華雄が深く頭を下げる。

これだけ反省していれば、二度と同じ過ちは繰り返さないでしょう。

「もう良いのかしら？」

「おや、詠。何時の間？」

声の方に振り返ると、腕を組んだ詠が背後に立っていた。

「アンタが号令を掛ける前からよ。気づいてなかったの？」

「いえ、全くです」

ふむ、これは自分とした事が……。

自分も少し、周りが見えなくなっていましたか。
心頭滅却、精神を研ぎ澄まして集中しなければ。

「……ふう、これでよし」

「流石のアンタも、この状況じゃ焦りを感じる訳ね」

「いえ、焦りと言うよりも怒りの所為だと思いますよ。だって、焦る必要はありませんし」

「でも、？水関ではそうはならなかった……」

「それを言われてしまうと、自分としても何も言えなくなってしまう

います」

？水関が落ちた責任の一端は、華雄を止められなかった自分にもありますので。

ですが、虎牢関では同じ過ちを繰り返すつもりはありません。

「大丈夫ですよ、きっと」

「うん、そうね……」

それでも不安を隠しきれないのか、賈馱の表情には影が残っていた。

洛陽への道、最後の関所……虎牢関。

そんな虎牢関にも、ついに連合軍の影が迫る。

放っていた斥候の情報から、虎牢関での先陣を務めるのは袁紹軍。

圧倒的な物量によって、虎牢関はすぐさま落ちるはずであった。

しかし、王平と賈馱がそれを許さない。

軍師と守りの将による指揮によって、虎牢関の守備隊は袁紹軍の猛攻を防ぎきっていた。

日中の猛攻を完全に防ぎ、そして夜には王平率いる少人数部隊が関から抜け出して連合陣営へと夜襲。

遠距離から連合陣営に火矢を放つだけの襲撃：しかしそれは、何時襲われるやもしれないという恐怖を連合軍兵士に植え付けた。

幾度となく繰り返される夜襲は、兵士たちを精神的に追い詰めて行く。

日中は攻城に駆り出され、夜は恐怖で寝付けずに過ごす。

連合軍が虎牢関を攻めだしてから早数日。

連合軍の兵士たちは、遠征の疲れとそれを癒せない毎日に、次第

に疲弊していくのであった……。

〜王平〜

いやはや、やはり防衛戦は楽でいいですねえ。

袁紹の考えなしの攻城をあしらうだけで関は守れますし、夜は少人数で火矢を打ち込めば連合軍は寝不足に出来ますし。

まさしく……ビバ、籠城！ ですね。

遠征軍ゆえに、兵糧の問題もそろそろ起こる頃でしょう。どうせならば、今度の夜襲は兵糧を狙うのもありますね。

まあ、兵糧の問題もそうですけど、一番の問題は、やはり兵たちの疲弊でしょう。

連日の攻城と寝不足で、明らかに連合兵は体調が悪そうでしたね。攻城の勢いも、大分弱くなっていましたし。

このままいけば、無事に守り通す事も夢ではありません。

斥候からの情報では、既に連合軍から何人もの諸侯が撤退を始めているらしいです。

しかし、未だ英雄豪傑たちの所属する軍は撤退せずに残っています。

流石、と言うべきなのでしょうが。

……まあ、彼女たちの陣が後曲に配置されているおかげで、夜襲を行えないのも理由の一つとしてあるのでしょうけど。

しかしアレですね。

袁紹軍の兵士の皆さんも、よくこの苦しい状況で数日間も攻城を続けられるものです。

気合だけならば、称賛に値する働きですね。

気合だけでどうにかなるほど、この虎牢関の守りと詠の指揮は甘くはありませんが。

その結果、連合軍は日に日に疲弊していつている訳ですからね。

「このまま行けば、無事に連合を追い払うことができそうやな」

「そうですね。そうなれば、晴れて自分のはのんびりできます」

霞と共に、城壁から溪谷を見下ろす。

虎牢関の城門前は金と赤で一面に染まり、鼻をつく鉄の匂いが城門の上まで漂ってきている。

「袁紹軍の奴ら、アレだけ被害を出してるうちゅうのにまだ攻めて来るんかいな」

「袁紹にも意地があるのでしょ。確か、袁紹は連合の総大将と言
うことでしたから。先の？水関にて、劉備たち他の諸侯に手柄を取
られてしまったのが、悔しいのでしょね」

「そんなくだらない理由に付き合わされる、兵たちの方が気の毒や
で」

確かに霞の言う通りです。

軍を支えるのは武器でも無く資金でも無く兵……つまりは人です。
軍に限らず、町も村も、全ては人がいてこそ成り立つもの。

全ての石垣たる人を、あのように無駄死にさせるのはどうかと、
自分も思いますね。

「袁紹軍の方はさておき……霞、曹操軍の動きはどうですか？」

「分からん。けど、出陣の準備は万全って斥候から情報が入って
る」

「ふむ、となると……そろそろ動くかもしれないね」

恐らく曹操の事ですから、袁紹軍にできるだけ自分たちの戦力を
削らせ、それから攻めてくるつもりだったでしょう。

そしてそれは、劉備軍と孫策軍にしてもまた然り。

しかし、自分達はほとんど戦力を削られていない。

なのに袁紹軍も疲弊し、兵糧の問題の事もあるとするならば、そ
ろそろ何かしらの手を打ってくるはずですよ。

「霞、詠を呼んで来てもらえますか？」

「もう来てるわよ」

霞に頼んだその時、背後にから詠の声が聞こえた。

「おや、またもや何時の間にも？」

「アンタの知らない合間によ」

うむ、今度は自分も油断はしていなかったのですが……。詠は案外、気配を隠すのが得意なのでですね。いやはや、思わず感心してしまいました。

そんな事を思っていると、霞の下に一人の兵が駆け寄る。恐らくは、霞の部隊の斥候でしょう。

そしてその内容は

「黎明、曹操軍が動いたぞ」

予想通り。どうやら曹操軍が動き出した様です。

「やはり来ましたか」

「来ましたか：じゃないわよ！ 全軍、曹操軍を迎撃！」

詠の指揮の下、城門に兵を寄せてきた曹操軍を迎撃する。

袁紹軍と同じように、投石と矢の雨が曹操軍を襲い、曹操軍の兵士が倒れていく。

「皆さん、曹操軍の方へ重点的に投石を！ 曹操軍を絶対に城門に近づけてはいけません」

守備隊の兵に、自分も指示を出して指揮を執る。

と、その時、

キーン！

「っ!?!」

詠に迫る矢を剣で斬り払う。

その弾道を目でたどると、こちらに弓を向ける一人の女性がいた。あの距離から正確に、詠の頭に向かって矢を放つとは……。

この芸当……間違いなく、彼女が夏侯淵ですね。

「詠、あなたは城壁から下がってください。ここは危険ですから」

「ごめん……」

「お気になさらず」

詠が城壁から中へ戻ろうとしたその時、

「おや、曹操軍が退いていく……」

「袁紹軍も、曹操軍に便乗して退いてくで……」

何故？ なぜ、犠牲を出して攻めて来ながら、いつもあっさり退くのでしょっ？

おかしい、何かがおかしい。あの曹操が、こんな無意味な行動を起すはずがない。

これはもしや……何かの策？

「……っ！？ まさか！」

「黎明、マズい！」

「ど、どないしたんや詠、黎明？」

自分と詠が同時に叫び、霞が驚きに目を見開く。

「霞、いますぐ恋を止めに行かなければ」

自分が最後まで言いきるその前に、一人の兵士が自分達の下に掛け込んできた。

「伝令！ 呂布将軍が部隊を連れて出陣なさいました！」

「なんやて!？」

くっ、遅かったですか。やはり、アレは自分達を釣るための罠。戦いを有利に進めている側をおびき出すための、偽りの撤退。

「やっぱりねねだけじゃ……誰かしっかりつけていれば！」

「あーもう！　こんなん、？水関の二の舞やないか！」

全く、霞の言う通りですよ。

折角、あと少しで、連合軍を被害少なく追い返せる所だったと言
うのに……。

それを……目先の勝利に釣られて台無しですか？

だから勝利を目標に戦うのは嫌なのですよ。本当にしなければな
らない事を見失う。

だと言うのに……アレですか？　そんなにも自分を怒らせたいの
ですか？

「もし、華雄と陳宮は何処に？」

伝令に二人の居場所を聞く。殺気が少し混じってしまったのか、
伝令が顔を青くしている。

「ち、陳宮將軍は呂布將軍と共にご出陣。華雄將軍は城門前で奮戦
しています！」

華雄はまあ、良しとして……軍師であるねねが、まんまと釣られ
て一緒に出陣……？

プチン……

「ん？ な、なんや、今なにか切れた様な音が……」

「ふ、ふふ……くくく……」

「どうしたの黎明？ なんで笑って……」

霞、それは自分がキレた音です。
そして詠、自分は極限までキレてしまおうと笑いたくなるのですよ。
他の人は……知りませんけどね。

「詠、華雄と兵の半数を連れて、月様の下に戻ってください」

ドスの利いた声に、詠が若干気押される。

「な、なにを言って」

「こうなってしまった以上、もはや連合の進軍を止めるのは不可能です。自分達が時間を稼ぎますから、早く行ってください」

いくら堅牢な関と言えど、門があいてしまえば意味がありません。
もはや、虎牢関もここまでです。

「黎明の言う通りや。詠は月を連れて逃げ。ここはウチらがなんとかする」

「詠、月様の事は頼みましたよ」

「分かった。……二人とも……いえ、恋とねねも連れて、絶対無事に帰って来なさいよ！」

「もちろんや！」

霞の返事を聞き、詠が走って城壁を降りていく。
それを見送り、自分達は戦場へと視線を移す。

「さてさて、自分達の癒し將軍と可愛い軍師を……助けに行くとしましようか」

もちろん、お仕置きも含めてですが…特にね。

「せやな。……ほな、気合入れて行こか！」

霞の声に兵たちも声を上げて応える。

さて、自分……今回はかりは本気でキレました。

なので今この時だけ、守り一辺の矜持、捨てさせていただきましよう。

この？勝負？だけは、絶対に負けるわけにはいきませんので。

「なあ、この怒り……鎮めさせていただきますよ」

腰の剣をスラリと引き抜き、自分も戦場へと身を躍らせた。

溪谷の罾（後書き）

王平さん、マジギレ。

矜持を無視するほどにキレました。

言うなれば、矜持と言う名のリミッター解除。
いえ、彼はチートではございません。

それでは、次回も宜しくお願いします！

縁あって合い見える(前書き)

く化けの皮がはがれるく

隠してきた正体や本性が露見すること。

縁あって合い見える

（曹操）

ようやく、虎牢関から董卓軍を引きずり出す事ができたわね。

しかし、流石と言うべきか…まさか我が軍がこれほどまで被害を受けるなんて。

戦いには支障ないけど、少しばかり痛いわね。

「華琳様、董卓軍と接敵しました」

「そう。……敵の旗は？」

「紺碧の張旗に、真紅の呂旗」

ふふ…情報通りね。

騎兵を使わせればその速さは右に出る者がいないという用兵術の達人…張遼と、黄巾党を一人で三万人斬った飛將軍、呂布。

どちらも素晴らしく優れた武人…欲しいわね。

「それから、深緑の王旗が確認されています」

「深緑の王旗……確か？水関で見たわね」

「はい。斥候の情報より、名を王平。先の？水関の指揮を執っていた者です」

「へえ、あの見事な撤退の指揮を……」

華雄の独断専行で落城した？水関だったけど、それでも董卓軍は被害をあまり出さずに撤退した。

恐らく、その王平と言う将が即座に手を回したのね。

あの乱戦の中では、それは恐ろしく困難を極める行動だと言うのに……。

「それと、さらに別の斥候から、王平が関羽を退けたとも情報が入っています」

「あの関羽を……」

義勇軍である劉備軍に属する、黒髪の美しい偃月刀使い。

私が今、一番欲しい武人……武と知を兼ね備えた豪傑。

その関羽を退けるなんて……。

「……決めたわ。桂花、その王平と言う将も、張遼と一緒に生け捕りにするわよ」

「それは構いませんが、呂布の方はどういたしましたしょう？」

「天下無双の豪傑に構って、無駄に兵を失うのは惜しいわ。呂布の相手は劉備軍に任せましょう」

幸いにも、呂布の部隊は劉備軍と戦っている。

劉備軍には優れた武官が多くいるようだし、任せても問題は無い

でしょう。

「春蘭、秋蘭！」

「はっ！」

「春蘭、あなたは真桜を連れて張遼を生け捕りにしてきなさい。秋蘭は凧を連れて王平の元へ。可能ならば、生け捕りにしなさい」

「「御意！」」

さあ、この戦いもじきに終幕。
最後にどの様な戦いを、董卓軍は見せてくれるのかしらね。

〜趙雲〜

「はあっ！」

ギィィン！

突き出した槍が呂布の戟によって弾かれる。

虎牢関から出てきた呂布を相手取ったは良い。
が、その予想を上回る強さに、私と愛紗と鈴々の三人で掛かって
も倒す事が出来ない。

飛將軍と謳われるだけあって、その武は凄まじいものだ。

三対一と言う、卑怯以外の何物でも無い事をしながら勝てないと
は……。

それほどまでに、呂布と我らの差は歴然と言うことか。

「愛紗よ、このままでは埒があかぬぞ」

「分かっている！」

「でも星。呂布ってめちゃくちゃ強いのだ」

焦りを募らせる我らと違って、呂布は相変わらずの涼しい顔で戟
を肩に担いでいる。

「……終わり？」

「くっ、まだだ！」

愛紗が偃月刀を振りかぶり、真横に薙ぎ払う。

呂布はそれを戟で受け止めると、お返しとばかりに愛紗に斬りか
かる。

「なにっ!?!」

「させないのだ！」

ガギーン！

呂布の一撃を、鈴々が受け止める。

その隙をついて、私ももう一度……今度は姿勢を低くして、下から突き上げるように槍を突き出す。

しかしそれすらも、呂布の蹴りによって軌跡をずらされ空を突いた。

「ちい！」

「早いけど、特に怖くない」

「なら、鈴々の一撃を受けてみるなのだ！ おりゃー……！」

鈴々の丈八蛇茅が唸りを上げて振り下ろされる。

それを呂布は、体を最小限にずらすだけで避ける。

「避けたのだ！？」

「振りが大きい。避けるの簡単」

「うう……」

呂布の言葉に鈴々が少しへこむ。

「ええい！ 鈴々、なにをへこんでいる！」

「だって、あんなに簡単に避けられちゃうと、流石の鈴々も自信な

くしちゃうのだ……」

「確かに、腕に自信があると言っておきながら三人揃ってこの体たらく。私もまだまだ、未熟よなあ」

「一人で勝手に納得するな！」

「……お前ら、へん」

三人で些か漫才めいた事をしてしていると、呂布に手厳しい言葉を言われた。

「なっ！ わ、私は違うぞ！ へんなのは星だけだ！」

「何を失礼な。愛紗とて十分にへんではないか！」

「二人ともへんだと思うのだ」

その様に漫才をしていると、突然、呂布がビクツと体を震わせた。それと同時に、呂布につき従っていた少女が駆け寄ってくる。

「恋殿ー！ 準備は終わりました……どうしたのでありますか？」

不思議そうな顔をする少女…陳宮と、目に見えて青ざめる呂布。心なしか、手が若干震えているようにも見える。

「呂布の奴、何か様子がおかしくないか？」

「ああ。まるで何かに怯えるように」

と、その時だった。

「……やあ〜っと見つめましたよ？　ねえ、恋…音々音」

地獄の底から響いてきたような声が、その場に響く。

ずざざあ、っと正面の董卓軍兵士たちの壁がわれ、そこから一人の男が清々しい笑顔と共に現われた。

確かに顔は笑っている。

だが、その身に纏う怒気が普通ではなかった。

あまりの強さに、周りの兵たちが一歩ずつ後ずさる。

「っ!？」

「れ、れれれ…黎明!？」

呂布と陳宮が、今度はハッキリと分かるほどに恐怖している。

二人とも、顔が真っ青になって震えている。

「くくく……本当に、お二人は自分に面倒を掛けさせるのがお好きな様で。折角、あと少しと言う所で、あの程度の策に釣られるなど……」

「あ、あわわ……あわ」

怯える二人に、男は一歩ずつユラリユラリと近づいていく。

そして……

ガスンツ！！x2

虎牢関全体に響くか否やと言つくりの音を立て、男の鉄拳が二人の頭に炸裂した。

「~~~~っ！！」

我らの攻撃を軽くあしらっていたあの呂布が、頭を押さえてうずくまる。

陳宮に至っては、頭から煙を立ち昇らせて地面に突っ伏していた。

「虎牢関を守るべきと將軍と、策を見抜くべき軍師が、まんまと釣られてどうするのですか！ 二人とも、恥を知りなさい！ って…ふむ、少し強く殴り過ぎましたか」

二人の状態を見て、男が……王平が、顎に手を当てて考え込んでいる。

すると、王平が怒気を霧散させて急に慌てだし、そしてなぜか呂布をなだめようとしていた。

そんな戦場らしくない光景を唾然として見ていると、王平がようやく気が付いたのか、こちらに視線を向けた。

「……ん？ おや、あなた方は」

王平は至って平然とした態度で言う。

先程の慌てようが嘘のようだ。

「また会いましたね、関羽殿、趙雲殿」

「ええ。どうやら、縁が繋がっておったようですね」

「その様だな。ちょうど良い、あの時の借りを返したいと…そう思っていた所だ」

愛紗の言う借りとは、恐らく？水関で蹴り飛ばされた時のことであるろう。

「あの、なんの事でしょう？」

王平はそれに思いつかないのか、不思議そうに首を傾げる。

「なあっ！？」

愛紗が怒りに体を震わせる。

「お主と初めて会った時、お主は愛紗の腹に一発入れたであろう」

「ああ、あれですか」

私の言葉に、ようやく王平は？水関での事を思い出したのか、ポツツと腕を叩いた。

「貴様あゝ…呂布と共に、今ここで打ち倒してくれろ！」

血気にはやる愛紗に、王平は相変わらずの平静で返した。

「それは構いませんが、三対二で戦うのですか？

……死にますよ？」

極めて平静……しかし、王平がそう言ったその瞬間、全身に緊張が一気に走った。

見栄やハツタリでは無い……これは、本気だ。

確かに、我ら三人が掛かっても倒せない程に呂布は強い。
ならば、ここで将が一人増えれば、こちら死ぬ可能性が高くなる
のも然り。

しかしそれ以上に、私はこの男の言葉に、恐怖を感じたのだ。

……この男は危険だ。

私の本能在、全力でそう叫んでいた。

〜王平〜

頭から煙を上げて突っ伏すねねと、うずくまる恋を見て思う。

ふむ、怒りのあまり、少し強く殴り過ぎましたか。
恋はまあともかく、陳宮が気絶してしまいましたね。
全く、これからが説教の本番であったと言うのに。

「……………ぐすっ」

などと考え込んでいると、何故か恋の目に涙が浮かんで!?

「つて、ええ!?! どうして泣いているのですか恋!」

「痛かった……………」

「それは、確かに痛い様には殴りましたが、何も泣かなくても…

…」

「だって、黎明たちを守るため戦ったら……………怒られて、痛かった…

…」

「そ、そうは言っても、結果的には逆に危機にさらされることになった訳で……………つて、ああ、分かりました! 殴った自分悪かったですから、どうか泣くのだけは勘弁してください!」

必死になって、目をウルウルとさせる恋をなだめる。

ああもう、どうして叱りに来たはずが、逆になだめることになっているのですか。

どう考えても、今回は恋とねねの落ち度でしょうに!

しかし……………恋に泣かれるのだけは勘弁してほしいです。

恋の泣き顔など、自分にとっては心をえぐるもの以外の何物でもありません。

「……ん？ おや、あなた方は……」

ふと、見られている様な視線を感じて顔を上げると、そこには？
水関で対峙したお二方と、そしてもう一人、可愛らしい少女が巨大な武器を持って立っていた。

「また会いましたね、関羽殿、趙雲殿」

「ああ。どうやら、縁が繋がっておったようですね」

「その様だな。ちょうど良い、あの時の借りを返したいと…そう思っていた所だ」

関羽が偃月刀を構える。

はて？ 自分、関羽に貸しなんて作りませんでしたでしょうか？
全くもって、記憶にないのですけれど……。

「あの、なんの事でしょう？」

「なあっ!？」

あ、どうやら関羽が怒ってしまったようです。くわばらくわば
ら。

「お主と初めて会った時、お主は愛紗の腹に一発入れたであろう」

「ああ、あれですか」

アレはただ、向かってきたので返したただけなんです、アレも貸

しに入ってしまうのですね。
ふむ、一つ勉強になりました。

「貴様あゝ…呂布と共に、今ここで打ち倒してくれる！」

威圧感を放ちながら、関羽が鋭い視線を自分へと向ける。
うゝん、ゾクゾクしますねえ。不謹慎ですけども。

「それは構いませんが、三対二で戦うのですか？ ……死にますよ？」

だって当然でしょう？

ただでさえ恋一人に手間取っていると言うのに、そこに自分が加われれば確実に関羽たちは不利になります。

自信がある、とまでは言えずとも、自分も武の心得くらいはありますので。

当たり前の事実を冷静を装って返してみたら、何故か趙雲さんがバツと身構えました。

「それで、どうします？ 戦いますか？」

「当たり前だ！」

「当然なのだ！ さっきは少し油断しちゃったけど、今度こそ鈴々たちは負けないのだ！」

「主に大見栄を切った手前、退く訳には行かんのぞな」

三人がそれぞれを構えを取る。

うづくまっていた恋も立ちあがり、方天画戟を担ぎ直した。その表情には、既に先程の泣きそうな顔は無い。あるのは武人としての表情のみ。

「恋、黎明と一緒に戦う」

「そうですね。自分も、恋とは一度、肩を並べて戦ってみたいと思っ
ていましたよ」

別に三国無双だからとか、そう言う理由ではありません。

圧倒的な攻の武を体现する恋と、守りを主とする自分が肩を並べればどうなるのか。

正反対の武の共演は、一体どのようなものとなりえるのか。

戦いの中に生きるものとして、興味を抱かない訳がありません。

それに、自分のこの、溢れんばかりの怒りを発散するためのパートナーとして、恋ほどの適役はいませんかからね。

久方ぶりに、大いに暴れる事が出来そうです。

「もし、陳宮を後方の安全な場所へ」

「は、はっ!」

兵の一人に、未だ意識喪失中のねねを安全な場所へと運ばせる。

さて、これで心おきなく戦えますね。

「それでは……始めましょうか?」

青竜刀を持つ右手を大きく後ろに引き、左手の人差し指と中指を

伸ばして前に突き出す。

英雄のお三方、是非とも自分を楽しませてくださいね？

縁あって合い見える(後書き)

王平、怒りモード継続中。

思考のバトルジャンキー化はその弊害です。

それでは、次回も宜しくお願いします！

虎牢関の落日（前書き）

く逃げるが勝ちく

場合によっては、ひとまず逃げた方が勝ちにつながると言える事。

虎牢関の落日

く趙雲く

その構えは、珍妙としか言いよ様の無いものだった。

何も持っていない無手の左腕を突き出し、得物を持った腕を後ろに引くなど、あまりにも無謀な構えだと思えない。

しかし、何故かその構えを取った王平には、全くもって隙が見えなかった。

さらにおかしなことに、王平からは殺気と言うものを全く感じない。

これから命を賭けた戦いをするというのに、先程から平静さを微塵も崩していない。

この男は、戦いに対して高揚感を抱くと言う事がないのか。

これでは、殺気から相手の挙動を察する事ができない。

呂布もあまり表情を表には出していないが、それでも相對する時には殺気を放つ。

王平と言うこの男……どうやら内も外も読む事が出来ない男の様だ。

「どうぞ、掛かって来てください。先手は譲りますよ」

王平は構えたまま、余裕のある口調でそう言う。

「そうか……ならば、遠慮なく行かせてもらおうぞ！」

愛紗が雄叫びを上げながら偃月刀を振りかぶり、構えて微動だにしない王平に肉薄する。

その左から鈴々、右から私が続ぎ、もしもの時に備えての位置取りをする。

「はああああーっ！」

気合の声と共に、愛紗の袈裟斬りは王平の首を狙って迫る。

その時、初めて王平が構えから動きを見せた。

突き出していた左手を素早く青竜刀の柄に添え、上段の構えから剣先を地面に向け傾ける形にして、愛紗の袈裟斬りを防ぐ。

金属のぶつかり合う鈍い音が響き、ぶつかり合った得物が火花を散らす。

と、その瞬間を見計らったかのように、背後から呂布が飛び出してきた。

「ぶっ！」

「私を忘れてもらっては困る！」

振り下ろされる戟と愛紗の間に割り込み、槍でその一撃を受け止める。

「ぐう！」

しかし、その一撃は先程までのものとは比べ物にならない程に重かった。

だが、その代償にか挙動の後の隙が大きい！

「もらったのだあー！」

その隙を逃さずに鈴々が蛇茅を振り下ろそうとしたその時、いつの間にも移動したのか、王平が蛇茅の刃を己の剣の腹の上で滑らせて受け流す。

「にゃあっ!?!」

受け流された力に引きづられ、鈴々が体勢を崩す。

そこに、王平の蹴り上げが腹に決まり、鈴々が体を浮き上がらせて吹き飛ぶ。

「鈴々！」

愛紗の悲鳴が響く。

ふと愛紗の方を見ると、愛紗は先程の場所から大きく飛び退っていた。

恐らく、王平の攻撃を避けたためであろう事が予想できた。

「げほっ、げほっ……」

「ふむ、燕人張飛の実力、どの様なものかと思いましたが……荒い、荒過ぎますね。まるで本能に従う獣の様な動きです。それでは恋に読まれても仕方ありません」

膝を着き、咳き込む鈴々を見て王平が言う。

確かに、鈴々は半ば本能で戦っている節がある。

しかしそれは、天性の戦いの勘であり、常人では読むことなど不可能だ。

「よくも鈴々を……星！」

愛紗が怒りを滲ませ言う。

「言われずとも分かっている！」

それに二つ返事で返し、愛紗と同時に呂布と王平に猛攻を掛けようと踏み出す。

と、それに臆す事なく、呂布が捨て身とも言える様な勢いで愛紗に迫り、戟を振り下ろす。

そのまま突撃する訳にもいかず、愛紗は偃月刀で守りの構えを取る。

凄まじい音と共に戟が偃月刀にぶつかり、愛紗の体が沈む。

鬼気迫る剛撃。

そしてやはり生まれた、捨て身ゆえの絶対的な隙。好機と思い、すかさず槍を突き出す。

しかし、やはり予想通りと言うべきか、またもや王平の剣が私の槍の一撃を弾き返した。

そして、ここで私は気が付く。

この二人……呂布は隙が出来るほどの剛撃を放ち、その隙を王平が確実に埋める。

守りを捨て攻撃のみに力を注ぎこむ呂布と、攻撃を捨て守りに徹する王平。

つまりは二人は、それぞれが得意とするである方に最大限に力を発揮し、そして正反対の力同士が組むことによって、最高の攻撃と

最高の防御を生み出していたのだ。

攻めと守り、この両方を気に掛けなければならぬ我が輩が、叶うはずがない……。

……だが、そこで諦めて終わる様な私では無い。

普通の一撃が通らぬと言つたならば、普通でない一撃を叩きこむのみ！

己が持てる限りの力と速さを持って、全力で王平に一撃を放つ。

一撃にとどまらず、二撃、三撃と、たとえ弾かれようとも高速の連撃をたたき込み続ける。

それでもなお、王平に隙は生まれず、堅牢で質実な最小限の動きで、全ての突きが弾かれる。

「くっ、堅過ぎる！」

「それは、自分にとって最大の褒め言葉です」

静かにそう言う王平の背後で、愛紗が今にも呂布に押し切られそうになっているのが目に入り、焦りが思わず生まれる。

そのほんの一瞬を見透かされたのか、王平は左手を鞘に掛けるとそれを逆手で抜き放って私に向けて薙ぎ払った。

その動きに過剰に反応してしまい、槍で防ぐも構えが崩れてしまふ。

そこに王平の蹴りが唸りを上げて迫り、これも何とか防いだが大きく後ろへと後退するハメになった。

それと同時に、愛紗が呂布にとつとつ押し切られ、偃月刀が弾き飛ばされて宙を舞う。

「しまった!？」

「……これで、終わり」

得物を失った愛紗に、呂布の止めの一撃が振り下ろされる！

そう、思った時だった。

「恋、避けなさい！」

王平がそう叫ぶ。

その声に呂布は振り下ろそうとしていた戟を無理やりに止め、そのまま横っ跳びに転がった。

その直後、呂布が今まで立っていた所を一つの光弾が通り過ぎる。通り過ぎた光弾は崖にぶつかり、爆発した。

もしあのまま戟を振り下ろしていれば、呂布がああなっていただらう。

「全く、無粋な真似をしてくれる人がいるものですね」

そう言っつて王平は呂布に素早く駆け寄ると、構えを取って光弾が飛んできた方へと目を細めて鋭い視線を送る。

その先には、鉄甲を付けた傷だらけの少女と、弓を構えた女性：

…夏侯淵が立っていた。

（王平）

趙雲との戦いの最中、ふと視界の隅に映った鉄甲の少女が手に光を纏ったのを見て、とっさに恋に避けるよう言いましたが…どうやら正解だったようですね。

まさか、この世界に波動拳の様なものがあるとは驚きでした。少しばかり、自分も冷や汗をかいてしまいましたね。

「全く、無粋な真似をしてくれる人がいるものですね」

不意打ちによって離れた距離を、恋の傍に駆け寄って詰める。

「恋、怪我はありませんか？」

「大丈夫、恋は平気」

「そうですか、それはなによりです」

さて、不意打ちを放った少女の右隣の女性…詠を狙撃した夏侯淵將軍ですね。

彼女がここに来たとなると、恐らく霞の所にも誰か將軍が向かっているはず…。

「恋、名残惜しいですが…ここは退きますよ」

「ん、わかった」

流石の自分達も、將軍五人を相手には荷が重過ぎます。向こうは飛び道具使いが二人もいらっしやいますし。

「逃がすと思うか！」

「悪いが、私はお前を捕えるようにと仰せつかっているのだ。逃がす訳にはいかないのだ」

関羽さんはともかくとして、曹操が自分を捕えよ……ですか。ふむ、面倒なお人に目をつけられてしまいましたね。

「そうですね、簡単には逃がしてくれないでしょう。……皆さん、放ちなさい」

構えたままの左手を上げ、そしてそれを相手方に向かって振り下ろす。

そして放たれた無数の火矢が大地に突き刺さり、ねねがあらかじめ用意していた火計が炸裂した。

「なっ、火計だっ!？」

「ねねもやる時はやりますね。……恋、皆を連れて先に虎牢関から脱出しなさい。自分は霞を助けに行きます」

「恋も一緒に行く」

恋がそう言って自分の袖を掴む。

「恋、良く聞いてください。虎牢関はもうすぐ落ちます。今、自分達に出来る事は、一人でも多くの兵たちを逃がす事です。そして彼

らを無事に導く……これは恋、あなたにしかできない事です」

恋は天賦の才を持つ武人。

この危機的状况を乗り切れるのは、恐らく恋だけでしょう。それに、月様を守るためにも恋の力は必須です。

「兵を連れて月様たちと合流し、涼州へ退くのです。これだけの被害を受けたならば、連合もしばらくは追ってはこないでしょう。その間に、勢力を立てなおすのです」

「……絶対に戻ってくる？」

「ええ、約束です。……それでは、また会う時まで」

「……（コクリ）」

一つ頷いて、恋が部隊を率いて撤退していく。

その背後を王平隊の隊員が、大盾を駆使して援護する。

「第二部隊は、そのまま呂布隊を援護しつつ撤退。第一部隊は自分について来てください。張遼隊の救出に向かいますよ」

「……はっ！」「」

火計で身動きがとれない関羽たちをその場に、自分達は虎牢関の左翼へと部隊を移動させる。

敵部隊を上手くいなしながら突き進んでいくと、張遼隊が曹操軍に囲まれ身動きが取れなくなっていた。

「王平隊は、敵包囲網を突破し張遼隊を救出。救出後、速やかに撤

退行動に移りなさい。守備隊ももう長くは保ちません……急ぎなさい！」

さて、これで張遼隊の方は何とかなるでしょう。

あとは、霞本人を救出せねばいけませんね。

王平隊の腕の立つ者数十人を引き連れ、乱戦の中をひた駆ける。しばらくして、霞が大剣を手にした女性と斬り結んでいる光景が目に入った。

「どうやら、まだ生きていますよね」

「なつ、貴様何者だ！」

「黎明！ どうしてここにおんねん!？」

二人が距離を取ったのを見計らって、素早く霞の傍へと駆け寄る。

「霞、虎牢関はもう保ちません。撤退します」

「黎明、恋は……恋はどないしてん!？」

「大丈夫です。既に部隊を率いて撤退しました」

「そっかあ、良かったなあ」

霞が安堵のため息をつく。

しかし、まだ安堵するには早すぎるのですよ。

本当に安堵すべき時は、ここから無事に撤退できた時です。

「あまり時間はありません。行きますよ。」

「でも黎明、ウチは今、夏侯惇との一騎打ちの真っ最中や。武人として、敵を前に逃げ出したくはないねん」

「そんな矜持など、何処ぞに放り捨ててしまいなさい。命あつての物種です。それに……霞は詠との約束を破るのですか？」

詠が自分達との別れ際に言った言葉……絶対に帰ってきなさい。

もし今ここで手合わせにこだわれば、これを破る事になってしまいます。

霞が負ける、とは思いませんが、例え勝ったとしても退路がなければ同じ事。

そんなことは、霞も絶対に望まないはずです。

「王平將軍、張遼隊の救出、無事完了いたしました！」

「なにい!?!」

王平隊の隊員の言葉に、何故か大剣の女性……夏侯惇が反応する。大方、兵たちを人質にとって霞を脅すつもりだったのでしよう。

先程の夏侯淵たちの乱入と言い、曹操軍はよくよく面倒を掛けさせてくれますね。

流星は曹操……その手回しの良さには、素直に称賛を送りたいです。

「これで戦場に残っているのは自分達だけです。……霞、行きますよ」

「……分かった。惇ちゃん、悪いけどこの勝負……またの機会までお預けや。けど、いつか必ず決着はつけるで」

「ま、待て！ それでは私が華琳様に叱られ」

「ほな、またな！」

霞が踵を返して走り出す。

それに続いて、自分も最後に、何故かダパーっと涙する夏侯惇とそんな夏侯惇を必死でなだめるドリルを携えた少女を一瞥し、踵を返して走り出そうとした。その時、

「全く、またあなた方ですか！」

数発の気弾が遠方より飛来し、自分の退路を阻むかのように地面に着弾して爆発する。

駆けだそうとしていた足を無理やりに止め、爆発に巻き込まれないように後ろに跳び退る。

そしてまた、自分がいる場所目がけて気弾が飛来する。

ハッキリ言って、この波動拳はチートでしょう。

あんなもの、どうやって防げと言うのですか！

狙い撃ちされる危険性を避けるため、最小限の動きで気弾の間を縫うように避ける。

しかし、それがまづかった……。

ドスドスッ！

肉に何か突き刺さるような鈍い音。

続いて自分の左足を襲う激痛。

見れば、二本の矢が自分の足に突き刺さっていた。

「なるほど……気弾の影に隠れるようにして矢を放ったと言っ訳ですか」

これは不覚を取りましたね。
敵ながらあっぱれです。

そして、足をやられた自分はもうここから逃げ切れませんか。
申し訳ありません、詠、恋。
どうやら自分は、約束を破ってしまうかもしれません。
全く、霞に偉そうに言ったばかりだと言っのにですね……。

「王平將軍！」

そんな自分に気が付いた部下の一人が声を上げて叫ぶ。
その声に気が付き、さらに部下たちが足を止める。
全く、なにをやっているのですか彼らは……。

「自分の事は構わず、あなたたちも早くこの場から撤退しなさい」

「しかしっ!？」

聞き分けの無い部下たちに、思わず声を荒げて告げる。

「これは命令です！ 行きなさいっ！」

彼らはこれからの董卓軍の立て直しに必要な存在です。
こんな所で、曹操軍に捕縛されて良い人材ではありません。

「……了解しました」

「はい。それでは……また何時か」

「……はっ!」「」

果たされるか分からない約束を信じ、自分の傍をついて来てくれた部下たちが撤退していく。

そしてそれを機に、退路を守るために奮戦していた守備隊も撤退を始める。

董卓軍の完全撤退をもって、虎牢関になだれ込む孫策軍。落城する虎牢関。

その一部始終を最後まで見届け、自分は剣を腰に納めた。

「潔く敗北を認めるのか?」

何時の間にか傍に来ていた夏侯淵がそう告げる。

「いいえ、自分はこの勝負に勝ちましたよ」

「……それは、どう言う意味だ?」

「確かに自分は戦には負けました。まあ、それも自分にとっては一つの汚点となってしまう訳ですが……本当に守りたい者を守るための勝負には勝ちましたので、それも良しとしましょう」

自分の言っている事の意味がよく分からないのか、夏侯淵が首を傾げる。

まあ、分かってもらおうとは思いません。

所詮、これは自分が勝手に始めた、自分の誓いとの勝負ですから。ただ、もう少しこの勝負……続けたくはあったのですけどね。

月様たちとの生活は、とても楽しいものでしたから。

「さて、夏侯淵。あなたは曹操殿の命で、自分を生け捕るために来たのでしょっ？」

「ああ、そうだ」

「そうですか。ならば自分は抵抗しません。逃げも隠れも、この足ではできませんから。素直に曹操殿のお顔を拝見しに参りましょう」

左足に刺さった矢をひと思いに引き抜く。

つう~~~~~！！これはまた…凄まじい激痛が走りましたね。

一瞬、新世界への扉が見えそうになってしまいました。

「それでは、行きましようか」

「それは殊勝な心がけだが……まずは治療が優先だ。血まみれの状態で、曹孟徳様の御前へは案内できん」

当然のことですが、自分の足は血で真っ赤に染まり、まさにホラ一度が全開の状態です。

さながら、血まみれ王平……とでも言いましようか？

「……ふむ、それもそうですね」

「だろう。衛生兵はこちらだ、ついて来い」

そうして自分は、未だに泣き続ける夏侯惇とそれをなだめる少女の脇を通り過ぎ、傷だらけの少女に見張られながら夏侯淵の後ろを着いていく。

ふと空を見上げれば、空は茜色で綺麗に染まっている。

それだけ、自分たちが長い間戦っていたと言っ事でしょう。
空を赤く照らしながら沈みゆく太陽が、自分たちの影を長く長く
伸ばしていた……。

虎牢関の落日（後書き）

反董卓連合編終了！

この小説では、董卓軍が一つの勢力として残る事になります！

つまりは、三国志ならぬ四国志となっています。

そして、王平は史実通りにひとまず魏に。

さて、タグ通りの展開に、この先が果てしなく不安です！

あ、ちゃんと構想はありますのでご心配なく。

それでは、次回も宜しくお願いします！

P.S. 作者はしばらくリアルが忙しくなるので、更新速度が激落ちします。来週には速度が戻る予定ですが、何卒ご容赦を。楽しみにしてください。読者の皆様、本当にゴメンなさい。

邂逅、相容れずとも（前書き）

く 狷介孤高けんかいここう

かたい意志を守り、決して妥協しない事。

邂逅、相容れずとも

虎牢関において、足を負傷したために曹操軍に捕らわれてしまった王平。

しかし無事に董卓軍を撤退させられた事に安堵した王平は、夏侯淵の配慮で治療を受け霸王：曹孟徳の元へと素直に参上する。

覇道を突き進む曹操と、守る戦いを矜持とする王平。

決して相容れないはずの二人の対面が、今まさに行われようとしていた……。

〜王平〜

夏侯淵によって貫かれた足を、夏侯淵の配慮によって衛生兵に治療してもらい、それから自分は曹操軍の陣の中を本営に向かって移

動する。

陣内の兵たちが自分に怪しげなものを見る視線を向けて来ますが……まあ、それは当然でしょう。

何せ自分は、先程まで虎牢関で敵対していた将ですからね。普通ならば討ち取られて首だけになっているはずですから。

しかし、なぜ曹操は自分の事を生け捕りにするよう命じたのでしょうか？

曹操が人材マニアだと言うことは知っていますが……いえ、それは直接聞けば良い事ですな。

どうせ、すぐに顔を合わせる事になるのですから。

そうして到着した本営には、曹操軍の将と思われる人物たちが円陣を組んで集まっている。

その中心にいるのは、金髪の小柄な少女。

夏侯淵と共に、自分も円陣の中へと足を踏み入れる。

「華琳様。ただ今戻りました」

「おかえりなさい、秋蘭。……その男が？」

「はい。董卓軍の守将、王平です」

夏侯淵が真名を呼んだあの少女。

彼女が恐らく、かの曹孟徳なのでしょう。

確かに見た目はアレですが、纏う覇気はまさに霸王そのもの。人は見た目によらないを体現している様な方ですね。

「そう、ご苦労さま。よくやってくれたわね、秋蘭」

「はっ、ありがとうございます」

そう言っって一步後ろに下がる夏侯淵。

自然、自分は円陣の中央で一人囲まれた状況になる。

そしてなぜか、射殺さんばかりの視線を向けてくる猫耳フードな方がお一人。

はて、彼女は一体誰でしょうか？ 自分、そのような目で見られる覚えは無いのですが……。

とにかく、この状況……どうしたものでしょうかね。

「これはまた、自分如き凡将にこれほどまでお出迎えとは。自分、恐縮してしまいます」

などと言い、肩をすくめて見せる。

しかしそんな態度にも曹操は動じず、ただ真っすぐに底の知れない瞳で自分を見つめるのみ

「貴様あ！ 我らが曹孟徳様の御前で、よくもその様な無礼な態度をつ！」

「「「……」「」」

……曹操の威厳が、今ので木っ端微塵に砕けました。

周りの将の、夏侯惇に向く視線が冷たいです。

ほら、曹操も額に手を当ててやれやれと首を横に振ってますし。

しかしまあ、自分もああいふ空気はあまり得意ではないので、むしろ助かったともいえます。

ある意味、夏侯惇には感謝ですね。猫耳さんからの視線も逸れま

したし。

「これはとんだ失礼をいたしました。どうぞ、お許しを」

「うむ、分かればそれで良いのだ！」

ふん、と鼻を一つ鳴らす夏侯惇。

そんな夏侯惇の姿に、周りの將たちが一斉にため息をついた。

「曹操様。そちらの夏侯惇將軍は、なかなか面白い方のようにですね？」

「……その点については否定はしないわ」

曹操が苦笑しながら言う。

「ふふつ、そうですか。それでは改めまして……自分の名は王平。董卓軍の一武将です」

「我が名は曹孟徳。陳留で刺史を務めている者よ」

「存じていますよ。お噂はかねがね……」

と言っても、前世での知識がほとんどを占めてはいるのですが。しかしまあ、こちらの曹操に当てはまる所もあるでしょう。

「して、自分に如何様な用でしょうか？」

「そうね。それでは、単刀直入に言わせてもらいましょう。……貴方、私に仕えなさい」

「……自分は名も知られていない、ただの一介の武将ですが？」

霞や恋はともかく、自分は現時点では名も語られていないただの武将。

何故、そんな自分を曹操は……。

「そんな事はどうでもいいのよ。私が貴方の力を欲している……ただそれだけよ」

「それはまた、大きく買われているようですね」

「此度の戦を見ていれば、当然の評価でしょう？」

自分はただ、矜持に従い皆を守るために戦い、指揮を執っただけ。しかしそれが評価の対象になったと言うのなら……そう言うことなのでしょう。

「もちろん、貴方に見合った地位と対偶も用意する。どう、悪い話ではないでしょう？」

「そうですね、確かに悪い話ではありませんが……曹操様の進む道は、どの様なものですか？」

「私が突き進むのは霸道。立ちはだかる英雄達を降し、大陸統一を目指す霸道よ」

間を空けることなく、曹操がそう返す。

言葉にも表情にも、瞳の中にも迷いは一切見られない。

それだけ、自分の信念に誇りを持っていると言うことでしょう。

「霸道…ですか。自分のポ…：矜持は、守るために剣を振るう事。戦う事を主とする曹操様の霸道と守る事を主とする自分の矜持は正反対に位置します。そして今この時も、自分の矜持は董卓様と共にあります。いずれ曹操様は董卓様に戦いを仕掛けるでしょう。もし自分が今ここで曹操様に仕える事になったとしても、その時が来れば自分は曹操様に剣を向ける事になるかもしれませんよ？」

「そう。ならばそうならないよう、貴方の矜持の抛り所を私の傍にしてみせましょう」

「出来るとお思いですか？」

「なら勝負する？ 貴方が私を守れば私の勝ち。貴方が私を守らなければ貴方の勝ちよ。貴方が勝てば、貴方はその後、好きにすればいい。でも私が勝ったら、貴方を私の好きにさせてもらおうよ」

自分が曹操を守れば曹操の勝ち、自分が曹操を守らなければ自分の勝ち。

……。

ああ、なるほど。そう言うことですか。

「ふ、くく…はははははっ！ 曹操様との勝負に勝てば自分は矜持を捨てる事になり、矜持を取れば自分は曹操様との勝負に負ける…ですか。どちらにしても、自分は勝って負けることになる…：ですが、負ける方によっては曹操様は命を落としかねませんよ？」

「それぐらいの覚悟がなければ、貴方は私に仕えないでしょう?」

そこまでして、自分の力を欲しますか。

霸道と言う攻の道には役に立たないであろう、自分の守の力を。

何がそこまで、貴方をそうさせるのかは知りませんが……。

「良いでしょう。その勝負、乗らせていただきます」

そんな曹操に、自分は些か興味を持ってしまいました。

それにここで断って斬首されるなりしてしまえば、月様たちの下に
戻る事は永久に不可能となってしまう。

ならば、多少面倒な事であっても乗るべきでしょう。

月様達には申し訳ありませんが、今しばらくは、この英雄と勝負
させていただきたい。

「良いのね? 取り消しは効かないわよ」

「はい。勝負を見据えるために? しばらく? 曹操様に仕えましょう」

「強調するのね?」

「これだけはハッキリさせておかなければいけませんからね」

いつの間にか終身雇用になっていたりしたら、自分が果てしなく
困りますから。

「そう。でも、それも私が勝つまでの話よ」

「さて、それはどうでしょうね」

「いいえ、必ずそうさせてみせるわ」

「おやおや、自身満々の覇気全開ですね。」

「流石は曹孟徳、勝負に関して何処までも貪欲ですか。」

「まあ、たとえそうであったとしても、自分も負ける気はさらさらありませんが。」

「それからですが…自分は今より、王平改め？何平？と名乗らせていただきます」

「うん？ 名前を変える必要でもあるのかしら？」

「董卓軍の王平の生存を諸侯に隠すためです。まあ、自分はそのままで名も知られていないので、必要かどうかは微妙ですが……一応は曹操軍への気配りとして」

「……本音は？」

「生存を隠した方が、生きて戻った時の董卓軍の皆さんの驚き顔を見られそうだからです」

「……貴方、結構イイ性格してるわね」

「ふふふ、褒め言葉として受け取っておきましょう」

「苦笑する曹操に笑顔でそう返す。」

「それでは、これから宜しくお願いしますね」

自分の清々しい笑顔に、何故か若干、周りが引いていました。
ちょっとだけ、自分の心が傷つきました……。

邂逅、相容れずとも（後書き）

忙しい合間を縫ったの投稿。

うーん、難しい回であっただけに、イマイチ出来が不安。

矛盾してる所がなければいいんですけど……。

もしかしたら、加筆修正を入れるかもしれない。

それでは、次回も宜しくお願いします！

お気に入り登録と感想に感謝！

洛陽道中（前書き）

く覆水盆に返らず

一度過ぎてしまった事は、二度と取り返しのつかない事。

洛陽道中

虎牢関での休止もそこそこに、連合軍が洛陽への進軍を再開しました。

そこそこと言っても、受けた被害が大きいだけに一週間ほどとしての再開です。

これだけの時間があれば、月様たちはとっくに洛陽を離れ、涼州へと逃れている事でしょう。

それに、進軍速度も大規模な袁紹軍が先頭を務めているだけに鈍いですし。

自分にとってはのんびり出来て、月様も無事に逃げられる確率が上がって、まさに良い事ばかりですね。袁紹軍さまさまです。

まあ、その所為で曹操以下数名がイラついて、そのとばっちりが来ないか心配ではありますが……。

ちなみに自分は、陣内では比較的自由にさせてもらっています。流石にまだ完全には信用できないのか、見張り付きですが。それでも、軟禁よりは十分マシです。

それで、その見張りと言つのが……。

「申し訳ありません、楽進殿。自分が信用されていないばかりに、面倒な見張りをさせてしまつて」

そう、あの娘です。

気弾を自分に向かって飛ばしてきた波動拳使いです。

曹操は恐らく、先の戦いで苦戦したのを見て、この娘を見張りに付けたのでしょね。

何と言うか、良い気遣いをしてくれますよ、本当に。

「いえ、お気になさらずに」

自分の言葉にそっけない態度で返す楽進。

ふーむ、どうやら楽進は無口なタイプなのでしょうね。

あまりおしゃべりなのも嫌ですが、ここまで無口なのも少し……。

ああ、恋は別ですよ？ 彼女とは別の方法で意志の疎通が出来ますから。

その方法ですか？ ふふ、秘密です。

「楽進殿、退屈にはなりませんか？」

「仕事ですから」

取りつく島もない感じですね。

きつと、仕事に対して至極真面目なんですね。

良い事ですが、ハメを外す事も覚えなければ人としてつまらなくなってしまうですよ。

まあ、あくまで自分の考えですから他人に押し付ける気はありませんが。

しかしまあ、こうしてゆらゆら馬に揺られているだけ、と言うのも暇なものです。

……ダメもとですが、言ってみましょつか。

「楽進殿。先の戦いで自分に放ったあの光弾は、気ですか？」

「そうですが、それが何か？」

「ほうほう、やはり。それで、ものは相談なのですが……自分にも
気の使い方を教えてもらえませんか？」

「……」

ふむ、返答なし。

やはり無理なお願いでしたか。

まあ、知り合って間もない相手にそんな事をする義理もありませ
んしね。

第一、いずれ敵になるかもしれない相手に己の技を教えるバカは
いませんか。

とりあえず、愚かな事を言ってしまったのを謝っておきましょう。

「いえ、失礼。今の事は忘れてください」

「……」

あー、これにも返答なしですか。

これは正直、くるものがあります。

色々とアレな自分ですけど、一応人並みには傷つくんですよ？

まあ、それこそ楽進殿にとっては知った事ではないのでしょうか
ど。

これで、自分は完全な暇になりました。

正直、こんな体験は初めてです。

今日まで毎日、何かしらの出来事がありましたからね。

「暇ですね〜」

「……………」

「凄く暇ですね〜」

「……………」

「超絶的に暇で」

「出来れば、静かにしてもらえると助かります」

「……………ごめんなさい」

怒られてしまいました。

楽進の仕事熱心さには脱帽です。

脱帽を通り過ぎて、暇すぎるストレスで脱毛しそうです。

お、今自分、上手い事言いましたよ。えっ、思いすごし？ ああ、
そうですか……………。

やる事もなく、話し相手も居ない。

さて、この状況……………どうしたものでしょう。

……………夏侯淵ならば、少しは話し相手になってくれるでしょうか？

馬の歩を速めてここより少し前にいる夏侯淵の近くへと移動する。

当然、後ろには楽進も付いてきますが、仕方がない事なので気に
しない方向でいきます。

「妙才殿、少し宜しいですか」

「ん、どうかしたのか何平」

「いえ、少し話をしたいと思ひまして。お邪魔でしたか？」

「いや、構わない。まだ、洛陽までは少し掛かるだろうからな」

ああ、袁紹の所為ですね。

夏侯淵には申し訳ないのですが、さっきも言ったように自分は内心喜んでゐる所があります。

でもその所為で、これほどまでに暇を持て余す事態にもなつてゐるのです。

「そうですね。……では妙才殿、一つお聞きしたいのですが……曹操様はなぜ、自分を欲しいなどと思つたのでしょうか？」

自分のその質問に、夏侯淵はふっと小さく息をつき、それから口を開く。

「それか。……華琳様も言つていたが……？水関、虎牢関でのお前の働きを見れば、私が華琳様の立場であつたとしても欲しいと思うだろう。無論、他の諸侯たちもな」

「ですから、それは買い被り過ぎではありませんか？ 自分はそれほどの方では無いと思うのですが」

「己の価値、評価は、他人が見て決めるものだ。先の戦いでのお前の活躍は、華琳様が言つてゐるように素晴らしいものであつたよ」

素晴らしいもの……ですか。

確かに、敗戦した状態から味方の損害を抑えつつ、上手い具合に撤退させる事は、攻める側からすれば素晴らしい見えるでしょう。ですが、生憎と自分は守る側。

あの状況に陥ること自体、守る側にとってはあつてはならない事なのですよ。

「……自分は、あの戦いで自分を働きを、素晴らしいなどとは全く思えませんし、思いません。自分は、最低限の成果しか上げられなかったのですから」

「最低限とは、董卓を逃がす事が出来た……と言つことか？」

「はい。本来ならば、連合軍を返り討ちにする予定だったので……まあ、これは今更言つた所で、と言うものです」

戦いはもう終わりました。

ここで何を言つても、それは所詮、負け犬の遠吠え。華雄を止められなかったのも、恋たちを止められなかったのも、その責任の一端は、自分にもあるのですから。

ですから自分は、守りたいものを守れたその事実だけを、此度の自分の唯一の誇りとしてあの戦いの結果を受け止めるしかない。

それが、今の自分に出来る最善の行いと思つて。

「そうか。……何平、やはりお前は……華琳様を守ろうとは思えないのか？」

「……」

「……すまない、私が口を挟むべき事では無かったな」

これは自分と曹操の勝負。夏侯淵もそれに思い至ったのでしょう。ですから、それ以上の口を挟む事を止めたのでしょうね。

「だがな何平、これだけは言っておく。……もし華琳様に危害を加えようものなら、今度こそ私は貴様の命を奪わせてもらっぞ」

「ええ、それは妙才殿の当然の権利であり義務です。ですから、自分は一切構いませんよ」

「ずいぶんと余裕なのだな」

「さあ、どうでしょうかね」

そう言って、夏侯淵に肩をすくめてみせる。

しかし正直に言って、その時の状況によっては自分もあっさりと殺されてしまいかも知れません。

現にこうして、足を射られてしまいましたから。

……もし言い訳を許してもらえるなら、波動拳は反則だと言いたいですがね。

「さて、どうやら思いのほか長く話していたようだな。直に洛陽に到着するぞ」

「そうですか。どうも長く付き合ってもらいまして、ありがとうございました。それでは、自分は見つからないよう待機組の陣の奥に引っ込む事にします」

そう言って、自分の馬を後方の部隊の方へと移動させる。

もし洛陽に一緒に入って顔見知りに見つかろうものなら、月様たちに生存を知られてしまいかもしれませんから。

ここは一つ、城外で待機する兵たちと一緒に、のんびりさせてもらおうとしましょうかね。

洛陽道中（後書き）

一週間、長らくお待たせいたしました。

微妙にとあるフラグを立ててみた今回。

まあ、まだずっと先のものになりそうなんですけどね。
さてさて、どうなる事やら。

それでは、次回も宜しくお願いします！

お気に入り登録と感想に、改めて感謝です。

何平、秘蔵の……（前書き）

く口も八丁手も八丁く

口も達者で、やる事も達者な事。

また、そうした人柄にたいする皮肉。

何平、秘蔵の……

さて、先の原因から、自分は城外で待機するつもり……だったのですが、

「何故こうして、洛陽の町を歩いているのでしょうか？」

言葉通り、何故か自分は外套に身を包み、城下を城に向かって歩いています。

「あら、洛陽で暮らしていたのだから道案内を頼むのは当たり前でしょう？」

ふふん、と当たり前に言う曹操。

正論です、全くもって正論です。

もうひとつ加えれば、自分の都合を全く無視した正論です。

いくら外套で姿を隠しているとは言え、知り合いに見つかったらどうしてくれるのですか。

「まさか曹操様……先程のウサを自分で晴らしてませんか？」

「……」

自分の見つめた曹操の目が、フィツと明後日の方向を向いた。

やはり……やはりそうでしたか。まさか、こんな形でとばかりを食らうとは……。

「……わざと遠回りでもしてやりましょうか？」

「あらそう。貴方がそうするなら、私は貴方の正体をここで大声で明かしてあげるわよ」

「むう、それは困ります……」

「でしよう？　それが嫌なら手早く案内なさい」

勝ち誇った様子で言う曹操。

よし、決めました。この娘、いつか絶対に泣かせます。

ええもう、絶対の絶対の絶対にです！

そんな誓いを自分に立てながら城門をくぐり、今はもう自分の居場所では無くなった城内を案内する。

董卓軍兵の姿は無く、どうやら無事に皆逃げ切った様子。

「しかし曹操様。貴方は何度か、ここに足をお運びになっているのでは？」

「ええ。けど、流石に台帳の保管場所までは知らないわよ」

「まあ、それはそうでしょうね」

帝に謁見するための謁見の間までの道はほぼ一本道。

台帳が保管されている保管室の場所はさらにその奥ですから、知り得るはずありません。

さて、その曹操が求めている肝心の、納税率等の機密の記された台帳ですが……恐らく無いでしょう。

あの詠が貴重な資料となる台帳を置いていくなどと、愚かな事をするはずがありません。

とまあ、それは口に出さずに、保管室への道を進む。
しばらくして、扉の開け放たれた保管室へと到着する。

「ふむ、誰か先客がいるようですね」

「先を越されたか……」

少し顔をしかめた後、念の為にと保管室へと足を踏み入れる。

そしてそこにいたのは、霞に続いてチラリズム精神を盛大に無視した、赤い衣に身を包んだ桜色の髪の女性でした。

自分達に気付いたのか、その女性と奥にいた黒髪の女性がこちらに振り向く。

「あら、曹操じゃない。ここに来たと言うことは、あなたも台帳目当てかしら？」

「こんにちは、孫策。ええ、そうよ。でも、どうやらその様子では、台帳の方は見つからなかった様ね」

「ええ。全て持ち去られていたわ。流石は賈文和…抜け目の無い事ね」

ふんつと鼻を鳴らして役に立たない書簡を本棚に戻す孫策。

それから改めて気づいたようにして、孫策が口を開く。

「それにしても、良くここが分かったわね。私たち以外にこの場所を知っている人はいないと思ってただけど……」

「私にも情報筋があるのよ。そっちこそ、どうしてこの場所を？」

「ウチの隠密の娘は優秀だからね。これくらい、朝飯前なのよ」

ふふふ、と笑いながら視線をバチバチとぶつけあう曹操と孫策。
なんだか、傍から見ると結構面白いものですね。

ほら、なんだかうつすらとスパークが見えてきたような……。

「ん？　ねえ、何でその人、城内で外套なんか被ってるの？」

と、睨み合っていた視線を、何故かいきなり自分へと向ける孫策。
マズいですね、孫策の目が疑いの色一色です。

「ああ、アレね。アレは極度の恥ずかしがりやな、ただの肝っ玉の
小さい付き添いだから、気にしなくていいわよ」

「ふうん」

……。

流れる微妙な沈黙。

曹操め、自分が姿を見せられ無いからと言ってよくも好き放題に

……！

しかもアレ扱い……自分はものではありません！

って、あ、今、曹操が一瞬ニヤリと自分に向けてしゃがりました。

あの娘……やはり何時か、絶つつつ対つちに……泣かすっ！！

……コホン、思わず心の中の口調が荒くなりましたね。

まあ、やり方は大いに気に喰わないですが、孫策の詮索をかわしてくれただ事には感謝しましょう。

「まあ良いわ。それじゃあ、冥琳。帰るわよ」

「ああ、分かった」

そう言つて、孫策と……恐らくは周瑜が、自分たちの横を通り過ぎて保管室から出て行く。

天井を移動していった人は、恐らく孫策の言っていた優秀な隠密とやらでしょう。

しかしまあ、すれ違いざまに孫策が自分の方に注意を向けていたのは、やはり孫家の当主としての勘ゆえでしょうか。

全く、本当にこの時代の、この世界の英雄たちは皆、ひと癖ある人物ばかりですね。

「……で、何平。本当に、ここにはもう何も無いのかしら」

孫策が立ち去つたのを確認して、曹操が口を開く。

「ええ、ありませんよ」

「……本当ね？」

「ですから、本当になにもないと……ああ、そう言えば、確か秘蔵の本ならいくつかあったと思いますわが」

「秘蔵の本？」

「はい。確か……ああ、これですね」

自分が手に取ったのは表紙に何も書かれていない、一冊の書簡。いかにも怪しい雰囲気のを、何食わぬ顔で曹操に手渡す。まあ、実際には笑いを堪えるのに必死な訳ですが……ふふふ。

「ふむ、一体何が書かれて……ぶっ!!?」

曹操が本を開いた瞬間に噴き出す。

HA・HA・HA 引つ掛かりましたね!

曹操に手渡したのは保管室努めの女官さんの秘蔵本。

現代で言う、ハーOGEEIが描かれた艶本です。

自分も一度覗きましたが……正直きつかったです。

「な、ななな、何てものを渡すのよっ!」

「はっはっはっ! 言ったでしょう、秘蔵の本だと」

今度は自分がニヤリと笑い掛ける。

ふふふ、曹操が悔しそうな顔をしていますねえ。いい気味です。

「……謀ったわね」

「己の業の報いが返ってきただけでは？」

曹操がこめかみをピクピクとさせるのが、これまたユーモラスで笑いを誘います。

まあ、曹操も何とか自分をいさめたようなので、ここは自分も自重しますがね。

「……まあいいわ。でも、この借りは絶対に返させてもらおうわよ」

ふんっ、と鼻を鳴らして不機嫌そうに保管室を出て行く曹操。

まあ、流石に年頃の女性には、少しばかり無配慮なものでしたか。

……少し、曹操には悪かった気がしますね。

ちよっとした罪悪感を感じながら、保管室を後にして城を出る。

そして、城門をくぐって少しした所で、

「止めてくださいっ！」

近くから女性の叫び声が聞こえて来ました。

……全く、どごその不埒な輩でも、面倒な事に湧きましたかね。

何平、秘蔵の……（後書き）

曹操と何平の第一ラウンド（？）は、何平の勝利でした。

ちなみに第二ラウンドが行われるかは未定ですのであしからず。

って言うか、アレを勝負と言っていいのだろうか……？

うゝむ、分かん。

それでは、次回も宜しく願います！

お気に入り登録と感想に感謝！

洛陽のチラリズム（前書き）

「跳んで目に入るチラリズム」
スカート系の服装の女性が宙に跳ぶと、おのずとチラリズムが目に入る事。

B Y お…何平

洛陽のチラリズム

声の発信源と思われる場所に向かうとそこには、劉備軍の面々と町民を思われる女性に剣を突き付けて喚く男が一人。

そしてその男の腕には、これまた懐かしい黄色の布。

つまり、黄巾党の残党ですね。まさかまだ生き残りが、しかもこの洛陽に潜んでいたとは……。

しかしまあ、あの男も阿呆ですね。

布を捨ててしまえば、まだ普通の市民として生きていける可能性もあつたでしょうに……。

「てめらそれ以上近づくんじゃねえ！ さもないとこの女の首をかつ切るぞ！」

包囲され逃げ道の無い状況に、黄巾党が喚き散らす。

突き付けられた剣に、ひっ、と悲鳴を漏らす女性。

うゝむ、これはなかなか厄介な状況ですね。

黄巾党は完全に包囲されていますが、人質がいるせいでこちらからも手が出せません。

「全く、こんな時にまで面倒起こすだなんて……つくづく救えないわね、黄巾党の連中は」

「くっ、人質さえいなければ、私がこの手で叩き切ってくれと言うのに！」

「落ち着け姉者。奴をいたずらに刺激しては、あの女性の命が危ない」

顔に怒りを滲ませる曹操と、憤怒する夏侯惇。

夏侯淵も冷静さを保ってはいますが、殺気がピリピリ滲んでいますね。

ちなみに自分の背後にいる楽進も、メラメラと気を纏っていますから余計に怖いです。

「どうしますか曹操様。ここは劉備たちに任せますか？」

「そう言う訳にもいかないでしょう」

ふう、とため息をつく曹操。これで案外、民を思う心は持ち合わせているようです。

霸王である前に、まずは民の王である……そう言うことですか。

なるほど、ならば自分は……曹操に手を貸すのでしょうか。

「曹操様。この状況、自分が無事解決いたしましょうか？」

「あら、そんなこと出来るの？」

「はい。夏侯淵殿の手助けさえもらえれば」

自分の言葉にほんの数秒考え込んだ後、その視線を夏侯淵へと向ける。

「どう、秋蘭。やってくれる？」

「はっ、華琳様の命とあらば」

「そう。なら、何平に協力してあげなさい」

「分かりました」

頷く夏侯淵。いやはや、話が早くて助かります。ちなみに夏侯惇も何やらウズウズしていますが、残念ながら今回の作戦は夏侯淵にしかできませんから無視します。

「で、どうするの？」

「簡単ですよ。奴に気付かれないよう奴の背中にある民家の屋根に上って、そこから夏侯淵殿が奴を射る。それだけです」

「なるほどね。確かに、秋蘭の腕なら造作もない事でしょう。なら、私たちは奴の気を引いておけばいいのかしら？」

「はい、お願いします。では夏侯淵殿、着いて来てください」

夏侯淵を連れて、自分は知り尽くした洛陽の街を駆け抜ける。角を曲がり路地を抜けて、数分ほどで民家の裏手に回る。

「さて、ここから屋根に上がればすぐです」

「それは良いが、どうやって上がるのだ？」

「自分が踏み台をしますから、それで上がってください」

「分かった」

夏侯淵が助走のための距離を取り、自分も片膝をついて両腕で踏み台を作る。

お互いに頷き合い、そして夏侯淵が走り出す。

夏侯淵の足が自分の腕を踏み切るタイミングで、腕を上へと押し上げる！

「ふんっ！」

夏侯淵が宙高く飛び上がり、ストンつと屋根の上に静かに飛び乗る。

その時、ちょうど風が吹いて自分の目に夏侯淵のチャイナドレスのチラリズムを頂きました！

はい、大人でした。アダルトいな下着でございました。

夏侯淵の性格を現すかのようなクールな色でした。

別に、この展開を狙って作戦を提言した訳ではありませんよ？

全ては偶然、天からの送りものです！（くわっ）

「……何平殿、なぜ片膝をついたまま親指を立てているのですか？」

「ふっ、楽進殿。チラリズムを堪能できた時は、親指を立てるものなのですよ」

「ち、ちらり……ずむ？」

「ああ、お気になさらずに。別段、重要な事でもありませんので」

と言うよりも、意味を知られると自分の身に危険が及びます。

まだまだ、自分はこんな所で死ねません。

ドスッ……！

「む、どうやら片付いたみたいですね」

「はい、その様です」

聞こえてきた鈍い音は、恐らく夏侯淵殿の放った矢の一撃の音でしょう。

断末魔が聞こえなかった辺り、一撃で黄巾党の頭を射ぬきましたか。

流石、弓の名手なだけはありませんね。

楽進と二人で曹操たちの下へと合流する。

そこでは案の定、後頭部を射ぬかれた黄巾党と、屋根から飛び降りる夏侯淵。解放され、蹲って泣きじゃくる女性の姿が。

そしてその女性を慰める青年。あれは……学生服？

……いやしかし、この世界では服装にかなりのパラレルが生じていますから、まさか……。

ふむ、それはともかくとして、劉備たちと一緒に行動しているようですが、はて……彼は一体何者でしょう。

劉備軍に属する、武将……と見るべきか。

まあ、今はとりあえず置いておくとしましよう。

「どうやら上手く行ったみたいですね、曹操様」

「ええ。まあ、秋蘭がやるのだから成功して当然よ」

「おやおや、部下のご自慢、ご馳走様です。……ん？ 曹操様、どうやら劉備たちが会いにきたみたいですよ？」

劉備と先程の青年。そして関羽と張飛がこちらに向かってやってくる。

大方、先程の事態を收拾したことについてのお礼かなにかでしょう。

……あの二人とは虎牢関で顔を合わせてますから、自分は少し後ろに下がるとしましょうか。

「ありがとうございます、曹操さん。おかげで町民の方を助ける事が出来ました」

笑みを共に礼を言う劉備。対する曹操は、何でも無いと言った風に答える。

「礼には及ばないわ。私は、当然の事をしたまでなもの。それに、礼を言うならばあそこにいる者に言いなさい。今回の事は、彼が進言したのだから」

って、待て待て待てえ！ どうしてそこで自分に振るんですか！？ しかも関羽と張飛のいる前で！ 正体がバレるではありませんか！

「そうだったんですか。ありがとうございます！ え〜っど……」

「じぶ……ゴホン！ 俺の名前は何平だ。それと礼は不要、俺も当然の事をしたまでだ」

うわぁ、自分で言ってる違和感バリバリな俺口調。鳥肌が全身に

立ってきました。

って、そこっ！ 曹操っ！ あからさまに笑いをこらえるんじゃないありません！

すると、関羽が何を思ったのか自分の方へと近寄ってくる。

「……お主、以前何処かで会った事は無いか？」

うっ、マズい。関羽に気取られましたか。

いぶかしげな表情で、外套の中を覗こうとする関羽。
怪しまれないように数歩下がり、顔を見られないようにして答える。

「い、いや。き、気の所為だと…思うぞ？」

「ふむ、そうか……」

疑問半分、納得半分と言った様子で下がる関羽。

あ、今横から、ちっ、と舌打ちが聞こえて来ました。

曹操ですね、分かります。って言うか借りを返しに来るの早いですね。

きつとレンタルビデオを期限一週間で借りても、借りた日に速攻で見て翌日に返すタイプですね、彼女は。

ちなみに自分は、借りた日に速攻で全部見て、返却ギリギリまで持っておくタイプです。

え、どっちもどっち？ いいえ、違います。全くもって違います！
どう違うのかは、魂で感じてくださいな。

……うん、誰に言っているのしょうね、自分は。

そんな事を思っていると、先程から気になっていた白い学生服（？）の青年が、曹操の前まで進み出て口を開く。

「今回は本当に助かったよ曹操。それじゃあ、俺たちは町民たちの炊き出しに行くから……またな」

「ええ。でも次に会う時は、私が貴方の所の関羽を貰い受ける時よ。その時を楽しみにしていなさい、北郷」

「悪いけど、俺は絶対に愛紗を渡さないからな」

そう言っただち去る青年以下劉備軍。

ふむ、あの様子からして彼は劉備軍の中でも上の人間ですか。

そして曹操が言っていた北郷と言う名前……もしや彼は、現代の人間なのだろうか。

「曹操様、先程の青年……何者ですか？」

「あら、噂を知らないの？」

「生憎と、そう言った方面にはとんと無頓着で」

「そう。なんでも、管輅の予言に出てきた、流星に乗ってやってきた天の御使いだそうよ。真偽の方は明らかではないけどね」

流星に乗ってやってきた、ですか。

なるほど。つまり彼は、自分のように転生したのではなく、肉体ごとそのままタイムスリップしてきたと、そう言うことですか。

「どうしたの、何か気になる事でもあったのかしら？」

「いえ、別に。にしても……天の御使いにしては普通の青年でしたね」

「本当、アレの何処に関羽が惚れたのやら……」

「曹操様は関羽をお望みで？」

「そうよ。あの美しい黒髪と天下に轟く武。あれほどの人材を手に入れたと思うのは当然でしょう」

ふふふ、と黒い笑みを浮かべる曹操。

いやはや、やはり曹操は人材マニアでしたか。

それだけは、向こうもこちらでも変わりませぬ。

「うふふ、関羽を手に入れた暁には、私がしっかりと可愛がってあげるわ」

……どうやら、こちらの曹操は些かREZUの気があるみたいですが。

「んんっ、とにかく自分達も、そろそろ復興の方に力を入れるべきでは？」

「そうね。……秋蘭、外で待機している桂花に、街道の整備と復興に取り掛かるよう伝えてきてちょうだい」

「御意」

「春蘭は部隊を率いて治安の維持に取り掛かりなさい。連合軍の兵士が盗みを働こうとした場合は、殺さずに取り押さえなさい。良いわね」

「御意！」

夏侯惇と夏侯淵が各々自分の持ち場に着く。

さて、自分は一体、どの様に働かされるのやら。

「何平は風…楽進と李典、于禁と共に町の復興支援を。何平、町を詳しく知る貴方なら出来るわよね」

「お任せを。これでも自分、大工仕事について、多少なりとも知識がありますので」

「そう。なら、その知識を生かして頑張りなさいな」

「言われずともそのつもりですよ」

互いに微笑し合い、そして楽進以下二名を連れて町の復興へと向かう事にする。

李典と于禁とはまだ話もした事ありませんが……まあ、何とかなるでしょう。

とりあえず、その二人を呼びに行く事から始めるとしましょうかね。

洛陽のチラリズム（後書き）

うむ、一刀を出してみたは良いが……たぶん空気になるのがオチだな。

だってこれから長い間、名前すら出てこなさそうなんだもの！

出さない方が良かったかなあ……？

それでは、次回も宜しくお願いします！

お気に入り登録と感想に改めて感謝です！

野望と気づかい（前書き）

く 一挙両得

一度に二つの利益を得たり、二つの目的が叶う事。

野望と気づかい

件の二人を呼びに行き、ただ今自分、絶賛復興支援中です。

ふふふ、本業の大工の親方に認められた監督力を舐めてもらっては困りますよ？

しかしまあ、ここまで順調に事を運んでいるのは、ひとえに李典のおかげでもあったりします。

いやはや、凄いですね李典は。

武器がドリルな事も驚きましたが、建築など工作関係に関する彼女の腕は凄まじいものです。

この時代ではあり得ないドリルを作った事もそうですが、復興に回っている部隊を堅実に指揮していますし、それに加えて自分の注文を忠実に、かつ完璧にこなして行くんですよ。

本人は、カラクリをいじるのが好きであるがゆえと言っています。だが、これはもう趣味のレベルを越えています。

条件さえ揃えばもしかしたら、いわゆる現代の？カラクリ？も再現出来るかもしれませんね。

「何平の兄さん、ここはこんなもんでええんか？」

「はい、完璧です。それでは、次はこちらの方の修理を」

建物の修理をしているとは思えない格好でテキパキと仕事をこなしていく李典。

李典の関西弁を聞いていると、霞を思いだしてしまってどうもい

けません。

それに……なんで上半身ビキニに腰に工具セットなんてファッションなんだろうね。

正直、目のやり場に困りますし、危ないのではと思ってしまつのですが。

まあ、それを言ってしまうと、鎧らしい鎧を着けずに戦場で暴れ回ってた劉備軍の面々もそうなのですが……。

とりあえず、どんな服装でいるかは人それぞれと言つことですね。分かります。

「何平さん！ こっちはどうすればいいのー？」

「ああ、それは二軒先の向こうの民家の前まで運んで置いてください。もし、誰か于禁殿を手伝ってあげてください」

自分の言葉に兵士数人が于禁と一緒に資材を運ぶ。そう言えば、于禁もアレでよく働く娘ですね。

楽進や李典とはまた別の雰囲気を纏う彼女ですが、やはり本質は武将と言つべきでしょうか。

ただ、外見はもの凄く女の子をやっています的な服装ですけど……。
アレです、渋谷などに行けば見る事が出来そうなファッションの服装ですね。

やはりこの世界では、服装の平行が凄いです。

「何平殿は、随分とこう言う事にお詳しいのですね？」

そんな事を思っていると、珍しい事に楽進の方から自分に声を掛けてきました。

「おや、気になりますか？」

「ああいえ、その……」

「ふふふ、まあ、自分も色々と見て来ましたからね」

しどろもどろになる楽進に微笑を返しながら言う。

前世から数えると、もう数十年は知識を蓄えていますから、これくらいの事は自分にとっては容易い事です。

「それはそうと……楽進殿は、お二人の手伝いをしなくても良いのですか？」

「……私は、何平殿を見張る役割を命じられていますので」

「そんな事をせずとも自分は逃げたりはしませんよ。ですがまあ、これが楽進殿の仕事だと言うのなら、口出しはしません」

任務ゆえに仕方が無いとはいえ、楽進の表情からは二人を手伝いたいと言うオーラがヒシヒシと感じられます。

恐らく、この三人はとても仲が良いのでしょう。

先程も三人で楽しそうに話していましたからね。

でももし、ここで自分が逃げないからと言い、それを信じて二人の手伝いに行ってしまうえば、楽進にとってそれは立派な命令違反となってしまう。

それは自分も望む所ではありません。

ですが、こつも寂しそうな顔をされながら見張られるのも、正直勘弁願いたいのですよ。

「ふう、では自分が、二人を手助けしに行くとしましょう。楽進殿も、自分を見張るついでに手伝うならば、支障も無いでしょうし」

「なっ……し、しかしそれでは、何平殿が」

「手伝いながらも指示を出す事くらいできますよ。それに、自分も指示を出すだけでなく体を動かしたいですね。と言うよりも、楽進殿も体を動かして働きなさい。ただ見張っているだけが仕事だなんてずるいです」

「ず、ずるいと言われても……」

いや、十分ずるいでしょう。

他の兵士たちはみんな汗水流して復興に手を尽くしているのですから。

將軍たる楽進殿がただ立って見張っているだけと言つのはいかなものかと思えます。

「ほら、行きますよ？　しっかりと見張っててくださいね」

「……ありがとうございます」

楽進のお礼を背中に聞きながら、自分も指示を出しながら重労働に励む。

きつと今の自分、黒い笑みを浮かべているでしょうね。

なぜかですか？

それはですね……ふふふ、楽進の好感度がアップだからですよ。これで一步、楽進から気功を習うという目的に近づきました。自分、一度断られはしましたが未だに気を教えてもらう事を諦めてはいませんか？

気功さえ習得してしまえば、楽進の気弾も恐れる必要は無し！
べ、別に気弾の所為で不覚を取った事、気にしてる訳じゃないんですからねっ！！

ズバリは目指せ、金城鉄壁！

……と言う下心もありますが、まあ純粹に三人組の事を思っている事でもありますよ？

それに、楽進が手伝った方が復興のスピードも上がりますからね。相手も得して自分も得して洛陽の人たちも得する。うん、実に公平で素晴らしい事です。

さて、楽進にも働けと言った手前、自分もテキパキ働きましょうかね。

短い間ですが自分の家となってくれた、この洛陽。

力及ばずこのような事態を招かせてしまいました。せめて町民の皆さんには、こんな戦の傷痕を残したくはありませんから。

「呟！ そっちに怪しい奴が行ったでっ！」

「分かった！ 逃がすか…はあぁーっ！」

ドゴォォォンッ！！

「アホか凧！ そない本気で撃つたらやつこさん死んでまうやないか！」

「凧ちゃん！ 気弾を使うのは良いけど、家を粉々にしちゃダメなのー！..！」

「……どうやら、傷痕を残さないようにするのは、結構難しい事のようにですね。」

「やれやれ、一つ気合を入れて……頑張るとしましょうか。」

「でもその前に……楽進と怪しいお人に拳骨の一つでも入れるとしましょう。」

「ふふふ……。」

野望と気づかい（後書き）

さて、反董卓連合編もそろそろ切り上げるとしましょう。

何時までも洛陽でギヤースカしている訳にも行きませんので。

それでは、次回も宜しくお願いします！

新たな仕事（前書き）

（心機一転）

ある事をきつかけに、気持ちを切り替えて出直すこと。
良い方向、明るい方向へと変化する時に使う。

新たな仕事

反董卓連合はその幕を閉じた。

此度の戦いで連合軍は、その全体の半数近くが被害を受けることとなった。

特に虎牢関での消耗は想像以上に激しく、兵士の疲労、兵糧の残量は既に限界へと達していた。

よって連合軍は、洛陽入り後の、撤退した董卓軍への追撃を断念する事を余儀なくされてしまう。

対する董卓軍は、その兵力の半数近くを残して洛陽から脱出……涼州へと落ち延びる。

そしてこの戦いを機に時代は動きだす。

漢王朝の衰退が公となった今、大陸全土を争いと言う名の暗雲が包み込み始めたのだ。

そんな時代を乗り切るために、諸侯たちは皆、己の力を蓄えよう

と画策し始める。

群雄割拠……………。

英雄たちが動き出す中、何平もまた、その奔流の中へと飲まれていくのだった……………。

〜何平〜

何かと苦勞が掛かりましたが、洛陽の復興は無事に終わらせる事が出来ました。

まあ、偽りの大義名分を持ちだして攻め込んできたのですから、これくらいの事はやってもらわなければ納得いきませんけどね。

その点では、曹操はしっかりと町の事を考えてくれていたようですよ。

復興に関しても、何処の諸侯よりも一番支援をしてくださっていただけですので。

たいして役に立っていないなかった、袁紹軍や袁術軍とは凄いい違いですね。

まあ、それはそれとして……。

復興を終えた後、曹操が董卓追撃のためにと占拠していた許昌に、自分達は移動する事になりました。

今回の戦いには参加せず、陳留を任されていた将ともそこで顔を合わせる事になっています。

そんな訳で自分は今、許昌城内の王座の間に立っている次第です。

「さて、とりあえず貴方の事を紹介しておく必要があるわね。……

何平、自己紹介なさい」

「はい。自分の名は何平。どうぞよろしくお願いします」

「」「」「」

長く語るのも退屈かと思い、ごく簡単に済ませてみたのですが……
……どうしてこんなにも王座の間が静かになっているのでしょうか？

「……それだけ？」

「はい。特に語る事ありませんので」

「ふ、ふうん……」

いや曹操、なんでそんな可哀想な人を見る目を自分に向けているのですか。

こらそこ、夏侯惇も「仕方が無い奴」だなんて目で見るんじゃないやありません。

「……おい、貴様」

皆が一様に拍子抜けと言った顔をしている中で、何故か一人だけ猛烈な威圧感を自分に向ける人物が。

「うん？ どちらさまで？」

「私の名は徐晃。徐公明だ」

長めの明るい茶髪をポニーテールにし、同じく両サイドの茶髪をこめかみの上で三つ編みにまとめた気の強そうな女性。

背も女性にしては高く、肌はほんのり小麦色。

顔立ちの整った美人ですが、その手に持つ、黒光りする刃の大斧と共に放つ、威圧感は相当なものです。

……ちなみに母性の方も、これまた立派な威圧感をお持ちのようです。

なるほど、この方がこの世界における、かの有名な徐公明ですか。確かに、周りで談笑をしている様な人たちとは違うようですね。

「そうですか。それで、その徐公明殿が自分に何用ですか？」

「先に言っておく。……私は、貴様を味方とは認めない！」

「分かりました」

「何故だと？ どの口でその様な……って、分かった…だと？」

いや、なんでそんな呆けた顔をしているのでしょうか？

「はい、あなたが私を味方と認めないのは分かりました。まあ、いきなり入ってきた新参者と今すぐ仲良くしろなど、土台無理な話ですからね。自分は構いませんよ」

「なっ、そ、そうか。……うん、そうか？」

肩すかしを食らってなにやら混乱気味の様子。

出来ればこのまま、うやむやになってもらえるとありがたいですね。

顔を合わせて早々に険悪な雰囲気になるのは嫌です。

とまあ、一部の人からは、やはりあまり宜しく無い目で見られましたが、とりあえずは挨拶を終える。

そして今回の戦いにおける被害の報告など、軍議は滞りなく進んでいく。

「さて、次に。何平、貴方に与える仕事だけれど……」

「それなら、自分は洛陽では文官として働いていましたから、出来れば文官でお願いします」

はい、嘘です。本当は武官と文官の兼任です。

ですがそれをこちらでする道理も義理もありませんので、ここは仕事の楽な文官を希望したい所です。

「そう。……けど、貴方の優秀な武官としての技能を生かさないとはいもったいないわね」

「優秀ではありませんから。むしろ政務で手一杯でしたよ」

「あら、私にはそうは思えないのだけれど？」

あー、もう。本当にこう言う所の勘は鋭いですね。

「そんなことはありませんよ。ですから、武官の仕事を任せられるのは、出来れば遠慮したいのですが……」

「そうね。でもダメよ。貴方の素性を考えれば、そうおいそれとは政務を任せる訳にはいかないわ」

「……ふむ、確かにそうですね」

部隊の練度や訓練などは、特に秘密性のあるものではありませんが、政務となれば話は別。

国の生産力や拠点の状況、場所などの機密情報を扱うのに近い仕事ですから、万が一文官がそれらの情報を持って敵国に逃げ込もうならば、それはとてつもない被害に繋がりがりかねません。

「よって何平、貴方には風……楽進たちの補佐の仕事を命じるわ」

「補佐……ですか？」

「ええ。あの子たちは將軍になって日が浅いわ。まだ至らない部分も多いでしょう」

なるほど。補佐と言う名の監視付きの仕事と言う訳ですか。

將軍三人と数百の兵の目が、仕事中は常時自分を見ていると言うことですね。

それなら確かに、自分も下手な行動は起こせません。

……流石は曹操。考えましたね。

「けど貴方は、先の戦いでも見せたように戦場での経験も豊富と見える。だから、あなたはしっかりと三人を補佐してあげる事。三人も、それでいいわね？」

「大将がええなら、ウチもそれでええよ」

「沙和もー！」

「私も異議はありません」

おやおや、なんともまあすんなりとOKなさるんですね、三人とも。

まあ、自分も昔は、將軍職と似たような仕事をしていた事もありますし、それなりに補佐も出来ますが……。

元敵軍の武将に対する警戒心は無いのでしょうか？

「どうやら、決まりの様ね？」

「そのようですね。では自分、ありがたくその仕事に就かせてもらいます」

「ええ。良い成果を期待しているわ」

「過度な期待は、御免こうむりたいものです」

ニヤリと笑う曹操に対し、自分は苦笑いでそう返す。

いや本当に、これまた面倒な仕事をもらってしまったものですね。

ですが、引き受けてしまった以上は仕方ありませんし、それ
自分としては楽進と接点を持つことができる訳ですから、あながち
悪い状況でもありませんね。

「では、今回の軍議はこれにて終了する。皆、各々の仕事に励みな
さい。解散」

「「「御意」「」」

さて、ようやく肩の凝る軍議も終わりましたし、自分もさっさと
仕事場に向かうとしましょうか。

と言っても、三人の後を付いて行かなければいけないのですけど
ね。

ですから……そんな所で談笑していないで、早く移動してくれま
せんかね三人とも。

先程から背中に刺さりまくってる荀？と徐晃のビームの様な視線
が、痛くて痛くてしょうがないのですよ。

はあ………本当にこの仕事……無事にこなす事ができるのでし
ょうかね……。

今更ですが、心配です……。

新たな仕事（後書き）

心機一転のはずが、幸先不安な仕事を割り当てられてしまった何平です。

苦勞性が定着しつつある今日この頃ですな。

それでは、次回も宜しくお願いします！

総合評価が2000を突破！

この小説を読んでくださっている読者の皆様に、改めて感謝です！

王平無き董卓軍（前書き）

（鬼の居ぬ間に鍛錬）

鬼（黎明）の居ない間に実力をつけ、帰ってきた鬼（黎明）をシバキ倒そうとする事。

B Y 張遼

王平無き董卓軍

反董卓連合に際して、洛陽から無事に抜けだし涼州へと逃げ延びた董卓軍。

しかしそこは、連合軍に参加していた馬超の母……馬騰の治める地でもあった。

洛陽に入る前に治めていた土地であるとは言え、董卓軍に緊張が走る。

そんな中、董卓軍筆頭軍師…賈馱の下へと馬騰から文が届く。

そこには、かつてと同じように友好的な関係を結びたいと記されていた。

馬超の参加は、此度の戦いが天子様のためであり、しかし同時に、連合の掲げる大義名分の真偽を確かめるための物でもあったと言うのだ。

結果それが偽りであり、かつては良き友人であった董卓に刃を向けた事を謝罪すると共に、以前董卓が治めていた領地の半分を譲渡し、その上で関係を結びたいと馬騰は提案をする。

だがそれは馬騰の善意であると同時に、未だ大きな戦力を持つ董卓軍を涼州の防衛に利用したいと言う馬騰の思惑でもあった。

軍師である賈馱にそれが分からないはずもなく……しかし賈馱は己の感情を抑えつつ、それが現状においては素晴らしい提案であることを即座に判断する。

そして董卓以下將軍勢との軍議の結果、董卓軍はその提案を受けることになった。

かつて治めていた土地に帰ってきた董卓軍は、領民たちの手厚いもてなしを受けながら疲れをいやす。

生き延びた者は生ある事に喜び、そして散って逝った同胞へと思いを馳せる。

しかし、そんな将兵たちの中に……王平と言つ名將は含まれていないのであった……。

（張遼）

「おらぁ！」

「くっ！」

気合と共に偃月刀を、体勢の崩れた華雄に叩きつける。

苦悶の表情を一瞬だけ浮かべ、しかしすぐさま戦斧に力を込めて、華雄が押し返してくる。

黎明に助けられたあの日から、ウチは酒を飲む事を止めた。

別に酒が美味くなくなったとか、そんな訳とはちやう。

黎明に助けられたこの命や。

せやからウチが、せめて黎明が戻ってくるまでは、黎明が抜けた穴を埋められるようにせなアカンから。

ウチはもつと強くならなアカン。

そのための華雄との鍛錬。華雄だけじゃない、恋とも手を合わせる時もある。

武だけじゃなく、それは政務も同じ。

自分でも驚く位に、政務に励む。もちろん黎明ほどの手際の良さは無い。

しかしまあ、ウチらは本当に黎明にせわになっとったんやなあ。

武官と文官の両立が、こない忙しいものやとは思わんかったわ。これやったら否応なしに、酒を飲んでる暇もないわ。

「霞、意識が逸れているぞ」

「あ、ああ。すまんな華雄。ほな、続けよか？」

「うむ。……では、行くぞ！」

再び華雄と武器を交える。

華雄を守り一片で倒した黎明に近づくには、これくらいで苦戦してる訳にはいかん。

せやけど、華雄も以前よりずっと強い。

今の華雄なら、黎明も簡単には勝てんと思う。

けど、それでも黎明には届かんはずや。

黎明とウチとの大きな差。それがウチには悔しい！
強くなりたい、黎明みたいにみんなを守れるように。

でもウチが今、一番強くなりたい理由は……そんな黎明を、この手でシバキ倒せるようになるためや。

ウチが黎明を一番許せへんのは、戦場から帰って来ないと言う行動で月たちを泣かせた事や！

月は人の目のある所では泣いてはおらんかったけど、陰で涙を流しとった。

虎牢関での負い目を感じて、ねねは大声を上げて恋の胸の中で泣いとった。

恋も涙こそ流さんかったけど、それでも悲しそうな顔をしとった。

人に約束だのなんだの言っで一騎打ちを止めさせて、やのに言った本人が約束破って帰らんくて、それでみんなを泣かせるなんて、なにをやつとんのや、あのボケはっ！

「黎明が帰って来た時にシバキ倒すためにも、ウチはこんな所で止まってもらえん！」

「それは私とて同じ事！ 月様に涙を流させた、黎明をただでは許せんのだ！」

「打倒黎明！ いつか帰ってきた奴を、必ずこの手でぶん殴る！
うおおおー！ー！ー！ー！」

華雄と全く同じ事を口にしながら、ウチは偃月刀をこれ以上ないくらいの速さで振り下ろした。

〜賈馱〜

「ふう…これでおしまい」

今日片づけ無ければならない政務を終わらせ、ぐっと思いつきり伸びをする。

かつて治めていた土地とは言え、ボクたちが治めていたころとは大分涼州の状況も変わってる。

民たちの生産力や軍備などがそう。

けどその辺りは勝手を知ってるから、すぐにでも都合を合わせる事が出来る。

一番の問題は、やはり北から攻めてくる五胡。

小規模とはいえ、時たま軍勢を率いて西涼を含む涼州へと侵攻をしてくる。

しかしそれも、馬騰との連携でそう苦労せずに対処できている。

それが、馬騰の思惑であるのだから当たり前と言えば当たり前。

正直に言っと、洛陽から逃げ出した時には、本当に涼州に戻ってもいいものかと思った。

でも結果は、こうして洛陽に入る以前とまでは言わないでも、良い状況に落ち着いている。

戦に負けたって言う自覚が、本当に感じられないくらい……。

でも、それでもやっぱり、失ったものはある。

抜け出す時間を稼ぐため、関で散って逝った兵士たち。

そして……その戦いで指揮を執り、洛陽に逃れるよう提案した将……黎明。

黎明は、もしかしたらこうなる事を予想していたのかもしれない。そして涼州に逃れれば、最悪の状況を逃れられる事も……。

涼州へ行けと言つ言伝は、気絶したねねと一緒に帰ってきた恋から聞いた。

でも黎明は、月と馬騰が友好を結んでいた事は知らないはず……いや、あの黎明の事だから、もしかしたらこつそりと調べていたのかもしれない。

「黎明の奴〜！」

そう思うと、今更ながらに腹が立つ！
全く、一発蹴らないと気が済まない！

……けど、それは今は出来ない。

黎明は、虎牢関で霞を逃がすために戦って、そしてそのまま戻って来なかった。

戻ってきたのは、将無き王平の部隊だけ。

そして王平隊の兵士が語った。

黎明は、敵将に傷を負わせられながらも、自分たちを逃がしてくれたのだと。

その敵将は、曹操軍の武将である夏侯淵であつたと兵士が言っていた。

もしそれが本当なら、既に黎明は死んでいるだろう。

でももしかしたら……黎明は死んでいないかもしれないと、そう霞が言った。

なぜなら、曹操が無類の人材収集家だかららしい。

確かに、曹操が優秀な人材を集めていると言つのはボクも聞いた

事がある。

霞もそれで夏侯惇と戦うことになり、そして黎明に部隊と共に助けられた。

だとしたら、負傷した黎明は、生け捕りにされた可能性が高い。けど、その後を取った黎明の態度次第では、斬首される可能性もありえる。

しかし、それを恋が真つ向から否定した。

黎明が恋に、必ず帰ると…そう言ったからと……。

そうは言った恋も、黎明が居なくなっただけからは少しさびしげな顔をしている時がたまにある。

黎明は何かとねねの仕事を手伝っていただけに、ねねが居ないはずの黎明の名を呼んでしまった事もあった。

霞は酒を飲む事を止めた。止めて、より一層強くなるために華雄と共に武を磨く事に励んでいる。

それは政務に関しても一緒に、黎明の抜けた穴を埋めるかのよう
に筆を動かしている。

そして華雄は、残された黎明の部隊を引き取り、攻めるためだけでなく守るための戦術を、ボクの下に通いながら学び始めた。

月も悔しさや悲しさを表情に出さずに、太守としての責務を果たしている。

皆が皆、黎明が居なくなっても、それでも自分達に出来る事を探して前に進んでいる。

黎明が抜けても、だからと言って弱くなる訳にはいかない。
でなければ、ボクたちをこうして生かしてくれた黎明に申し訳が
立たないから。

もし黎明が生きていて、そしてボクたちの下に帰って来た時、情
けない姿を見せる訳にはいかないから。

仲間となって日が浅かった……けれども結ばれた絆はとても深い。
軍師であるボクが理論的ではない事を語る事は可笑しい事なのか
もしれない。

けどそれくらい、黎明がボクたちに残してくれたものは大きかつ
た。

ならばその分、生きて帰って来た時は盛大にもてなしてお返しを
しよう。

もちろん、ありったけの感謝を拳と脚に乗せて。

「早く戻って来なさいよ！ このバカ黎明ーーーーー！！」

何処かで相変わらず飄々としているかもしれない黎明に届けと、
ありったけの叫びを空に向かって響かせた。

「……………ブルルッ。うゝむ…今、誰かの殺気を感じた様な……………気のせいでしょうか？」

偶然にも三人の叫びが空へと響いたその同時刻、散歩中の黎明の背筋に寒気が走ったのだった……………。

王平無き董卓軍（後書き）

とまあ、本編から少し離れて董卓軍の様子を少し。

語り部に霞と詠を選んだのは、この二人が一番一人称視点を書きやすいからです。

それ以外に特に意味はありません。

そして馬騰と董卓の間柄の設定は作者の創作ですのであしからず。

一応は理の通るようにはしたつもりですが、少し無理があるかもしれません。

作者の技量不足をお許してください。

それでは、次回も宜しく願います。

不和ある所に気苦労あり（前書き）

く犬猿の仲く

非常に仲の悪い間柄のたとえ。

（犬と猿は仲が悪い者の代表とされていることから）

不和ある所に気苦労あり

「やり直し」

李典が提出した報告書を、朱墨で訂正点を記して付き返す。

「おおよよ……この鬼い、悪魔あ！」

李典が罵倒を残し、涙を流しながら報告書をひったくって部屋を出て行く。

曹操より任された、この楽進達の補佐と言う仕事。

これにはもちろん、三人が將軍としてしつかりと仕事ができるようになるための補佐も含まれていると、自分は認識している訳です。

なのでこうして、自分は各部隊長である三人の提出した報告書を、こうしてチェックして、誤字や文の誤りを指摘して、書き直させている訳です。

まあ、先程のように、恐らくは三人の恨みを猛烈に買うことになっているでしょうが、まあ、それは自分の事ですから良しとしましよ。

曹操から頂いた、この素晴らしく面倒なありがたい仕事。

実はこれ、曹操軍における正式な役職ではありません。

あの場で曹操が思いついた、文官でも武官でも無い、なのに武官と文官の両方の仕事の場合によってはさせられる役職。

完全に便利屋状態の、名の存在しない空白の役職……なんて厨二臭い名前でも付きそうな立場に、今現在自分は立っています。

しかも上記の理由から、軍務や政務に自分から関わる権利はありません。

これに関してはまあ、先にも言った通り自分の素性ゆえの対処でしょう。

正規の役職ではないゆえに、軍からの給金は薄給ですが、そこは曹操が自身の財産から自分の給金を出してくれる様です。

自分で言うのも何ですが、結構手間のかかる仕事ですからね。

ある意味、董卓軍の居た頃よりもハードです。

なので、それくらいはしてもらわないと割に合いません。

しかしまあ、それ相応の役職につけるとは言っていましたけど……
本当に、随分と自分の事を買ってくれているんですね。

でなければ曹操軍の將軍三人の補佐なんて無理難題級の仕事を任せたりはしないでしょう。

ハッキリ言って、普通は無理です。

そんな事を思っていると、前触れなく扉が勢いよく開き于禁が報告書を片手に飛び込んできた。

「何平さん！ 今度こそ大丈夫なの」

机に置かれたのは、今日の部隊調練の報告書。

さてさて、もの思いにふけるのはこれくらいにして、于禁の報告書のチェックを、と……。

報告書の文章を、じっくりねっとりと確認する。

「……ふむ、まあこれなら良いでしょう。ただ、もう少し纏まりよ

く書いてください。報告書は簡潔に読みやすく内容を正確に、ですよ」

「分かったの。うーん、十三回目にしてようやく解放なの」

解放って、そんな大袈裟ですねえ。

まあ、どのように感じるかは人それぞれですが、それだと自分が縛っていたみたいで少々心外です。

それはさておき、後は李典を待つのみですか。

ああ、ちなみに楽進は二度目の提出でOKを出しました。

一度の注意で、二度目の報告書はしっかりと出来ていましたからね。

……これが如実に表れた性格の差、と言うものですか。

もう少し、李典と于禁には楽進を見習ってほしいものです。

「何平の兄さん！ これならどうやっ！」

「李典、そんなに急がなくても良いですから、少し落ち着いては？」

于禁に続いて勢いよく駆けこんできた李典をいさめる。

いやはや、肩で息をするほどに、急ぐ理由でもあるのでしょうかね？

「では添削を……ふむ」

「ど、どうなん？」

「……」

「……」

ミリオネア式に無駄に引っ張ってみます。

おお、李典の顔が不安で一杯になっていきますね。

人の表情の変化と言うのは、よく見ていると分かりやすいものな
んですよ？

「な、なあ。どうなん、どうなんや？」

「……」

それでは、肺に大きく息を吸い込んで……。

「良いでしょう。ギリギリ及第点です」

「よっしゃあー！ 十五回目でようやく解放されたわー！」

ですから、解放なんて大袈裟な言葉を使わないでくださいよ。

なんか、感じなくても良いはずの罪悪感を感じるではありません
か。

「李典、あくまでもギリギリですからね？ それをお忘れなきよう
に」

「分かつとるがな。ほな、ウチは失礼させてもらっつで？」

「ええ。カラクリいじり、頑張ってくださいね」

「おおきにや、何平の兄さん！」

やってきたのと同じように、ダッシュで部屋から出て行く李典。
やれやれ、元気な事は良い事ですが……もう少し、落ち着きを持
ってもらいたいものです。

さて、それでは報告書を苟？の下へと持って行きましょうか。

報告書を一つに纏め、宛がわれた部屋から廊下を伝って移動する。
すると、廊下の途中で徐晃が、何かを探すようにキョロキョロと
周りを見回している。

……これは、スルーの方向で行くべきですね。

気付かれないよう、その場で方向転換して一つ向こう側の廊下を
目指す。

「おや、何平ではないか。どうした、その様に気配をひそめて」

ふう……ありますよね、こつ言つ展開。

回避しようと思つたら、第三者の介入で結果回避できなくなる事
つて……。

「なぜそんなに気を落として 「見つけたぞ何平！」……すまな
い何平、そう言うことが」

「いえ、お気になさらずに……」

申し訳なさそうにしている夏侯淵にそう言い、仕方が無く徐晃の
方へと向き直る。

ずんずんと女性らしくない歩き方で近づいてくる徐晃。
うっむ、折角の美貌が台無しと言うか何と言うか……。

「はあ……何かご用ですか、徐晃殿？」

「相変わらずの態度だな、何平。私を前にしてあからさまにため息か？」

「そう言う徐晃殿も、自分に対して露骨に嫌悪感を抱いているではありませんか」

それはもう、許可さえあれば今すぐにでも殺してやりたいとでも言っているかのように。

「降った将に警戒心を抱いて何が悪い」

「別に悪くはありません。が、それを露骨にぶつけられるのは、自分としても気分が悪い。抱くならば心中のみでどうぞ」

「くっ……どうやら、貴様は上の物に対する口のきき方になっていないようだな？」

「残念ながら、自分は正式な役職に就いていませんので、上も下もないのですよ」

「ぬうっっ、ああ言えばこう言うっ！」

「こう言えばそう言う、とでも繋がりますか？」

徐晃が今にも斬りかからんとするかのように、鋭い目つきで自分

を睨みつける。

険悪な雰囲気を見かねたのか、夏侯淵が自分と徐晃の間に割って入る。

「止めないか二人とも。このような場所で殺し合いでも始める気か？」

「許可さえあれば、即刻何平のその素っ首……刎ねてやっても良い位だ」

「出来ますか？ 貴方に」

「何平！ お主は少し口を慎め。烈華^{れっか}も落ち着いて武器を納めろ」

「……ちっ」

一つ舌打ちをして、構えていた大斧の切っ先を下げる。

そしてもう一度自分を一睨みすると、来た時と同じように、不機嫌そうにズンズンと歩き去っていった。

「ふう、行ったか。……何平、頼むからあまり烈華を挑発してやるな」

「いやあ、売り言葉に買い言葉でつい……」

「そうか。だがしかし、よく烈華の殺気を正面から受けて平気で居られるものだ」

「あれ以上に凄まじいものを、自分は知っていますからね」

それはもう、詠とか詠とか詠とか……。

彼女があの時、自分の腕をへし折らんばかりに握り、そして自分に対して向けたあの威圧感。

あれに比べれば徐晃の殺気など軽いものですよ。

それにしても……うう、あの際の詠の黒いオーラを思い出したら、思わず鳥肌が立ってきました。

「徐晃殿はどうして、自分をあのように目の敵にしているのでしょうか？」

「烈華は戦場で、己の実力で武功を上げて今の立場に就いたからな。しかしお主は、投降した将であるにも関わらず、正式では無いとは言え華琳様から將軍三人の補佐と言う大役を命じられた。それが、烈華にとっては気に入らぬ事なのだろう」

「それは自分の所為ではないでしょうに……」

文句なら曹操に言ってくださいよ。

自分は曹操に言われて、今の役職に就いているんですから。自分に当たられてもどうしようもありません。

「ふう、面倒な事になりました……」

「すまぬな。……そう言えば、お主は何か用事があったのではないのか？」

ああ、そう言えばそうでした。徐晃の襲撃の所為ですっかり忘れていました。

「ええ、苟？殿に報告書を渡し行く途中でしたよ」

「そうか。ならば、早く行った方が良さだろう。桂花はその辺りに
関しては厳しいからな。特に」

「男には…ですね。分かっていますよ。まあ、自分は気にしません
ので」

罵倒だの中傷だのを気にするのは、正直労力の無駄遣いですから。
そんな者は馬耳念仏でガンスルーすれば良いのですよ。
流石に肉體言語を行使された場合は、話は別ですが……。

「それでは妙才殿、自分は行きますのでこれで」

「ああ。ではな」

夏侯淵と別れ、そして再び荀？の執務室へと向かう。
しかしまあ、徐晃の気持ちも分からないではないのですけどね。

ですがそれは、自分にはどうしようもできない事。
全くもって、面倒な事が増えました……。
これは本当に、気苦労が増えることになりそうですね。

「失礼します。荀？殿、楽進以下二名の報告書をお届けに参りまし
た」

「あらそう。なら、さっさと机に置いて出て行ってくれる？ 妊娠
しちゃうでしょ」

入った途端にこの扱い。

これが荀？ですから仕方ありません。一体何をすれば、ここま
で男嫌いになるのやら。

まあ…こればかりは仕方が無い、仕方が無いのですが…ふう、
何と言つか…相手をするのが疲れます。

本当に、ここで働く以上は、気苦労が絶えることはなさそうですね。

良質な胃薬、あれば良いんですけどね。

そこはまあ、歴史ある中華漢方をあてにするとしましょう。

胃が荒れるのだけは、勘弁願いたい所ですからね。

……さて、と。

では、おしゃべりはこの位にして……残りの仕事も、気合を入れてこなすのでしょうか。

無論、自分が疲れない程度に……ですけどね。

はあ………。

不和ある所に気苦労あり（後書き）

さて、徐晃の真名と黎明への嫌悪の理由が発覚しました。

徐晃は実力第一で昇進して来たので、ポンと出の黎明が許せないんですね。

しかも投降の将ですし。

さて、黎明の気苦労はここから始まる……かも？

それでは、次回も宜しく願います。

何平の休日 壱（前書き）

（舌は禍の根）

口から出る言葉は禍を招くもとである。

だから不注意な発言は出来るだけ慎めと言つ事。

何平の休日 壱

ようやく補佐の仕事にも慣れ始めた今日この頃。

今日は三人にこれと言った難儀な仕事が無いため、自分は休みをもらえる事になりました。

いやはや、ここ最近働き詰めでしたから、休みをもらえるのはありがたいです。

と言う訳で、こうして日用品を揃えるべく、休みを利用して城下に出てきています。

とりあえず必要になるでしょう筆記用具一式やら、剣の手入れ道具やらを一式買い込みました。

まだ初任給をもらったばかりでしたから、早速、自分の懐は氷河期に突入しましたけどね。

しかしまあ、許昌も洛陽に劣らず、活気のある良い街ですね。よく曹操の治世が届いていると見えます。

良いですね、こういう光景を見る事が出来るのは……。

おや、洛陽での日々を思い出して思わず目から水が。

しばらくお待ちください……………。

ふう、やれやれ…なんとか落ち着きましたか。

つて、ああ…その少年。そんな心配そうな顔をしないでください。
い。

ただの思い出し泣きなんですから。

近くの露店で売っていた飴玉をいくつか買い、自分を不安そうな顔で見上げていた少年に数個手渡す。

「どうも心配をおかけしました。これ、どうぞ。ああ、それと……
自分が泣いていた事は秘密ですよ？ 男の涙は安くは無いですか
ら」

そう言って頭をわしゃわしゃと撫でてやると、不安そうな表情からにっこり笑って、少年は一つ頷いて向こうへと走っていききました。

いやはや全く、年端もいかない少年に心配されてしまうとは……
嬉しさ半分、恥ずかしさ半分です。

でもたまには良いかもしれせんね、こつ言つのも。

気を取り直して、改めて城下を散策する。

そう言えば、一つ先の通りにちよつとした広場がありましたっけ？

歩いて少し疲れましたし、休んでいくとしましょうか。

喧騒の中を通り抜け、子供たちが走り回る広場へ。

近くの空きベンチに腰をおろして、ふう、と一息つく。

先程買った飴玉を取り出し、その内の一つを口に含む。

……おお、これがこの時代の飴玉ですか。

現代みたいにとても甘いわけではないみたいですね。

少し控えめの、サツパリとした甘さです。

飴玉を口内で転がしながら、ふと周りを見渡すと、とある建物の

一角がなにやら騒がしい。

はて、何か大道芸でもやってるんでしょうかね？

気になってひよこつと覗いてみると、そこでは苟？が子供たちに

教鞭を振るっていた。

「いい？ 素晴らしいお方の孟徳様が、十の宝を手に入れました。

それを野蛮で低脳な元讓が汚い手口で三つ。次に何を考えているのか分からない妙才と、邪魔で不潔な何平が協力してさらに二つ宝を奪って行きました」

……今、なにやら自分の名前が、凄まじい中傷と共に出されたのは気のせいですか？

「その三人を、孟徳様を愛する有能で従順な文若ちゃんが、策を巡らせてひっ捕らえました。孟徳様は感動して、文若ちゃんに一番価値のある素晴らしい宝を渡しました。さて、孟徳様の宝はいくつ残ってる?」

「二つー!」

「じゃあ、俺は三つ!」

「違うよ、一つだよー」

ああ、なるほど。

つまりこれは、子供たちに算術を教えている訳ですね。

そう言えば、以前曹操が、いずれ城下の民たちにも最低限の教養をつけさせる必要があるとか言っていましたか。

ですがこれは……明らかに人選ミスの様な気がするのですが……。

……何と言うかアレは、うん……掛ける言葉が見つかりません。

「……あ、あんたたち……分からないからって適当に答えてるんじゃないでしょうね?」

子供たちの反応に苟?がこめかみをヒクヒクさせる。

しかしまあ、あの出題の仕方では無理もないと思います。

自分も問題を聞いている最中から解く気が失せましたからね。

内容もさることながら、はっきりいってグダり過ぎです。

問題はそう……。

もつと、

簡潔に！

分かりやすく！！

間違いなく！！！！

これが鉄則です。報告書と一緒にですね。

相手に分かりやすく間違いなく伝える事が、教鞭を振るう者には第一に必要なだと自分は思います。

それを踏まえて見ると、苟？の場合は……語る必要もないかと。

「……面白いですね」

「うん、おもしろいな」

「二人に同じなのー」

と、背後から聞こえてきた聞き覚えのある声に振り返る。

そこには何時の間に来たのか、楽進と李典と于禁の三人が立っていた。

「おや、お三方。何時の間に？」

「何平の兄さんが邪魔で不潔、の辺りからや」

「それはなんともまあ、嫌な所からで……」

どうせだったら夏侯惇の時から居てくださいよ。

聞かれたのが自分だけって、悲しくなるじゃないですか。

「ええのん、あんな風に言われて」

「邪魔、と言うのは苟？にとっては事実でしょうから気にはしません。不潔と言う点に関しては心外ですね」

これでも自分、朝夕寝起きと寝る前にはしっかりと体を拭いているんですから。

身だしなみと清潔には気を配っているつもりです。

「いい、もう一度言うわよ？ 孟徳様の」

さっきと変わらない問題を、再び子供たちに言う苟？

おおー、子供たちがもの見事に首を傾げていますね。

「……これ、春蘭さまに聞かれたらえらいことになるで」

「確かに……」

「うんうん、最悪小屋が吹き飛んじゃうのー」

夏侯惇の人となりに関しては、自分はまだまだあまり詳しくは知らないのですが……。

三人が異口同音に言うのなら、間違いは無いのでしょうかね。

まあ、初見からしてそんな感じのタイプであるとは、薄々気がつ

いてはいましたが。

「自分としてはあの出題の仕方に文句を言いたいところですが……さて、どうしたものやら」

「ここはなんもせんと、この場を立ち去った方がええんとちゃう？」

「ふーむ……まあ、子供たちが些か可哀想ではありますが……それが一番ですかね」

正直に言つて、ここで文句をつけに行つて、また誹謗中傷の嵐を受けたことはありませんし。

第一、大の大人が子供たちの目の前で、その様なやり取りを見せる訳にもいきませんからね。

そんなの、恥ずかし過ぎて死ねます。

「さて、行きましようか？」

全員一致でその場から立ち去ろうとしたその時、

「おう。お前ら、この様な所で何をしているのだ」

今、一番この場で聞きたくない声が、自分達の耳に入って来ました……。

「なんでこの間の悪い時に……」

李典、同感です。全くもって同感です。

「これはアレですか？ 天のいたずらと言う奴ですか？」

「いえ、私にそう言われましても……」

いやまあ、申し訳ありません楽進。

でも、分かってても言いたかったんですよ。
主に自分の心のバランスを保つために……。

「なんだ、四人して私を見るなり。何か都合の悪い事でもあるのか？」

「いえ……」

「全く……」

「これっぽちも……」

「なんてシンクロ率……」

まさに三位一体の誤魔化し。

これはもう、仲良しとかそんなレベルじゃないですね。

きつと三人は、見えない何かで繋がれて……って、それだと誤解を招きますか。

「だーかーらーっ！ 強欲で脳なしの元讓が勝手に三つ取っていったのよ？ じゃあ、この時点でいくつ？」

「「「……」」」

「なん……だと？」

「……はあ」「

まあ、その素晴らしいまでの頑張りも、荀？自身がたった今水泡に帰してくれたわけですが……。

「あの女狐め、この様な所で狼藉を働いていたとは……！」

おおー、怒りの炎が夏侯惇の背後にメラメラと。

どうしましょう、この状況を打開する策が一向に見えてこないのですが。

まあ、とりあえずは言葉で説得を試みましょう。

「元讓殿、ここは気を鎮めて落ち着きましょう。ほら、子供たちの迷惑になりますし」

「あのような授業では、その子供たちに悪影響だっ！」

うぐっ、これは……凶星過ぎて言い返せない。

「それから！ 邪魔で不潔でケダモノの何平が」

ああもう、なんでそこで、あえて大声で余計な事を言うのですが荀？！

夏侯惇の暴走を、余計止めにくくなるじゃないですか！

「何平！ 貴様もあ言われていると言うのに、それを黙って見過ごすと言うのか！」

「確かに、不潔でしかもいつの間にか後付けされてるケダモノと言う点に関しては、大いに不満を感じる所ではありますが！ そこを抑えるのが大人と言うものでしょう！」

「大人であつても抑えられぬ時もある！」

「町中でくらい抑えましようよ！ 特に今この場は」

「うるさい！ 外で暴れているのは誰！？ 授業の邪魔になるから出て行きなさいよ！」

どなり声を上げながら、荀？が教室から飛び出してくる。

いやもう本当に……勘弁して下さいよ荀？さん。

ここで貴方が出てきたら、もうどうしようも出来ないじゃありませんか……。

「風……それに真桜と沙和まで。どうしてここに……って、げっ！ 何平、それに春蘭！？」

楽進たちの顔を怪訝そうに見まわし、そしてすぐに自分と夏侯惇に気づき状況を把握したのか、荀？が露骨にしまった顔をする。

流石は軍師、頭の回転はやはり早いですね。

「ほう、こんな所で陰口を叩いていた割には、威勢よく飛び出してくるじゃないか」

「あら、何のことかしら？ 私は別に陰口なんて言っていないわよ？」

あー、もう自分は知りません。知りませんっただら知りません。

後は二人、町中の大衆の面前でお恥ずかしいコントをどうぞ続けてくださいな。

その思いが通じたのか、始まる二人の低レベルすぎる言い争い。

「えーっと、先生が何か喧嘩してるけど……僕たちどうすればいいの？」

荀？の授業を受けていた子供の一人が、そう言っって自分に聞いてくる。

ふむ、そうですね。この際ですから、自分が変わりに教鞭をとりましょう。

「はい、皆さん外の喧嘩は気にせずに。では、今から自分が授業をしますから、しっかり勉強をしましょう」

「「「はぁーい」「」」

さて、それではまず、先程荀？が出題していた引き算の説明を……。

「猪突猛進だけが取り得の癖に！」

「ふん！ 小賢しい策ばかりでろくに戦えもしない貴様に言われる筋合いはない！」

「ああ。ですからここはですね。元からあつた数がこれだけで、今は三つここから無くなって」

「黙りなさい！ 猪は猪らしく、山の中でも走ってなさいよ！」

「なにおっ！ 浅はかな知恵で華琳様にお仕置きされたがる、この変態がつー！」

「すると数は七個ですね？ では、この状態からもう一度、次は二つを引くのですよ。慣れるまでは一気にやろうとせず、こつこつして順番に」

「脳味噌まで筋肉の戦闘馬鹿っ！」

「戦闘では役に立たない脳味噌変態馬鹿がっ！」

プチン……………。

「あ……………」

「何平殿が……………」

「キレよっ たな……………」

はい、三人とも説明ご苦労。

ガシイ × 2

「へっ？」「」

先程から喧しい二人の首根っこを、背後から両手で引っ掴む。

「ちょ、なにをする貴様！ ええい、離せえ！」

「いやあああ！！ 触らないでよこのケダモノ！ 妊娠しちゃうでしよー！！」

「お二人とも……少し裏でO H A N A S I ……しましょうか？」

「「ひっ！」」

さて、二人を黙らせた所で早速、何故か都合よく目前にある裏路地へと二人を引っ張って行って……。

しばらくお待ちください……。

懺悔の時間です。祈りなさいいいいい！！

いやああああ——————————つ——！！！！！！！！

「ふう、こんなものですか」

真っ白になった二人を路地裏から引きずりながら、楽進たちの下へと戻る。

さて、お二人にはしっかりと話をしましたから、これで少しはマシになるでしょう。

「侮つとつた。あの時の殺気…アレは普通とちゃう」

「ああ。まるで修羅の様な……」

「うう………。沙和、何平さんだけは絶対に怒らせない様にするの」

「「同感や」だ」「」

後ろでお三方が何か言っているようですが、全くもって聞こえませんが――。

「さて、それでは授業を再開しましょうか？」

「はい、先生っ！」「」

おや、さっきよりも随分と真面目な顔になりましたね。

やっぱり、外の馬鹿喧嘩が無くなったからですかね。良い事です。

さてさて、それでは今日中に、子供たちに足し引きくらいはマスターしてもらいましょうかね。

教壇の上に立ち、自分は苟？に変わって子供たちに向かって教鞭を振るった。

後日、何時ものように三人の報告書を苟？に提出しに行ったら、もの凄い勢いで怯えられました。

うゝむ、少しお話の刺激が強過ぎましたかねえ。

何平の休日 壱（後書き）

なんとなしに日常編？

作中の言葉はあくまで何平の考えですので、その点はどっどっど理解
ください。

それでは、次回も宜しくお願いします！

参軍者、二名なり（前書き）

（人と入れ物は有り次第）

人の頭数と道具は、多ければ多いで使いこなせるし、少なければ少ないでどうにでもやり繰りができると言ふ事。

参軍者、二名なり

反董卓連合からしばらくの時が過ぎた。

群雄割拠の乱世の中、北に勢力を持つ袁紹が動きだした。

巨大な数にものを言わせ、袁紹は幽州……公孫贇の下へと攻め入る。当然、公孫贇に袁紹を押し返すだけの力は無かった……。

そして袁紹はついに幽州の公孫贇を滅ぼし、河北四州を統一する。それは、曹操軍にとっても見過ごせる事では無かった。

反董卓連合以来、周辺の豪族や野盗、盜賊団を排除しながら徐々に勢力を広げて行く曹操の領土。

以前とは比べ物にならない程に拡大した領地は、当然周辺諸侯との問題を生み出す原因ともなる。そんな中、公孫贇が滅びたことで袁紹を脅かしていた北の脅威が消え去ったのだ。

北を完全に抑えた袁紹が、次に侵攻するであろうのは、南に領土を構える劉備と曹操。

そして袁紹の性格を読んだ曹操の言う通り、しかし曹操の予想よりはるかに早く、袁紹は大軍団を率いて魏領へと侵攻を始める。

その一大事に將軍達が集まる中、思ってもみない報告を、曹操たちは受ける事になった……。

（何平）

あふ……眠いです。

ええ、それはもう、今この場で目を開けたまま寝むれるほど眠いです。

理由はそう……昨日の夜の出来事ですな。

全く、何の嫌がらせかは知りませんが、夜になってからいきなり仕事を持ってくるとは……荀？もやってくれますよ。

おかげで自分、今日は日が昇るのと同時に床に入りました。

眠くて当然、眠る権利があるのも当然。

なのに自分は、ゆっくりと寝る暇もなく、袁紹の所為で叩き起こされて今ここにいます。

眼の下にクマーですよ。

自分アイシャドウ使う必要ありませんよ。

それくらいに、今にも意識が飛びそうなほどに、自分は睡魔に襲われているのですよ！

……まあ、だからと言って今この場で寝たら、叱られるのは当然なので我慢しますけどね。

さて、自分の身の不幸を愚痴るのはこれくらいにして……えへ、どうやら話を聞く限り、北方の雄こと袁紹が南に向かって動き出したようですな。

しかも予想より遙かに早い速度で動きだしたと言うことですが、ふむ……あの袁紹がその様な即断即決をするだけの……いえ、袁紹だからこそ、と言う線もありますか。

ともかく、このままだとマズいことになるみたいです。

なにせ、袁紹の侵攻してくる城の兵力はおよそ七百。

対する袁紹は約三万とのことですからね。

普通に考えれば、一日保たずに落ちるでしょう。

そんな訳で、今こうして援軍を送るために、あーでもないこーでもない軍議をしています。

が、そんな中で夏侯淵殿が驚きの発言をしました。

と言うのも、絶賛軍議の中心となっているその城の指揮官が、援軍は不要だと言ってきたのだとか。

その指揮官と言うのが、郭嘉と程？の二名だそうで……なるほど、それならば納得も行きませぬ。

しかしよもや、このタイミングで出てこようとは、自分も思っ
ては見ませんでした。

「……分かったわ。ならば増援は送らない」

「華琳様!？」

荀?が驚きの声を上げる。

まあ、この決断に驚くなど言う方が無理な話ですか。

「その代わりに、その二人には袁紹たちが去った後、こちらに来る
ように伝えなさい。理由をちゃんと説明してもらっわ……そうでな
いと、納得できない子もいるようだしね」

「でしょうねえ。そりゃあ、納得しない人の方が多いでしょう。
徐晃はそうでも無いようですが、夏侯惇と荀?は不満たらたらで
すし。」

夏侯淵も若干不安そうなぼやけた顔を……ああ、もう起きている
のが限界……。

「何平、あなた……私の話を聞いていたのかしら?」

「あ、勝手にい…兵を、動かしたらあ、厳罰に処すんです…よね
え。きひてまふあわああ……」

「うう、思わず大あくびが。」

「……貴方、しっかりと睡眠は取ったの?」

「荀?殿にい、寝る前にえ、仕事を…押し付けられてえ……日が昇

つて……か、ら……寝ま……」

「ちょっと！ なにドサクサに紛れて言いつけてるのよ！」

「……桂花？」

「あ、いえ、これはその！」

おわあ、三人の曹操があ、ぐにゃぐにゃの荀？を取り囲んで説教をおく……って、ああ、もうダメ、無理ポ……。

ドサリ……。

そこで、完全に自分の意識が途切れました……。

「何平……おい、起きろ何平！」

誰かが耳元で自分の名前を呼ぶ。

うう、ん、まだ自分はドリームの中でお花畑を疾走していた気分……。

「うう、あと四半刻……」

ちなみに四半刻は、今で言う30分です。

あれえ、これ前にも言いましたっけ？ まあ、どっちでも良いですけれど。

「すうー……起きろおおおーっ!!」

「おおっ!?!」

み、耳が痛い。なんですか今の馬鹿でかい声は……。

「やっと起きたのか何平。華琳様がお呼びだ、早く来い!」

「そうですか。曹操様がお呼びですか。じゃあ、ちょっとそこまで二度寝を……」

「良いから来い!」

ああ、自分の大事な安眠が……。

安眠妨害のぬしたる夏侯惇に引きずられて、眠い目をこすりながら王座の間へ。

そこには、曹操軍内の將軍勢には見覚えの無い顔が二人。

二人……ああ、そうですか。彼女たちが郭嘉と程?……。

なんとまあ、一方は可愛らしい少女だこと。

少女の軍師……そう言えば、ねねは元気になっているでしょうか?

「二人とも紹介するわ。彼は何平。我が軍の将の一人よ」

その言葉に、しっかりと、ある意味合いを含む視線を送っておく。
どんな意味合いかは分かりますよね？

「お初にお目にかかります。我が名は何平。どうぞ、お見知り置きを」

「これはどうもご丁寧に。私の名は郭嘉です」

「どうもはじめまして！。風は程？と言つのですよ」

メガネの背の高い方が郭嘉。小柄な少女が程？ですな。

……あれ？ こうして將軍勢を見渡してみると、曹操軍つて意外と口 んんつ……低年齢層が多い？

いや、年齢は全員アレとお約束されていますから、外見年齢が幼……じゃなくて、若い人が多いんですね。

これは……その手の人がこの場にいたら、あまりの眼福さに踊り狂って皆さんに刺し殺されるでしょうねえ。

ああ、自分は至って健全ですよ？ 純粹にチラリズムを求める探求者です。

「何平、彼女たちは今日からこの城で働く事になったわ。宜しくしなさい」

「「ぐ~~~~」……」

「寝るなっ！」

「「おおっ!?!」」

あれ、なんか今、もの凄くデジャブリました。
って言うか程?さん、あなたまでどうして寝てるんですか?
もしかして、自分と同じく寝不足なんですか?

「いえ、お兄さんが実に気持ちよさそうに寝ていたものだから
つい」

あ、そうなんですかあ。

それにしても、貴方はもしかしてエスパーでしょうか?
自分、口に出してませんのに……。

「はあ……寝不足の所、真夜中に呼びだしたのは悪かったわ。だからもう少しだけ頑張って頂戴」

「ふあああ……善処します」

意志力を振り絞って、もってあと三十分ですね。
それを越えたら立ったまま寝ます。ええ、間違いなく。

「それで郭嘉。話の続きになるけど、袁紹の侵攻に対する程?の策
を」

「……~~~~~ぶはっ!」

って、おお!?

目の前にいきなり真っ赤なアーチが!

そして真夜中なのにお昼のサスペンス劇場が何故に王座の間に!

誰か！ 鑑識を回して！

「あー、とうとう限界が来ちゃいましたかー」

「限界？」

驚きに目を見開く夏侯惇たちをよそに、首を傾げる曹操。

「はい。稟ちゃんは華琳様に仕えるのが夢でしたから、緊張が極限まで達してしまっただんでしょうね」

「ああ、ナルホド」

と、これは自分です。

まあ、確かに緊張で鼻血が出ると言うのは……自分は体験も伝聞もありませんが、あるのでしょうかねえ。ここに証人も倒れていますし。

「ふう、これではまともに話を聞けそうにないわね。仕方ない、話はまた明日にしましょう。……流琉、二人を部屋に案内してあげて」

「はい、分かりました」

「とーんとん。ほらほら稟ちゃん、行きますよー」

「ふがつ……ふあい」

典緯に案内されながら、郭嘉と程？の二人が王座の間から出て行く。

それに続いて曹操から解散の言葉が発せられ、自分達もお開きとなる。

ふう、やっと終わりましたか。

やれやれ、これでやっと安眠できますね。

それでは、自分は早速ベットにダイブしに

「ああ、そうそう。何平、明日の朝に調練場に来なさい。これは命令よ。いいわね?」

……あれ、今…なんかフラグ立ちました？

参軍者、二名なり（後書き）

曹操軍も全員揃いましたし、ここらで魏軍に何平の実力をお披露目に。

さて、相手は一体誰になるのやら。

それでは、次回も宜しくお願いします。

手合わせと言つ名の戦場 吉（前書き）

（因果応報）

良い事をした人にはよい報いが、悪い事をした人には悪い報いがあること。

悪い事に対して使われる事が多い。

類：自業自得

手合わせと言つ名の戦場 壱

朝になりました。

ええ、新しい朝が来ましたよ？

それも恐らく、希望ではなく絶望の朝です。

昨日の軍議の解散の際、自分は曹操に翌朝調練場に来るようにと
言われました。

調練場……今だけはこの言葉が重く自分にのしかかります。

だって考えたら分かるじゃないですか。

調練場＋曹操の考えそんな事＝手合わせ

そう、これに決まっています。ついでにこれを曹操の公式とでも名
付けましょう。

……。

……はあ、ダメです。何とかテンションを上げようと努力しても
一向に上がる気配が無いです。

ドンヨリまっしぐら、穴が有ったら……きっと棺桶と一緒に入れ
られる。

だって夏侯惇ですよ、徐晃ですよ？ 恋と共闘した時ならいざ知
らず、自分一人で戦えと？

いえ、普通の手合わせなら構いませんよ？

でもほぼ確実に、向こうはモノホン取り出してきましたよ。

主に夏侯惇とか徐晃とか。

手合わせ自体は逃げられない運命として、相手くらいは自分に選ばせてもらえませんかねえ。

もし可能なら、即座に楽進を希望するのですが……主に気功研究のために。

まあ、そう上手くいかないのが現実と言うものなんですけどね。

でもこんな所で死ぬわけにもいきませんし……いっその事、一番危険な夏侯惇と徐晃を何とかして排除して……。

いやいや、流石にそれはダメすぎます。完全犯罪狙っても動機面で一発でバレます。

これはもしや、打つ手無し……と言う奴ですか？ 自分はもう、調練場と言う処刑台に行くしかないと言うバッドエンドオチですか？

嫌です、絶対に嫌です。自分はハッピーエンド以外の終わりを認めない！

そう、世界が平和になったらいいのに！ ふははははは

何平、現実逃避中につき、しばらくお待ちください……………。

ははは、やっぱりこれくらいではなんともなりませんか。

我ながら強い精神を持ったものです。

ああ、でもやっぱり目から塩水が……。

もうダメです、現実逃避も限界です。

歩きながら散々逃げ道を探して来ましたが、ついに視界の端に魔窟が……。

しかもここからでも分かるほどの濃密な殺気が溢れています。

なんかもう、空に「何平、死ね！」とか見えそうです。

はあ、憂鬱です。加えて恐怖と絶望です。

そんな自分の思いを華麗に天は無視して、とうとう自分の足は訓練場の地面を踏みました。

自分にいち早く気づいた曹操が怪訝な顔をする。

「あら、ようやく来たわね……って、なんでそんな暗いのよ」

「……今からの出来事に思いを馳せていたら自然にこうなりました」

「そ、そう……」

顔をひきつらせて半歩身を引く曹操。

あはは、曹操が引くほどにどんよりしてますか自分。

あ、瘴気に当てられて兵の一人が鬱顔になりましたね。
これは凄い、まさに鬱り神。鬱だけに近づいたらウツる、なん
ちやっつて。

「大将、なんや何平の兄さん……病んでないか？」

「凄まじいまでの瘴気ね。……そこまで手合わせが嫌なのかしら？」

「嫌ですよ！ ええ嫌ですよ、当然でしょうがっ！」

思わず曹操の言葉に吠える。

だって手合わせじゃないでしょう！ 真剣に命取りあう死合いで
しよう！

なんでそんな利益の一切ない事をしなければならないのですか！

ハローワークに月給百万のバイトを紹介してくれて言う位に喧
嘩売ってますよ！

「そう。けど止めないわよ」

ニヤリと笑う曹操。

このドS人材マニアめっ！

マジでそのほつぺた引っ張って縦縦横横の丸を書いてやりたいで
すよ！

「いいじゃない。これから軍師として働いてもらう稟と風には、当
然貴方の实力を見てもらう必要があるのだし、それを兼ねた歓迎仕
合とも思ったら？」

「だったら曹操様が相手してくださいよ。そうです是非相手になっ

てください。そしたら喜んでお相手しますよ」

「嫌よ。だって貴方の相手をしたら、貴方の戦いっぷりを見れないでしょう?」

「王様視点が憎い!」

「だって私は王だもの」

ダメです、今日は口撃の方もコンディションが悪過ぎます。
曹操に口で勝てない……こんなに悲しい事は無いです。

「いいですよもう。やりますよ、それでもって大怪我負って仕事ができなくなっても知りませんから」

「大丈夫よ。その分、給金も減らすから」

……マジでこの人、ここで殺って虎牢関で交わした勝負の誓いを
終わらせても良いですか?

「さて、何平の手合わせの相手だけど……」

「私にお任せを! つて、何い!」

同時に名乗りを上げたのは、やはり夏侯惇と徐晃。

うわぁ、もう泣きたいです。どっちになってもあんまり変わらないです。

「烈華、奴に最初に目を付けたのは私だぞ!」

「何を言うか！ 名乗りを上げたのは私の方が少し早かった！」

……おや？ 何だか勝手に、向こうで低レベルを限界突破な喧嘩が勃発したりしてます？

「ここは長年華琳様に仕えてきた私に譲るべきだろう！」

「それは今この話に関係ない！」

二ト口を放り込んだかのようにヒートアップしていく口喧嘩。

美人の女性二人に取りあいをされるのは大いに嬉しい事なのですが、内容が内容だけに素直に喜べないです……。

自分はこの人に殺されたいの、なんて自殺願望は持ち合わせてませんので。

「良いだろう。そこまで言うのなら勝負しろ。そして勝った方が何平と戦う。どうだ！」

「ふっ、面白い。今日こそ魏軍最強の座は、この徐晃が頂く！」

おや？ 何やらいつの間にか、自分放置されてませんか？

自分は放置プレーに快感なんて覚えませんよ！

って、夏侯惇と徐晃の手合わせになりつつある気配なんですけども……この状況やいかに？

「あゝ、曹操様？」

「全く。何をやっているのかしらあの子たちは」

「え〜と、自分の相手をめぐっての争い？」

「なら、貴方が二人を同時に相手してくれば、すぐさま解決するわね」

「自分に死ねと言いますか……」

恐らくは魏の最高戦力であろう二人を一度に相手に出来るのは、自分が知る限りでは恋しいかもしれませんよ。

自分は一人で精一杯です。本心を言うならばその一人すら相手にしたくはありません。

「で、どうするんですか曹操様。あのままだと本当に戦い始めてしまいますよ?」

「分かってるわよ。……やめなさい春蘭、烈華」

「華琳様っ!」

「華琳様、なぜお止めになるのですか!」

曹操の言葉に言い争っていた二人が曹操へと向き直る。得物に掛かった手は未だそのまま。

「今は何平の実力を試す場だと言うのに、貴方達二人が戦ってどうするのよ」

「あ、自分はそれでも一向に構わな「貴方は黙ってなさい」……はい」

黙ってます、黙ってますからそんなおっかない視線を向けないで

ください。

霸王の視線は、自分も結構堪えるんですから。

「二人が戦いたい気持ちはよく分かるけど、ここはそうね……折角だから、稟と風に組み合わせを決めてもらおうと言っつのはどうかしら？」

「私たちがですか？」

「おお、それはまた面白いですねえ」

いきなり振られて慌てる郭嘉と、面白そうに目を細める程？。

郭嘉はともかく、程？は何を考えているのか読みにくくて怖いですね。

ああ言うタイプの人には絶対に敵に回したくないです。

なんかこう、知らぬ間に周囲から孤立させられていて、そして気が付いたら墓の中……とか。

……いえ、あの可愛らしい少女がその様な……どうなんでしょう？

「どう、要望は無い？」

「そうですね。……私としては、魏軍最強を称されている夏侯惇將軍の実力を拝見したいところですが」

「それが一番無難ですねえ。風もそれでいいと思いますよー」

「おお、やはりそうだろう！」

二人の援護を受けて夏侯惇のテンションがうなぎのぼり。

対する徐晃はと言つと……。

「むう、二人がそう言つのなら仕方が無い。ここは私が引こう」

なんと言つ事でしょう。あっさり納得してました。

なるほど、夏侯惇と違ってちゃんと徐晃はわきまえている、と言
う事ですか。

うーむむ、これはまた、徐晃の危険度レベルを一段階上げなければ。
ば。

「烈華、それで良いのね？」

「はい。華琳様が申された手前、自分はそれに従うまでです」

「ふふ、可愛い子。そんな貴方が好きよ」

「はっ、ありがたきお言葉」

そう言つて徐晃が観客サイドへと歩いていく。

調練場の中央に残されたのは、自分と夏侯惇と曹操だけ。

ほかの武将たちは、少し離れた所から観客としてこちらを見ている。
る。

一部の人が視線レーザーを放っている様な気がしますが、それは
スルーしておきましょう。

「何平、貴方の相手は春蘭に決まったわ。異論は無いわね？」

「あります……けど、言っても仕方が無いので諦めます」

「そう。まあ、せいぜい死なないように頑張りなさいな。……では、両者構え」

曹操の言葉を合図に、自分と夏侯惇が同時に剣を抜く。

しかし、なんか夏侯惇の殺気が異常な気がするのですが……自分、何か夏侯惇に何かしましたっけ？

……。

ま、まさか……。

「ふははは！ 覚悟しろ何平！ この前の借り、今ここで十倍にして返してやる！」

うわー、やっぱりですよ。この人まだあの時のお話の事、根に持っていましたよー！

「いえ、アレはどう考えても元讓殿が悪いでしょう！ 手合わせに怨恨を持ちこまないでください！」

「ええい、黙れ！ 今度は私が、貴様の事を真っ赤にしてやる！」

「真っ赤ですか！？ 真っ白じゃ無くて真っ赤ですか！」

それは暗に、自分を斬ると言っている様なものでしょうに！

そして曹操、なんで貴方はこの物騒なやり取りを面白そうに眺めているのですか！

止めましょうよ！ おもに自分の命の問題的に！

「では……始め！」

「うおおおおおー！ー！ー！ー！」

無情なまでの開始宣言と、空気を震わせるほどの夏侯惇の怒声が調練場に響き渡る。

ああ本当に、面倒な事になってしまったものですね……。

そんな事を思いつつ、自分も夏侯惇に向けて構えを取った。

手合わせと言つ名の戦場 壱（後書き）

長くなりそうなので一度切りました。

さて、何平のお相手は魏軍最強（笑）の夏侯惇です。

久々の戦闘……上手く書けるといいな。

それでは、次回も宜しくお願いします。

手合わせと言つ名の戦場 弐(前書き)

く転んでもただでは起きぬく

どんな場合であろうと、何かしら利になるものを探し出す事。

手合わせと言つ名の戦場 貳

（曹操）

私の合図と共に雄叫びを上げながら何平に斬りかかる春蘭。対する何平は、げんなりとした表情を浮かべながら、珍妙な構えを取っている。

あのような構えは見た事が無い。しかし、傍から見ても隙が見当たらない。

一見すると、無謀な構えにしか見えないと言つのに。

「はあああああーっ！！」

そんな事はお構いなしと言つた風に、振り上げた大剣を何平に向けて叩きつける春蘭。

すると、何平は突き出した左手を目にもとまらぬ速さで動かし左手を春蘭の大剣の腹に添え、そしてそのまま力を加えて大剣の軌道を反らした。

「なにっ！？」

春蘭の驚愕と、そして轟音と共に調練場の地面が大きく陥没する。何平はと言つと、

「熱っ熱っ！ や、やはり摩擦熱が……」

赤くなった左手に息をふーっとなげかけていた。

そりゃあ、アレだけの速さで振り下ろされる春蘭の大剣を素手で

いなせば、摩擦熱が起きるのも当然でしょうよ。
でも問題はそこじゃ無い。

あの春蘭の剣を、素手で捌いたと言う事が何よりの驚きね。

「春蘭様の剣を素手で……」

「凧、アンタ……アレできるか？」

「……いや、無理だ」

凧たちが後ろで息をのむのが聞こえる。

季衣たちは純粹に驚き、桂花たちも呆気にとられている。

秋蘭だけが落ち着いた様子で二人の戦いを見ている。

「秋蘭、貴方は驚かないのね？」

「私は虎牢関で、何平が戦う所を少しですが拝見しております。しかし、まさかここまでとは……」

「そうね、私も驚いているわ」

そう言って、私は二人の方へと視線を戻す。

改めて大剣を構えなおした春蘭が、相変わらず手を冷ましている何平を睨みつける。

「貴様、今一体何をした」

「何って、剣の腹を手で押して軌道をずらしただけですけど……」

「ふざけるな！ 我が大剣を素手でいなしたとでも言うのか！」

「いえ、だから今そう言ったじゃないですか」

「ありえぬ、そんな事があり得るか!」

「そう言われましても……」

困った顔をして言う何平。

へえ、困った顔もなかなか可愛い……じゃなくて、何時も冷静沈着な何平もあんな表情をするのね。

ちよつとした発見ね。これだけでも春蘭と戦わせた甲斐があつたかしら?

「……まあ良い。次こそその頸、勿ね飛ばしてくれ!」

「だから嫌だつたんですよ……手合わせのはずなのにこうやって命のやり取りになるんですから。ああ、月様……自分、文官をしていた頃が懐かしうわっ!」

春蘭の横薙ぎを危なげに何平がかわす。

「何をぶつくさ呟いている。貴様を武人なら剣を抜いて戦え!」

「はあ……」

何平が大きくため息をつき、深く頭を垂れる。

そして次に顔を上げた時、何平の顔つきは全く別のものに変わっていた。

「華雄と言い元讓殿と良い……どうしてこう、戦うことに躍起にな

るのか理解できませんよ、本当に……」

未だに愚痴を呟きながらも、何平は剣を再度構える。殺気は全く感じない。しかし放つ威圧感が尋常ではない。これが……戦場に身を投じた時の何平だと言っの？

「ようやくヤル気になったか。さあ、来い！」

「いえ、元讓殿からどうぞ掛かって来てください」

「良いだろう。……てやああああーっ！！」

春蘭が剣を裂帛れっぱくの気合と共に、何平に向けて振り下ろす。

何平は目を見開くと春蘭に向かって踏み込み、同時に剣を下段からはね上げ振り下ろされる大剣の刃の根を受け止める。

剣の衝突で火花が散り、その中で何平と春蘭が鏝迫り合いとなる。

調練場の中心で競り合う二人。

けど、どうやら力のぶつかり合いでは春蘭の方が勝っているようね。

じりじりと何平が春蘭に押し込まれ、踏ん張っている足が地面を削っている。

「くっ、凄い力ですね。元讓殿のその体の何処から湧いてくるんですか」

「たゆまぬ鍛錬の賜物だ！」

「なるほど、ならば納得もいきますね！」

何平が強引に春蘭の剣を反らし、素早く後ろに跳び退る。

春蘭は何平に追い打ちを掛けようと、反らされた大剣を下段から逆袈裟に斬りあげる。

それを剣を寝かせて刃の腹を滑らせることで受け流す何平。そこにすかさず、春蘭の蹴りが繰り出される。

「ぐっ！」

春蘭の蹴りを左手を盾にして受けた何平は吹き飛び、地面に倒れはせずとも若干顔をしかめる。

折れはしていないだろうが、打撲はしたかもしれないわね。

「痛う……効きますね。しかしっ！」

ズビシッ！ と、聞こえて来そうな勢いで何平が左手を地面に水平に伸ばし、そして親指を天に向けて立てる。

「元讓殿のチラリズム……頂きました！ ごつつあんです！！」

何故か達成感を感じさせる表情を浮かべて、聞き慣れない言葉を何平が発する。

ちらりずむ……って、一体何なのかしら？

「元讓殿のは、まさかの三枚一組……しかし、これはこれで意外性に富んで良いと言うべきか……」

何やらぶつぶつと呟いているが、ここからではよく聞こえない。

でも、無性に、何平を殴らなくてはいけない気がするのは何故かしら……？

「しぶとい奴だ。いい加減斬られてしまえ！」

「いやいや、それは流石にご勘弁をっ！」

春蘭の地面をも砕く剣撃を、何平は絶妙な剣捌きでいなし続ける。十合、二十合……まだ終わらない。力で劣る分、何平は技術でその差を補っている。

これで文官だと言っていたけど……今思えばアレは嘘だったのではないかしら。

どう考えても、文官にしておくには惜しい腕前だもの。

「やるではないか何平。私相手にここまで食らいついてくるとは」

「自分は本来手合わせは好かないのですが、程？殿と郭嘉殿の歓迎仕合となればみじめな戦いをする訳にも行きませんからね」

「確かになっ！　だが、これならば文句もあるまい！」

「そうですね！」

さらに加速する剣撃の応酬。

けど、一向に崩れそうにない均衡。このままずっと見ていたいほど素晴らしい戦いだけれど、それだと日が完全に昇ってしまうわね。流石に午後からの仕事を放り出してまで見ている訳にはいかないか。

最後まで見れないのは残念だけれど、今回はこれで良しとしましょう。何平の実力も十分に確認できたことだしね。

「両者そこまでっ！　この戦い、曹孟徳の名において引き分けとする」

「そ、そんな華琳様っ！」

いきなりの終了宣言に春蘭は眉を八の字にして不満を。何平はと言えばホツとした様子で剣を鞘に納めていた。

「最後までさせてあげたいのは山々だけど、それだと昼からの仕事に手をつけられないでしょう？ 今回の所は引き分けと言う事で納得して頂戴」

「はい……」

「ふふふ、そう落ち込まないの。素晴らしい戦いを見せてくれた褒美に、今日の夜は可愛がってあげる」

「華琳様あゝ!!」

顔をだらしなくニヤけさせる春蘭。ふふ、本当に可愛いわね。しかし、予想以上の何平の実力……ますます彼を私の物にしたくなつたわね。

さて、その実力……どう利用させてもらいましょか。

ふふふ、これから面白くなりそうね。

（何平）

ふう、ようやく夏侯惇との手合わせが終わりましたか。

いやはや、流石は魏武の大剣を称されるだけあって手強かったですね。

あの蹴りはかなり痛かったです。青痣ものですよ、本当に。

まあ、チリズムのためならこの程度の負傷など気にはしません。むしろ名誉の負傷です。

それはさておき……さて、今後の事についてどうしたものでしょう。

なるべく抑えるつもりではいたのですが、今回の手合わせで曹操は自分に武官の仕事を任せようと思ったに違いありません。

それだけは嫌です！ もう仕事が増えるのはこりごりです。いえ、肉体労働は嫌いではありませんが……。

んんっ、とにかく……先の手合わせはもう少し自重すべきでした。夏侯惇の猪っぷりがあまりにも華雄に似ていたものですから、つい加減を誤りました。

華雄は手を抜くと凄く怒りましたからねえ。

まあ、今回は夏侯惇の実力を知る事も出来ましたし、決して全てが悪い結果ではありません。

機会があれば、他の将の方々の実力の情報も手に入れたいですね。徐晃辺りなどはなんとしても。まあ、彼女ならこちらから手合わせを申し込めば、容易に引きつけてはくれそうですが……。

その場合は、命を落とす可能性がある事を覚悟しなければならな

いでしよう。

彼女、自分の事を大分嫌っていますから。

「お疲れ様。良い物を見せてもらっ たわ」

「そうですか。それは何よりです」

「稟と風も感心していたわよ。もちろん私も感心したわ。貴方の今後の扱い方を考え直さなければいけない位に」

「いえ、今のままで良いです。考え直さないでください」

「それは無理な相談ね」

語尾に音符でも付きそうな声調で言い、ニヤリとした笑みを浮かべる曹操。

ああ、やはりこうなってしまうのか。不安がもろに的中です。今すぐ荷物を纏めて夜逃げしたい！

しかし、夜逃げしても行く宛てもないですし……完全に手詰まり。うう、パワハラで上に訴えてやる。って、その上からのパワハラでしたな。

泣いてなんかいませんよ、これは汗です。絶対に！

「それじゃあ、午後からの仕事も頼むわね」

「もう、どうとでもしてください」

やさぐれてやります。どうせ……どーせ何を言っても聞き入れてもらえないでしょうし！

開き直ってやる、徐晃の目ビームなんかスルーですスルー！
さっさと昼の仕事を終わらせて、曹操の部屋の前で鼻歌でも歌ってやるんですから！

そうと決まれば実行あるのみ。

善は急げ、思い立ったが吉日です！

調練場を後にして部屋に戻り、自分は午後からの仕事に手をつけ
た。

後日、その日の前日に見事に曹操の執務室の前で鼻歌を歌ってやった所為なのか、いつもの倍に仕事が増えました。

なぜ、なぜあんな結果の分かりきった事をしてしまったのか……。

ふっ、認めたくないものですね。若さゆえの過ちと言つものを。

……。

しくしく……まあ、そのおかげでいくつか軍務の情報を閲覧でき

ましたから良いですけどね。

手合わせと言つ名の戦場 弐（後書き）

一週間もお待たせしてしまい申し訳ありませんでした。

ここ一週間は少々リアルが忙しかったので。

さて、此度の二人の戦いは引き分けと言つ結果になりました。無論、チラリズム込みで。

久しぶりの戦闘描写なので上手く書けているか不安ですが、楽しんで頂けたのならば幸いです。

それでは、次回も宜しくお願いします！

お気に入り登録と感想に改めて感謝！

恋姫チラリズム図鑑 第一弾（前書き）

ユニーク10万突破記念……かな？

とにかく書いてみたくなったので書いてみました。

では、番外編をどうぞ。

恋姫チラリズム図鑑 第一弾

「どうも、作者の若輩侍です」

「主人公の黎明です。どうもお世話になっております」

「えー、今回はふと思いついた番外編です。内容は恋姫たちのチラリズム図鑑！」

「全国のチラリズムを愛する人たちのため、作者が自分こと黎明の体験を基に作りました」

「しかしまあ、アレだね。体張ってまでチラリズムを追い求める黎明に作者は脱帽だよ。おかげでこうして図鑑が作れるし」

「ありがとうございます」

「でもこれ、完成させるとかなり難しいんだよなあ」

「でしょうねえ。主に孫策陣営とか難しいでしょう。きっとポケ○ン図鑑のコンプリートよりも難しい気がします」

「いや、比べられないから……それ」

.....

「さて、これより先は若輩侍著、？真・恋姫十無双　くドキッ、乙女だらけの三国志人物？チラリズム図鑑？の紹介に入る訳だが…」

「何時の間に命名したんですか。って言うか名前長すぎませんか？」

「作者権限で良いんだよ。でだ、紹介する前にいくつか注意点がある。下記参照」

・これから先を読む場合は、大きな声で「フォー！　チラリズム最高！」と叫ぶ事。

「おいコラ、へぼ作者。なに意味不明な決まり事作ってるんですか。確実に読者減りますよ？　自分の努力を無駄にする気ですか。斬りますよ？　その頸刎ねて赤穂の天然塩で塩漬けにしますよ？」

「すみません、冗談です。ですから剣をしまってください」

「次ふざけたら、注意事項の欄に真っ赤なバラが咲きますからね？」

「はい……ごめんなさい。では、下記参照」

・この図鑑はBASESON様の公式設定では無く、作者の妄想による創作設定です。

・原作が大本ですが一部本作品の設定が絡んでいる部分があるので、ここまでの本作を読んでから読む事をお勧めします。

・ツッコミ当は自由です。図鑑に載っていない、そして作者が納得する新たなチラリズムポイントが読者様から出た場合、加筆修正される可能性があります。

・この図鑑はシリーズ式です。物語がある程度進み、黎明のチラリズム情報がある程度溜まった時点で次巻が発行されます。

・その他、改善点などを挙げてもらえると図鑑の質が向上しますので、宜しく願います。

「……最後だけ注意事項じゃなくてお願いでしたね」

「いいじゃないの。図鑑の品質向上につながるんだし」

「まあ、それはそうですね」

「と言う訳で、？真・恋姫（以下略）？チラリズム図鑑？の記念しなくてもいい第一弾。どうぞー！」

「あ、完成度の方はあんまり期待しないでくださいね？」

？真・恋姫十無双　くドキッ、乙女だらけの三国志人物？チラリズム図鑑？

者 若輩侍

〔第一弾・一話〜二十七話〕

No.1 華雄

チラリポイント 戦闘中

チラリチャンス 戦斧を大きく振り抜いた直後

チラリレア度

取得難易度

黎明が最初に刃を交えた恋姫で、戦斧・金剛爆斧を操る。
華雄は戦斧と言う大振りな武器を用いるため、チラリズムを得るにはさほど苦勞はしない。
ただし日常内では丈の長い腰巻に隠されているため見るのが難しい。
黎明は手合わせの最中に腰巻が翻った瞬間を見逃さなかった。
ちなみに、執念深い華雄との戦闘は長引くので水分補給は怠らないように。

No.2 賈馱

チラリポイント 日常

チラリチャンス 足技による肉体言語の行使直後

チラリレア度

取得難易度

黎明を脅して拉致……もとい、董卓軍にスカウトした筆頭軍師。賈馱のスカートの丈は短く、かつ頻繁に蹴りによる肉体言語を行使するので取得は容易。ただし気付かれた場合はブラック化のち、命の危機にさらされる可能性があるので要注意。

黎明は日常の中で、詠をからかいしなに取得している。

ブラック化：賈馱がたまに発動させる謎の状態。肉体言語の威力が危険なものになる。

NO.3 呂布

チラリポイント 日常／戦闘

チラリチャンス 天然の恩恵／体術行使時

チラリレア度

取得難易度 交友有り / 交友なし

董卓軍の最高戦力。鬼神、呂奉先。何故か黎明に懐いている。

あまり羞恥心と言うものを持っていないので、交友関係があるのならば取得は容易。

ちなみに黎明は、その百歩^{はたか}先の次元まで見させられそうになった事がある。

しかし交友関係が無い場合は取得は最高難易度まで跳ね上がる。
なぜなら、呂布と戦闘を行わなければならないからだ。
たとえ取得できても、生きていられる可能性は低いだろう。

No.4 董卓

チラリポイント 日常

チラリチャンス ドジを踏んだ時

チラリレア度

取得難易度

董卓軍のトップにして、美少女。マジパネエの一言な可愛さ。

羞恥心もさることながら、普段から丈の非常に長い整った服装をし、
戦闘をする事もないので取得が非常に難しい。

よって、レア度は最高の星五つである。黎明は傷の手当て時にドジ
を踏んで転び、捲れてしまった瞬間を見逃さなかった。

ドジっ子な部分が認められるので、一日中ストーキングをすれば取
得できる可能性がある。

もちろん、その場合は賈馱以下武将たちの目を掻い潜っての話にな
る。

No.5 陳宮

チラリポイント 日常

チラリチャンス ちんきゅーきつく行使時

チラリレア度

取得難易度

呂布お付きの幼な軍師。黎明との仲は良好。

チラリズムを感じにくい服装ゆえに、レア度は高くない。

狙い目としては、ちんきゅーきつく行使時の股の部分。もしくはかがんだ時の腰の部分。

命の危険は無いが、怪我の可能性があるので注意しよう。

No.6 張遼

チラリポイント 日常/戦闘

チラリチャンス 袴が翻った時

チラリレア度

取得難易度

サラシが眩しい神速の姉御。

チラリズム精神を盛大に無視した服装のため、狙い目は一つのみ。袴の両サイドの僅かな隙間から取得が可能である。

とにかく張遼に大振りな運動をさせないといけないと言う点がネック。

腕に覚えがあるのならば、戦闘時に狙うのが手っ取り早い。

No.7 夏侯淵

チラリポイント 戦闘

チラリチャンス 回避時

チラリレア度

取得難易度

曹操に仕える夏侯姉妹の妹。

チャイナ服の深いスリットからのチラリズムが狙い目。

夏侯淵の武器は弓矢なので、接近戦に持ち込んで回避運動させてチャンスを作ろう。

ただしチラリズムを深追いすると射殺されかねないのでほどほどに。ちなみに黎明は、狙ってでは無く不可抗力で夏侯淵のチラリズムを取得した。

No.8 夏侯惇

チラリポイント 戦闘

チラリチャンス 大剣を振り抜いた後

チラリレア度

取得難易度

妹と同じくチャイナ服なので、深いスリットからのチラリズムを狙う。

夏侯惇は積極的に近接戦闘を行ってくるので、回避を重視しながら大振りな行動の合間のチラリズムを狙おう。

取得は簡単だが、その後の戦闘がとにかく危険。

夏侯惇の戦闘力はかなり高くかつ執念深いので、取得後の命の危険は大きい。

黎明はこのチラリズムを得ようとして、左腕に打撲を負っている。

第一弾 ー完ー

「と、言う訳で……二十七話までの情報で作者が書き上げた？ 凶鑑でした」

「……もし」

「ん、なにかな？」

「なんで凶鑑なのに自分の場合やら書かなくてもよさそうな事まで書いているんですか？」

「いやあ、だって例があつた方が分かりやすいだろうし。その他の余計な部分は作者のノリだ」

「いいりません！ そんなノリは断じて必要ありません！ 今すぐ書き直しなさい！」

「その要請を受諾するのは意に反する」

「パーレイなんて自分は一言も言ってませんから。それとも呪われた金キラ金貨を御所望ですか！」

「いや、これもノリだよ。黎明君」

「……（チャキ）」 剣が鞘から抜かれて構えられる音

「あ、あれ、黎明さん。どうして剣をお抜きになって……ゴメンなさい！ 調子に乗り過ぎました！ だから頸だけはやめ ギャアアアー……！」

ザックリ

……若輩侍、全治一時間の切り傷。

「いやあ、一昨日に貰い物のマフィンを食べたら、包みのアルミで唇をザックリやりましたー」 事実

「……馬鹿ですか？」

「あまりにサクリやつて痛みを感じなかったから、マフィンをかじった跡に血痕があった時は驚いたよ。結構出血が酷かったなあ」
(遠い目)

「(ダメですねこの作者。ああ……この小説の行く末が心配です)」

「とまあ、それはさておき。本編の息抜きに書いてみましたが、いかがでしたでしょうか番外編」

「なんか不評の嵐が来そうで怖いのですが……」

「大丈夫、作者も怖い！」

「なんの慰めにもなりませんね……」

「うん。まあ、次回はちゃんと本編を進めます。次回の番外編は未定！」

「だそうです。どうぞ、作者共々この作品を宜しくお願いしますね」

「それでは、また次回にお会いしましょう」

「」「」どうも、ありがとうございました！」「」

恋姫チラリズム図鑑 第一弾（後書き）

かなりメタ発言がありますが、ここでの掛け合いは本編には関係しません。

なので黎明も大分壊れてます。夏の暑さで作者はもつと壊れてます。

……ふふふ、最近浄水器のカートリッジを新しくしたので氷水をガバガバ飲んでます。なんて安上がりな水分摂取。日本の水道水、万歳！

読者の皆様も、熱中症にはくれぐれもお気を付けてくださいね。

それでは、次回も宜しく願います。

不器用な優しさ（前書き）

（おんこうてんじつ
温厚篤実）

性質が穏やかで、人情に厚く誠実である様子。

不器用な優しさ

「ふむ、ここは要チエックですね」

独り言をつぶやきながら、城下の地図に印を入れる。

ただ今自分、警邏兼町の構造把握に精を出してます。警邏は楽進たちの補佐の一環で、構造把握はいざという時の逃走経路の確認です。

いえ、逃走と言っても軍を抜けるとかそういう事では無いですよ？
例えば、手合わせをしると追いかけてくる夏侯惇を撒くためとか、
そう言う理由です。

それに、町の構造を把握する事はこれ以外にも様々な利を生みま
すからね。

「何平殿は、先程から何をしていますのですか？」

「これですか？ ふふふ……知りたいですか？」

「……いえ、遠慮しておきます」

楽進、そこまで露骨に怯えなくても良いでしょうに。

苟？と夏侯惇へのお仕置きの後辺りから、どうも楽進たちが自分を
怖がっている節が見えるんですね。

滅多な事が無ければ、自分はある所までは怒りませんよ……。

「しかし、町の警邏はあなた方三人の隊だけで行っているのですか
？」

「はい。桂花様たちや秋蘭様は政務で忙しいですし、親衛隊の二人

も同じく。春蘭様には……その……」

「いえ、その先は言わなくても分かりますから」

確かに、夏侯惇に警邏を任せたらどんな二次災害が発生する事やら分かったものじゃありません。

最悪捕縛対象が昇天してしまう可能性だってありますから。

しかし、そうなるとこの三人にはかなりの苦勞が掛かっていると
言う事ですね。

……。

敵……いえ、今は味方ですが……まあ、曹操に塩を送るのも一度
くらいは良いですか。

ほら、情けは人のためならずとも言いますし。

「もっと警邏の負担を軽くできるよう、改善案が必要ですね」

「改善案ですか？」

「ええ。ほら、今のままでは楽進殿たちも大変でしょう。許昌の城
下は広いですから」

「……はい、少し大変だとは感じています」

ここで控えめに言う当たり、楽進らしいと言うか何と言うか。
真面目で仕事熱心なのは良い事なのですがねえ。

「ですが、改善と言っても具体的にはどうするおつもりですか？」

自分の話にし少し興味が湧いたのか、楽進が自分に問いかけてくる。

「そうですね。……例えば、町をいくつかの区画に分けてそれぞれに詰所を配置。各詰所に定数、警邏の兵を常駐させ、さらに区画内での警邏のルー……道順を決めて効率化を図るとか」

「なるほど、それなら確かに、今までよりもずっと効率的で警邏の時間の短縮にもなりますね」

「道順が被らないようにすれば余計な手間も省けます。ただ効率化を求めてしまつとその分、穴も出来てしまつのですよ」

「穴……ですか？」

「ええ。それは、相手方に警邏の道順を把握されてしまった時です。こうなると、逆に規則的に警邏をしている事があだとなってしまいます」

「あつ……」

それは思いつかなかった、と言いたげな表情で声を上げる楽進。

「ですが今の様な不規則的な警邏であるならば、相手方も対応に困ります」

「しかしその分、兵たちには余計な苦勞を掛けさせてしまつと？」

「そういつことですね」

楽進の言葉に頷く。すると、楽進は顎に手を当て何かを考え始め

る。

いいですねえ。こう言うタイプの人間は自分、大好きです。もちろんLOVEではなくてLIKEですよ？

その所を勘違いしないように。」

「何平殿、その……これはあくまでも、私が考えた事なのですが……」

「なんでしょっ？」

「その……警邏の道順の形式いくつか用意してはどうでしょうか？
そうすれば、先程の穴に関しては問題無くなるのでは？」

「良い所に気が付きましたね。その通りです。例えば、道順を三通り用意してそれぞれを一日ずつ、三日間施行したとします。そしてその次の三日間では、先の三通りを今度は前回とは違った順番で一日ずつ施行する。こうすれば相手方もかなり困ると思いませんか？」

「なるほど。そうすれば、例えば道順の形式を三つとも把握されても、その日の形式がどれになるか分からない限りは対応に困りますね」

そう、ランダム要素ほど怖いものは無い。一生懸命頑張って警邏のルート調べても、その日のパターンが1なのか、2なのか、3なのか。確率は三分の一。三分の一の確率で警邏隊に見つかり、捕まれば牢屋行きな訳ですからね。まあ、今のはあくまで三通りの場合。これが五通り、十通りになれば、もうほとんど穴は無くなります。

ただ、先の洛陽に潜入していた呉の隠密の様な、実力の高い人物相手では対応に限界もあります。そればかりはどうにもなりません

ん。警邏の人員全員を夏侯惇や徐晃と言った人物にするならば話は別ですが、それは土台無理な話ですから。

……うん？ これって、もしかしなくてもかなり良い案ですよ？ これを曹操に献策すれば、恩を一つ売る事ができたりとかしますよね。そうすれば後々、有利に話を進める事が出来たり……いやいや、これには楽進が考えを出した所もありますから、それは流石に気が咎めます。

第一、敵に塩を送る精神で考え始めたのですから、それを無視して利益に走るのは人としてダメな気がします。ここはやはり、何平としての自分を優先する事にしましょう。自分が王平に戻るのは、まだ先の事です。

「どうですか楽進殿。今の案、あなたの口から曹操様に伝えてみては？」

「私ですか！？ そんな……これは何平殿が考えた案で」

「お忘れですか？ 自分は楽進殿たちの補佐なのですよ。これは自分の当然の仕事です。それに……」

「それに？」

「……これ以上、曹操様に注目されるようなことは出来れば避けたいのですよ。ぶっちゃけた話、仕事を増やされるのが面倒です」

げんなりしながら言った自分は悪くないでしょう。この案を自分が曹操に献策すれば、絶対に回される仕事が増える気がピンピンします。

恐らく大量の雑務に混じって軍事関連の情報も手に入るでしょうが、正直雑務が面倒過ぎです。

それだったら、夏侯惇を上手く誘導尋問に引っ掛けて情報を引き出した方がまだ楽です。だって夏侯惇ですし。

「と言う訳で、献策の方は楽進にお任せします。もちろん自分の名前は非公開で」

「……分かりました」

その間が凄く気になりますが……まあ、大丈夫であると信じたいです。

警邏の改善案についての語り合いを終え、今現在の警邏へと意識を戻す。

しかし、真面目な楽進はともかくとして、少しサボリの傾向がみられる李典と于禁の方が心配です。

ちゃんと警邏……やっていると良いんですけどね。二人がサボっている所が見つかれば、二人はともかく補佐の自分まで怒られてしまいます。

この時代でも管理不行き責任はちゃんとあるのですよ。

「李典と于禁は今頃どうしていますかね？」

「……正直に言うと、恐らく寄り道などの類をしている可能性は高いですね」

「正直に言わないでください。自分、悲しくなります……」

二人と付き合いが長いと思われる楽進にそう言われるとなおさら

です。

「ここは、他の人より先に二人を確保して、こちらで内密に処理を……」

「何平殿、目が本気の色なんですか？」

「ああいえ、冗談……ですよ？」

「声が上ずってます」

むう、手厳しいですね楽進は。と言うか、自分が少し焦り過ぎただけですか。

「まあ、息抜きも大事な事ですから、多少の事ならば目をつむりますよ」

「その多少で済まないのがあの二人なのですが……」

「……アレですか？ 楽進殿はそんなに自分を追い詰めて楽しいですか？」

「事実を言っているだけですから」

ああヤバい、これは本当にマジに言っている目です。自分、頭が痛くなってきました。もうこのまま帰って良いですか？

「あつ、何平さんと凧ちゃんなの！」

自分がうう〜とこめかみを押さえていると、その頭痛の原因で

ある二人の内の片方の声が、自分の耳に入って来ました。

声が出た方に目をやると、喫茶店の様な店で杏仁豆腐を前にしている于禁と、何やら凄まじい集中を手元に注いでいる李典の姿が。

「おや、二人ともこの様な所で。休憩ですか？」

「えっとね、ここ最近人気のお店だから、真桜ちゃんと一緒にお茶しに来たの！」

ぱあっと屈託無く笑う于禁の、なんと罪深き事か。その言葉が意味する所は、警邏をほっぽりだしてきたという意味に他ならないと言っている。

「……………」

そしてそれを聞いた楽進から凄まじい怒気が。まあ、彼女の性格的には許せない事でしょうからねえ。

李典はそれに気付かず、相も変わらず何かをいじってますし。どうやら何かの人形のようなのですが、姿形がかなり夏侯惇に似ている様な？

「李典殿、何をしているのですか？」

「ん〜」

おお、花丸を付けたいくらいの生返事。自分の言葉は聞こえていませんか。

「……………」

おつ、また楽進のボルテージが上昇しましたね。なにやら背中が熱いです。殺気に当てられてますね、自分の背中が。

「ふむ。物事に集中するのは構いませんが、警邏の方はどうしたのですか？」

「ん〜」

……。

……これは、自分に対する挑戦状ですかね？

「于禁殿、ちなみにお聞きしますが……警邏は終わっているのですか？」

「え〜っと……まだなの！」

ほうほうほう、引き攣った笑みを浮かべている辺り、自分が少し怒っている事が分かっているようですね。

いいでしょう、于禁は無罪放免にしてあげます。

さて……。

「李典殿、最後通告です。今すぐ警邏に戻りなさい。さもなければ、実力行使でいきますよ?」

「ん〜」

なるほど、あくまでも動く気は無い……と言つ事ですか。ふふふ、良い度胸です。

自分が腰の剣に手を掛けたのを見て、于禁が大慌てで李典の肩をゆする。

「真桜ちゃん！ 早く警邏の続きに戻るの！ 真桜ちゃん！」

「じゃかあしい！ 手元が狂うやないかこのド阿呆！」

本気の怒声を于禁にぶつける李典。

于禁から垂らされた蜘蛛の糸を自ら払い除けますか。全くどうして、仕方の無い人ですね。

これは少し、お仕置きが必要な様です。

ドンッ！

剣を逆手で抜き、その切っ先をそのまま李典たちのテーブルの上へと勢いよく突き立てる。

その切っ先に、先程まで真桜がいじっていた夏侯惇によく似た人形は真つ二つに切り裂かれていた。

「……ぎいいやああーっ！！ ウチの夏侯惇将軍があああーっ！！」

一瞬の間の後、状況を理解した李典が大絶叫を上げました。凄いですね、湯のみのお茶に波が立っていますよ。

「ウチの、ウチの夏侯惇将軍があ……真つ二つにいいい……」

「自分はこう言った実力行使はあまり好きでは無いのですが、三度言ってダメなら仕方がありませんよね？」

「あああああ~~~~~……夏侯惇將軍。ウチの愛しい……真つ二つ……夏侯惇將軍……」

何時もより三割増しに殺気を纏い、泣き叫ぶ李典を見下ろす。それすら眼中に入らず滝の涙を流す李典。

李典、呆然としていて言語野が逝っているのかも知れませんが、その発言は些かアブナイですよ？

「だから言ったのに真桜ちゃん。何平さんは怒ったら容赦無いの、知ってるのに」

「おや、于禁殿にも実力行使が必要で？」

「いらない！ いらないの！ 沙和、ただいまより警邏に戻ります！」

「そうですね。それは残念です」

「ひいひいっ！」

于禁が卓上の杏仁豆腐をひっくり返しながら怯える。

おっと、いけないいけない。思わず本音が漏れましたか。自重しなければ。

「……何平殿って、実は凄い……いえ、なんでもありません」

何かを口走ろうとした楽進に、につこりと笑みを向ける。

すると楽進は言いかけた言葉を飲み込んで黙り込んだ。何を言おうとしたのか凄く気になるのですがねえ。追求は無しにしてあげま

しょう。

「ともかく于禁殿。今すぐ、李典を連れて警邏に戻るように。い・いで・す・ね？」

「はいなのっ！」

于禁はがばつと立ち上がると、半屍状態の李典の手を引っ掴み一目散に駆けて行った。

「……全く、あの二人は」

二人が見えなくなるまで見送ったあと、ふうっと一つ大きく息を吐き出す。後ろでは何やら楽進が呟いている。

「まさか私より先に何平殿が手を出すなんて……」

「ん？ 何か言いましたか？」

「いえ、何でも有りません。お気になさらずに」

そう言って何時もの寡黙な表情へと戻ってしまふ楽進。はて、一体何だったんでしょうね。

「さて、と。ここで何時までもつつ立っているのも何ですし、少しお茶をしていきますか」

警邏に加えて説教までしたものですから、自分も些か疲れしました。疲れた体には甘味が一番。

「しかし……」

「二人が気になりますか？」

「……はい」

まあ、確かに少しやり過ぎてしまったかもしれませんがね。楽進が心配するのも無理は無いです。

「なら、楽進殿には追加で李典と于禁の警邏を手伝うよう任を与えます。今すぐ、二人の下に向かうように」

「はい！」

追加で仕事を言い渡されたのにも関わらず、楽進は笑みを浮かべて二人が走り去った方へと駆けて行った。

そんな楽進の微笑ましい姿に、自分までもが知らずの内に笑みを浮かべてしまう。

「さて、男一人……喫茶店に取り残されてしまいましたか」

呟き、未だ剣が突き刺さったままのテーブルから剣を引き抜いて、同時に真つ二つになった人形を手取る。

あまりにも夏侯惇に似ているその人形……改めて、真つ二つにした事を二つの意味で申し訳なく感じました。

「あのう、將軍様とお見受けしますが……」

と、そこに、自分が感じているのと同じく申し訳なさそうな顔をした若い女性が、自分に声を掛けてきました。

「ああ。二人の飲食の代金なら自分が払います。それからこれの修理代と……これで足りみますか？」

財布からいくらか金銭を取り出し女性に手渡す。

「いえっ！ そんな…多過ぎます！」

「では、その多い分で饅頭を四つほどお頼みます。残りは迷惑料と言つ事で」

あたふたしている店長と思わしき女性に、若干の威圧感を伴つてそう告げる。このタイプの人はこうでもしないと妥協してくれませんから。

慌てて饅頭の包みを持ってきた店長に苦笑しながらも、一つお礼を言つて喫茶店を後にする。

さて、疲れて戻ってくるだろう三人への差し入れはこれで良いでしょう。

「あとは……」

饅頭の包みをしっかりと抱え、自分は未だ喧騒収まらぬ城下へと足を向けた。

後日……。

楽進以下三隊による城下の警邏の改善案が楽進によって提出され、これにより警邏はより効率的に行われることになった。

時を同じくして、楽進に俸給の昇格が。城下では何平と夏侯惇による逃走劇が。

そして李典には差出人不明の小包が届き、その中身を見た李典が狂喜乱舞した事は、また別の話である……。

不器用な優しさ（後書き）

またもや一週間の間が……。

夏休みって、忙しいですよね？ よね！？

とまあ、作者の見るに堪えない言い訳でございました。

それでは、次回も宜しくお願いします。

先見る者の情け 巻(前書き)

く石橋を叩いて渡る

何事も、用心の上に用心をする例え。

類義語英語表記

- ・ Look before you leap (念には念を入れよ)
- ・ Forewarned is forarmed (前もって戒めるは、前もって備えるに等し)

先見る者の情け 壱

「ああ、面倒くさい……」

曹操に呼び出され、自分は王座の間へと向かっています。

全く、人が朝食を食べながら雑務と格闘している時に呼び出すとは何事ですか。

と言うかその前に、荀？にもっとまともな時間に仕事を持って来いと伝えたいです。

トイレに行く直前とか着替え中とか、あまりにもタイミングが狙われ過ぎ……これはもうホラーの領域ですよ。怖すぎです。

ゲンナリしながら廊下を進み、王座の間へと到着する。おや、どうやら先客がいる様子。

ちらっとこつちを見ただけですぐに正面に向き直る徐晃の隣へと歩を進め、曹操の前へと行く。

「遅くなりました。何平、ただ今参上いたしました」

「忙しい時に呼び出して悪かったわね」

「はい。出来れば荀？殿に、食事中に仕事を持ってくるなど言ってください」

そうすればこう言った呼び出しにももっと早く対応できますし。

「全くあの子は……貴方も随分と嫌われたものね」

「本当に、説教してからはさらに酷く嫌われたみたいで」

思わずため息をついてしまう。嫌われるのはともかく、それに比例して嫌がらせをされるのはちょっと嫌です。対応するのが面倒なんですよ、本当に。」

「それで、自分の他に徐晃殿もお呼びの様ですが……一体何の用で？」

本題に戻すと、曹操はふうっと一息を吐き、改めて口を開く。

「北の国境付近で賊の被害が多発しているという情報が入ったわ。貴方達には、その対応に向かってもらおう」

賊討伐ですか。なるほど、確かにそう言った事に関しては自分は適任ですね。ただ、いくつか不安要素もありますが……。

そう思っていると、徐晃が自分の不安を代弁してくれる。

「北の国境となると、平原の劉備との国境。侵略行為と勘違いされる可能性が……」

そう、部隊を率いて国境の近くまで行くと言う事は、最悪侵略行為と勘違いされ劉備軍から攻撃される恐れがある。賊の討伐中にそんな事なるものなら、目も当てられません。

「その件に関しては心配ないわ。既に劉備にはその旨を伝える書状を送っておいたから」

「そうですね。出過ぎた事を言い、申し訳ありません」

徐晃が頭を下げて後ろへと引く。

「他に質問はあるかしら？」

「ありません」

「自分もありませんよ」

「では、すぐに出陣準備を始めなさい」

「「御意」」

二人揃って答える。まあ、どうしてメンバー編成が徐晃と自分なのかと疑問に思う所もありますが、それは別段問う必要もないでしょう。徐晃も特に何を言う訳でも無いようです。徐晃は私情と仕事を割り切ってるようですからね。これについては、自分も嬉しい限りです。しかし、徐晃と一緒に遠征ですか……面倒事が何も起こらないと良いんですけどね。

（曹操）

何平と烈華が踵を返して王座の間から出て行く。

何平と烈華の仲はあまり良くは無い。しかし、二人は魏の中でも武と知の両方を兼ね備えた素晴らしい良将。遠征を任せるにこれ以上の人材はいないでしょう。何平に関しては完全に魏の将とは言えないけど。

この二人の仲が改善されれば、さらに魏は強くなる事は間違いない。それに、そこから何平が何らかの情を持っては何平を魏へと留まらせる事も出来るかもしれない。どうにかして、烈華の何平嫌いを改善できないものかしらね。

「失礼します。華琳様、少しお聞きしたい事が……どうかしましたか？」

王座の上で悩んでいると、いつの間にか入って来ていた桂花が不安そうな顔で私を見つめている。

「少し悩み事をね。……それで何か用かしら？」

「はい。この件に関してなのですが……」

桂花の持ってきた案件に目を通しながら、烈華と何平の不和の改善方法を頭の片隅で模索する。この場合は他の者にも聞くべきなんでしょうけど……桂花と春蘭には相談しても意味が無さそうね。この案件を終えたら、秋蘭が稟辺りに相談してみましよう。

何平……必ずや私のものしてみせる。そんな事を思いながら、何時もより幾分か気分よく、私は案件を片づけ始めた。

「ああ、そうそう。桂花、何平の嫌がらせもほどほどにね」

「うっ、申し訳ありません……」

徐晃と共に治安改善を行うため、北の国境付近へと遠征する事になつた何平。

相変わらずの徐晃との不和と、理由の分からない一抹の不安を抱えながらも、彼は任務のために許昌を発つ。

何平が許昌を発つたその頃、平原の将である劉備の元へ凶報が届く。

以前、魏領へと侵攻を試みた袁紹が、今度は平原へとその矛先を向けたのだ。

劉備軍に袁紹軍と事を構えるほどの戦力は無く、劉備軍は民を引き連れ平原から脱出する。

劉備軍一同は諸葛亮の献策のもと、益州へと逃れるために魏領へと歩を進めるのであった。

〜何平〜

「ぐがつ……」

潜んでいた最後の賊を斬り捨て、剣を振って刀身に付着した血を飛ばす。

遠征のため許昌を発ち、国境付近の賊の討伐を初めて早二週間。

報告にあつた賊の一味は今斬り捨てたので最後。それに連なつていた悪徳商人やら奴隷商人やらも、今日までにほぼ一掃し終えました。

しかし、賊にしてはあまりに規模の大きいものでしたね。非合法とは言え商人と繋がっているとは……。

いやはや、世も末だと言うべきなのでしょうが。

「何平、そつちの奴らは片付いたのか？」

「はい、今しがた」

鎧のあちこちを血で染めた徐晃が、相変わらずのぶっきらぼうな調子で言い、自分もしれつと答える。

うゝむ、二週間も共に行動をしているのですから、もう少し態度が柔らかくなつても良いと思つんですけどね。どうしてそんなに嫌われているのだから……。

「なら、死体は集めてとつと燃やせ。腐れば病の元だ」

「了解しました」

兵たちに手伝つてもらい、賊の死体を一か所に集めて火を放つ。人の焼ける匂いが辺りに漂い、油で唇がベタつく。火葬場みたいに超高温で一気に燃やす訳ではありませんから、こうなるのも仕方がない。あまり気分の良いものではありませんが我慢するしかありません。

一刻ほどで後始末を終え、自分に割り当てられた部隊を率いて撤収作業に移る。流石は魏の兵、仕事の手際が良いです。そう時間も

掛からずして作業が無事に終わりました。これで少しは休む暇も…
…なんて思っていたのですが、そこは流石徐晃と言うべきか……。
休む暇もなく国境の城へと引き上げることに。これには流石に、兵
たちもうへえと呻いていましたよ。帰りくらいもつとゆっくりすれ
ば良いのに。せつかちさんですね、徐晃も。

なんて事を思いながら駆け足進軍を乗り切り、城に帰還してよう
やく休みをもらえました。

「ああ、恋たちとのんびりしていた頃が懐かしい……」

天幕の中でのたれながらついつい独り言。なんだか魏に来てから
昔をよく思い出すようになりました。アレです、現実逃避ってやつ
です。職場ストレス万歳です。

職場の同僚との不和、無駄に責任の大きい仕事。敗軍の将とは、
こうも忙しいものなのでしょうか……。

「何を呑気にくつろいでいる。貴様、此度の」

「報告書なら、徐晃殿の部屋に届けてありますので」

自分に先手を打たれた事が悔しいのか、徐晃が面白くなさそうな
顔で言葉に詰まる。

「そう言う訳ですから、自分はまったりと夢の中に」

「ならば私の鍛錬に付き合え！」

「えー……」

「な、なんだその嫌そうな顔と反応は！」

いえ、そうではなく、嫌なんです。何が悲しくて徐晃と手合わせなんてしなくちゃいけないんですか。

休み時間を放り出してまでする事ではないし、そもそも休み時間を不意にしたくもありませんし。

「嫌です。自分は疲れているので寝ます。帰り道まで強行軍だったんですから」

「情けない！ あの程度で根を上げてどうするのだ！」

「だーかーらー。自分は洛陽では文官を務めていたと言っているではありませんか」

まあ、実際は武官も兼ねていた訳ですが。それは別に言う必要はありませんし、言っても何の利益もありません。

ぶっちゃけ、強行軍もそこまでしんどくはありませんでした。ただ戦いたくないだけ、基本自分は非戦闘を好みますから。

「……ちっ、もういい！ ならば軟弱者は軟弱者らしくへばっていろ！」

そう言って荒い足取りで徐晃は出て行く。

ふう、これで存分に体を休める事ができ

「何平、緊急を要する事だ。今すぐついて来い」

「……」

なんかこう、先程まで私情挟みまくりだった顔が、たった数分でキリリとした顔になって緊急事態を告げに来るって……なんか気持ち悪いです。

「何を呆けている。早くしろ」

「ふう、了解です」

寢床からはね起きて腰に剣を刺し、公務モードになった徐晃へとついていく。

すると連れていかれたのは城壁。はて、城壁何かに自分を連れて来て一体何を？

「何平、貴様はアレをどう見る」

「アレって……」

徐晃の指さした方向へ視線を向ける。そして……自分は一瞬絶句した。

「アレって……劉備軍ですね」

「ああ、そつだ」

緑の布地に劉一文字の牙門旗。何処からどう見ても、劉備軍の軍勢です。

「確か、曹操様は書状を出したと……」

「ああ、そつだ」

「……」

「……」

二人揃って無言。それりやあ、無言にもなりますよ。万にも満たない部隊の自分たちが駐留する城に、パツと見で万を越える軍隊が進軍してきているんですから。

「これは、どういうことだ(でしょう)?」

ああ、気が動転するあまりハモってしまいました。落ち着け、落ち着きなさい自分。

「分からん。部下からの情報では、向こうには劉備を始めとした主力が全て揃っているとの事だ」

「大将自らですか。これまた大胆なことを……」

確かに、大将自ら先陣を率いるのは味方の士気を上げるのに非常に効果があります。

しかし……解せませんね。こんな国境上の小さな城、主力を投入してまで落とす必要はないはずですよ。

国境上の主導権を握りたいと思っていたとしても、今の劉備の戦力では曹操に敵わないのは明白。

あの諸葛孔明が、それを分からないはずは無いのですが……。

「何か、事情があるのやもしれんな」

「恐らく。曹操様への早馬は？」

「貴様に言われずとも、とうの昔に出している」

「そうですか。……ん？ 誰か、単騎でこっちに向かって来ますね」

眼を凝らすと、劉備軍から突出する者が一人。恐らくはこちらに向けるの使者でしょう。

「何平、貴様が応対しろ」

「いえ、ここはやはり徐晃殿の方が……」

もしアレが関羽とかだったりしたら、自分の生存が発覚してしまいます。何としても、ここは断らなければ。

「口の達者さでは私より貴様の方が上であろう？」

「いえいえ、徐晃殿の方が知的で聡明でしょう」

口での応酬。この勝負、負けは絶対に許されません。もし負ければ、自分の董卓軍ドツキリ大作戦が破綻に……！

「あのお、劉備軍の使者の方が目通りを願っているのですが……」

「……」

どつやら、やいのやいの言っている内に、兵が使者を城内に入れてしまった様子ですね。と言うか、自分と徐晃の視線に目に見えてオロオロしている彼が少し可哀想です。

「二人で会いましょうか？」

「……ちっ」

そんな露骨に舌打ちしなくても。ほら、言うじゃないですか。赤信号も、皆で渡れば怖くないって。えっ、違います？そこはほら、突っ込んだら負けです。

何時も通りに外套を深くかぶり、徐晃と共に使者の下へと向かう。案の定待っていたのは、何やら切羽詰まった表情をした関羽だった。

「お前が劉備軍の使者か？」

「そつだ。我が名は関羽、平原の将…劉備元徳の使者として参つた」

「お前が関羽か。噂は耳にしているぞ。して、わざわざ主と共に何用だ。ここが我らが魏の領地との国境である事は、お前も知っているはずだが」

「実は……曹操殿に領地の通行の許可を頂きたく、使者として参つた。頼む……どうか、曹操殿の取り次いで欲しい」

関羽が頭を下げ、徐晃に嘆願する。

関羽が領地の通行許可を求める。なるほど、どうやらこれは……他人事で済む事ではないようですね。領地を捨て他領の通行を求める、すなわち自領が何者かに侵略され逃げてきた……恐らくはそんなところでしょう。そしてその侵略者は、ほぼ間違いなく袁紹。曹操より先に劉備を潰しにかかる事にしたと言つ訳ですか。

「徐晃殿、じぶ……俺はこの件、曹操様に取り次いだ方がいいと思

う。恐らく劉備軍の背後から袁紹軍が迫っているはずだ」

「……なるほど、私と貴様だけで裁量を下せる案件ではないか。関羽よ、少し待て」

そう言つて、徐晃は近くの兵に書くものを借りると、何やら手紙をしたため関羽に手渡す。

「徐晃殿、これは……？」

「これを見せれば、すぐに曹孟徳様に取り次いでもらえるだろう。城を抜け、許昌へ向かうが良い。ただし関羽、お前ひとりだ」

「ありがとう徐晃殿、かたじけない！」

「礼など不要だ。行け」

関羽はもう一度頭を下げると、馬に飛び乗り飛ぶようにして許昌の方角へと馬を走らせて行った。

「意外ですね。自分はもう少し、徐晃殿が渋ると思っていたのですが」

「事の大きさを見誤るほど、私は愚かではない。どこぞの猪と同じに見るな」

どこぞの猪つて……まんま夏侯惇のことですね。しかし、夏侯惇もそこまで考えなしではないと思うのですが……どうなのでしょう？
しかしまあ、これまた面倒な事になって来ましたね。劉備軍と袁紹軍、出来ればどちらも顔を合わせてくない面子だと言つのに。

「しかし貴様、なぜ関羽に対し己を隠した」

「あー、まあその……？水関での戦いで少し因縁があるんですよ」

「何だ、無様に斬り伏せられ逃げ出したのか？」

「いやあ、あははは……」

言えない、言うてはいけない。どうまかり間違っても自分が関羽を蹴っ飛ばしたなんて言うてはいけない。何故かそんな気がした。

「……まあいい。いずれ分かる事だ」

何がいずれ分かるのか、そう言う不安になるような事はなるべく言うて欲しくありません。安心して夜寝れなくなりそうです。

「とにかく、劉備軍の監視……貴様に任せるぞ」

「分かりました。徐晃殿も、部隊の編成の方をお願いします」

「……ふん」

鼻を一つ鳴らして立ち去る徐晃。

さて、自分は曹操が来るまで、事の展開を脳内でシミュレートしておくのでしょうか。

先見る者の情け 巻（後書き）

更新に二週間も掛かってしまいました。読者の皆様、ゴメンなさい。ちよつと今後の展開を考えるのに時間を食いました。悩みまくります、どうしよう。

まあ、悪やらがクライマックス近いのでそっちに執筆が偏っていると言つのもあるのですが……。
なるべく滞らないよう、努力します。

なお、この小説での劉備は、黎明たちの必死の防戦により手柄を立てる事が出来なかったため、連合終結後も平原の相のままと言つ設定ですので、どうぞよろしく。

それでは、次回も宜しくお願いします。

先見る者の情け 弐（前書き）

く成るは厭なり思つは成らずく

嫌な事ばかり達成され、望んでいる事は叶わない。思い通りにならない事。

先見る者の情け 式

今後の展開をあれこれ予想しながら、城より数里離れた所で駐屯している劉備軍を、自分は城門の上から見つめる。辺りは既に闇に包まれ、見えるのは見張りと所々に設置されている松明の灯りのみ。城内の方もひっそりと静まり返っている。

劉備軍が平原から逃れてきて早五日……今頃平原の地は袁紹によつて征服されてしまっているでしょう。となれば、袁紹が次に向かうはここ。聞く所の情報から予想できる袁紹軍の規模からして、猶予は良くて一週間と言った所ですか。使者として向かった関羽は未だ戻らず。まあ、その理由は、きつと曹操が部隊を引き連れこちらに向かっているからでしょう。

曹操の事ですから、事態を聞けば必ず本隊を率いて自らここまで来るでしょうし。無論、劉備との交渉のために。劉備の頼みである領地の通行許可……恐らく劉備は、益州へと逃れるつもりでしょう。益州の蜀は史実での劉備の本拠地。豊かかつ山々に囲まれた天然の要害である蜀。どうやって入るのは知りませんが、手に入ればこれほど素晴らしい土地は無い。となれば、ほぼ確実に、劉備に行き先は益州。いかな曹操と言えど、益州に入られてしまえば容易に手が出せないはず。いずれ厄介になるであろう事が分かっている劉備軍ですから……さて、曹操はどのような対応に出るか。

「なんて考えても、答えはあまり多くはありませんか……」

思わず独り言をつぶやいてしまう。曹操にとつても袁紹は邪魔な存在。北に大勢力を持つ袁紹が居ては、おちおち周辺諸国の併合もままなりません。となれば、劉備を追って本拠地から遠くこの地

まで遠征し、疲労しているであろうこの機会に袁紹軍を叩かない理由が無い。

ただ、それに劉備軍をどう使うのか、あるいは使わずに恩を売るのが……そこが分からない。まあ、時代の英雄の考えることなど、自分程度の人間には到底理解できない事なのかもしれません。たとえ遠い未来の知識を持つとも、今この時に、何を英雄たちが思い、考えているかなど、理解する事はおろか知る事も出来ないでしょう。

自分はただ、自分がしたい事を時代の流れに乗りながら行っただけ。守りたい人を守る、そして今は、その者たちの下へ何としても帰る。その目的のためなら英雄だって利用してやりましょう。

「何平將軍、そろそろ交代なさった方が……」

心配そうにそう言ってくれるのは、同じく見張りをしてくれている兵の一人。まあ、自分は今日で二日連続見張りに立っていますからね。もちろん、他人の目の無い所で居眠りをさせては貰っていませんが。でないと体がもちません。城壁の上でも立ちながら寝るのと寝ないのでは変わるものです。

「それはありがたいです。では、後はあなたに任せますので。見張り、頑張ってください」

「はっ、お任せを」

見張りを兵に任せ、城壁を降りる。しかしそのまま寝台には向かわない。その前にしなければならぬ事があります。そう、自分の目的達成のための下準備が。

城の裏口へと回り、あらかじめ隠しておいた黒い外套に身を包む。幸い、劉備軍と袁紹軍の動向を素早く察知するために、見張りのほとんどの正面に回されています。つまりは、今の裏口の警備は手薄。難なく見張りの目をかいくぐり城を抜け出し、闇にまぎれて劉備軍の陣地へと向かう。

「待て！ 貴様何者……がっ」

「はい、少し眠っててくださいね」

劉備軍の陣地に潜り込む際に自分を見つけた見張りを、声を出される前に眠らせる。殺してはいませんが、みね打ちです。眠らせた見張りにさるぐつわをし、手足を縛って近場の天幕の陰に転がしておく。少しお粗末な気がしますが、まあ良いでしょう。

ぬき足差し足で陣内を回る。うゝむ、思ったよりもざる警備じゃないですね。流石は劉備軍、優秀な将が多いと見えます。しかし、そうなると逆にこちらとしては助かる訳で……なるほど、特に警備の厳しい天幕が劉備、その周りの牙門旗の立つ天幕がそれぞれの将の天幕ですか。む、もう一つ何やら嚴重な天幕が……ああ、そう言えば天の御使いがいましたか。

まあ、用があるのは劉備だけですし、特に気にする必要はない……ああいや、そう言えばこの世界の劉備って女でしたね。どうしましよう、若い女性の眠る天幕に忍び込むのは流石にマズいですね。絶対に勘違いMAXで大変な事になりそうです。うゝむ、誰かに仲介を頼まねば。しかし、そう都合よく仲介人がいるものでしょうか。

「動かないで頂こうか」

と、静かだが、殺気の含まれた声と共に首にひやりとした固く鋭い感触が当たる。まあ気付いてましたよ？ 仲介人が欲しかったのでわざと気配を漏らしたんですから。と言っても、気付けるのは結構な腕前の人のみのレベルですが。見れば首に添えられているのは赤い槍。となれば、声からしても後ろ居るのは彼女しかいません。

「こんばんは、趙子龍殿」

「……お主、何故我が名を知っている」

「有名ですからね。そして自分は、丁度あなたのような人に会いたかった」

趙雲ならば確実に劉備に取り次げる人物です。なにせ、将来の五虎将の一人ですから。今でも十分、その位は高いはずですよ。いやはや、何と運のいい巡り合わせ。たとえ命を落とす一歩手前の状況でも、時間が惜しい自分にとっては願ってもない展開です。

「どう言う意味だ。お主、曹操軍の者か」

「そうであるとも言えますし、そうでないとも言えます。そしてここにいるのは、ちょっとしたお話をしに来たからですよ」

「……ふむ」

首に添えられていた槍が離れる。依然槍は自分の方を向いたままですが、それは仕方が無いでしょう。今の自分を見るからに怪しい格好ですからね。すくっと立ち上がって外套を脱ぎ、趙雲の方へと向き直る。

「お主は……王平」

「どうもお久しぶりですね。こうして顔を合わせるの、虎牢関以来ですか」

ずっと生存を知られないようにして来ましたが、それも今日で終わり。劉備軍が益州に向かうと言うのなら、涼州に居る月様たちとも当然接触をするはず。それが同盟と言う形になればなお良いのですが、それはまた別の話。今は涼州へ帰るための事前策を施すのが先です。

「まさか生きて曹操に組みしていたとはな」

警戒心バリバリで未だに槍を構えている趙雲。これ、先端恐怖症の人にやったら倒れますよ？ ただでさえ趙雲の殺気がおつかないのに。加えて真っ赤な槍が目の前にあるとか、恐怖症じゃなくても怖いです。

「そこはまあ、大人の事情ってやつです。言っただでしょう、そうであるとも言えるし、言えないとも言える。ああ。ここから先が聞きたいのならば、自分を劉備、それから諸葛孔明と会わせてください。もちろん監視付きで構いません、自分が少しでもおかしな動きをすれば殺せばいい」

「……」

「どうですか？ ちなみに自分の持ってきた話は、これからあなたたちが益州に向かうに当たって利益となる話ですよ？」

ピクツと趙雲が僅かに反応する。やはり益州に向かうと言う予想

は間違っていないませんでしたか。なるほど、一か八かで話を持ちかけて良かった。

「時間は限られています。自分は日が昇る前には戻らなければなりません。さあ、どうしますか？」

「……良いだろう。だが、その前にお主の武器を預からせてもらう」

「まあ、妥当な判断ですね」

腰の剣を趙雲に渡す。そして趙雲にペタペタと全身を調べられ、武器が無い事を確認すると外套を纏うよう命じられる。槍突きつけられながら調べられるのって、なんかドキドキですね。あ、別に変な意味では無く、純粹に心拍数が上がります。

「よし、付いて参れ」

む、どうやら御調べは終わったようです。さて、では希代の名軍師と仁徳の将と顔を合わせる前に、少し精神統一でもしておきましょうか。どうせ待たされることになるでしょうし。

「ここで少しお待ちを」

通されたのは恐らく軍議に使われているだろう天幕。広さや内に置かれている備品からしてそうでしょう。別に期待していた訳ではありませんが、あまりにも妥当過ぎて少し面白くない。出来れば趙雲同伴の下、ドッキリ寝顔を拝見、みたいな事をしてみたかったです。……ふむ、残念。

さて、それはともかく……これからする取引、どの様にして交渉

を運ぶべきか。一番の方法は相互利益を提示し、互いに納得する形ですが、以前ちらつと拝見した劉備の様子からして、彼女は少し感情的な面があると見えます。となると、利益云々の前に自身の感情を優先する事も可能性としては十分にあり得ると言う事。これはとても厄介です。となれば、否応なくそうするしかないと思わせる事の運び方を取る必要があるかもしれません。些か強引な交渉も、場合によっては致し方ないでしょう。

無論、自分としては平和的かつ互いに納得のいく交渉が望ましいのですが。

「お待たせしました」

と、先頭を切って入ってきたのは……子供？ いやでも、続いて入って来たのは劉備と趙雲。と言う事は、この子供が諸葛亮と言う事ですか？ いやまあ、呂布が恋みたいな女の子である時点で、そうであってもなら不思議ではありませんね、はい。と言う事で、どうやら待ち人が来てくれたようです……って、おや？ なぜ御使いまでもが一緒に？

……。

ああなるほど、彼もまた劉備と並んで劉備軍のトップに立つ人物と言う事ですか。この場にいるのは自分と劉備、諸葛亮に護衛の趙雲、そして御使い。劉備軍の要と言える人物たち。自分で求めておいて何ですが、これはなかなか面白い状況ではありませんか。どうせだったらサインでも貰っておきましょうかね？

「こんばんは、諸葛孔明殿。夜分遅く申し訳ありません」

「いえ、趙雲さんから話は聞いています」

毅然とした態度で答える諸葛亮。なるほど、見た目で判断するのは凶ですか。やはり諸葛孔明、侮れない人物です。

「それで、私たちにお話があるそうですが、その前に……あなたは董卓軍の守将、王平さんで間違い不是吗？」

「元、ですよ。それに今は何平と名乗っています」

む、今御使いがピクツと反応しましたね。やはりこの青年、この時代の者ではありませんか。となれば、後の王平の事も知っている可能性もあります。なるほど、これは都合がいい。交渉の駒に使えそうです。

「さて、時間もさほどないので早速。……孔明殿、ずばりあなたは魏領を何の問題も無く通過できるとお思いですか？」

「……いえ、場合によっては、最悪の事態も想定できます」「最悪の事態って……？」

……ふむ、どうやらこの少女は、少し頭がお花畑なご様子。

「ぶつちやけると、通行を許可せず袁紹の勢力を落とすための贄になってもらう可能性もあると言っ事です」

「そんな!？」

「酷いですか？ でも今は乱世の真っ只中。良将集まる劉備軍と、物量多き袁紹軍を同時に疲弊させる事が出来るのですから、魏にとつてはこれ以上喜ばしい事は無い」

まさに一石二鳥。いえ、袁紹の領土と劉備の領土も手に入る訳で

すから、四鳥ですか？

「あなた方と袁紹が同盟を組むなどすれば魏も流石に困りますが、侵略行為を受けた現時点でその可能性は皆無。となれば、あなた方に残されている道は多くは無い。魏領を迂回し外れ、険しい道のりを民を連れて益州へ進むと言う道もありますが、それは土台無理な話であるのは、孔明殿も理解しているでしょう？」

天然の要害である益州にあえて迂回路で入るなど、自殺行為にも似た行い。ただでさえ兵糧には限りがある状況であるのに、遠回りをするというのもアホのする事です。まあ、今の劉備軍はそのアホな行為を行う余裕すら無いでしょうが。

「確かに、王平さんの言う通りです」

「朱里ちゃん……」

主従そろって落ち込みモード。しかし御使いだけは平静を保って自分を見つめている。おお怖い、まさに不気味まつしぐら……と、この時代の人には取られるでしょうね。

「そこで一つご提案。やっぱりここは、魏領を通って益州に向かいましょう」

「でも、それはさつき」

「興味深い事に、曹操様は劉備軍にある種注目しています。今後、己の覇道を飾る好敵手となり得るかどうか。そして、特に名将名高い関羽にはいたくご執心のようです。彼女をこの様なところでみすみす死なせてしまうのは、曹操様も良しとはしないはず」

「まさか……」

ええ、そのまさかですよ諸葛亮。

「関羽を対価として曹操に払えば、ほぼ確実に領地の通行を許可してもらえますでしょう」

自分のその言葉に、重い沈黙が天幕の中に流れた。

先見る者の情け 弐（後書き）

もう一話ほどやり取り回が続きます。ぐぬぬ、短く纏められぬ。

それでは、次回も宜しくお願いします。

先見る者の情け 参(前書き)

く我が物と思えば軽し傘の雪く

辛い事でも、自分のためになると思えば、人はそれほどに苦しな
いと言つ事。

先見る者の情け 参

天幕に流れる重い沈黙。その流れを破ったのは、理解が遅まきながら追い付いたらしき劉備だった。

「だ、ダメだよそんなの！ 愛紗ちゃんを対価に払うなんて出来無い！」

声を張り上げて否定を必死に述べる。やはり、劉備は感情で動く所がありましたか。けどもう少し、粘り強く交渉してみましよう。

「何故です？ 一人の将と万の兵と民。劉備様はどちらが大切なのですか？」

「そんなの決められません！ 私にとっては、どっちもかけがえの無い大切な人たちです！」

ああ、なんて甘い考え。しかしだからこそその仁徳の将。その心根ゆえに良将は集まるも、今はこうして苦しむに至る。曹操の歩む霸道も辛い道なのですが、劉備の貫く信念もまた辛いものですね。優し過ぎるがゆえに、こうして策略の前に苦しむ事になる。

「劉備様、今の状況……あなたのその様な我がままは通りませんよ」

「でも！ 愛紗ちゃんは私にとって姉妹の契りを交わした妹なんです！ この道も、愛紗ちゃんが一緒でなければ意味が無いんです！」

これは、曹操に合わせる前に話をしに来て正解でしたね。全く、もしこんな話を曹操にしようものなら超ド級の雷が炸裂しますよ、

マジで。ああでも、それで呆れかえって対価無しで通すなんて気まぐれも起こしかねない。それは自分としては非常に困る。ゆえに、ここは自分の利益のために……英雄さんたちを利用させていただきます。

「いえ、対価と言っても一時的です。時期が来ればお返ししましょう」

「はえ？」

「それはどう言っ？」

主従揃って呆け顔しないでくださいよ。可愛いじゃねえですか。

「自分の主が今どこにいるか、孔明殿ならばそれで理解できるのでは？」

「あ、ああつ！ でもでも、それってつまり……王平さんが曹操さんを裏切るって事じゃ」

「さて、それはどうなるか分かりませんが。もしかしたら自分は曹操に心酔してしまうかもしれません。ですが、そうですね……曹操が益州か涼州に攻め入ったその時、自分が関羽をあなた方に返す手引きをする事は約束しましょう」

さて、これにはどう反応するか。それ次第で対応を変えざるを得ないですね。

「王平、私はその話は魅力的に思う。だが、それはお主が信用に足る人物であればこそだ」

つと、予想外の所から反撃が。なるほど、趙雲の言う事もまた然りですね。

「自分が信用に足りない？」

「そつだ」

むぐう、そこまでハッキリ言われると自分としても胸にグサリと来るものがあります。もう少しオブラートに包んだ言い方をしてくれないものですかね。自分のハートがグサグサです。

「どうです劉備様。この案、自分を信用して受けますか？」

「……」

再び沈黙。今、彼女の中では人を信じたいと言う気持ちと誰もが持つ疑いの気持ち、そして妹を案ずる気持ちがせめぎ合ってぐちゃぐちゃーといった状態でしょうか。なんて辛い事、しかしそんな時でも最善の判断を下すのが、上に立つ者に求められる事。さて劉備、あなたの最善は一体どのようなものですか？

「時間はありません。決断を」

「……ごめんなさい。やっぱり私、そんな賭けみたいな事に愛紗ちゃんを巻き込ませるなんてできません」

「桃香様……」

劉備の返答に頂垂れる諸葛亮。そうですか、それがあなたの下す

最善か。

「はあ……面倒くさい」

「なにっ？」

おお、御使い殿が少しお怒りのようですね。けどね、自分はそれ以上にイライラが止まらないですよ。

「言葉の通りですよ御使い殿。折角、人が安全かつ不利益のない話を身を危険にさらしてまで持ってきたと言つのに、一時の感情に判断を任せ無下にするなど……。良いでしょう、己の判断で決められないのならば、自分がそれを手伝ってあげます」

「どう言つ事だ。王平、桃香に何かしたら許さないぞ！」

「手を出すつもりはありません。ただ、少し話の内容を変えるだけです。先程までは提案でしたが、今この時を持って、自分は関羽を対価として払い益州へ渡る事をあなた方に強要します」

「王平、言葉には気をつける。さもなければ、我が槍がお主の首を刎ねるぞ」

おお、趙雲の殺気が増し増しですね。ピリピリした空気がビンビンに伝わってきますよ。

「構いませんよ？ もしもの場合に備え、劉備軍へ赴く旨を記した書置きを残してありますから。朝までに戻らなければ誰かがそれを読むはず。さて、そうなればどうなることやら……」

「お前、なにが目的だ。どうしてそこまで愛紗を欲しがる！」

欲しがるって……まあ、捉え様によつてはそうなるのかも知れませんが、あまりに露骨過ぎますよ。別に自分は、そう言った意味で欲しい訳ではありませんし。あ、曹操はそつちの方も込みでかもしれませんけど。と言うか、もしかして御使い殿は、関羽と親密な関係で？ もしそうなら、少し酷な事をしてしまふかもしれませんね。

「保険ですよ。自分は曹操と勝負をしていますがね。勝てば魏を離れ、負ければ魏に残る。そしてもし、魏を離れることになった際に自分だけでは些か不安だ。しかし関羽が居ればそれも大分変わります。自分の主が居る場所は涼州、そして関羽は益州。曹操がどちらに攻め入るうとも、二つの州は距離もそこまで離れてはいません」

「あなたが離反する事になった場合の戦力として、愛紗さんを使いたいと言う事ですか」

「簡単に言えばそうですね、孔明殿。仮に離れなかった場合は、関羽一人で戻ってもらう事になりますかね。まあ、彼女の腕前ならば問題は無いでしょう」

「それはお主にも当てはまる事だと私は思うのだが？」

あー、聞こえない聞こえない。趙雲の言葉は聞こえない。自分は可能な限り楽をしたいので都合の悪い事は聞こえません！

そこ、最低とか言わない。これも乱世で生き抜くための策と思いなさい。

「無論、この案を受けてくれないのであれば、それ相応の対応をさせてもらいます。例えばそう……曹操様に進言してみるとか」

なにをととは言わない、ただの思わせぶり。

だってこれ、ぶつちやけハツタリですし。自分が曹操に進言なんて出来る訳がありません。いえ、出来ますけど、出来ればやりたくないが正解です。

「さあ劉備様、もはやあなたに残された道は二つ。関羽を対価に差し出し生き残るか、それともこのまま滅びゆくか」

「……」

俯き肩を震わせる劉備。そう、それでいい。あなたはもつと知るべきだ。王たる者が、どの様な苦渋の決断を迫られる時があるのかと言つ事を。その経験は、必ずやあなたを強くし、先へ進むための力になるでしょう。劉備はまだ、こんなところで終わるべき人では無いのですから。

「……必ず、愛紗ちゃんを返してくれますか？」

ポツリと、俯いたまま劉備が言う。

「ええ、必ず」

「……分かりました。この案、受けます」

その言葉に、諸葛亮は安堵の表情を浮かべ、御使いは何やら複雑そうな顔。趙雲は平静で読み取れませんね。

しかしまあ、自分も随分と甘くしたものです。結局、約束の取り付け方が変わっただけで内容は最初と全く同じ。ホント、悪役やるのも楽じゃないですよ。劉備のホワホワ甘甘が移りましたかね？

「さて、交渉成立。と言う訳で、自分は帰らせていただきます。…
…って、あぁそうそう」

男として大事な事を伝えるために、ちよいちよいつと御使い殿を手招きする。首を傾げながら近づいてくる御使い殿にぼそりと言。

「明日辺りに帰ってくるでしょうから、しばらく会えなくなる分、愛してあげてくださいね」

「なっ!?!」

ピシリと固まる御使い。おお、これはマジでラブラブの関係ですか。って言うかもしかして、自分よりも大人の階段昇ってる可能性もありですか？ いや、きつとそうだ、鍛え抜かれた(?)男の勘が告げている。彼はリア充だ!!! まあ、モゲロとは言いませんが……少し羨ましいです。自分も男ですから。

「それからもう一つ。この件は関羽には伝えない事。知っているがゆえに変に行動を起こされるのは御免です。あつと、さらにもう一つ。益州に渡り、もし董卓様と接触することがあったとしても、自分の生存は伝えないくださいね」

「えっ、でも董卓たちだって心配してるんじゃない?」

不思議そうに首を傾げる御使い殿に、ちゅちゅと指を横に振る。

「知らずに再会した方が、ドッキリで面白いじゃないですか」

顔を引き攣らせている御使い殿の肩をポンポンと叩いてやり、今

回の交渉に関して付き合ってくれた諸葛亮と趙雲にお礼を言う。なんかお礼の際、凄く微妙な顔をされたのですが……はて、何か可笑しな所でもありましたかね？ まあ、とにかく目的は達成できましたし、日が昇る前に城に戻るとしましょう。黒の外套を身に纏い、自分は闇にまぎれて劉備軍の陣営から城への道を駆け抜けた。

翌日、予想通り関羽が曹操と一緒に国境まで帰って来ました。驚く事に、曹操は主力をまるまる連れてやって来ましたよ。これ、もう袁紹を潰す気満々ですね。自分の頭では既にあの高笑いが断末魔に変わってます。あ、どうしましょう、ちょっとお腹が痛いです。

とりあえず長旅で疲れただろうと言う事で、頑張って進言して一日休みを取ってもらいました。

関羽、御使い殿、これで一つ貸しですよ　と言う文を匿名でついでに劉備陣営に送っておきました。関羽は首を傾げるでしょうが、御使い殿は頭を抱えて唸っているでしょうね。ささやかな自分からの嫌がらせです、どうぞ許して下さいな。

などと溜まりに溜まったストレスを発散させながら、何やら自分の天幕でふふふと笑う曹操に背筋が寒くなったり、曹操に着いてき

た夏侯惇と徐晃が、何やらギヤースカと手合わせで騒いでいたり、ブラブラしている所を夏侯淵に見つかって仕事を押しつけられそうになった所を逃走して矢で壁に縫いつけられたり、まあ休みを進言した自分が、一番休みを取れませんでした……くすん。

閑話休題……………。

と、一日休日を挟んだところで、曹操と劉備の交渉が行われた訳です。

領地の通過を申し出た劉備に、予想通り曹操は関羽を通行料に要求。自分との件で既に決意をしたものの、やはり苦しい所があるのか、数分間も唇を強くかみしめ、そして小さくかすれた声で曹操の要求を劉備は承諾しました。

変に勘ぐられないために少しは演技をしてもらいたいと思っていた所、そんなもの全く必要無いマジの表情での承諾だったので、これで自分と劉備たちとのつながりを勘ぐられる事は無いでしょう。劉備と御使い殿には、酷な事をしてしまいました、これも乱世と割り切りましょう。でなければ、心が壊れる。

ちなみにこの承諾、曹操は少し驚いた顔をしていました。やはり、

最初から無償で劉備を通すつもりだったようです。曹操も存外、甘い所があるのですね。

そう言う訳で、劉備たちは関羽としばしの別れ　そうと知っているのは自分を含め五人だけ　を惜しみ、関羽が曹操陣営に参入する事になりました。

しかし未だ安心はできません。まだ、袁紹の問題が残っています。まあ、余程の事が無い限りは特に問題はないでしょう。

よって、新たに参入した関羽を実戦評価も含めて、部隊編成に組み込んだようなのですが……。

「どうして自分の部隊に配属なんですか……」

がつくしと頭を垂れて一人呟く。これは完璧に徐晃の陰謀です。

奴は自分が関羽と因縁がある事を知ってて、敢えて同じ隊に配属したに違いありません。

くそっ、なんで部隊編成の責任者が徐晃なんだ！　いつそ程？　か郭嘉だったらまだ良かったのに！

「どうした何平。どこか、具合でも悪いのか？」

なんて、優しい言葉を掛けてくれるもんですから、もう心が痛くて痛くて……。

もう良いですよ？　正体明かしてもOKですよ？　って言うかいずれ絶対にバレますし。

「関羽殿。お願いがあります」

「どうした？」

「今から自分は外套をに脱ぎますが、出来れば怒らないでくださいね？」

「は？ それはどう……いう……」

外套を脱ぎあらわになった自分の顔に、関羽がポカンと口を開ける。次いで顔が赤く染まり、その場から一メートルほど後ろに跳び退る。

「お、お前は……王平!？」

「どうも、関羽殿。お久しぶりです」

「お前、生きていたのか？」

「はい、この通りピンピンしてます。訳有って名前は変えています
が」

もちろん、それがドッキリ作戦のためだとは口が裂けても言えませんが。

「なるほど、曹操に捕まり降つたと言っ訳か」

「うーん、ちょっと違つんですけど……まあ、その解釈で良いです
よ」

「そうか。そう言えばお前には、？水関での借りがあつたな」

「あ、やっぱり覚えてます？」

「当然だ」

ですよねえ。女性の恨みは深いと言いますし。あれ、食べ物でしたっけ？ まあどちらにしろ、覚えていらっしやるんですね、悲しい事に。

「だが、今更掘り返した所でだ。今は別に気にしてはいない」

「そうですか。良かった、ずっと気がかりだったものですから」

仕返しの恐怖もそうですが、やはり女性を蹴り飛ばすと言つのは、男としても申し訳なさが一杯でしたので。

「それにしても、随分と落ち着いていますね。民と兵たちのためとは言え、仮にも売られたに等しいと言つのに」

「あの状況ならば私でもそうする。桃香様は何も間違つた事はしてない」

うゝむ、関羽の劉備への忠誠心は目を見張るものがありますねえ。これ、自分がそのかさなくても勝手に関羽自ら魏を抜けだしそうな気がします。まあ、関羽も劉備と同じく義に厚いらしいですし、武功の一つも立てずに抜けだしはしないでしよう。逆に言うならば、もし武功を立ててしまった場合は、警戒の手を強める必要があります。少なくとも自分が抜けるか抜けないか見極める、その時までには。

「しかし、よもやこうして、袁紹へ一矢報いる機会を与えてくれるとは。曹操もなかなか気がきく」

「うゝん、まあそれもあるでしょうが、今回は主に関羽殿の実戦評

価の確認が大きいでしょうね」

「それでもだ。例え曹操の尖兵になろうと、私は手を抜く事など無い。全てこの、青龍偃月刀の錆にしてくれる」

「おーおー、燃えたぎってますなあ、関羽殿。これ、もしかして自分の出番無いんじゃないですか？ 後方でゆっくり守ってるだけでOKだったら、自分凄く幸せです。ガチンコバトルは関羽や徐晃や夏侯惇に任せておきましょう。適材適所と言う奴です。」

「そうじゃあ、頑張ってくださいね関羽殿」

「ああ。共に仇敵、袁紹を打ち倒すぞ！」

「……あれ？ 共にって、もしかして自分、前線に出る事確定なんですか？」

「……。」

確かに、一応自分の部隊ですから、指揮官だけが後ろに引っ込む訳にもいかないですよね。

全く、恨みますよ徐晃。

メラメラと闘争心を燃やす関羽の隣で、自分は再びがっくりを肩を落とした……。

先見る者の情け 参(後書き)

ようやくと駆け引き回終了です。次回は袁紹戦、なるべく短く纏めよう。

それでは、次回も宜しくお願いします！

PV100万突破！ 改めて、読者の皆様に感謝！

覇道、あるいは修羅の道 壱（前書き）

く人生意気に感ずく

人は生きがいを感じて努力するものである。欲望や名声のために努力するのではない。

物事に感動して行動を起こす場合に言う。

霸道、あるいは修羅の道 壱

劉備軍との取引を終え、袁紹軍との交戦準備を始めて数日。国境より数里先へと派遣していた斥候から、袁紹軍襲来の報が届きました。と言っても、既に迎撃態勢は万全であり、いつでも来いやあと言える状態なので、それほど慌てる必要もないのですが。

うむ、もう少し早く来ると思っていたのですが……いやはや、それほど平原の併合に手間取ったんでしょうかね？

とにかく、曹操より戦闘準備の号令が下ったので、関羽が加わった分再編された部隊を城門前で待機させ、自分は城壁から侵攻してくる袁紹軍の様子をうかがったのですが……。

「……………目が痛い」

あまりの眩しさに直視できません。だって袁紹軍の鎧つてば、全身金メッキなんですよ。太陽光が反射して眩しい事眩しい事。アしですか、ビーム跳ね返したりするんですか？ 反董卓連合の時に思ってしまったけど、これってもしか、相手を混乱させる一種の作戦ですか？

……………。

うん、絶対に袁紹の趣味ですよねえ。いくら眩しいと言えど効果などたかが知れてるレベルでしかありませんし。って言うかこの世界にビームありませんし。そんな薄い効果のために多大な出費を掛

けるなど普通はありえませんが。そうするくらいなら、地味で良いです。ですから品質重視で武装を揃えますよ。

「何平、こんなところで何をしている」

相変わらずの遅さで進軍する袁紹軍をぼつと眺めていると、背後から現在進行形で恨み中の人物の声が聞こえてきた。

「ああ、徐晃殿。自分に何か用でも？」

「貴様、戦闘配置に着くよう命令が下っているはずだ。なのになぜこんな所にいる」

「いやあ、親切な誰かさんのおかげで前線に赴く事になってしまったので、敵である袁紹軍を見ながらたそがれていたんですよ」

誰かさんと言うのは、今更説明するまでもないですよ。徐晃、あなたの事です。

「ほう、ではその誰かとやらに礼を言わなければならぬ」

「そうですねえ、では徐晃殿に変わって、ありがとうございます。とっても迷惑してます、ええ本当に」

「私に言われても困るのだがな？」

「しらばっくれるんじゃないやありませんよ。今回の部隊統括の責任者はあなたでしょうが」

あ、今、露骨にしまったって顔しやがりました。詰めが甘いので

すよ、伊達に自分は精神年齢重ねてません。

「関羽を自分の部隊に編入するなんて憎らしい事してくれて。おかげで関羽の意気込みに引かれて前に出る羽目になったじゃありませんか！」

「貴様の様な軟弱な男は、一度戦場で心身ともに鍛え直された方が良いに決まっている！」

「余計なお世話です！ あなたの価値観を自分に押し付けなくてください！ って言うかあなたが行け、その方が適役です」

「無論私も前が出る。しかし貴様も共にだかな！」

ええい、この熱血面倒魔人めっ！ どうしてそこまで自分を目の敵にする！？

「それがいらぬ世話だと言っに！ アレですか、もしかして自分に気でもあるんですか？」

「……貴様、発言には気をつける。誰が貴様の様な軟弱者に気など持つか」

おお、いつの間にか大斧が自分の首に添えられていますね。むう、短気なのは頂けませんよ？

「仮に私が気を持つとして、それは私と同等かそれ以上の男だけだ」

「それはまたなんとも。道理で嫁の貰い手が見つかりそうに無いって、おお！！？」

ま、マジで斧振り下ろして来ましたよこの人！ 髪が数本自分の頭からお別れになって……あれ、なんか黒い気が徐晃の背後に揺らめいていらっしやるような？

「ふ、ふふふふ……何平よ。今ほど私は、我が得物の試し切りをしたいと思った事はない。さて、どうしてくれよう？」

やばい、目がマジです。アレはマジでヤろうとしてる目です。

「さ、さあ。その辺の木にでもお相手してもらえば良いのでは？」

「いやダメだ、やはり斬るのは人でなければ。ほら、私の目の前に丁度良いのが……」

え、どこに丁度いいなんて……ああ、自分の事ですか？ あ、そうですか。

「あー、自分はそろそろ、持ち場に戻りますので。……では」

くるりと身をひるがえして撤退を

「まあ、待て」

OH！ 徐晃の手がガシリと肩にメリメリめり込んで脱出不可能に……！！

「じよ、徐晃殿。自分の様な軟弱者などで試し切りをしても、あまり意味が無いかと思うのですが？」

「ふふふ、獅子は兎を狩るのにも全力を尽くすと言う。なんら問題は無い」

それは、絶対に！ 使い所が、違う！！

「徐晃殿、ここは穏便に話し合いと言う人間の素晴らしい文化をです。すね……」

「何平よ、ここは武人らしく腹を決めてだな……」

「……相容れませぬ」

「……相容れぬな」

ダメだ、意見主張が180度反対です。これは説得の余地が無い！

……。

よし、一か八か、これで……！

「あ、曹操様！ 助けてください、徐晃殿が自分をっ……」

「なっ！？」

チャ〜〜ンス！ 手の握力が弱まった！！

「三十六計逃げるにしかず！」

「誰も居ない……って！？ ……謀ったか何平ええー！！！」

おやおや、負け犬の遠吠えが背後から聞こえてきますねえ。
ふふふ、あの程度の嘘に騙されるようでは、まだまだ自分を殺す
など夢のまた夢

「つて、あぶうっ!？」

お、大斧が……頭上をスレスレで飛んで……？

……。

うわあ、見事に石壁に突き刺さってますね。恐るべし、徐晃怒り
の大斧投擲。徐晃の背後にゲッターの姿が……あ、アレはトマホー
クでしたか。

「なんだ!？ 今もの凄い音がこっちから聞こえたぞ！」

む、夏侯惇が騒ぎを聞きつけて来ましたか。うむ、これ以上の
騒ぎは起こさない方が吉ですね。

「いえ、ちょっと積み荷が崩れただけですから」

「む、そうか？」

「はい、そうです」

「分かった。ちゃんと直しておけよ」

納得して立ち去る夏侯惇。つて、今度は入れ替わりに曹操が……。

「あら何平。烈華とまた一悶着起こしたのかしら？」

「あ、分かります?」

「貴方と烈華が城壁に向かったのを見たもの」

「だったら止めてくださいよ。危うく落命しかけたんですよ?」

「烈華を怒らせたのは、貴方の責任でしょう?」

むう、正論だけに言い返せない……。

「で、何をしたの?」

「いやあ、色々とありまして。簡潔に言えば、口喧嘩です」

「口喧嘩で烈華があんなに怒った所は見た事がないのだけれど」

「嫁の貰い手が見つから無いですね、って言ったら……殺されかけました」

「それは女だったら誰だって怒るわよ。私だって怒るもの。それに烈華は一応、私たちの中では最年長だから、より気にしているのではないかしら?」

アレで最年長って……どう見つもっても二十代前半でしょう。若く見るなら十代後半……十八、九に見えますし。

「しかしまあ、徐晃殿の望み的には、貰い手は早々見つからないと思いますよ」

「どうしてそう思うの？」

「だって、相手の条件が徐晃殿と同等かそれ以上って、大陸全土を探してもそういないでしょうから」

女性だったら結構いますけどね。最終手段として、同性愛に走るのも致し方無し？

「確かにそうね。でも、候補ならすぐ近くいるわよ」

「あれ、そうなんですか？」

もしかして、曹操の知る人物の中に高名な男の将がいるとか？

……。

むう、思いつかないですね。って、なんか曹操が笑いながらこつちを見てますし。自分が考え悩んでいるのがそんなに面白いんですかね？

「うーん、徐晃殿と渡り合う男ですか。気になりますね……誰なんですか？」

「それは秘密よ。それとも、貴方は女性の秘密を根掘り葉掘りしないと気が済まないタチなのかしら？」

うむう、そう言われてしまうと引き下がるを得ないですね。自分に変態認定されるのは嫌です。

「……ふう、分かりました。ま、自分としてもこの話題はそろそろ

切りたい所でしたから」

「あらそう、つまらないわね」

「楽しくしたくて、取り上げてる訳でもありませんから」

コイバナに文字通り、命を賭けるなんて物騒すぎるでしょう？

「と、つい長話になってしまいました。それでは、自分は持ち場に
戻ります」

「ええ。良い働きを期待しているわ」

「……給金分は働きますよ」

まあ、その給金も結構な額ですから、相応に働かないといけない
んですけどね。

なんて事を思いながら自分の部隊に戻ると、こちらに気づいた関
羽が声を掛けてきた。

「おう、何平。何処に行っていたのだ？」

「徐晃と曹操と、ちょっとした話をしにです」

「そうか。それで何平、我らは戦でどう動く」

「そうですねえ。出来れば後方で支援行動を」なにい!?!「……は
いはい、前に出て袁紹軍を蹴散らしましょう」

偃月刀を手にそんな目を爛々とさせて詰め寄らないでください、

迫力が……自分に掛かる迫力が凄いです。ついでに母性の迫力も。

いやあ、男だったら誰でも圧倒されますよ、関羽のお胸は。

美貌から放たれる威圧感と合わせて、まさに男殺しのツイン。ええい、蜀の軍神は化け物か!?

「どうした何平。何やら眉間にシワなど寄せて」

「いえ、赤い大佐の気持ちを体感しただけですから」

「……?」

関羽が首を傾げるのと同時に、城内に出陣の銅鑼の音が響き渡る。

さて、よつぽどの事が無い限り、この戦は勝ち戦でしょうけど、仮にも相手方は名家と謳われる袁家の軍。油断は必要無きものでしょう。それに、この戦は関羽と自分の評価も兼ねている事ですね。

まあ、ここは一つ、気合を入れていきましょうか。

霸道、あるいは修羅の道 壱（後書き）

袁紹戦突入、と思ったかあ！ すいません、書いていたら何やら何平と徐晃の絡み回に。徐晃も程良く壊れてきてるなあ、なんて思ってる作者です。初期の構想ではもっと真面目でクールなキャラのはずだったのに……。

言わせてほしい……どうしてこうなった？

それでは、次回も宜しくお願いします。

霸道、あるいは修羅の道 式（前書き）

く敵は仮す可^へからず時は失^へう可^へからず

敵に対して情けは無用である。討つべき時期には討つ事が大事である。なまじっかの情けをかけた時、時機を逃したりすると、反対に敵にやられてしまう戒め。

霸道、あるいは修羅の道 貳

押し寄せる袁紹軍を確認し、曹操軍が城外へ部隊を展開する。自分の配置は左翼前曲、関羽を中心とした重歩兵による横撃を仕掛けるよう命令が下っています。うん、防御や迎撃と言った戦い方は無縁の配置……徐晃え、貴方はとことん自分を前に引っ張り出したのですか……。

ああ、何だか無性に腹が立ってきたんですけど。絶対に借りは返しますよ。それもたつぷりと、もういらん、勘弁してくれと言う位に利子を付けて……くくく。

「しよ、將軍？ 大丈夫……ですか？」

っと、感情が表に出ましたか、自重自重。

「大丈夫ですよ。それよりも、袁紹軍の動きはどうなっていますか？」

「はっ。陽動などの動きは無く、正面から横陣を敷いて進軍しております」

ふーむ、袁紹は正面きつての会戦をお望みですか。自身の戦力に絶対の自信を持っている表れですね。まあ、確かに袁紹軍の物量は大陸でも最大級です。単純な戦力では曹操軍よりも袁紹軍の方が勝っていますし、策など弄さずとも良いと言っ訳ですか。

兵法の基本では、相手よりも多くの兵を集めるのが吉。正面衝突ではこちらが不利なのは火を見るより明らか。

ならばどうする？ その差を策で埋めれば良い。それが軍師たちの務め。そしてその軍師達が提示した策が、三方からの同時攻撃。正面からだけではなく、左翼と右翼からの横撃を仕掛け、歩兵と弓矢による飽和攻撃で一網打尽にする。無論、向こうも必死で反撃してくるでしょうが、それを踏まえての三方同時攻撃。敵の戦力集中を避け、各個撃破の要領でジワリジワリと攻め入る。

ただ、これを為すには袁紹軍が部隊を広範囲に展開するよりも早く、両翼の横撃部隊が回り込む必要があるのですが……昨今の袁紹軍の動きを見る限りでは、軍の機動力はこちらの方が上と見えます。絶対、とは戦場にいる限りは言えませんが、下手さえ打たなければ負ける要素は無いですね。

思考を帰結し、迫る袁紹軍へと視線を向ける。さて、両軍の距離からしてそろそろ舌戦なりなんなりする頃合いですが……。

「関羽殿、自分の目の錯覚でしょうか？ 袁紹軍の前衛が弓矢でこつちを狙ってる気がするんですけど……」

「奇遇だな、私もそう思っていた所だ」

ほあ、こんな偶然もあるんですねえ。ああでも、開戦直後に仕掛けるつもりでいるのでしょうか……って、いきなり一斉射かましてきたあ！？

「全員、盾を構ええ！！」

声を張り上げて兵たちに号令を出す。兵たちが盾を斜め上へ掲げ

た次の瞬間、矢の雨が部隊を次々と襲った。

……おうおう、盾にドスドスと土砂降りのごく矢が突き刺さりますなあ。

「くつ、不意打ちを仕掛けてくるとは卑怯なっ！」

「いやあ、向こうはこっちに侵攻してきた訳ですから、ぶっちゃけ卑怯も何もないんじゃないですか？」

兵が掲げた盾の下で、関羽は怒り心頭のご様子。関羽って、戦いに関して潔癖気味っぽいですね。

けど、袁紹がまさか、開戦宣言を待たずに攻撃を仕掛けてくるのは……袁紹も馬鹿では無いと言う事ですか。確かに卑怯と言われても仕方がない先制ですけど、これはこれで有効な戦端の開き方です。戦いは非情と言いますからねえ。しかし、予想外の先制パンチ。これはちよつと……マズいです。

「くそつ、こうなったら私が敵陣に突っ込んで」

「勝手に動かないでくださいよ。それにこの矢の雨の中、どうやって突っ込むんですか？」

「この程度の障害など、我が青龍偃月刀で打ち払ってくれる！」

うゝむ、関羽ならマジで矢を弾きながら敵陣に突っ込みそうだから怖い。でも、確かにこのまま、身動きが取れない内に兵が死ぬのも癪です。……どうせ被害が出るのは抑えられませんか、ここは一つ、大胆な行動に出てみましようか。

「全員に告ぐ！ 我が隊は袁紹軍の次の斉射を防いだ後、作戦通り敵部隊に横撃を仕掛けます。敵側面に張り付いた後は敵前衛に弓の一斉射を仕掛け、本隊および右翼部隊の進軍の補助を。我らが戦局を覆す鍵となる、全員奮励努力せよ！」

自分の号令に兵たちが雄叫びをあげて応える。うん、こう言った鼓舞は柄じゃないんですけどねえ。自分は熱血タイプではありませんし。まあでも、これも将としての務めですかね。

つと、どうやら次の一斉射が……よしっ、矢の雨を受けきりましたか！

「盾を構えたまま前進せよ！ 足を止めずにそのまま突っ込みなさい！」

「っっっんっ！」「っ」

自分たちのいきなりの動きに動揺したのか、袁紹軍が慌ててまばらに矢を放ってくる。一部の兵が焦りと恐怖で号令を無視しているようです。それが瞬く間に前衛全体に広がりましたか。とは言え、斉射の脅威は無くとも、向こうは数が数ですからね。じりじり削られる前に潰してしましましょう。

「槍兵、構え！」

盾の隙間を縫って槍兵が槍を前に突き出す。魚鱗陣を敷き、雄叫びを上げながら、自分たちの部隊は左翼から袁紹軍の横つばらに突っ込んだ。迎撃のために構えられていた槍に味方が貫かれ、その隙に味方の兵が敵兵の懐に潜り込んで防衛線を食い破る。その中には、

黒髪をなびかせ血飛沫の中を舞う戦神が一人……。

「うおおおおーっ！ 我が青龍偃月刀の錆にしてくれるっ！」

おお、人が文字通り宙を舞ってますよ。華雄と言い関羽と言い、どうしてそこまで力が強いのでしょうか。あのしなやかな腕からは全くもって想像できないですよ。

っと、関羽に見とれてばかりいる訳にもいきませんか。

「方円陣に陣形を移行。側面からの攻撃に対応を！」

横撃を仕掛けた自分達の部隊を包囲殲滅しようしてくる袁紹軍に対し、方円陣を敷いて迎撃態勢をとる。むう、これでは完全に囷をしているのと変わりないです。危惧していた戦力集中が今まさに自分の部隊に起こっている訳です。しかし、三方同時攻撃のタイミングを合わせようにもあの状況では不可能でしたし、こうでもしないと袁紹軍に隙を作る事もできませんでした。うう、なんて貧乏くじを引いてしまったんでしょう。

「何平將軍、袁紹軍に包囲されそうです！」

「本隊と右翼が攻撃を仕掛けるまで、どうか耐えきってください。男だったら根性見せるですよ！」

報告に来た兵に激を飛ばして迎撃の指揮を執る。

ああもつ、囷役は引き受けますから、曹操も徐晃も早く仕掛けてくださいよー！

〜曹操〜

「華琳様、袁紹軍の攻撃のより、部隊の進軍が困難になっています」
桂花の報告に自然、眉間にシワが寄る。

まさか宣戦布告も無しに攻撃を仕掛けてくるなんてね。麗羽もやってくれるじゃない。流石に麗羽も馬鹿では無いと言う事か。
けど、この状況は非常にマズイ。ただでさえ物量で劣っているのに、こつも身動きが取れないと手の打ちようがない。かと言って無理に動けば矢の一斉射で被害を被ることになる。そうなれば三方攻撃に持ち込んだとしても、押し切る事が出来なくなる可能性も出てくる。

まさしく手詰まり。どうにかして、この状況を脱しなければ、私たちに勝利は無い。

問題なのはこの絶え間なく降り注ぐ矢の雨。進軍を妨害するこれさえなければ、後はどうにでもなる。少しの時間で良い、袁紹軍に接近するまでの間で良いから、どうにか止められないものかしら…。接近さえしてしまえば、向こつも迂闊には一斉射など出来なく

なる。そうなれば、後は当初の思惑通り、三方からの飽和攻撃で攻め潰せばいい。

「華琳様！　ここは私が、袁紹軍に突撃して敵に混乱を！」

「ダメよ春蘭。本隊の前衛を率いる貴方が抜ければ、連携に支障が出るわ」

「ですが華琳様。誰かが囮となり攻撃を引きつけなければ、この状況を抜けだすことは……」

連携に支障を出す訳にもいかず、しかし桂花の言う事もまた妥当。こんな時、遊撃に秀でた将が居ない事が悔やまれる。連合の時、神速と称される用兵の達人、張遼を手に入れる事が出来ていれば、今ここで悩む必要も無かったと言うのに。

……そう言えば、張遼の捕縛を邪魔したのは何平だったわね。本当に、恨むわよ何平。

心の中で何平に対する恨みを積もらせていると、息を切らした伝令兵が本陣に駆けこんできた。

「伝令！　左翼の何平將軍が部隊を引き連れ袁紹軍に突撃を敢行しました！」

「なっ、何を勝手にやってるのよアイツはっ！」

桂花が怒りを爆発させる。確かに何平らしくない無謀な行い。けど、？水関と虎牢関であれほどの手腕を見せたあの何平が何の思惑も無しのような事をするとは思えない……。

「秋蘭、袁紹軍の動きはどうなってる？」

「はっ。何平の突撃の対応に追われている様です。包囲殲滅しようとやっきになっているようですが……」

袁紹軍の攻撃が何平に集中している。そして現状、絶え間なく続いてきた矢の一斉射も途絶えている。……なるほど、そう言う事ね。

「全く、やってくれるわね何平も」

「そうですね。では、折角お兄さんが作ってくれた機会ですから、逃さず迅速に動きましょう」

風の言葉に一人を除いて全員が意図を察した様子。烈華も恐らくは状況を理解して動くでしょう。さて、ここから本番……麗羽、完膚無きまでに潰してあげるから、覚悟なさい。

「あの、華琳様？ 結局どういう……」

でもその前に、もう少し春蘭には学を付けてほしいわね……。

〜何平〜

さて、反撃の機を作るために困になったのは良いものの……。

「これはちょ〜っと、ヤバい状況ですのわっとな〜？」

おお〜！ 敵さんの剣が脇腹スレスレで通り過ぎてったよう。すれ違いざまに首を一閃して敵兵の命を刈り取る。

はい、余裕ぶつた感じはしてますけど、ぶつちゃけこれ以上は無理いっとな〜！ ああもつ、思考に浸る余裕すら無い！

「奴だ！ 奴を討ち取 ぎゃあ〜！」

「はいはい〜、面倒を持ち込まれるのは勘弁！」

自分に延々と兵を送りこんでくる戦場の呼び子（？）を斬る。こうして自分が前線に出っ張っていることから分かる様に、既に困り行動も限界ギリギリ。ぶつちゃけ関羽の獅子奮迅の活躍によって支えられている様な物。いやあ、流石は軍神。その姿はまさしく血塗れの戦女神！ ……あ、なんか厨二臭い。ちよっとな〜り〇ツシュ買いにそこまで……。

「何平ええ〜っ！ 戦場の中心で悩みごとなどしてる場合かあぁ〜っ！」

関羽、戦場の中心で何平にツッコムために叫ぶ。映画化は……しなさそうですねえ。

……はい、バカな妄想してる場合じゃありません。て言うか何故

にバレたし。関羽はどうやら超感覚スキルに目覚めた様です。

……。

むう、あまりの忙しさと苦境に、ちょっと頭があぼーんになりますね。いやはや、修正修正と。

さて、思考の修正をしたのは良いものの……。

「早く動けや本隊いいーっ！っ！」

ざ・そつるしゃうと。いや本当に、もう……だめぽ。

「伝令！ 本隊と右翼の徐晃將軍が袁紹軍と接敵。歩兵と弓隊による飽和攻撃を開始しました！」

「遅いです！ 危うく全滅仕掛ける所だったじゃないですか！」

「ひい、すみません！」

「何平！ 部下に当たっている暇が有ったら手を動かせええー！」

あー、まあ……そうですね。自分とした事が、少し頭に血が上っていたようです。

頭を冷やして周囲を確認。

ふむ、攻撃の勢いが明らかに落ちてますね。どうやら三方攻撃の効果が無事に発揮されている様子。さて、些か戦力を削られました

が、こちらにも反撃に出るとしましょうか。

「今こそ好機！ 全員、死力を尽くして袁紹軍を押し返しなさい！ ついでに押し込む事ができたなら、今度自分が奢ってやります！」

途端に湧き上がる兵たちの士気。全く現金なものですねえ。でも、そう言うのは嫌いじゃありませんよ。

「押しして押しして押しまくれ！ あなたたちの意地と根性、袁紹軍に見せてやりなさい！」

「何平の部隊に遅れを取るな！ 我らも行くぞ！」

「よし！ では自分はお役御免で後ろの方に！」

って、あれ？ 関羽さん、なんで自分の襟首掴んでいるんですか？

「ふっ、何平。……お前も前に出て戦えええーっ！」

「は、ちよっ！？ それは流石に……！」

おお！！？ か、片手で体が持ち上がって！？ って、うおおお
お！！ 関羽がすんばらしい投擲フォームを明日に向かって決めて
いる！？

ま、まさか……これは流石に、へるぶみいいい！！

「飛・ん・で・けえええーっ！」

「いつやああ~~~~っ！！！！！」

今、自分の体が！ 斜め四十五度の角度で空に向かって放たれる

！！

これぞまさに、人・間・大・砲！！

ああ、びゅうびゅうと体にぶつかる風が気持ちいいですなあ。

きつと、これが空を飛ぶ鳥の気持ちなんでしょうねえ。

……。

でも自分、鳥みたいに着地するための手段……持ってないんですよねえ。

あはは……人間って、高高度から落ちても大丈夫な生き物でしたっけ？

……。

……月様、どうやら自分は、ここまでの様です。ドッキリさせてあげられなくて申し訳ありません。自分はただ、それだけが心残りです。

放物線の頂点を越えたあたりで目を閉じて、ひゅーんと体が落下して行くに任せる。どうか、痛くありませんように。

そして、衝撃。ぼふんと柔らかい何かに衝突したインパクトが自分の体を突き抜ける。

……。

……ん？ 柔らかい衝撃？

「……生きて、ます？」

体の動作確認。おお、ちゃんと両腕動きますよ！ 両足もOK、五感もしっかりしてますよ！ ……でも、どうして生きてるんでしょ？

「……どうして戦場に柔らかいベッドが？」

改めて自分の状況を確認すると、天幕を突き破って自分はなにやら戦場に似合わない豪華なベッドの上に着地してました。これ、絹と羽毛の最高級品ですかね？ これだけの品質、さぞかし値の張るものでしょうねえ。こんなものを戦場に持ち込むなんて、一体どこのゴージャスさん……。

「まさか……」

そこに思い至って、顔から一斉に血の気が引くのを感じ取る。投げられた方角、今相手にしている軍、そして豪華な天幕。もしかして……もしかしてもしかして、これは。

「ふう、全く。華琳さんも往生際が悪……い……」

そう声がして、背中にじつとりと冷や汗を流しながらも振り返る。おお、これはなかなか見事なゴールドツイン。

「き……」

じゃなくてですね。……はい、袁紹ですね。つまりここは、袁紹の天幕だった訳です。ちなみに付け加えると、相手方の陣のど真ん中です。

「きゃあああー！ー！ー！ 誰か！ 変質者が私の天幕で寝ていますわー！ー！ー！」

おー、袁紹って予想外に女の子らしい悲鳴を上げるんですね。

いやあ、それにしても。一難去ってまた一難。絶体絶命から絶体絶命。自分、今年が厄年なんでしょうか？ って言うか、変質者は傷つきますよ変質者は。

「あ、あなた、一体何者なんですの！」

「ああ、これはどうも。自分、曹操軍に仕える何平と申します」

床から起き上がって一応礼を取る。ほら、一応、この人のおかげで助かった訳ですし。

「なっ！ う、嘘をおっしゃい！ 華琳さんの所の将が、どの様にして私の天幕に！」

「飛んできたんですよ。ええ、それはもう、命がけで……」

あ、自分、今絶対に遠い眼してますよ。ああそうです、自分をこんな目に合わせた関羽……帰ったらどうしてくれましようか。

「とまあ、それはどうでも良いとして。袁紹殿、その頸自分が頂きます」

目の前の標的に思考の対象を切り替え、腰の剣を抜く。

「こ、この私を殺すとおっしゃいますの！」

「それはそうでしょう。自分達、戦争をしているのですから」

こんな形で本陣強襲を行うことになるとは思いませんでした、今ここで敵軍の頭である袁紹を討ち取ればこの戦は自分達の勝利。この機会を逃す馬鹿が、何処にいますか。

「さて、誰か助けが来るのも面倒です。さっさと終わらせてしまいましょう」

だらりと腕を下げた状態から、地を蹴り袁紹との距離を一気に詰める。剣を水平に寝かせて引き、袁紹を両断する勢いで剣を振り抜く。

「くっ！」

その一撃を、袁紹がとつさに引き抜いた剣で危なげに防ぐ。ふむ、流石に一軍を従える大将。武芸を磨いていない訳ありませんか。

「しかし、未熟」

自分の一撃を防ぎ大きく体勢の崩れた袁紹に、今度こそ引導を渡すための一撃を首筋に狙いを定めて一閃。剣が袁紹の胴と首を分かつその時、

「きゃ！」

袁紹が何も無い地面に躓つまいて尻もちを突く。がくんと袁紹の体が沈み、自分の一閃は袁紹の金髪数本を切り裂くに終わる。

「さて、もう逃げられませんか。あなたも将ならば、潔く覚悟を」

尻もちをつき、自分を見上げる袁紹。少々時間も掛かりましたし、手早く袁紹を討ち取って

「麗羽様あー！ー！」

「げふうはあ！！！」

な、横腹に凄まじい衝撃が！？ しかもまた自分、高度は低いですがど体が真横に吹っ飛んでる！

「麗羽様無事ですか！ それで何処です、変質者って言うのは！」

だから自分は変質者ではないと……。ああ、痛い。吹っ飛んだ際に腰を打ち付けました。ついでにあばらにも鈍痛が。状況から考えるに、あの緑の髪の子の頭突きですか？

「ちょっと文ちゃん！ そんな勢い良く突っ込んだら危ないよ」

「だって変質者だぜ、変質者！ アタイたち女の敵！ 姫に何かあ

「だったらどうすんだよ斗詩！」

「そうだけど、落ち着いて行動しないと逆に危ない時もあるんだよ？」

「全く、その通りですよ。おかげで自分は体のあちこちに鈍痛が。あー、体全身が痛い」

「……」

「ちょ、何ですかその沈黙は。なんでそんな目を見開いて自分を見てるんですか。ああほら、若い女性が口を開けて呆然とするのは感心しませんよ？」

「しかし、袁紹も悪運が強い。なんでここまで邪魔が入るのか」

「一撃目はともかく、二撃目は尻もち。三撃目は乱入者のロケット頭突きで邪魔される。二度ある事は三度あるとは言いますが、何も今この時に起こらなくても良いでしょうに。自分、命賭けてるんですよ？」

「……はっ！　そうですわ！」

「む、袁紹が再起動を果たしましたか。袁紹が立ちあがってズビシッと自分に指をさす。」

「猪々子さん、斗詩さん！　その男が変質者ですわ！　今すぐ討ち取ってしまいなさい！」

「なにぃー！？」

「……なんであなたまで驚いているんですか？」

「……言われてみれば？」

変質者と言うのは断じて認めませんが、確かに自分は討たれて当たり前前の立場ですし、驚くのは変ですかね？

「それはともかくとして。……あなたは何者なんですか？」

何処から取り出したのか、巨大な鎚を構えて袁紹の前に立ちふさがる髪を肩の線で切り揃えた女性。それを見て自分に突っ込んできた緑の髪の女性も、これまた何処から取り出したのか、巨剣を構えて立ち塞がる。

なるほど、彼女たちが袁紹軍の二枚看板、顔良と文醜でしょう。

先程の会話からするに、文ちゃんと呼ばれていた緑の髪の子が文醜。そしてこちらが顔良ですか。いやはや、これはまた面倒な事に……。

「自分の名は何平。曹操軍の将です」

「何平さんですか。……どうやってここまで入り込んだかは知りませんが、姫に害なす曹操軍の将であるならば、討たせてもらいます」

「いくぜ変質者！ アタイと斗詩から逃げられると思うなよ！」

「だから変質者では無いと言うのに……」

全く、袁紹の所為でとんだ誤解を受けてるじゃないですか。

しかしまあ、この状況……どう打破したものでしょうかね。流石にこの二人を相手に立ち回るのは、自分には些か荷が勝ち過ぎます。

ここはやはり、守りに徹して関羽か徐晃が来るのを待つのが最善ですかね。

「猪々子さん、斗詩さん、やあっておしまい！」

「あらほらさっさー！」

「……行きます！」

何時かどこかで聞いた事のあるセリフな気が？

って、呆けている場合でもありませんか。やれやれ、真正面からの荒事は専門ではありませんが……。

「ふう……推して参る！」

二枚看板の二人、捌き切って見せましょう。

一時は守将と冠された、この自分の身に恥じぬように。

霸道、あるいは修羅の道 貳（後書き）

はい、はっちゃけてしまいました。だって袁紹と言えばギャグキャラ……え、違います？ はい、ごめんなさい。なので関羽、それはやったらダメだろ！ というツツコミは出来れば無しで。関羽もテンションがフルバーストしてたんです、きつと。

と言う訳で、今回はギャグ（？）にてお送りしました。

それでは、次回も宜しくお願いします！

霸道、あるいは修羅の道 参(前書き)

く戦々競々(せんせんきょうきょう)

びくびくして恐れ慄む、おどおどして落ち着かない様。

戦々：恐れおののく様

競々：憤み戒める様

を示す

霸道、あるいは修羅の道 参

袁紹を守る様にして自分に得物を向けている文醜と顔良の二枚看板。さて、威勢よく剣を抜いたは良いものの、正直これは骨が折れそうです。

自分は、まあ言うのもなんですが、純正スキルファイターなんですよね。分かりやすく言うならば、戦闘技術だけが実力の全て。身体能力なんかは、そりゃあ一般人よりかはありますけど、目の前の彼女たちには到底及ばないわけで。目の前にある大剣と大金槌は振るうどころか、たぶん持ち上がりもしません。って言うか、恋にしても華雄にしても、目の前にいる二人も、何をどうしたらあんな巨大な武器を軽々と振り回せるのか……。

本当に、誰か、説明を、求むっ……！！

いやはや、勘弁願いたいですよ。あんな大質量武器の攻撃をまともに当てられたりしたら、一撃で何平ミンチの出来上がりですよ。例え防げたとしても、ほぼ確実に肩とか腕の骨が逝きます。まあ、それを上手くいなして無効化するのが、自分の戦い方なんですけども。今は生憎と、二対一の状況。しかも見た感じ、二枚看板のコンビネーションはかなり良好。うん、あんなギガントコンビの連携なんて相手にしたら、軽く人生終わります。

「はあ……不幸です」

「どうした、腹でも痛いのかー？」

「いえ、腹よりも胃が……」

主に今からあなた方よつてもたらされるであろう事態に、ストレス性の胃痛が爆発です。自分、帰ったら絶対に胃薬を飲むんです……。

……こんな悲し過ぎる未来を思い描いたからって、死亡フラグ立ったりしませんよね？ て言うか立つな、立ったら呪う、この世界のフラグ神を呪い殺してやる。

「えっと、考え事をしている最中であれなんですけど……」

「ん？ ああ、そう言えば殺し合いを始めようとしていた最中でしたね。これは失礼しました」

さて、これでいくらかは時間稼ぎができたはずですよ。後は、後方の徐晃らが来るまで……。

「なら、アタイから行くぜ！ おりゃああーっ！」

ひたすら回避っ！

「文ちゃんどいて！ てええいつ！」

とにかく回避いい！

「はあああーっ！」「」

とことん、回避いいいいっ！ 二枚看板の連携攻撃をおお、とにかく避けて、避けまくるうっ！ そこ、カッコ悪いとか言わない！ 命あつての物种、生き残ったが正義！ 次々に襲い来る致死

の一撃を、体の稼働域を限界まで行使して避けまくる。それこそマトックスやイナ〇ウアーもどきの体裁きで。動きが被ってる気がするとかは、言っではいけない。

「くっ、素早い……！」

「だったら……斗詩、挟み打ちで行くぞお！」

ええい、面倒な。多方面から仕掛けられては、攻撃が避けにくくなるじゃないですか！ もう少し、劣勢側の人間に配慮と言うものを……って、不可抗力とは言え無謀にも敵本陣に攻め込んできた自分が言えることではありませんよね。でも、少しくらいは慈悲があっても……。

「そこっ！」

有りませんよね、まあ当然です。自分だってこの状況に直面すれば慈悲無く斬り捨てるでしょうし。総大将を殺そうとした敵将に、何故に慈悲を掛ける必要があると言っのか。

「せいやあぁーっ！」

「もらったあぁーっ！」

「……ッ！」

思考に浸ってしまった、自分の僅かな隙を逃さずに、文醜と顔良が完璧なタイミングで仕掛けてくるのを、目の前の戦闘に注意の戻った思考をフル回転させて把握し、次の瞬間に己が取るべき行動を実行する。鋭く息を吐き、自分の目の前に迫る大剣を、腰を捻って体を回転させながら籠手をはめた左拳でその刀身を殴って軌道をず

らす。手から伝わる反作用に顔をしかめながらも回転の勢いを維持し、左足を軸に放った右足の回し蹴りで、同じく大金槌の側面を蹴って必中の軌道を横にずらす。軌道のずれた重い一撃が、目の前と背後の地面を砕く。

「しまった!？」

「なっ、やばっ!」

文醜と顔良が同時に焦りの声をあげる。力勝負で敵わないなら、技術でそれを覆すまで。今日まで磨いてきた剣の腕と体術が、自分の武器であり盾です。

「まずは……一人!」

勢いで硬直している二枚看板の、顔良へ迷わず狙いを定め、剣を振り上げ袈裟斬りを無防備な体勢の所へ放つ。剣を構え、そして振り下ろそうとした……その時、視界の端から何かが自分に飛来した。飛来した何かを迎撃するため、剣の軌道を顔良から飛来物の射線上へとずらす。かすかな手ごたえと共に剣に弾かれたのは石つぶて。射線をたどると、どうやら袁紹が投擲したもののようです。

「斗詩さん、猪々子さん、今の内ですわ!」

ほんの一瞬、袁紹に気を取られた所為で、文醜と顔良が武器を担ぎ直し、体勢を立て直すために自分から距離を取る。いやはや、戦力外かと思っていた袁紹が、なかなかどうして機転がきくじゃないですか。自分もまだまだ、修行が足りないようです。

「文ちゃん、この人……強い」

「ああ。……つたく、出来ればアタイたちだけで倒したかったけど、こうなったらしょうがない」

文醜の合図で、今まで手を出さずに距離を置いていた近衛兵と思わしき兵たちが武器を手に自分になじり寄ってくる。さて困りました、これは非常にマズイ状況です。流石に数の暴力で来られては、自分もどう仕様もありません。自分は恋みたいに一騎当万なんてできませんから。ああでも、ここって敵軍本陣な訳ですから、当然逃げ道なんてものは無い訳で……。

……。

あ、やばい。これはもしや……詰みました？

ぜ、絶体絶命のピンチ。どうする、どうする!？

……。

はい、打開策が何にも浮かんできませんでした……。

「って、いい加減、誰か助けに来んかいー!」

自分が文字通り命がけて二枚看板を釘づけにしてるんですから、精兵を自称する曹操軍なら早く陣を食い破る位の事してくださいよ! アレですか、手抜いてるんですか? それともこれがあなたたちの実力なのですか!

「どうなんだコラ、この……徐晃の役立たずー!」

敵に囲まれながらも、今回の部隊責任者に向けてシャウトする。

ああ、もう目の前まで袁紹軍兵士の構えた槍が……。

「くうっ、我が野望、月様ドッキリ大計画……ここに潰えたり」

なんて遺言を残そうとしてみた……その時、

「誰が役立たずかああーっ！！」

そんな雄叫びが、自分の耳に確かに飛び込んできた。しかも、かなり近い。見れば、視線の向こうで袁紹兵が空に舞い上がる光景が確認できる。自分を囲んでいた兵たちに動揺が走る。そして、その一角の兵たちが急に包囲を乱して逃げ回り、その中の逃げ遅れた兵士が吹き飛ばされて、自分の目の前に現れたのは

「誰が役立たずだと？ なあ、何平……ああ？」

どこのレディースですか？ なんて言いたくなる、ほぼ確実に嫁の貰い手が来ないであろう代表選手の、そしてなぜか半ギレっぽい雰囲気醸し出している、我らが愛する徐公明でした。

「私の気のせいかな？ ここから私に？ 役立たず？ などと罵りを上げた者がいるはずなのだが？」

血に濡れた大斧の柄を撫でながら凶悪な光を宿した視線で、自分を含めた周りをぐるりと見まわす徐晃。自分とはもかく、袁紹兵たちが威圧感のあまり引いています。いや本当、マジで目の前の徐晃、威圧感がパネエ状態です。

「え、あー……たぶん、気のせいじゃないですか？」

「……まあいい、今はその事は、何故貴様がここに居るのかと言う事も含めて後に置いておくとしよう」

「そうしてくれると助かります。とりあえず、今は目の前の敵を掃討するのが先と言う事で」

そう言っつて、徐晃と同時に武器を構える。向こう側から聞こえてくる戦闘音からして、本隊と両翼の部隊も本陣に入りましたか……。全く、もう少し早くても良いでしょうに。それにしても、徐晃が駆けつけてくれなかったら、今頃自分は死んでいたでしょうね。どうやら自分は、徐晃に命の借りが出来てしまった様子。いやはや、高い借金を背負いました。

まあ、命が助かった事を考えれば、それも安いものですけどね。

「さて、袁紹殿。今度こそその頸、自分達が貰い受けます」

「覚悟しろ。そして我が斧の前に散れ」

「くっ、敵はたった二人のみです！ 斗詩さん、猪々子さん、困んでやっておしまいなさい！」

「姫、ここは逃げた方が良いって！」

「そうですよ！ 一人でも対処するので精一杯だったのに、加えてあの徐公明ですよ！ 無理ですってば！」

何平と名乗ったのに、名前を呼ばれないこの悲しさ……。ええええ、え、そうでしょうとも。徐晃のネームバリューには敵いませんとも。

「きいー！ あなたたち、それでも名門、袁家の将なのですの！」

「名門よりも、命の方が大事ですって！」

「本隊に攻め込まれる前に、さあ！」

「あ、ちょ、放しなさい！ どうして私が、華琳さん相手に逃げ出さなくては」

二枚看板に引きずられ退却し始める袁紹。うん、別に自分は、逃がしても全然構わないのですけど……。

「逃がすかつ！ 追うぞ、何平！」

「ふう、了解です」

徐晃の方は、そもいかないみたいですからね。

立ち塞がる袁紹兵を 主に徐晃が 斬り裂きながら、逃げる袁紹の姿を追う。

しかし無駄に多い親衛隊の決死の殿による妨害で、結局自分達は袁紹を討ち取る事は出来ず、また残った袁紹軍は大将を失って総崩れとなり、そこに曹操軍の止めの追撃が決まり、袁紹軍の全面降伏と言う形で、この戦いは幕を下ろした。

霸道、あるいは修羅の道 参（後書き）

今回は少し短めでお送りしました。

うむむ、こちらでも更新間隔が開いてしまった。ぎぶ・みー・執筆時間！ これ、作者の切なる願いです。

それでは、次回も宜しくお願いします。

罪の処罰も何平次第（前書き）

〔だんろんふうはつ〕
談論風発〕

盛んに話し合ったり、論じたりする事。議論が相次ぐ様。

談論：談話と議論

風発：雄弁の形容、吹きまくる風のように勢いが激しいことから来ている

罪の処罰も何平次第

袁紹との戦いから幾数日。

ようやく戦後処理を終え、自分達は許昌へと帰還する。

今回の戦後処理、袁紹軍の規模が規模なだけに、收拾にかなり手間がかかり、こうして時間がかかってしまった次第。ついでに言うのと、逃走した袁紹たちは結局見つからずじまい。しかし、袁紹の本拠地は会戦中背後に回った、楽進率いる別動隊によって既に制圧されているので、袁紹たちが再起を図るのは最早不可能と言えるでしょう。これで、曹操は巨大な北の脅威を完全に消し去る事が出来ました。

今現在生き残る大勢力は南に陣取る袁術。それから蜀を本拠地とする劉璋。そして、月様達が身を寄せる西涼の馬騰。袁紹軍を吸収した曹操軍に兵力は劣るとはいえ、いずれも大陸屈指の大勢力。まだまだ油断はできません。

……ああ、油断できないと言えば、袁術の客将である孫策と、蜀に向かった劉備軍もですね。何せ、三国時代の英雄たちです。この世界ではどうなのか、それは自分の知るところではありませんが、曹操がこうしていることから、必ずや頭角を現すでしょう。今はまだ雌伏の時と……そう言う訳です。

まあ、戦後処理を終えたとはいえ、河北四州を完全に平定するには、まだ少し時間がかかります。領土の拡大は、必ずしも有益なばかりではありません。その土地を統治する以上は、必ずや求められる事もあります。民たちが安心して暮らせるように治安への配慮、新しい領土の各方面に配置する駐屯部隊の編成や、その物資の供給

について。それは領土が広がれば広がるほど手間がかかります。しかも安定にまで持つて行くその間は、敵対勢力からすれば攻め込むに都合のいい機会となります。何せ、こちらの準備が整っていない訳ですから。

しかし、現状から考えるに、各諸侯は今すぐに動くと言う事は無いでしょう。劉璋は聞くところによれば何やら色々と問題を抱えているようですし、孫策と劉備は第一に動ける状態でもありませんし、袁術だけは未だに脅威となりますが、領土の位置的にもそれも許容できる範囲内でしょう。

ですから、曹操もしばらくは領土の治安維持に力を入れるはずで、領土の治安維持ももままならないままに出兵を繰り返すなどと言う愚かしい事を、自分が知るあの曹孟徳がするとも思えませんが、つまりは、今後しばらくの間は、戦から離れてのんびりとする事が出来そうです。

とまあ、大まかな状況把握はこれで良しとして。休暇を申請するその前に……一つ、やる事があるんですよねえ。

長い思考の海から意識を浮上させ、視覚から入ってくる目の前の状況に意識を戻す。玉座の間を集まっているのは、何時も通りの面子。それに加えて、玉座の正面に立たされている関羽が一人。まあ、どんな状況であるのかと言うと、袁紹との戦いにおける戦功への報償の贈呈などと言った、戦後の軍議の真っ最中な訳です。

で、今の議題についてですが。関羽が出ている事からも分かる様に、関羽の先の戦における行動の是非についてですね。自分の所属する部隊の指揮官を、我を忘れて敵陣中にぶん投げると言う非常識極まりない行動。なんやかんやで結果オーライにはなりましたが、

それで、はいそうですね、と済む問題では決してありません。一步間違えれば、自分は確実に死んでいた訳ですし。って言うか、徐晃が来てくれなかったら死んでました。

今思い返すと、よく生きてるなあ自分、なんてしみじみと思ってしまう……。

っと、曹操が何か言うそうですね。

「さて、関羽の今回の行いについてだけど……軍規に照らし合わせれば関羽は当然、重い罪に当たる。けど、関羽のおかげで戦が有利になったのも事実」

厳密に言えば関羽ではなく、関羽に投げ飛ばされた自分が、袁紹軍本陣で二枚看板と大将を引きつけて指揮系統を乱したからです。これ重要、テストに出ます。

「この案件……どう処分を下すべきかしら？」

「そうですね。軍規に沿って罰を与えるのならば、減給、さらに棒叩きに処し、その後数日間の独房監禁と言った所ですが……」

ま、真面目な顔をした郭嘉が言うと、内容が内容だけに現実味が感じられ過ぎて恐ろしいです。ほら、関羽も無関心を装っていますけど、眼が下を向いて心なしか顔も青いですし。

にしても、棒叩きに数日間の独房監禁、さらには減給って……うん、厳し過ぎませんか？ 自分、そこまでする必要は無いと思うのですが。まあ、こればかりは曹操軍の規律に従わなければいけませんから、何とも口出しはしませんけど。

「いかがなさいますか、華琳様」

「ふむ、そうね。……何平、あなたはどうすればいいと思う？」

「えっ、自分ですか？」

「ええ。今回はあなたが最も被害を受けたのだから、何かしら意見はあるんじゃない？」

確かにそうですけど、ここでいきなり振って来ますかねえ。今さっき口出しはどうかと、思っていたばかりだと言うのに……。

……。

いや待てよ、これはもしかしたら、関羽の好感度を上げる絶好のチャンスなのでは？　ここで関羽の減刑を申し出て、それを通す事が出来れば、関羽の自分に対する評価アップ。すると関羽を何かと動かすやすくなる。例の計画にもプラスに働く！　まさに、百利あって一害無し！

「いい、これはいい！　そうと決まれば、早速曹操に申し出てみましょう。」

「では、お言葉に甘えて意見させていただきますが……先程、郭嘉殿の申し上げた刑罰に関しては、些か厳し過ぎるかと思えます」

自分の意見に、曹操が面白いと言った様子の表情を浮かべて自分に視線を送ってくる。

「何故そう思うのかしら？」

「確かに此度の件、軍内においては重罰避けられぬ事です。ですが、先程曹操様がおっしゃられた様に、そのおかげで袁紹軍を撃破できたのもまた事実。それに、自分はこうして何ら怪我も無く生還していますから、関羽殿の行いによる曹操軍への損失も事実上ありません。以上の事を踏まえ、此度の件を従来の軍規に照らし合わせる事は、些か行き過ぎであると思います。それに、袁紹の領土を併合したばかりの今、優秀な人材の手を借りられなくなる事は魏にとって損にしかありません……と、自分は思うのですが？」

政務と軍務の両方をこなせる関羽の手を、袁紹領を併合したばかりで不安定な状況下にあるこの時期に借りられないと言うのは、国側にとつては痛すぎます。しかも　こればかりは本人の前では言えません　重い刑罰は関羽の曹操に対する感情が悪化しますし、それで魏を飛びだされたりなどした日には目も当てられません。劉備たちとの約束もありますし、自分の計画にも支障が出ますからね

「どうでしょう、曹操様」

「なるほどね。……桂花。何平の意見、あなたはどう思う？」

「私もそれほど重い刑を科す必要は無いと思います。被害を受けた本人もそう言っておりますので。処罰は減給処分だけで良いのではないかと」

「桂花、それではあまりにも罰が軽すぎませんか？　何平殿も、それで納得できるのですか」

「うむ……あ、じゃあ追加で、今日から一月の間、自分に回って

くる雑務を全て関羽が引き受けると言うのはどうでしょう？ 無論、
棒給の増額は無しで。これなら罰にもなりますし、自分も仕事が無
くなって幸せになります」

おお、我ながらなんて素晴らしい罰を思いついてしまったのでし
ょう。これ、もう確定事項で話を進めて欲しいくらいです。

「それ、アンタがただ仕事したくないだけじゃないの！」

「そうですが何か？」

荀？の横やりを間髪いれずにバツサリと切り捨てる。それを見た
程？が、珍しく呆れた表情を浮かべて言う。

「……お兄さん、そこでハッキリと認めてしまうのはどうなのかと、
風は思うのですよ」

「程？殿、ここは敢えて見逃して下さい。自分、ここ最近はろくに
休む暇も無く働いているんです。少しくらい休みたいと思っただって
良いじゃないですか」

そのの、いつもむやみやたらと雑務を押しつけてくる猫型軍師、
あなたに言っているんですよ。

「それに、関羽が仕事で忙殺されてしまえば、曹操様も関羽に容易
に手を出す事は出来ないでしょう。曹操様も仕事に集中できて一石
二鳥です」

「ちょっと、それじゃまるで、私が関羽に手を出そうとしているか
の様じゃない」

「違うんですか？」

「違うわいわ」

流石は天下に名高き曹孟徳。威風堂々、キリリツと真顔でそう言う所に痺れる、憧れる〜！

ちなみに言っておきますが、自分はレズが好きとかそういう訳ではありません。……本当ですよ？」

「さて、では関羽の処罰は減給処分と、先に自分が挙げた内容で良いですね？」

これ以上軍議を長引かせるのも何なので、他の将から意見が出る前に曹操に決定を促す。早い所、自分も部屋に戻って休みたいので。

「ええ、そうしま……ふむ、そうね」

頷きかけた曹操の動きが止まり、代わりに顎に手を添える。一体何を考えているのか、たぶん自分の想像の遙か斜め上をぶっ飛ぶ内容なのには間違いないでしょうけど……。

「……どうせだったら、関羽の処罰に一晩私と閨を共にするというのが付け加えるのもありかしら？」

……ある意味、曹操らしいと言えるばらしい内容でした。って言うか曹操さん、この真面目な空気の中でそれを言えるあなたは間違いなく霸王です。

「華琳様。ならば私も、関羽に一月、私の鍛錬を付き合わせると言

うのを……」

そしてこっちにも空気を読めない徐晃がいたあー！

「ちよつと待てえー！ 曹操殿と徐晃殿、自分の欲望に忠実すぎではありませんかっ！？」

「そうだけど何か？」

「そうだが何か？」

関羽のソウルシャウトに間髪をいれず真顔で答える二人。ちよつとお二人とも、自分の真似しないでくださいよ。

「秋蘭、華琳様……最近お変わりになられたか？」

「ああ。以前よりも、幾分態度がお柔らかくなられた」

目の前の曹操を見て、夏侯姉妹が後ろでそう言う。今で柔らかくなったですか。となると、昔の曹操はさぞドSで容赦の無い人だったのでしょうか。今でも十分Sですが。この際、二つ名にサディステイック孟徳と名付けてみるのもありな気がします。うん、ピッタリです。

……。

まあ、ひとまずそれは置いて。とりあえずは関羽に救いの手を差し伸べるとしましょうか。

「曹操様、徐晃殿。上に立つ者がその様な振る舞いをしては、下の者に示しがつかないと思うのですが？」

「分かっているわ、ただの冗談よ」

「……………ああ、冗談に決まっているだろう」

だったらその不自然な間は何だったのかと、自分は徐晃に問いたいです。

「コホン……………では、これにて軍議を解散する。関羽には追って沙汰を届ける、それまでは自室で謹慎するように。皆、ご苦労であった」

曹操の解散宣言に、将校たちが各々自分の持ち場へと戻り始める。さて、自分も自室に戻ってゆっくりと休みを

「待ってくれ何平！」

と、思ったら関羽に呼び止められました。はて、何か用でもあるんでしょうか？

「どうかしましたか、関羽殿」

「いや、その……………済まなかった何平。いくら戦で気が昂ぶっていたとは言え、あのような事をしてしまって……………。それに処罰の減刑まで図ってくれて……………本当に済まなかった」

頭を深く下げ、謝罪の言葉を口にする関羽。まあ、自分の目的のためと言う所もありましたから、そこまで気にされる必要もないのですけどね。ただまあ、流石にぶん投げられた時は呪いたくなりませんでしたけど。

……。

あ、どうしましょう。思いたしたらなんだか無性にムカムカが……。

「……もし、関羽殿？」

「な、なんだ？」

「折檻と処罰って、別腹だと思いませんか？」

ほら、折檻は私的で、処罰は公的。ですから、重複無しでの適用可に入りませんか？ いえ、きつと入るはずですよ。てか入れ。

「えっと、それは………どう言う意味なのか、私にはよく分からないのだが」

「じゃあ簡潔に。関羽殿、折檻して良いですか？」

「は、はあっ！？」

「いや、ですから折檻ですよ折檻。なんか、あの時の事を思い出したら………ね？」

驚く関羽に構わず、イイ笑みを浮かべながらゆっくりと関羽に近づいて行く。

「か、何平？ い、いいい、一体、何を？」

「そんなに怖がらずとも大丈夫ですよ。痛くは、しませんから」

顔を引き攣らせて後ずさる関羽、その背中が壁にドンツとぶつか
る。逃げ道の無くなった関羽に、自分は手をワキワキさせながらさ
らに近づいて行く。

「い、いや……やめ」

「ふふふ。さあ、覚悟おーっ！」

「ひうっ！」

可愛らしい悲鳴をあげて目をつぶる関羽。そんな関羽に自分は手
を伸ばして行き……。

「そりゃ」

ビシッと、萎縮する関羽の額を指で弾いた。つまりは……デコピ
ン。

「……へっ？」

何が起こったのか分からず、目をパチクリさせる関羽。いやはや、
武の腕は天下無双の豪傑も、やっぱり中身は女の子なんですねぇ。

「冗談です。そんな事、自分がするはずがないでしょう？」

先程は違う意味合いの笑みを満開に浮かべて、呆然としている関
羽に告げる。

「それにしても……へっ？　ですか。関羽殿もなかなか……ぷっ」

ああ、いけないいけない。思いだしたら思わず笑みが。

「な、なななな、なあああーっ！っ！」

ようやく自分がからかわれた事を認識したのか、関羽が顔を真っ赤にして声を上げる。いやあ、こうしてみると関羽も可愛げがありますね。

「まあ、これで戦での事は無しと言う事で。……ではっ！」

シユタツと腕を上げて別れを告げ、自分は猛然とその場から撤退する。なぜって？ そりゃあ、関羽の肩が小刻みに震えているのが確認できたからで

「かあああへえええーっ！っ！」

ほら、関羽大爆発。今この場に青龍偃月刀がない事を感謝しますよ。でなければ、壁をぶち破りながらも追っつきそうです。大噴火を起こした関羽の怒声を背中に越しに聞きながら、自分は王座の間を後にする。さて、関羽の怒りが収まるまでは、城壁の上で昼寝でもしましょうかね。

関羽に見つからないように足早に城壁に向かう。そして城中に響き渡る怒声を子守唄に、自分は城壁の上で横になった。

ああ、今日も空が青いですね。

罪の処罰も何平次第（後書き）

と言う事で、今回は折檻タイムはお休みでございます。何平は処罰に加えて折檻をするようなキャラではないので。ちなみに今回は曹操のキャラ崩壊が発生しました。何卒、スルーの方向で。

それでは、次回も宜しく願います。

何平の休日 貳（前書き）

く人は見かけによらぬもの

うわべだけを見て人を判断してはならない。

類

：あの声でとかげを食つかやほととぎす
英類

：There is no trusting to appearance
r a n c e . (外 観 は 信 ず べ か ら ず)

何平の休日 貳

「ああ、暇を感じる事が出来るって……いいなあ！」

「止めてくれ何平。朝から涙がこぼれそうになる」

え、何ですか夏侯淵？ 自分はこんなにも素晴らしい気分なのに！ いやもう、最高です。朝起きたら自分の執務机に仕事が無い。

大事な事なので、もう一度。

仕事が無い、一切無い、欠片も無いんですよ？ 朝起きたら即着替えながら仕事、食事をしながら片手に筆を持って仕事、廁から手を洗って戻ってきたら手が乾かないうちに仕事！ 仕事仕事のワーワーク！ 決してワクワクをふざけて言っている訳ではない！ つまり、味をしっかり染み込ませるために漬けこまれたおでんもかくやと言った状態の仕事漬けだった自分の目の前に、一切仕事が無いんですよ？ 例えに関してはツツコマない。これ重要。

とにかく！ この状況でハイになるなって言う方が無理ってもんさあああーっ！

……失礼、興奮しすぎて口調が。

いやあ、メリツと眉間にしわを寄せていた荀？の顔が実に見ものでしたねえ。でも、その後何やら壁に向かって一人ブツブツぶやいてましたし、少しばかり不安が。まあ、大方どうやって自分に仕事を押しつけようか悩んでいるんでしょうけど。しかし、やらねばなしの自分ではありませんよ？ もしこれ以上何かを仕掛けて

くるつもりなら、こちらにもそれ相応の対応つてものがあります。

仏の顔も三度まで。まあ自分は仏でもなんでもありませんが、何をされても笑って見過ごせるようなDMさんではないのですよ。そんなのは曹操に弄られてる時の荀？本人で十分です。ああいえ、主従関係の形は人それぞれですから、別に口出しをするつもりはありませんよ？

……まあ、それは横に置いておくとして。

「さつきから不思議に思っていたのですが、何故に妙才殿は自分に着いてくるんですか？」

そう、実は夏侯淵、自分が休暇を満喫しに市に出ようとしていた所に声を掛けてきて、そのままこうして市まで同行してきたんですよ。いやね、夏侯淵はぶっちゃけ美人ですし、自分も一人の男ですから嬉しいと言えば嬉しいんですけど……。

「む、着いて来てはいけなかったか？」

「あー、その……妙才殿はともかく、その妙才殿を心配してか、さつきからバレバレの尾行をしている元讓殿の所為で、全くもって気が休まりません」

自分たちの後方の民家の物陰に、本当に尾行する気があるのかと疑いたくなるようなレベルでバシバシ視線を送ってくる夏侯惇がいるんですよ。いや本当に、そんな気配だだ漏れで尾行つて舐めてるんですか？やるんなら気取られないようにしてくださいよ。それだったら自分も許可しますよ。でも、あからさま過ぎる尾行は余計に神経使うんですよ！それともそれを見越した自分への嫌がらせ

ですか？

「まあ、アレで姉者も本気なのだ。許してやってくれ」

「余計に夕チが悪いですよ……」

ワザとだつたらまだ色々と手の打ちようがあったのに、本気でアしだと言うのならどうしようもできません。気付かれていないと本気で思つて尾行している人に真実を突きつけるのは、酷つてもんじゃないですか。

「はあ、荀？殿を黙らせても未だに心労の種は尽きないと」

「姉者も最近、苛立ちが募っているのだ。どうか、姉者の気分転換に付き合つてやって欲しい」

確かに、荀？との曹操を巡つての取り合い合戦に、徐晃との魏軍トップの座を掛けた抗争などと言つたものに身を置いてれば、否応なしにストレスは溜まるでしょうね。將軍職は決して楽な仕事ではないと、そう言う事です。でも、他人の尾行がストレス発散になるつて……夏侯惇は人として大丈夫でしょうか。越えちゃいけない一線、越えたりしませんよね？

「まあ、妙才殿には日ごろお世話になっていきますから、これくらいは付き合いますけど」

「済まない、感謝する」

夏侯淵が口元に笑みを浮かべて言う。夏侯淵には世話になっているからと言うのは確かに理由の一つではあります。反董卓連合での

時といい、徐晃との争いの仲裁といい、結構な頻度で助けてもらっているのは事実ですし。ですがそれ以上に、ストレスの溜まった夏侯惇に後々絡まれるという事の方が余程迷惑ですから、この程度の事でそれを回避できるのなら安いものだ、と言う打算的な理由もあるんですけどね。

いやだって、夏侯惇の絡みは最早絡みとかそんなレベルを超越してますから。何が悲しくて命を危険に晒すような絡みに付き合わなくてはいけないんですか。ツッコミにモノホンの大剣とか洒落になりませんよ？ 下手したら「何でやねん！」ってボケ返した方の手首が宙を舞ってフォーエバーですよ？

……本当に、洒落に凶器を使用するのは止めましょう。

「それにしても、元讓殿ももう少し柔軟な思考と学を持てば、徐晃や荀？を相手に論戦するのも不可能ではないんですけどね。勘は悪い方ではないみたいですし」

「うむ、それは私も思う所なのだが……姉者は大の勉強嫌いだな。いや、勉強嫌いというよりも、何と言うか、武に関する事以外に取り組もうとすると空回りしてしまっただけ」

「それはまた、面倒なところで器用ですね。料理なんかダメなんですか？」

「……姉者に厨房を使わせるのは、厨房を破壊するのと同義だ」

いや、ガスマイみたいな可燃物の無いこの時代に、何をすれば料理中に厨房を破壊する事が出来るのか、そっちの方が凄過ぎて逆に聞いてみたいです。

「他に何か取り得みたいなのは無いんですか？」

「姉者は手先が器用だな。ああいや、料理などとは別に、木彫りなどが得意だ」

「あー、なるほど。それであの曹操様人形ですか」

「知っているのか？」

「はい、偶然」

以前、荀？に頼まれた軍事関連の雑務に関する意見を聞くため

生憎その日は徐晃も夏侯淵もいなかった。夏侯惇の部屋に、荷物が多くてノックをする余裕が無くしかもアポ無しで訪れたら、中でニヤけながら曹操に着せ替えをしていたものですから、流石に驚きました。思わず持っていた荷物を床にぶちまけると言う失態を犯す位に。まあ、その後なんやかんやで、それが曹操の生き写しと言つても過言では無い位に精巧に作られた木製の等身大人形である事を説明されたんですけどね。もちろん秘密厳守で。

「いやはや、アレは確かにすごかったです」

「姉者の渾身の作だからな」

アレだけ器用なら、料理くらいで来ても良いと思うんですけどねえ。そこはまあ、人それぞれの悩みどころと言つ奴ですか？

「しかし、アレを見てよく姉者が生きて返してくれたな。普通なら、その場で斬られてもおかしくないだろうに」

「それを真顔で言う妙才殿もだいぶおかしいですけど……まあ、元讓殿をいさめるくらいの手札は持っていますから」

「ほう。それは、私の分もあるのか？」

「いやあ、妙才殿はなかなか隙が無くて。残念ながら持ってないですわね」

実際、武官勢の中で徐晃と夏侯淵は弱みを握る事が出来ていない。曹操は言わずもがなで、後は荀？を除いた軍師勢も弱みを握る事は出来ず。え、なんで荀？は出来たのか？ だって彼女、自分に雑務を押しつけるために色々と無理やってみましたから。その分、後ろめたい事がつぼがつぼ、何も自分はただやらされていた訳じゃないんですよ？ ちなみに楽進以下二名は自分が一応の上司ですから、煮るなり焼くなり自由です。職権乱用？ 何を言っているんですか、権力は使うためにあるんですよ？ まあ、パワハラで曹操に訴えられたらアレなので、自重はしますけど。

「まあ、いつかは握って見せますよ」

「それは無理だな。なにせ、私は握られるような弱みを持っていないからな」

「おや、それは残念」

他愛のない雑談をしながら、二人で市を回る。それにしても、何時まで夏侯惇は尾行を続けるつもりなんでしょうね？ さつきから飛び出したくてウズウズしている感じが見て取れるのですが。

うーむ、そろそろ声を掛けてあげるべきでしょうか。それとも敢えてここは、焦らす作戦を取るべきか。

「ああ、焦れる姉者は可愛いなあ」

「……」

……とりあえず、夏侯惇には声を掛ける事にしましょう。なんだかこのままだと、姉妹揃って危ない人認定を受けそうな気配ビンビンなので。姉は怪しい尾行將軍、妹は姉に萌えるシスコン將軍。これは……うん、嫌過ぎる。

「ふう。元讓殿、いつまでそうしているつもりですか？」

「しまった！ 見つかったあ！？」

大袈裟な動きと声で、驚いた顔をして夏侯惇が顔を引っ込める。いや、見つかるとか以前の問題です。まず見つかるという結果に至る、隠れていると言っ過程が存在してませんでした。まあ、夏侯惇自身は隠れているつもりだったのでしょうか。

じとつとした視線を夏侯惇が隠れている物陰に向けていると、夏侯惇が一つ深呼吸をしながら物陰から出てくる。そしていかにも、たった今見つけたと言わんばかりの驚愕を顔に浮かべて、こちらへと近づいてきた。

「お、おお！ き、きき、奇遇だなあ何平。こ、この様な場所出会つとは。なな、なんと、秋蘭も一緒だったのだな！ ふ、二人で一体、な、何をしているのだ？」

……さつき自分で「見つかったあ!？」って言ってたじゃないですか。今更取り繕っても後の祭りというか、それ以前に、焦り過ぎで嘔みすぎです。

「こんにちは、元讓殿。元讓殿も市に何か用ですか？」

ここに理由を知っている質問じゃない？ 良いじゃないですか、ワザとやってるんですから。尾行(?)された意趣返しにこれくらいしてもバチは当たりませんよ。

「えっと、いや、その、だな。あー、あはは、はは！」

ほほー、誤魔化しに来ますか。なるほどなるほど、そっちがそう来るのならこっちはさらに追い込むまで。

「もしかして、自分たちを尾行していたとか？」

あ、夏侯惇のアホ毛が真っすぐビンツと反応しました。これ、今後の交渉での心象パラメータの参考に使えそう。

「な、何をバカな事を言っている！ なぜ私がおんな様な事を！ 私はその、だな。……そう！ 新しい下着を買いに来たのだ！」

ビシッとここから少し先に見える呉服屋を指さして言う夏侯惇。きつと瞬間的に周りを見渡して目に着いた所を取り上げたんですね、分かります。

「そうだ、そうだとも。うん、うん」

「自分で言った事に自分で領かないでくださいよ……」

それじゃあ先程の急場しのぎが台無しですよ？

「ああ、ボケる姉者も可愛いなあ」

そして、そんな夏侯惇にまたもや萌える夏侯淵。なんかもう、色々な意味でこの姉妹はダメな気がします。早く何とかしないと、それとももう手遅れ？

……出来れば、手遅れでなければいいなあ、なんて思います。

「そ、そうだ！ 私はともかく、そう言うお前は秋蘭と二人で何をしているのだ！」

「今更ですか！？ うっん、何をしていると聞かれても……」

まさか馬鹿正直に夏侯惇のストレス解消 本人は知らぬ事とは言え に付き合っていたなんて言えませんか……さて、どうやって説明したのか。援護射撃を求めて夏侯淵に目配せをすると、夏侯淵は一つ頷いて口を開く。

「姉者、何平は私に付き合っていたのだ」

「む、そうなのか？」

「まあ、そんな感じですよ」

そう言うってはぐらかすと、夏侯惇はそうかただけ言って納得した様子。もしこれが曹操辺りだったらと思うと、どんな風に弄られるのか想像するだけで嫌になります。

「あら、珍しい面子が揃っているわね」

……噂をすればなんとやらとは言いますが、それを自分自身が体験する事になるとは思いませんでした。

「こんにちは曹操様。曹操様も市へ用事ですか？」

「ええ、今日は仕事が早く終わったから、久しぶりに服を見に来たのよ。そう言う貴方は、春蘭たちと逢い引きでもしていたのかしら？」

「ち、違います華琳様！ 私はえっと……」

「……下着を買いに来た」

「そう！ 私は下着を買いに呉服屋に行く途中だったんです！」

ボソツと夏侯惇に聞こえるくらいの声で呟く。夏侯惇、さっき自分が言った事くらい覚えておきましょうね。

「春蘭はそれで良いとして。何平、あなたはどうなの？」

「なんか元讓殿の扱いが酷い気がします……自分はただぶらりとしていただけですよ」

「嘘を吐くな！ 貴様、秋蘭とは城からずっと一緒だったではないか！」

なっ、夏侯惇、折角の恩を仇で返すかこの猪アホ毛將軍がぁー

「っ！」

「……どう言う事か、説明してもらおうかしら？」

そ、曹操の声のトーンがさつきより確実に低くなってる！？

「ま、待ちましよう、曹操様。ここは平和的に話し合いの道というものを、って何処からそんな鎌を取り出したのか聞いてもいいですか？ ついでにナニをするのかも」

「ブスリとチョン、どちらか選んだらナニをどうするのか教えてあげる」

それどっちも意味は違えど処刑宣言ですから！ 特に二つ目、自分は宮廷に仕えるつもりありませんから！

「……ちなみに、自分の罪状は？」

「私の秋蘭に手を出した罰よ」

「出してないですよ！？ なんですかその濡れ衣は！」

「なっ……！？ 何平、お主……私にアレだけ好き勝手シておいてそんな、うつつ……くくく」

「はいそこお！ 悪ノリしてある事ない事でっちあげるんじゃありませんよ妙才！ って言うか後半笑ってましたよね！？ 隠しようもない笑みが全身からこぼれてますよ！？ それから元讓！ その物騒な大剣、今にも振り下ろそうとしてますけど止めてください！ それ以前に何処からその大剣持ち出してきたんですか！？ アレ

ですか、四次元ポケット持ってるんですか!？」

「うるさい黙れ! 秋蘭をキズものにしたその罪、万死に値するわ
ああーっ!!」

「目がマジですよ目が! 今ここで襲われたら何平の亡骸一丁上がりですから! って言うか曹操様も早く止めてください!」

「嫌よ、だって面白いもの」

「あ、アンタって人はあああー!! どれだけ私情を挟めば気が済むんですか!？」

「私だつて人の子よ? たまには私情を挟みたくもなるわ」

「まず私情云々の前に、自分は無罪です!」

「じゃあ判決、私刑」

「王権乱用!？」

しかも字が違う! 思いつきり私情挟んでやがる。どこぞの天使集団のボスよりタチが悪い! などと内心で思いながら三方からの包囲攻撃にぐおおと悶えていると、そんな自分を見かねてか夏侯淵が曹操に口を開いた。

「ふう……華琳様、お戯れもほどになさいませ」

「あら、もう少しくらい良いじゃない」

「これ、戯れにしては夕チ悪過ぎです！　って言うか妙才殿、冷静を装って事態の收拾図ってますけど、元の発端あなたですからね？」

「さて、どうだったかな」

もう嫌、この人。……ん？　発端もこの人、收拾するのもこの人。もしかして夏侯淵って、魏で曹操の次に敵に回したらいけない存在？

「ふう、仕方がないわね」

そう言っただけで曹操は一つため息をつく構えを解く。そんなあからさまに分かりして、どこまでSなんですかあなたは。おかげでメタル方面に疲労がマツ八です。ついでに胃の方も。

「全く、曹操様は戯れが過ぎます」

「良いじゃない、男ならそれくらい受け入れなさいよ」

この一連のやり取りに耐えられる人は、大陸をくまなく探してもそうはいませんよ。経験者が語ります。

「それで、さっきの理由をまだ聞いてないんだけど？」

「それでしたら、私から」

夏侯淵が曹操に耳打ちで自分と夏侯淵の同伴の事を説明する。話を聞き終えると、曹操は納得の表情を浮かべた。

「なるほどね。ありがとう何平、それとさっきは悪かったわ」

「夏侯惇殿の件は構いません。が、戯れの方は自重してください。さっきのはマジでやり過ぎです」

「わ、分かっているわよ。今度からは自重するわ」

本当に分かっているのか、それとも分かかってやっているのか……。きつと後者ですよ。夏侯惇じゃあるまいし。

「ん？ なんだ、じろじろ見つめおって」

……間違いなく後者ですね。と言うか、夏侯惇を基準に見ると大抵の人間がそう見えそうで怖い。

「いえ、何でもありませんよ」

「全く、おかしな奴だな」

「この面子に囲まれている現状が、そもそもおかしい気がしますけど」

何て言ったって、町中に魏のトップ3が勢ぞろいしている訳で。これをおかしいと言わずして、何をおかしいと言っべきなのかと言えるくらいの状況なのは間違い無しです。

「それで。何平、あなたこの後に予定はあるのかしら？」

「ん、自分ですか？ 自分は」

特に無い、と言おうとして、背筋を走った悪寒がそれを止めた。はっ、これがいわゆる大六感！？

「あー、ええと。そう言えば、この後に少し用事が」

「用事って何よ？」

「あー……そう、本を見に書店へ行くことかと」

「それなら必要無いわ。私の命で、城の書庫には常に最新の書物を取りそろえているから」

「そ、そうですか……」

脱出失敗。これは……詰みましたねえ。今から別の用事があると言っても、嘘である事は一目瞭然でしょうからねえ。後付けポンの理由で見逃してくれるのは、魏では夏侯惇と許緒だけです。

「それで、他に何か用事はあるのかしら？」

勝ち誇った表情で言う曹操。いや本当に、この何平、不覚を取りました。

「はあ……分かりました、煮るなり焼くなり好きにどうぞ」

どうせやらされるのは、荷物持ちとかそんなベタな役どころでしょうけど……。

「変態か、お前は。自らを煮て欲しいなどと……」

……夏侯惇の言葉に、この場の空気が一瞬にして凍りつきました。

「……曹操様。自分、この言葉をまんまの意味で受け取る人を初めて見ましたよ」

「言わないで。私は何も聞いてないわ」

曹操、現実逃避はよくないですよ？

「姉者、それはいくらなんでも……」

「な、なんだ二人して。どうしてそんな憐みを含んだ目で私を見る！ わ、私は煮るより焼く派だぞ！」

「「「……」」」

夏侯惇の必死のずれた言い訳に、三人揃ってため息をついた。そう言う意味で、言ったんじゃないんですけどね……。

「まあ良いわ。とにかく何平、暇であるのならば少し私に付き合いなさい」

「華琳様あゝ」

曹操の華麗なスルーにへこむ夏侯惇。そんな夏侯惇に曹操はため息、夏侯淵もやれやれと言った様子。かく言う自分も、きっと呆れた表情を浮かべているに違いない。

曹操を先頭に、自分達は夏侯惇が先程、言い訳に指さしていた呉服屋へと足を運ぶ。相変わらずの平行つぷりに何度来ても疑問が尽きない。この世界のどんな謎よりも、この服装のオーバーテクノロジー具合には脱帽です。

「で、自分を連れてきたのは良いとして、自分はここで何をすればいいんですか？」

「あら、折角服を見に来たのだから、貴方もそうするべきだとは思わない？」

「別に自分は、服には困っていませんよ？」

「だが何平、私は今日まで、お主が支給された武官服以外の服装をしている所を見た事がないのだが？」

「まあ、生活する分にはこれで十分ですから」

自分が仕官する際に支給された数着の武官服は、お世辞にも洒落つ気があるとは言えませんが、服としては十分機能的ですから特に不満は無い。元々自分は、そこまで御洒落には気を使っていませんから、支給された武官服と寝巻以外の服装を持っていないんですね。

「……沙和辺りが聞いたらさぞ憤慨する事でしょうね」

「全くだ。男だからと言って服装に気を使わないのは感心せんな」

「そうなのか？ 私もそこまで服には気を使っではないが」

「春蘭は黙ってなさい」

「姉者は黙っていてくれ」

しゃらーっが夏侯惇。主と妹に言われてシユンとする夏侯惇。…

…「ご愁傷様です。」

「良いかしら、何平。私の部下として、そう言った事をないがしろにすることは許さないわ」

「えっと、つまり？」

「なんだが無駄に真剣な曹操の眼差しに、もの凄く嫌な予感がするんですけど……？」

「何平、今から貴方の服を見繕うわ」

……。

はっ、言われた言葉に思考が一瞬フリーズしてしまった。

「い、いやあ、それは流石に遠慮願いたいんですけど？」

曹操の提案を拒否しつつ右足を半歩下げて逃走の用意を

「拒否は認めないわ。春蘭、秋蘭、何平を捕まえなさい」

「「御意」」

しようとしたら夏侯姉妹の手がメリメリ肩にめり込んで！？

「な、何をするんですか！ ええい、手を離せえー！」

「すまん何平。私も同僚として、今回ばかりは見逃せないのでな」

「どんな服を着ようと自分の自由でしょう！ 余計なお世話です！」

別に良いじゃないですか武官服。丈夫で機能性抜群、出かけるときにも何ら問題無しですよ？ なんでこれだけじゃダメなんですか！

「何平、そう心配するな。私も、服は何時も華琳様と秋蘭に選んでもらっているぞ？」

「話の主旨がずれてますから！？ ああもう、分かりました！ ちゃんと別の服を買いますから、せめて自分で選ばせてください！」

「ダメよ。折角何平を弄れ……んんっ。さっきまで服装に気も掛けていなかった貴方に任せる訳にはいかないわ」

しつかりと本音聞こえてましたからね曹操さん！ キリツと真顔で言い繕っても遅いですからね！

「誰かお助けえ！ このままでは自分の貞操に危機があ！」

「ええい、うるさいぞ何平！ 暴れるな、諦めて大人しくしろ。店に迷惑ではないか！」

「ぐはあ！？ か、元讓が正論……だと？」

ぐふっ、精神的なダメージがマツハだ！

「何平。悪い様にはせん、行くぞ」

夏侯惇の　これが重要　正論でのけ反った所に、的確に撃ち込まれる夏侯淵の優しい言葉。うん、もう良いよね？　ゴールして

も良いですよね？ ほら、目の前に沢山のお出迎えが……。

「それじゃあ、行きましょう」

「……もう、どうとでもしてください」

休暇を満喫しに市に来たはずが、どうしてこうなったんでしょうね……。

そんな自分の不憫さに嘆きつつも、この後たっぷりと時間を掛けて、三人に弄られまくりました。ついでに言うと、合わせられた衣装も何着か買わされました。そんなもって、自分の懐に氷河期が到来しました。

うん、今度から外出は一人きりでしょうと思います……。

何平の休日 弐（後書き）

ちよいとグダった感がある今回の話でございます。

内容もかなりやらかした気味、本当に申し訳ないです。

ここ一週間、忙しくてロクに執筆する余裕がありませんでした。
更新間隔が開いてしまった事、お許しください。

それでは、次回も宜しく願います。

何平の休日 参(前書き)

くしんさんたん
〽苦心惨憺〽

一つの目的を達成するために心を砕き、苦勞を重ねて、あれこれと工夫を凝らすこと。また、努力して物事を成し遂げること。

何平の休日 参

「気の使い方を教えてほしい、ですか？」

「はい、どうぞこの通り、お願いします！」

どうも、何平です。ただ今自分、絶賛楽進に向かって土下座中です。何故って？ そりゃあ、気の扱い方を教えてもらうために決まってるじゃありませんか。だって気ですよ？ かめはめ波ですよ？ 男のロマンですよ！？ それを扱える人が目前にいて、教えてもらわずにはいられようか、いやいられない！

という訳で、

「何卒、この何平に気の扱い方を教えてください！」

善は急げということで、楽進が執務室にいる時間帯を狙って、こうして真昼間から地面に頭を打ち付ける勢いで土下座ってます。男のプライド？ 何それ、おいしいの？ そんな持っていてても役の立たないものは何処かに投げ捨てました。プライドと気の扱い方、どっちを優先すべきなのは考える必要すらありません。それに、楽進から気の技術を伝授してもらおう事は、前々から考えていた事です。楽進の警戒度もそろそろ低くなってきているでしょうから、これから教えてもらいたい。完全習得には時間もかかるでしょうし。

「楽進殿、お願いします！」

再び平身低頭でモーレッツ懇願。楽進がうーんと考え込む。やはり己の技を他人に教えるのは気が進まないと見えます。しかし、そこ

を何とかしてほしい！

「……分かりました。何処までお役にたてるかは分かりませんが、私にできる範囲でならお教えします」

長い事考え込んでいた楽進が頭を上げて言う。やったぜ何平！
これでついに君もチートキャラに仲間入りだ！

「ありがとうございます！ ああ、これで念願の男のロマンスが！」

「ろ、ろまん？」

「あ、いえ。こちらの話です。どうぞお気になさらずに」

うーむ、とつさに横文字発言をしてしまうこの癖を、そろそろ何とかしなければ。蜀の御使いの前でポカをやらかすと、かなりマズイですからね。

「では、仕事を終わったら呼びに行きますので、少しの間待っていた
だいても」

「これを終わらせれば良いんですね？ 分かりました、すぐ終わらせましょう！ ええ、任せてください、自分にかかればこの程度は
四半刻ううう！！」

「え、あ、何平殿！？」

「唸れ、我が右手よっ！」

しばらくお待ちください……………。

「終了です。さあ、行きましようか楽進殿」

「ほ、本当に四半刻で終わった……………」

片付いた書簡の山に呆然としている楽進。何をこの程度で驚いているんですか？ 洛陽で文武官をしている時はこれよりもっと大変でしたよ。ゆえにこの程度の書簡など朝飯前。しかもその向こう側に男のロマンが待ち受けていると思えば、いっその事はかどつてしまうのが男というものです。

「あ、一応言っておきますけど、このことは曹操様には内緒で。…もし知られたらどれだけこき使われるか、分かったもんじゃないですから」

「は、はあ……………」

「ま、政務の事はさておき。気の扱い方、ご教授宜しく願います」

未だに目を白黒させる楽進を、頬をペチペチ叩いて呼び戻し、二人で修練場へと足を運ぶ。この時間帯は場外での合同演習ですから、

修練場はほとんどガラ空き。まあ、非番の兵が自主鍛錬をしている姿がちらほらとある位です。これなら気の修練にもなんら問題ないですね。

迷惑にならないよう修練場の隅の方へと移動する。周りを確認した後、一つ深呼吸して楽進が口を開く。

「それでは、まず最初に、何平殿には自分の気を意識し感じ取れるようになっただきます。これは、気を扱う上で最初に習得しなければなりません」

「自分の気を感じ取るですか。して、それはどの様に？」

「へその下二三寸程の所に意識を集中してみてください。そこが丹田と言われる、いわば気を練る場所です」

「むむむ……」

へそ下三寸、へそ下三寸……。

……。

……。

「……申し訳ないです、何も感じません」

そりゃあもう、さっぱりな具合に。

「では、私が気を流しこんで何平殿の気を少し引つ張り出してみます。何平殿は先程と同じように意識を丹田に集中して、何か感じたら言ってください」

そう言つと、楽進は自分の背後に回り、自分の背中に左手を、腹部には右手を回して当てる。

「では、気を流しますから、集中してください」

楽進のその言葉と同時に、何やら体の前と後ろから温かいものが流れ込んでくる様な感覚を受け、そしてそれが先程から意識を集中させていた丹田へと流れ込んで来て……？

「ん？ 何か、流れ込んでくるのとは別に、こう、何か底からわき上がってくる感じが……」

「そう、それです！ その感覚を忘れないようにしてください！」

「むむむう……」

お、おお？ これは、何かがどんどん湧き上がってくうる？

「では、私の気を止めますね」

体の外側から流れ込んで来ていた温かい流れが止まる。しかし、自分の底からわき上がってきた何か 恐らくはこれが自分本来の気 は、ハッキリとした流れこそ感じ取れないものの、漂うような感じで自分の体内にとどまっている。

「なるほど、これが気ですか」

「はい。なるほど、何平殿は筋がいいですね。私が引つ張り出したとはいえ、こつもすぐに自分の気を意識できるようになるとは」

「楽進殿のおかげですよ。それに、まだ自分の立つ位置は最底辺ですから」

ここから男のロマンたる、かめはめ波まで持っていかななくては。果てには自力元気玉も……いえ、それは流石に無理がありますか。

「では何平殿、丹田への意識の集中を切ってもらえますか？」

「分かりました」

楽進に言われて集中を切る。すると、先程まで感じていた気の漂いが一瞬にして霧散した。

「気が霧散しましたね」

「ええ。では、そこからもう一度、気を感じ取れますか？」

「……はい、感じ取れました」

感覚さえ掴めれば存外難しいものでもないですね。こつやっつて、腹の底から引き出すようにスルスルーっと。おお、さっきよりも気の流れが鮮明に。

「なるほどなるほど、こつやっつて気を引きだすんですね」

「何平殿、もう自由に気を引き出せるようになったんですか!？」

「なんかこう、スルスルーっと?」

「そんな簡単に……」

いえ、でも感じ的にはそうとしか言いようがないですし。

「もしかして、何平殿は私よりも気の才能があるのかもしれない」

「えっ、それ本当ですか?」

まさか、これは本当に自力元氣玉も夢ではない!?

「とにかく、こうも短時間で自由に引き出せるようになったのは嬉しい誤算です。では、次は丹田から体全体への気の流し方ですね」

丹田で練った気を四肢に流すって、一体どうやってやるんでしょう? こう、神経とか筋肉を通してビビビ、みたいな感じですかね?

「では、今感じ取っている気ですが、ある程度自分の意思で動かしたりできますか?」

「むー、腹の中でぐるぐる回したりならしてますけど」

「その回す感覚を、今度は自分の利き腕に流し込むように意識してみてください」

「むむっ!」

自分の気を右腕に流し込む、そうこれはまるで……ゴッドフィンガー！

「おおっ！」

右腕を輝かんさんばかりに流れ込む気いいー！　って、おや？

「……流れませんね」

なんかこう、詰まっている感じがして気が流れていかない？

「それは勁道が開いていないからです。気は丹田で発生させて、それを勁道を通して導き、そして対象に作用させるものですから。気を使うには、まずこの勁道を開かないといけません」

「その勁道を開くにはどうすれば？」

「こればかりは一朝一夕では無理です。日々の鍛錬、気を毎日体全身に流し、少しずつ広げていくしかないですね」

むう、流石はチート仕様。そう簡単には習得できませんか……。

「何かコツみたいなものは、あつたりします？」

「気は筋肉が生み出すような力ではありません。なので力んで気を流そうとすると、逆に気が強張って流れが止まってしまいます。ですから、気を流す際は力むのではなく、自分の四肢を節と思つてそこに水を流し込むかのように意識すると良いかもしれませぬ」

「水を流し込むが如く、ですかあ」

うむ、これはなかなか難しい。

「それから、気は発するだけでは無く蓄えることもできます。蓄える時の感覚としては……そうですね、弓を引く様な感覚、と言えば分りやすいでしょうか」

「そして逆に発する時は、弓を放つ様に、ですね」

「はい」

これは時間を掛けて少しずつ、習得していくしか方法は無いようですね。何事も一朝一夕では身につかず、そう言うことなのでしょう。

「ちなみに私が使う気弾は、掌に気を蓄えて、それを一気に放出することで発生させているんですよ」

「では、あの岩を砕く拳とか、凄まじい跳躍とかも？」

「基本は同じ原理です。岩は拳が当たる瞬間に、跳躍も跳ぶ瞬間に気を放出して力に変えているんです」

「なんて便利……」

つまりは、やり方次第ではデコピンすらも凶器に変わると。そう言えば、昔ワニンチパンチなんてものがあつた気が。そうか、あれも気を使った技なんですね。

「とまあ、私が教えられるのはこれくらいです。まさか一日も掛か
らずに気を意識できるようになるとは思いませんでしたから」

「いやいや、さっきも言いましたけど楽進殿が手助けしてくれたお
かげです。本当にありがとうございます」

気の意識の仕方、そして勁道の開き方とそのコツ。そして気の使
い方。この四つを教えてもらえただけで、自分にとっては十分な成
果ですから。後は地道に鍛錬を重ねて、ある程度気を流せるようにな
ったら、また楽進殿に教えを請うとしましょう。

「さて、それでは楽進殿。この後、今回お礼も兼ねてお茶でもどう
ですか。于禁殿からお茶菓子が美味しいお店を教えてくださいん
です」

「えっと、それじゃあ……お言葉に甘えて」

「そうですか。それでは行きましょう」

二人で並んで修練場を後にする。

さて、これで魏に降った目的の一つは達成できました。結果が出
るかはまだ、自分次第な訳ですが、必ずや気の扱い方はマスターし
て見せましょう。そして、自分の心が曹操に動かず、約束の日が来
たその時は……いえ、今はそれを考えるのは、野暮つてものですね。

折角美少女をお茶に誘えたのですから、今はそれを満喫するとし
ましょう。

美味しい杏仁豆腐が、自分を待っていますから」

何平の休日 参（後書き）

長らくお待たせいたしました、王平伝更新再開です。いえ、別に止まっていた訳ではありませんが。

さて、今回は休日なのに、黎明強化フラグ。黎明はチートになれるのか？

そして今回登場した気の習得及び練習法は、作者が調べた内容を独自解釈し、捏造したものです。決して信じないように。ついでに言う、ツッコミも無しで。

それでは、次回も宜しくお願いします。

曹魏の守将 壱（前書き）

（かっこふばっ）
確乎不拔

意志がしっかりしていて、何事にも動じることがない様子。

曹魏の守将 壹

曹操が袁紹を下し、河北四州を統治下に置いてから二月が経過した。

袁紹軍を吸収し、圧倒的な軍事力を得た曹操は、広大な北の大地を順調に平定していく。

しかし、そこに思わぬ問題が発生する。未だ袁家を支持する地方の豪族たちが、曹操の統治下に入ることを頑なに拒んだのだ。

豪族たちは徹底抗戦の構えを見せ、それにより曹操は河北平定の遅れを余儀なくされてしまう。

同じころ、揚州では孫策が袁術に対し反旗を翻す。袁術はこれに応戦するも、一揆に偽装されていた孫権率いる別動隊に背後から奇襲され、挟撃を掛けられた袁術軍は為す術無く敗走。孫家により揚州が平定され、また一つ大勢力が表舞台から退場した。

南を孫策に抑えられた曹操はこれに危機を感じ、難航する河北四州の早急な平定のため、大きな賭けにでる。

それは主だった将を河北四州の各地へと派遣し、豪族の反抗を一

齊に鎮圧するというものだった。

西に馬騰率いる西涼、南に孫策率いる呉と言う、強大な敵を抱えながらも、戦力の大部分を分散させる曹操。自身もまた、豪族鎮圧のため許昌より西に位置する河東の城へと入城する。

そんな中、何平の姿もまた、河東の城にあつたのだった……。

〜何平〜

どうも、何平です。

ただ今自分、涼州にほど近い、河東の城へとやってきています。

理由はもちろん、ここら一帯で反抗をしている豪族たちの鎮圧です。ここ河東は岩塩の産出地として有名ですから、早いところ統治下に置かないと色々面倒なんです。岩塩をもとにした交易なんかで豪族に力をつけられると、なおさら鎮圧に手間がかかる。しかし、未だ反抗する豪族は河北のあちこちにいるわけですから、ここだけに戦力を差し向けるわけにはいかない。留守を狙われ本拠地を落とされては本末転倒。ゆえに、戦力を河北全土に分散して一気に反抗勢

力を鎮圧する。無論、足りない部分は曹操自身が出陣することで埋めてまで。

何と言うか、領土が広大過ぎるがゆえの悩みと言うか……。って言うか、孫家もう少し空気読んでくださいよ。孫家がいきなり反乱起こして南を抑えたりするから、曹操が焦ってこんな危険極まりない作戦を決行する羽目になったんですよ。ついでに言うと、自分の休日を返せ。

それにしても、曹操は何故に護衛に自分を選んだ？ だって自分、裏切っちゃうかも宣言を堂々としているんですよ？ 確かに曹操は武を嗜んでいますけど、それでもたぶん自分の方が強いんですよ？ 夜こっそり寝首を掻いちゃうことだって出来るんですよ？ なのに、ただでさえ主だった将が北方各地に遠征に出ているこの最中に、曹操自身が鎮圧部隊の一角を指揮して出張ってくるだけに止まらず、その護衛に自分を任命するなど……。

もうアレですよ。こんな状況で裏切るなんて、余程の恩知らずしかできないですよ。寄せられる期待に胃がヤバい。何これ、新しいイジメですか？

全くもって冗談じゃないですよ。自分の他に同行している将と言え、荀？と程？と李典だけ。ここにいる武官、自分と合わせて二人だけです。先の豪族鎮圧で兵力も消耗していますから、今どこから攻められたりしたらヤバい、ヤバすぎる。まあ、ここら一帯の豪族はあらかた鎮圧しましたから、大丈夫だとは思いますが……。

「本当に、無謀が過ぎる……」

城壁の上で思わず独り言。ついでに盛大なため息を吐く。ああ、幸せがまた一つ逃げていく……。

「仕方がないじゃない。河北を手早く平定するには、この方法が一番早いのだから」

城壁にもたれかかりグダっていると、背後から曹操の声が聞こえた。

「あ、いたんですか曹操様」

「今来たところよ。……ねえ、何平。貴方は今回の賭け、やはり快くは思っていないのかしら？」

いつもは自身満々な曹操が、少し不安げに言う。

「そうですねえ。南を孫策が抑えた今、早急に河北を平定しなければ三方に敵を持つことになりますから、最善かどうかは別として、この賭け自体が間違っているとは思いません。南の孫策は自領の平定と軍備の増強に忙しいでしょうから、すぐには攻めてこないでしょう。それを見越して、こつこつと素早く行動に出たのでしょうか？」

「ええ。孫策は袁術とは違う。隙を見せればたちまちその牙を魏に向けてくる。ならば、その牙が研がれる前に、こちらで盤石の態勢を整えておく。それに」

「魏の敵は、呉だけではありませんからねえ」

山々が遠くにそびえる、南西の方角へと視線を向ける。今はまだ公にはなっていないませんが、孫策に続き劉備も入蜀を果たしたことは、

放っていた密偵からの情報により既に確認が取れている。孫策同様、今は軍備の増強と内政の立て直しに苦勞しているのですが、その時間も掛からずに劉備も態勢を整えるでしょう。ならば、強大な二国 呉と蜀が動けない今の内に、最低でも自領の平定だけは済ませておきたい。曹操の思いとしては、そんなところでしょう。

「劉備、孫策、馬騰。曹操様の霸道の先には、英雄豪傑がわんさかですね」

「それこそ私の望む所。立ちはだかる英雄たちをなぎ倒し、我が霸道の礎にしてみせるわ」

霸道、か……。確かに曹操の霸道も、天下泰平への道の一つではある。ですが……。

「何平、どうしたの？」

黙りこくっていた自分を不審に思ったのか、曹操が訝しげな表情で自分の顔を覗き込んでくる。

「いえ、何でもありません。少し考え事をしていただけです」

「そう。もし体の不調を感じるのならば休みなさい。貴方には随分と働いてもらったことだしね」

確かに一週間で三つの城を落とすのは、十分な働きに値しますよねえ。自分で言うのもなんですけど。

「まあ、自分以上に活躍している方もいるようですけど」

「関羽の事ね。報告を聞く限りでは、凄まじいの一言に尽きる戦果をあげているわ」

主の願いを聞いてくれた恩返しか、はたまた武人としての矜持か。この河北遠征での関羽の戦功は半端じゃない。先駆けとして一人で敵軍に突っ込み、討ち取った敵将の頸は数知れず。軍神の二つ名に違わない、圧倒的な強さで豪族の私兵たちをなぎ倒し、鎮圧に貢献していると、逐一報告にやってくる伝令兵から聞いている。それこそ、自分の為した功績など足元にも及ばないくらいに。

「敵に回れば恐ろしいけど、味方につけばこうも頼もしい。流石は関羽、私が目を付けただけはあるわ」

やれやれ、この言葉は徐晃にだけは聞かせられないですね。聞けば嫉妬に狂って面倒なことになりかねません。実際、自分はそうなってます。

「元讓殿や徐晃殿たちも、順調に豪族たちを鎮圧しているようです。もう数日で、河北四州も平定が済みそうですね」

「ええ。このまま順調にいけばね」

そう、順調にいけば

「伝令！　ここより西方約四十里に砂塵を確認しました！」

「順調に、行くはずがないですよ……」

だって、そんな感じのフラグが立ってたような気がしましたから。

「旗は？」

「遠目からの視認なので旗までは……」

「曹操様、恐らくは西涼の馬騰でしょう。ただ、馬騰は病で寝込んでいるはずですから、出てきたのは子の馬超かと」

西涼の民は騎馬の扱いに長けていると聞きます。四十里程度の距離などあつという間に詰めてくるはず。西涼勢が押し掛けてくる前に、迎撃の準備を整えなければ。

「やはり戦力が分散している所を狙ってきたか……。今すぐ、各地に散らばっている將たちに合流するよう早馬を出しなさい。何平、籠城戦の準備よ。春蘭たちが合流するまで持ちこたえる」

「了解です」

籠城戦なら自分の得意とする所。相手の戦力にもよりますが、一週間は持ちこたえて見せましょう。近くにいた兵を数人集め、各部署に籠城戦の用意を急ぐよう言伝を頼む。

「行くわよ何平、すぐに軍議を開く」

そうして一通りの指示を出し終え、自分は曹操の後に続き軍議の場へと向かった。

籠城戦の準備を兵たちに任せている間、自分を含めた将たちが軍議のために集まる。とは言え、今ここにいるのは自分を含めて五人。曹操、荀？、程？と李典。そして自分です。

「それでは、自分が説明を。現在、西方より西涼軍と思われる部隊が我が方へ向け進軍中。距離はおよそ四十里と離れてはいますが、西涼の民は騎馬の扱いに長けます。ここに到着するまで、そう時間も掛からないでしょう」

「軍勢の規模は？」

「伝令から伝え聞く限りでは、五万ほどらしいです」

「対する我が軍の兵力は約一万。油断していたわけではありませんが、この状況は些か厳しいですねえ」

程？の言う通り、決して自分たちは油断していた訳ではない。しかし、先日までの鎮圧作業で出た被害が今に大きく響いています。幸いにもこの城は、規模は小さいですがほとんど被害無く接收出来ました。ゆえに籠城に際する防衛機構の問題は無いでしょう。攻城の際出来てしまった唯一の弱点も、逆に生かして敵を一網打尽にすることもできます。しかし、やはり厳しいのは戦力差。攻城戦の際は敵の三倍の兵力が必要と言われていますが、戦う以前に兵糧と物資の問題で死ねます。

今回の遠征は長期のものではありませんから、運んできた兵糧も

三週間分ほど。その半分は既に尽き、豪族たちが蓄えていた分があるとしても、それは城下に住まう人々に回さなければならぬ。外部からの補給は、城を取り囲まれてしまえば終わりでしょう。ゆえに、先に自分は一週間は持ちこたえられと言ったのです。民を犠牲にするのならば話はまた別ですが、それは自分が許しませんし曹操も良しとはしないでしょう。

タイムリミットは一週間。それまでに各地に散っている將たちが合流できれば自分たちの勝ち。間に合わなければ、自分たちの負けです。

「籠城戦の準備は既に始めています。それを踏まえて、今後自分たちはどのように動きましようか？」

「最初から籠城を決め込んでも、少しずつ削られて終わるだけ。ここは城から出て敵軍にひと当てした後、素早く反転して城に戻る。これを繰り返して、向こうの戦力も削りながら時を稼ぐのが最善かと」

「それしかないでしょうねえ。風も桂花ちゃんの見解に賛成なのですよ」

荀？の献策に程？も賛同する。荀？の作戦は、名づけるとすれば？通り魔作戦？と言ったところ。軍を城を守る部隊と、城から出て攻撃を仕掛ける部隊の二つの部隊に分け、攻撃を仕掛ける部隊は深追いしない程度に西涼軍に当たり、機を見て素早く城へと反転。当然追いかけてくる西涼軍は城を守る部隊に迎撃させ、その間に外の部隊は城内に避難する。西涼軍も激しい激撃の中、四六時中城壁にへばりついているわけにはいかないのでしょうから、夜になれば包囲網はそのままに城壁から一度部隊を引くでしょう。そこを狙って再

度出陣、ひと当てしたらまた同じように反転する。夜に限らず、西涼軍が距離を取ったところで出陣すれば、開門時になだれ込まれることもないでしょう。

兵数に圧倒的な差のあるこちらが、真正面から戦って勝てる確率はゼロ。ゆえに、まさに一撃離脱、通り魔のように刺し、通り魔のように逃げる！ 例えが悪いとかは言わないでください、自分でも自覚してますから。

「分かったわ。なら、桂花の策を採用しましょう。真桜、すぐに部隊を編成しなさい」

「任しとき大将。四半刻で済ませたる」

「何平、貴方は部隊が編成された後、桂花たちと共に城の守備隊の指揮を執りなさい。守将の二つ名に違わぬ働きを期待するわ」

これはまた、懐かしい二つ名を聞きましたねえ。連合での時以来ですか、その名を聞くのは。しかし、かの霸王に期待されて逃げるようでは守将の名折れ。例えあの時とは仕える主が違つと言えど、必ずこの城と曹操の背中は守って見せましよう。

「了解です。して、曹操様は？」

「私は真桜と共に前に出るわ」

「そんな、危険すぎます華琳様！」

「危険は百も承知よ桂花。けど、私が前に出れば兵たちの士気も上がる。それに私は霸王。皆に守られ、城の中で恐怖に怯えて縮こま

るつもりはないわ」

毅然とした態度でそう言い放つ曹操。もう全身から覇気がバシバシほとばしってます。ほら、荀？も一の句が告げずに気押されてる。

「桂花、私を心配してくれる貴女の気持ち、とても嬉しいわ。でもね、これは王の決断よ。良いわね？」

「……御意」

唇を強く噛みながら、荀？がしぶしぶ下がる。

「では、これにて軍議を解散。各々、自分の持ち場に着きなさい」

「……御意」「……」

曹操の号令のもと、自分たちは己の配置へと動き出す。

さて、袁紹との戦い以来、二月ぶりの戦。そして守将として、我が矜持のもとに戦える戦でもある。この身に再び生を得た、その時に誓った。守ることこそ我が誉れだと。守って見せましょう、それが例え、相容れぬ存在である霸王であろうとも。

さあ、曹魏の守将？何平？の守りの戦。西涼の勇士たちに見せつけてやるとしましょう。

曹魏の守将 吉（後書き）

はい、原作とは違う展開にてお送りしました。そして久しく、黎明が守将として戦います。まあ、それだけで終わらないのがこの小説ですが。

それでは、次回も宜しくお願いします！

曹魏の守将 貳(前書き)

〔万死一生〕
ばんしいつしやう

決死の覚悟で事に当たる事。万死に一生を得るの略。

曹魏の守将 貳

「まだです、もっと引きつけて……放てっ！」

自分の号令と共に、千を優に超える数の矢が撤退する曹操率いる部隊を追って城へと殺到してくる西涼軍に襲い掛かる。西涼の主戦力たる騎馬たちが悲鳴の嘶きを上げながら、血を流して大地に倒れ伏していく。騎馬だけでなく、それに跨る兵たちも、そして後続の歩兵たちも等しく、自分が指揮する守備隊の洗礼を受け、その命を散らしていく。自分たちが籠城する小さな城の周りには、城を囲むようにして屍が転がり鮮血が大地を濡らしている。その大半は西涼兵、しかし中には曹魏の鎧を纏ったものもある。

西涼軍との開戦から、既に五日の時が過ぎました。やはりと言うか、数の暴力には勝てないと言うか、戦況はジリジリと押されつつあります。が、無傷で無いのは西涼軍とて同じ。度重なる衝突と迎撃で、向こうも相応の被害を負っています。それでも、未だにこちらが劣勢なのには、変わりないのですが。

劣勢と言っても、こちらは基本籠城ですから今のところ問題はありません。野戦においても、一撃離脱の策により被害を受ける度合いは西涼軍の方が大きい。そして向こうの大将である馬超は少し猪の気があるのか、面白いようにこちらの誘いに乗ってくれるので、戦いやすくてなお助かります。そう言えば、開戦直後の舌戦で、曹操が馬超を泣かせてやったとか自慢していましたっけ？

まあ、それはともかく。馬超率いる西涼軍は、開戦二日目に、自分たちがこの城を攻略した際に使用した城下の井戸へとつながる天然の地下水道を発見して利用しようとしてきたのですが、無論そこ

にはあらかじめ真桜作の罫が盛大に仕掛けられていました。おかげで西涼軍は大きな被害を出してくれました。

その反省を生かしてか、三日目以降からは騎馬の機動力を生かした四方からの攻城戦を仕掛けてきているのですが、その程度に手間取るようでは守将の二つ名は語れません。しかも今ここには、自分の他に荀？と程？の二人の軍師もいます。騎馬を使った攪乱など、自分たちには通じません。

ぶつちやけ言つと、このまま行けるなら自分達、籠城しながら西涼軍を倒せます。これぞ自分の本領「守って勝利を勝ち取る」です。自軍の被害を最小限に抑え、相手には甚大な被害を与える。これ以上に理想的な勝利は無いですね。

……まあ、残念ながら現状ではそれは不可能なのですが。と言うのも、このまま戦を続けようにも、自分たちには刻一刻と兵糧の限界が近付いています。もってあと二日、しかし二日では西涼軍を追い払うことはできません。確かに西涼軍はかなり大きな被害を負っています。それでもこちらを包囲するだけの戦力はまだ残っています。

まさに絶体絶命。一刻も早く将たちの合流が叶う事を願うばかりです。

「第二部隊、右翼から回り込んでくる西涼軍に一斉射！ 掻い潜った敵兵には第三部隊が投石と狙撃で対処、限りある矢を無駄にすることは許しません！」

撤退する曹魏の野戦部隊へ、右翼から大きく回り込み横撃を仕掛けようとしている西涼軍へ対処するよう、守備隊に号令を飛ばす。

西涼軍のあの騎馬を使った用兵術を見てみると、霞の事を思い出してしまいます。彼女、元気になっているでしょうか？ お酒を飲み過ぎたりしていないと良いんですが……。

「っと、第七、第八部隊は城壁の開門、および閉門へ回りなさい。第一部隊は城壁へと殺到してくる西涼騎馬兵に対し全力で迎撃。迎撃の際は兵では無く馬を射なさい。的が大きい分、そちらの方が当てやすいでしょう」

一瞬目の前の戦況から離れそうになつた意識を瞬時に呼び戻し、今回も無事戻ってきた野戦部隊を城内に引きいれ、その隙に乗じて入り込もうとしてきた敵兵たちを守備隊の戦力を集中させて迎撃する。無数の弾幕に西涼兵は為す術無く倒れ、城門が鈍い音を立てて閉まる。

「何平將軍、曹操様がご無事に帰還なされました」

「報告ご苦労様です。守備隊の配置を撤退支援から全方位警戒に移行。敵の攪乱に注意しつつ、引き続き迎撃を続けてください」

「はっ！」

さて、自分は帰還した霸王様をお迎えに行きましょう。城壁から降り、帰還した野戦部隊の方へと足を向ける。開戦当初よりも数の減った兵士たちの中で、曹操が帰り血を拭っていた。

「曹操様、此度もご無事な様で」

「いえ、そうでもないわ」

曹操の表情が曇る。確かに、これまでの奇襲からの帰還よりも被害が大分酷いようですが……。

「馬超の方は直情的で扱いやすいのだけど、馬超の従姉妹の、あの馬岱と言う娘……なかなかの食わせ者だったわ」

「一体何があったのですか？」

「嵌められたのよ。馬岱が自分と自分の部隊を使って私たちを文字通り命がけで足止めしてくれたおかげで、馬超の騎馬隊にまんまと横を突かれたわ。おかげで馬岱の部隊は壊滅にまで追い込めたけど、こちらは大分被害を受けたわ」

「なるほど……それで、被害の程は？」

「野戦部隊の半数が死傷、左翼を率いていた真桜が馬超に手傷を負わされたわ。命に別条はないけど、回復するまでは戦場には出せないわね」

「……困りましたね、それは」

曹操と雲行きの怪しい話をしていると、螺旋槍を右手に左腕を包帯で吊った李典が、申し訳なさそうな表情でこちらへとやってくる。

「すまん、何平の兄さん。情けないことやけどこの通り、やられてしまったわ」

一二の腕に巻かれた包帯に血を滲ませ、痛みからか若干脂汗を流す李典。確かにこれでは、戦場に立たせるのは無理と言うものでしょう。李典の武器は両手で扱う槍ですから戦闘も不可。傷の痛みを抱

えたまままでの陣頭指揮は、李典だけでなく兵士たちの命も危険にさらします。

「分かりました。次回からの陣頭指揮は自分が受け持ちましょう。代わりに李典には守備隊の指揮をお願いします」

「ホンマにすまん。ウチが不甲斐ないばかりに……」

「いえ、かの西涼の猛将錦马超と打ち合って、生きて帰ってこれたのですから。李典は不甲斐なくありませんよ。むしろ、これまでの見事な戦いっぷりに脱帽です」

「何平の言う通りよ真桜。よく死なないでいてくれたわ」

「何平の兄さん、大将……」

涙声になる李典に自分は背を向ける。女性の涙は安くはありませんからね、涙を流す李典の慰めは曹操に任せましょう。自分は兵士たちの治療と再編を手掛けなければなりませんしね。

「衛生兵は重傷者の治療を最優先で行いなさい。動ける者は炊き出しの手伝いを。程？殿、炊き出しの方の指示をお願いしますね」

「おお、バれていましたかあ。気付かれないようにしていたつもりだったのですがね」

「これでも自分、将ですから」

物陰からヒョコツと出てきた程？に炊き出しの方は任せて、自分は救護所の方へと向かう。さてさて、お酒と塩水、用意していかな

ければいけませんね。

（馬超）

「大丈夫か、蒲公英？」

「うん、かすり傷程度だから心配いらないよお姉さま」

天幕の中の寝台で横になりながら、蒲公英は笑いながらそう言う。蒲公英が提案した先の作戦のおかげで、曹操軍の部隊に大きな打撃を与えることができた。でも、足止め役を買って出た蒲公英も曹操によって傷を負わされてしまった。本人はかすり傷だと言ってるけど、右足に巻かれた包帯から滲んでいる血が、かすり傷程度の傷じゃない事を物語っている。

「ごめんな蒲公英、あたしがもっとしっかりしていれば……」

「気にしないでお姉さま。別に一生歩けなくなるとか、そんな怪我じゃないんだし」

「でも……」

「もう！ お姉さまがそんなんじゃ、兵のみんなが動揺しちゃうでしょ！ ほら、お姉さまは何時もみたいに、少し行き過ぎた位に元気な方が似合うよ！」

「な、行き過ぎって……それは少し言いすぎなんじゃないか!？」

あたしだって、これでもちゃんと普通にしてるつもりんだぞ！

「そうそう、お姉さまはそれくらいの方がいいよ。ほら、蒲公英の事は良いから、お姉さまは自分のすべきことをやって。……ね？」

真つすぐな瞳をあたしに向けながら蒲公英が言う。そうだな……折角、蒲公英が作ってくれた好機だ。無駄にするわけには、行かないよな！

「分かった。あたしが絶対に、曹操をぶっ倒してみせる。だから、蒲公英も早く怪我を治せよ」

「うん！ 頑張つて、お姉さま！」

最後に、お互いに笑い合つてあたしは天幕を出る。外では少し離れたところで、蒲公英を心配してか部隊の兵たちが心配そうな顔で待機していた。出陣のときにはあれだけの兵たちも、大分逝ってしまった。特に蒲公英の部隊は、足止めを引き受けた際に一番の被害を受けた。死人と負傷者の数は半端じゃない。出陣するには、部隊を一度解隊して再編する必要がある。

「馬超様、馬岱様の様子は」

「大丈夫だ、命の心配はない。ただ、足を負傷したから治るまでは出陣はさせられない」

「そうですか。ともかく、ご無事な様で何よりでございます」

蒲公英の容体が心配無用な事を聞いて、兵たちが安堵の表情を浮かべる。

「心配掛けたな。それで、部隊の再編の方はどうなってる」

「はっ。既に編成を終え、負傷兵は後方へと下がらせました。何時でも出陣できます」

「そうか。けど、大分兵たちも少なくなっただな」

「敵の迎撃による負傷兵が多く、動ける兵の数だけならば既に半数にまで減っています」

死亡じゃなく、負傷である辺りがまだ救いだな。それでも、実際に動かせるのは当初の半数。でも、曹操の方だっただこ数日の交戦でかなりの被害を受けてるはずだ。兵数の差なら、未だにこっちが有利なはず。それに、曹操の奴は籠城してるけど、あの規模の城にあの兵数なら、そろそろ糧食の限界が来てもおかしくはないはず。この戦い、まだあたしたちには十分に勝機がある。

「それからもうひとつ、先程伝令から報告があったのですが」

「なんだ？」

「我らの苦戦を知ったのか、馬騰様が援軍をこちらに送ってくれたとのことだ」

「母様が？ それは確かなのか」

「はい。その援軍からの伝令ですから、もう間もなくこちらに到着するのではないかと」

援軍、か。……よし、ならこれを利用しない手はない！

「作戦を思いついた！ 私たちはこのまま出陣せずに、ここで曹操が攻めてくるまで待機するぞ！」

「し、しかし馬超様！ それでは今までと同じ結果に！」

「だからこそその援軍だ。蒲公英が使った作戦を、もう一度ここで使う！ あたしたちが囮と足止めを引き受けて、後方からの援軍に攻撃してもらおうんだ」

「な、なるほど。敢えて同じ策を二度使うのですか……」

ふふん、向こうもよもや、一度使った策を二度も使うとは思わな
いはず。先の戦いでこっちはその策を使ったせいで大きな被害を受
けているんだし。それに包囲網を敷いているこの状況だ、曹操の奴
はこっちに援軍が向かってることも知らないはず。

「それで、その援軍つてのは誰が率いてるんだ」

「それが、その……恐らく馬超様も驚くような人物ではないかと」

「なんだよ、もったいぶらずに教えるよ」

そう言っつてわたしは兵に答えを即。そして兵の口から、増援として兵を率いて向かってきている將の名を聞いた瞬間、私はその予想外すぎる名前に驚愕して、思わず大声で叫んだ。

〜何平〜

西涼軍による命がけの作戦により予想外の被害を被った翌日、自分たちは同じく大きな被害を受けた西涼軍の立ち直らぬうちに、再度攻撃を仕掛けようと城門前で出陣の準備をしている。動ける負傷兵と城の守備隊の兵とを交代し、あくまでも野戦戦力の低下を防いでの出陣。城の迎撃能力が若干低下しますが、ここで西涼軍を一気に叩かなければ、そろそろ到着してもおかしくないであろう遠征組が合流する前に、こちらが落とされてしまうのは火を見るより明らか。

兵糧ももはや限界、もって今日と明日。西涼軍の猛攻を防ぎきるためにも、今日の一戦が自分たちの命運を決める重要な一戦。決して、失敗するわけにはいかない。そう、失敗するわけにはいかない

のです。ですが……

「曹操様、今回の出陣……自分、何か嫌な予感がするのですが」

「嫌な予感？」

「はい。こう、第六感的な感じでこう、ピピピっと」

「びびび？ ……よく分からないけど、単なる思い過ごしでしょう。それに、どちらにしろ状況が悪いことには変わりないわ」

確かに現状も十分に最悪と言えるレベルですが、それにさらなる拍車をかけるようなもつとマズイ出来事が、出陣する自分たちを待ち受けている気がしてならないのですよ。ついでに言うと、自分個人の事としても嫌な予感が……。

しかし、西涼軍が陣内で大人しくしてるこの好機に、攻め込まないというのもまた愚行。向こうも攻撃に備えて迎撃準備くらいは整えているでしょうが、勢いに乗せた一撃離脱での攻撃ですから、そこはあまり気にしなくてもいいでしょう。攻撃を仕掛ける以上、どんなに策を練ろうとも犠牲が出るのは当たり前なのですから。

「本当に、思い過ごしだと良いのですが……」

まあ、たとえそうでなろうと、自分たちは出陣しなければならぬのですから、今更そんな事を言っても意味のないことですか。言い知れぬ不安を胸に抱きながら、始まった曹操の熱弁に耳を傾ける。

「魏の勇者たちよ、この一戦こそが、我らが生死を分かち戦となる

！ 皆、我が後に続け！ 我に続き、生ある道へと突き進むのだ！」

曹操の熱弁に鼓舞され、魏の精兵たちは雄叫びをあげながら己の得物を掲げてその士気を一気に上げる。

「開門せよ！」

曹操のその一言に、重い音を響かせながら城門が開く。目指すのは、包囲網の要である马超の陣。総大将の陣を襲い、指揮系統を乱して撤退時の危険を少しでも減らすための策。撤退の時期を一步読み間違えば全滅の可能性もある、諸刃の策でもありますかね。

「全軍、出陣せよ！」

勇ましい雄叫びと共に、曹魏の兵たちが凄まじい勢いで出陣していく。自分もその例にもれず、雄叫びこそ上げてはいないものの、李典がいらないことで空いた穴を埋めるために部隊の半数の陣頭指揮を執る。突出する曹操の率いる部隊を援護するための部隊を指揮する役割。全く本当に、責任重大な役割を背負うことになったものです。

「魚鱗陣を敷け！ 敵部隊に痛撃を加えた後、即座に反転することを忘れるな！」

さてさて、通り魔部隊のお出ましですよっと！ 横陣の数段重ねで部隊を編成する西涼軍に、勢いづいた曹操軍が障子を突き破るが如くの勢いで突っ込む。突き殺され、踏み殺され、西涼兵の死体が部隊の通り過ぎた後に転がる。決死のその突撃に、西涼軍の横陣があつという間に分断され、断ち切られた部隊の兵が散り散りとなつて逃げていく。

……そう、まるで最初から、破られることを想定していたかのよう
うに。

「（これは……まさか!？）」

散り散りになった西涼兵たちが、こちらの部隊の後方に回り、自分たちの退路を塞ぐようにまたもや横陣を数段重ねに敷く。

城を包囲するため、広範囲に兵を布陣させている西涼軍は一陣に配置されている兵の数が少ない。それゆえに、一撃離脱での戦闘ならば包囲される前に自分たちは撤退することができる。勢いづいた部隊を止めるには多大な被害を覚悟して迎え撃つ必要がありますから、包囲網維持のために無駄に被害を出したくはない西涼軍は迎撃では無く、撤退する自分たちへの追撃に回るしかない。しかし先日の戦いでは、迎撃による足止めにより西涼軍が出た所為で、双方ともに大きな被害が出るようになりました。西涼軍側はこの戦いで、主力の一隊であろう馬岱の部隊を潰しています。

だと言うのに、まさか今度は、総大将の馬超自らとその部隊をもつてして、二度目の足止めによる挟撃策を使ってくるとは。いやはや、これは流石に予想外でした。……しかし甘いですね。確かにこれで、こちらはまた手痛い被害を受けるでしょうが、今回のこの策には穴がある。

総大将自らが足止めに出て来てくれるというのなら、こちらはありがたく、総大将もろとも足止め部隊を潰してあげましょう。一撃離脱を忠実に守って、撤退しようとしている曹操様には悪いですけどね。

「第一部隊と第二部隊は自分に続きなさい。自分たちは馬超の頸を取りに行きます。残りの部隊はそのまま曹操様の撤退支援を。この戦、勝てますよ！」

万が一にも曹操が討たれる事のないように、指揮する部隊の半分以上を曹操の部隊へと回し、分隊を二隊のみを率いて自分は揺れる馬の牙門旗の下へと向かう。

騎馬の扱いでは西涼兵に譲るところですが、歩兵同士のぶつかり合いなら魏の兵士たちの方が勝ります。さらに言えば、今率いている部隊は李典の部隊。ひいては自分が調練の補佐を務めた部隊です。ゆえに自分の手足の様に動かせるこの部隊ならば、この程度の布陣を破る事など造作も無き事。敵陣の隙間を縫って進み、牙門旗周辺に敷かれていた方円陣を強引に食い破ってようやく牙門旗の下へと到着する。即座に自分たちを取り囲もうとする西涼兵たちを、部下たちが決死の勢いで抑えてくれる。

部下たちの働きに報いるためにも、自分は手早く馬超を討ち取ることにしましょう。

自分の目の前に佇む、十文字の槍を手に長い茶髪のポニーテールを風に揺らす少女の前へと進み出る。明らかにそこらの兵とは放っている威圧感が違いますから、恐らくは彼女が馬超……武将の女性化にはなれたつもりでしたが、どうしてこう女性化した将たちには可愛い娘が多いのか……。

「さて、あなたが西涼軍の大將……錦馬超で間違いないですね？」

「ああ。あたしが馬超だ。西涼太守、馬騰の娘のな」

「そうですね。ならば話は早い……その頸、いただきます」

「へっ、やれるものならやってみろ。あたしの頸はそう簡単には取れないぜ！」

「曹魏の守将、何平の名に懸けて……討ち取って見せますよ！」

腰の剣に手を掛けるのと同時に剣を抜き放ち、構えをとること無く马超へと斬りかかる。一瞬驚きの表情を浮かべた马超は、次の瞬間には槍を跳ね上げ自分の居合抜きを弾く。時間が惜しいのでこれを仕掛けてみたのですが……なるほど、通じませんか。

「不意打ちとは、随分姑息な手を使うんだな」

「不意打ちとは心外です。ちゃんと名乗ってから斬りかかりましたよ？」

「そんな屁理屈言ってられるのも、今の内だけ！」

腰を沈めた马超が、勢いよく地面を蹴って槍の真骨頂たる突きをチャージを放ってくる。これが普通の直槍なら受け流してカウンターを入れたいところですが、面倒なことに马超の槍は十文字槍。これは、跳ね上げて軌道をずらす他無いですね。

「おりゃあああああ……！」

「はあっ！」

马超の必殺のひと突きを、槍の側面に右逆袈裟斬りの剣撃をぶち当てることで上方へとそらす。その勢いそのまま体を時計回り捻り、

続けて横一闪を馬超の胴へと放つも、馬超も跳ね上げられた槍の勢いを利用して、同じ様に石突きを下から跳ね上げる。横一闪の軌道を腕の力で強引に変え、跳ね上がってきた石突きを剣を振り下ろす形で迎撃する。得物同士がぶつかり合った衝撃が、自分の両腕を突きぬける。なるほど、華雄や夏侯惇ほどパワーファイターではありませんか。いえ、それでも十分強いですけど。

馬超の追撃を受けないよう、バックステップで馬超から距離を取る。

「どうしたらその細腕でそんな力が出せるのか。あなたと言い夏侯惇と言い、この世界の永遠の謎ですよ」

「へっ、そう言うあんたは、言っただけに對して力は強くないみたいだな」

「まあ、自分は技だけが頼みですから」

もしさっきのチャージを真正面から受け止めたら、たぶん自分は吹っ飛ぶでしょうね。夏侯惇の時は鎧迫り合いでも押されてましたし。

しかし、流石と言うべきか馬超は強い。これは予想以上に時間がかかりそうです。申し訳ありません兵の皆さん、もう少し踏ん張ってください。

「いくぜ！ はあああああ！」

再度、馬超の気合のチャージ。さっきのやり方ではまた同じ展開になるでしょうし、ここは一つ危ない橋を渡ってみますか。

馬超の槍をギリギリまで引き付ける。食らえば一撃で内蔵を丸ごと貫かれるだろう一撃。見極める、そしてかわせ。ここぞ言う瞬間を、槍が自分を捉えるその一歩手前を知覚すれば、

「避けられない一撃など……無い！」

「なっ!？」

馬超のチャージが自分を貫くその一歩手前の瞬間に、体の重心を左に傾け最小限の動きで槍の軌道上から己の体を外す。しかし

「ぐっ！」

十文字槍の特徴たる、水平に突き出した刃が自分の右の横っ腹を抉る。走った痛みが体が反応しそうになるのを意志の力で抑え、すれ違いざまに馬超の胸を抜く一閃を放つ。しかし、確実に入ったかのように思えたその一撃すらも、馬超は体を最大限に捻ることで、致死の一撃を右腕に少し深く入っただけの裂傷へと変える。それでも、自分が放った一撃は馬超の右腕の皮膚と血管を切り裂き、筋肉を傷つけ、それゆえに馬超の右腕から血が流れ出す。

「まさかあたしの一撃を、たった一度見られただけで見切られるとは思わなかったよ。なるほど、確かにあんたの技は凄いようだ」

痛みに顔をしかめながらも、馬超が関心した声で言う。

「完全には避けきれませんでしたけどね。やはり、十文字槍を相手にするのはやりにくい」

それにしても……あー、横っ腹が痛い。もの凄く痛い。ヤバいで

す、血が普通に流れてます。ドバドバじゃない辺り幸いですが。

「さて、馬超殿は腕を負傷したわけですが……まだやりますか？」

「舐めんな！ これくらいの傷、どつってことない！」

「ならば、遠慮は無用で！」

槍を構えなおした馬超へと、再び袈裟斬りを放つ。やはり腕を負傷しているせいか、槍の動きが先程より遅い。これならば懐に入つて一方的に戦いを持ち込むことができる。

振り下ろされる槍を避け、その隙に懐に潜り込んで剣を振る。腕を負傷していない自分は、剣を振る速度にはなんら影響は出ませんが、体を動かす移動自体に影響が出ます。恐らく、先程よりも自分の動きは多少鈍っているでしょう。方や得物の速度に鈍りが生じ、方や体の動きに鈍りが生じる。プラスマイナスゼロ、しかし対峙する距離はかなり縮まりました。先程までは大きな一撃とそれに対するカウンターの応酬しかなかった戦いも、今は剣と槍が壮絶に打ち合う連撃の応酬。致命の一撃こそ入らないものの、少しずつ互いの体に裂傷が刻まれていく。

そして、数々の裂傷がさらに自分たちの動きを鈍らせていく中で、ほんの一瞬、馬超の槍の動き止まった。

その隙だけで、決着をつけるのには十分です。

槍を右手で構えた剣で抑え込み、左手に拳を作る。そして修行を初めて二月、ようやく形になってきた勁道へと気を流し込み拳に気を蓄えて、そのまま馬超の腹部へとブローを叩きこむ！

「せいっ！」

「あうっ！！」

拳が馬超の腹部にめり込んだ瞬間、拳に蓄えていた気を馬超に向けて放出する。とは言え、楽進ほどの威力が出るわけでは無く、せいぜい衝撃を多少強くするだけ。致死レベルの威力には到底及ばない未熟な気功拳。それでも、相手を戦闘不能に持ち込むには十分な威力。拳を受けた馬超が、ゆっくりとその場に崩れ落ちる。と同時に、それを見た周りの西涼兵の動きが停止する。その隙に、魏軍の兵たちが自分を中心に方円陣を敷き、隊列を整える。

「さて、西涼の兵の皆さん。あなた方の大将の命は、自分の手中にあります。大将の命が惜しければ、城への道を開けてくれると嬉しいのですが？」

そう言いながら、気絶し地面に倒れ伏す馬超に剣の切っ先を向ける。まあ、大将の命を盾にした脅迫と言う奴ですね。自分としてはあまりこういう手は好きではないのですが、こうでもしないとこの完全に囲まれた状況から脱出することもできませんので。

「あまり時間をかけたくはないので、ご決断はお早めに」

その言葉に、悔しさを顔に滲ませながら武器を下げて城の方向への道を開ける西涼兵たち。今にも自分を殺してやりたいと言った感じの視線が自分にバシバシ集中しています。いや本当に、これでは完全に悪役ですね。なんだか魏に来てからこんな役割が増えたような……あんまり、嬉しくくないですねえ。

「では、兵の皆さんは先に帰還してください。自分は、ここでこうしている必要がありますから」

西涼兵とはうって変わって、自分の身を心配してくれながら、負傷兵に肩を貸したりして撤退していく曹魏兵たち。さて、兵たちが包囲網から抜け切るのを見計らつてと。

「それでは、自分もこれにて失礼します！」

地面に転がる馬超を素早く担ぎ上げ、西涼兵が唾然としている間に逃走！ え、馬超はそのまま返さないのかつて？ 馬鹿言っちゃいけません、ただでさえ作戦方針を無視して独断専行を行ったんですから、敵大将を捕縛するくらいに戦功を上げないと曹操に何を言われるか分かったものじゃありません。最悪、首が落ちます。

あまりに突然の事に意識を飛ばしていた西涼兵たちが、我に戻って怒りの雄叫びを上げながら自分の後ろを追ってくる。いやあ、一人担いでこの逃走劇。ぶっちゃけこれ捕まるんじゃないかね、とか思ったりしてます。まあ、捕まりかけたらまた脅迫と言う手段を取るしか無いでしょう。まったく、自分は何処その悪の手先なのではないと言うのに　！？

「くっ！」

自分に向けられた明確な殺意を感じ取り、即座に姿勢を低くして前に飛ぶ。肩に担いだだけの馬超の体が激しく揺れますが、まあ気絶しているので大丈夫……ふむ、馬超って結構胸あるんですね。あ、いえ、もちろんこれはわざとでは無くて不可抗力ですよ？ 馬超の体が揺れた瞬間に、背中に感じるものがあっただけで、決してそれを狙った訳ではありませんからね？ ありませんったらありません

からね！

崩れた態勢を立て直し、避けた瞬間自分の後方を通り過ぎて行ったものの正体を確かめる。地面に突き刺さっているのは、明らかに普通の弓では放てないような大型の矢。さて、西涼の大将を助ける義理があつて、かつこんな馬鹿げた芸当ができる人を、自分は一人しか知りません。

馬超を担ぎ直しながら、殺気の発信源へと向き直る。地平線に見える、西涼軍の援軍と思わしき軍勢から一騎突出しこちらへと凄まじい勢いで向かってくる、赤い馬に跨り大きな弓を構えた赤毛の少女。

「やれやれ、嫌な予感の正体はこれでしたか……」

てつきり馬超の特攻ともいえる先の作戦がそうだと良いなあ、なんて思っていたのですが……まさかそれ以上に厄介なものが来るとは。自分、何か悪いものでも憑いているんでしょうかね。

大きくため息をつきながら、自分の目の前で馬を止め弓の代わりに獐猛な刃を持つ方天画戟を担ぎ、大地へと降り立つその少女を見る。二本のアホ毛が特徴的なその少女の名は

「久しいですね、恋。いえ、飛將軍……呂奉先」

かつては仲間として、肩を並べて戦ったその少女。比類なき武を持ち、三国無双の肩書を持つ最強の武將……そう、飛將軍呂布。

戦場において、最も相手にしたくない人物が今、自分の目の前に立ちただかった。

曹魏の守将 貳（後書き）

まだ続きます、涼州軍激突編。本当はもう少し早く投稿するつもりが、確定ボタンを押す直前で何故か睡魔に襲われておりました。一体、あれはなんだっただ……？

今回はご都合主義的な展開がいくつかあるので、そこらへんに関してはどうぞお許しを。やっぱり戦闘描写って難しいですね。作者は何度書いてもそう思います……。

それでは、次回も宜しく願います。

曹魏の守将 参(前書き)

く水火を辞せず(すいかをしせず)く

あらゆる苦難を厭わず、物事をやり抜く決意を言う。

曹魏の守将 参

立ちほだかる恋を前にして、自分は馬超をゆっくりと地面に下ろす。恋の放つ存在感が自分たち以外の人物がこの場に踏みこむ事を許さないのか、それとも恋さえいれば馬超の奪還に己たちは無用でも思っているのか、西涼兵たちがこっちなだれ込んでくる様子も見受けられませんし、まあ大丈夫でしょう。

しかし、なんと言うか……ボスと言っても過言では無い馬超を苦労して倒し、後は追っ手から逃げ切って城に帰還するだけだと言うのに、ここに来てまさかの追加ボス登場ですか。しかも戦場において一番相手にしたくない人物と言う、嫌がらせの範疇をぶっちぎりに超えたナイス過ぎるチョイス。マの付く人ならさぞ喜ぶ、いえもう天にも昇る気分になるでしょうね。まあ実際に方天画戟の一撃で天に昇らせてくれる人物が目の前にいるわけですけど。

全く、これが某無双なゲームだったら、近くに米俵でも置いてあって、壊したらおにぎり登場、食べたら即体力回復！……みたいな事も出来るんでしょうけど、生憎とそんな都合の良い事があり得るわけもなく、今も馬超に挟られた横っ腹から、先程よりも勢いは収まったとは言え血を流しながらこうして立っている訳です。ハッキリ言つて、この体の状況で恋と戦うなんて、それこそ虎の前に素っ裸でルパンダイブを敢行するよりも無謀です。

ここは何とかして、戦わずに済む方法で乗り切るしかないですね。まあ、周りからの無粋な横槍も入らないでしょうし、それにこうして恋とは久しぶりに会えたわけですから、折角の機会に恋と話でもしながら方法を模索するとしましよう。

……。

ぐっ、右手が……恋の頭を撫でてやりたくて疼く！ 恋の涙に
えたい、長い間心配させてしまった分、慰めてやりたい。ですが、
ここは戦場。そして今は、恋と自分は相対する敵同士。この衝動は、
なんとしても抑えなければ……！

「黎明？」

「……いえ、大丈夫ですよ。それと申し訳ありません、恋の涙に、
言葉だけでしか応える事が出来ずに」

「……気にしない。ここは戦場だから、黎明は正しい」

少しだけ寂しそうな顔をして、ごしごしと涙をぬぐう恋。そして
再び向かい合った恋からは、強烈な威圧感が自分に向けて放たれて
います。今や、自分の目の前にいるのは友として日々を過ごしてき
た恋という一人の女の子では無く、万もの敵をたつた一人で葬る三
国無双の呂奉先。さっきまで涙を流していた瞳も、鋭い眼光を宿し
て自分に向けられている。

「恋の役目は、翠を助けること。だから、もし邪魔するなら……殺
す」

翠、と言うのは馬超の真名なのでしょう。なるほど、武将間でも
真名の交換が済んでいると言う事は、どうやら月様たちは馬騰たち
とは上手くやっている様ですね。安心しました。

「天下に名高き飛將軍と戦場で剣を交える、武人としてはそれもま

た一興。しかし、生憎と自分は今はこの有様。ゆえに呂布、ここは一つ取引をしましょう」

「……取引」

「ええ。呂布、あなたの目的が馬超の救出だと言うのなら、取引に応じてくれれば今すぐこの場で馬超はそちらにお返ししましょう。ですが、自分も好き勝手やった手前、手ぶらで帰ろうものなら主君に合わせる顔がありません。馬超をそちらに返す、その代わりと言つてはなんですが、今回はこれで軍を退いてください。もし駄目だと言つのなら、自分は迷いなくこの剣を馬超に振り下ろしましょう」

未だに気絶し眠る馬超に抜き放った剣を向ける。今の自分と恋との間の距離は、恋ならば一瞬で詰められる距離でしょう。しかし、その一瞬で自分は馬超の命を奪うには事足りません。恋もそれは分かっているでしょうから、恋の役目が馬超の救出な以上、馬超を見捨てて自分を殺しに来ると言う事はないでしょう。

「馬超を返してもらえる代わりに、そちらはただ軍を退くだけ。どうですか、呂布。そちらにとっても、悪い話ではないと思いますか？」

この取引におけるこちらの利は言うまでもなく、最悪の現状からの脱出。四方を完全に囲まれ、しかも野戦部隊は深刻な被害を受けた状態。遠征部隊の合流も間に合いそうにありませんし、その上、敵方の援軍に呂布が来たとなれば、この戦にもう勝ち目はありません。いえ、馬超をこうして生け捕ったのですから、勝負には勝つたと言えるかもしれませんが。ただまあ、国同士の戦と言つ観点から見れば完全に敗北ですが。しかし、そこいらの将ではなく、多少無

理してでも馬騰の娘である馬超を生け捕りに出来たのは僥倖としか言いようがありませんね。おかげで何とかこの戦、敗北ながらも生き残ることは出来そうですから。

将一人のために、大国の頭を潰せる絶好の機会を失う。普通ならば将を見捨て、大国を潰す方を選ぶことでしょう。なにせ、このようなチャンスは二度とは訪れるものではないのですから。しかし、それが我が子となれば話は別のはず。まあ、中には子を見捨てて敵国を潰す方を選ぶ人もいるでしょうけど、援軍を送ってきたくらいですから、少なくとも馬騰には我が子を思う気持ちはあるはずですから、ここで恋が軍を退く事を承諾したとしても、それを責めるようなことはないでしょう。

「さて、どうします？」

「……分かった」

恋は赤兔馬に跨ると、後方に待機する部隊の方へと向かう。恋の帰還といきなり撤退の命令に西涼軍からは明らかな動揺が見て取れます。そしてしばらくの後、本隊や城を囲んでいた部隊にも撤退の伝令が行き届いたのか、西涼軍が一斉に後退を始める。と同時に、恋が赤兔馬を走らせこちらへと戻ってきた。

「ねねに、帰るように言ってきた」

「そうですか。では、こちらにも約束を果たさなければいけませんね」

剣を鞘に納め馬超を担ぎあげる。そして恋と自分との先程の距離の中間の地点に馬超を下ろし、元の位置まで自分は戻る。

「どうぞ、馬超はお返しします。ですが、この槍はこちらが頂きます。馬超を倒した証にね」

馬超を恋に受け渡す際に地面に突き刺してきた、背後の十文字槍を指さして言う。恐らく曹操はこの一連の事に関して予想を付けているとは思いますが、まあ一応は念のためと言う事で。

「さて、これにて此度の戦は幕引きですね。それでは、自分も帰るとしましょう。……恋、久しぶりに会えて嬉しかったですよ。ですが、月様たちには今日この場で、自分に会ったことは言わないでくださいね」

「どうして？」

「どうしても。これは自分の個人的なお願いです。聞いてくれますか？」

「……分かった」

「ありがとうございます。……では」

ふう、これで月様ドッキリ大作戦の崩壊はなんとか防ぐことが出来そうですね。恋が口を滑らさなければですが……。

わずかな不安を残したまま、自分は恋に背を向ける。取引が終わった今、これ以上の無用な接触は自分の立場に悪影響を及ぼしかねません。名残惜しいですが、自分も城に戻りましょう。

「……黎明」

そう思った矢先、背後から呼ばれた自分の名前に思わず振り返る。恋の呼びかけを無視するとか、そんな事自分にはできませんから。

「どうしました、恋」

「……またね」

それは、再会の約束。虎牢関で自分が恋と交わした、再び会い見える事を願った時と同じもの。

「ええ、いずれまた」

悩むまでもなく、自分はもう一度、再開の約束を恋と交わす。自分の知る限り、恐らくはそう遠くないうちに恋とはまた会うことになるでしょう。その時、再び会う時の立場は敵同士としてか、それとも。

約束を交わし、一つ頷いた恋は馬超を赤兎馬の背に乗せ、自身も赤兎馬に跨り去っていく。男一人……血に染まった戦場に立ち尽くしていると言うのも寂しいものですし、自分も戻るとしましょう。恐らくは帰って一悶着あるでしょうが、それはまあ、甘んじて受けますよ。

さてさて、どんな言い訳をするか、一つ考えとしましょうかね。

曹操軍と涼州軍との衝突は、互いに大きな被害をもたらしてその幕を下ろした。

戦いの中、一度は窮地に陥りかけた曹操であったが、何平の活躍によりそれも未然に防がれる。

戦いが終結した翌日、反抗勢力鎮圧に向かっていた遠征部隊の面々が曹操のもとへと合流を果たす。

それぞれが己の任を果たし、反抗勢力たる豪族は皆沈黙。これにより、曹操は完全に河北四州を平定した。危険な橋を渡りながらも、大きな賭け勝つことができたのだ。

己の命を危険にさらしながらも目的を果たした曹操は、一度本拠である許昌へと帰還する。

そしてそこで行われたのは、河北平定を祝う祝宴などではなく、何平の独断専行に対する処罰の論議であった……。

「さて、何平。何か申し開きはあるかしら？」

目の前の霸王こと曹操が、額に見た目にも分かりやすい青筋を浮かべて静かな怒気をまき散らしながら言う。いやはや、数日前に甘んじて受けるだなんて言った自分を殴りたい。これもう、ひと悶着なんてレベルじゃないですよ。関羽の時と同じく、立派に軍法会議です。ついでに言うなら、罪状は独断専行。しかも今回は、関羽の時とは違い曹操軍に被害を出した形での処罰ですから、下手したら自分の頸が飛びますね。うーん、面倒なことになりました。

「何についての、と言つのは愚かですね」

「別に構わないわよ？ まあその後、貴方が再び言葉を発することができるとかどうかは、保障しかねるけどね」

それ、暗に「そんなふざけた発言したら速攻討ち首」って言うてるも同じです。やれやれ、一応自分は曹操を、ひいては魏と言う国を破滅から救ったはずなのですけどね。一体何が、彼女の琴線に触れてしまったのやら。

「そうですね……。では、僭越ながら申し上げますが、此度の自分

の独断専行、確かに軍規においては重罪に値するもの。それは自分も認めましよう。ですが、自分は戦功を得んがためなどと私利で動いたわけでは無いと言わせていただきます」

「では、何のために動き、そしてその様な有様になり果てた？」

「西涼軍の決死の策を打ち破らんがため、西涼軍の大將たる馬超を剣を交え討ち取ろうとしたからです。幸いにも、自分は馬超を打ち倒し生け捕ることに成功しました。それは、そこにいる李典の部隊の兵たちと、自分が持ち帰ったこの馬超の槍が証言してくれるでしょう」

証人として、この場に呼び出されていた兵たち数人が馬超の十文字槍を手に頷く。まあ、彼らは自分と馬超の戦いを、周囲の西涼兵を抑えながらも間近で見ていた兵たちですから。いわゆる、激戦を潜り抜けた生き証人と言う奴ですね。よくぞ証人役を買って出てくださいました。

「だが、城に戻って来た時のお前は、生け捕った馬超を連れてはいなかったな？」

なぜなのかは曹操も当然ながら知っているはずですが、これはまあ形式上の、軍規に則しての質問なのでしょう。

「城に帰還する途中西涼軍の援軍と遭遇し、そしてある取引を持ちかけ、その結果馬超の身柄を引き渡しました」

「王たる私に断りを入れず、貴様だけの判断で国同士の問題に裁量を下したと言うのだな？」

「はい、そこは否定致しません。ですが、自分はあの状況の中、魏にとつて最良の選択をしたと自負しております」

自分は魏に対して絶対の忠誠を誓っているわけではありません。ですが、自分の矜持はしつかりと貫き通すと決めています。如何様な国であろうと、今はそこに属している身ならば、自分の力の至る限り守り抜く、この信念に揺るぎはありません。

「なぜそう言える？」

「自分が西涼とした取引は、馬超を引き渡す代わりに西涼軍は軍を退くと言うもの。あの状況において西涼側に援軍があるものなら、確実に自分たちは押し負け、曹操様も討ち死になさっていた事でしょう。しかもその援軍を率いる将が、かの飛將軍呂布であつたならばなおさらです。無論、こちら側の援軍の到着を見込んで限界まで籠城するという選択肢もありましたが、結局こちら側の援軍が合流したのは戦が終わつた翌日。その点においても、馬超一人を引き渡すだけで戦を無事収束させた自分の裁量には、なんら間違いはなかつたと思つのですが？」

そう、恋に掛ければあの程度の城など、策うんぬん以前に力押しで破られます。しかも、未だ幼く程？や郭嘉に後れをとるとはいえ陳宮もあの場にいたわけですから、なおのこと戦況分析が敗北寄りに傾きます。守備隊は手負い、野戦部隊は被害甚大で糧食も無し。限界まで籠城する手もあつたとは先程言いましたが、ぶっちゃけ遠征隊が合流する前に城を破られたでしょうね。戦場における恋の、飛將軍の存在の影響力はそれだけ大きいと言つ事です。実際に共に戦つたことがあるからこそ分かります。

「ゆえに自分は、此度の独断専行に対する処罰について、これらの

戦功による処罰の打ち消しもしくは減刑があつてしかるべきだと思うのですが、いかがでしょう?」

なんだか状況を整理しながら弁解をしている内になおのこと自分に落ち度が無いような、と言つかむしる自分かなり頑張ったじゃないな気がして来て、思わず曹操に対する態度が悪くなる。当然ながら、そんな態度を取ってしまうと過剰に反応してしまう人がいる訳で……。

「貴様あ、華琳様に対してどこまで無礼を働くつもり」

「春蘭、引きなさい。発言を許したのはこの私よ」

「しかし華琳様っ!」

「下がれ夏侯元讓! 私は今、何平と話をしているのだ!」

曹操の怒号が王座の間に響き渡る。うむう、なかなかの音量に耳が痛いです。

「っ!?!? ……御意」

それを真正面から叩きつけられた本人は、びくりと体を震わせて大人しく下がる。徐晃と荀?が何も言わなかったのは、こつなることが分かっていたからですかね?

「見苦しい所を見せたわね」

「いえ、お気になさらず」

「そう……。では何平、お前に処罰を言い渡す。何平の此度の戦における戦功は全て剥奪、さらに何平を七日間の独房監禁に処す」

「……は？」

間抜けな声が、自分の喉から意図せずして飛び出す。いやまあ、流石に無罪は無いだろうと思っていましたけど、まさかここまで減刑してくれるとは。七日間、ただ独房で静かにしてればいいだけで……ああ、そうですか。なるほど、そう言う事ですか。

「言うておくけど、これは王の決定。覆ることはないと思いなさい」

「……御意」

「では、これにて軍議を解散する。徐晃、何平を独房へと引っ立てよ」

「御意」

曹操の命を受けた徐晃と、その部下の兵二名に連れられ、自分は独房へと向かうため王座の間を後にした。

曹魏の守将 参（後書き）

と言う訳で、原作通り遠征部隊が間に合うことなく、何平の独擅場で終わりました。恋とのバトルを期待していた読者様には申し訳ないです。

原作ブレイクしたので少々違和感のある所もあるでしょうが、そこは作者のクオリティの限界です。ごめんなさい。

それでは、次回も宜しくお願いします。

独房談話 卷(前書き)

く人こそ人の鏡く

他人の言動は、自分の至らなさを直すよい手本となる。

独房談話 壱

「入れ」

徐晃に連れられ、やってきたのはご存知の通り城の地下にある独房。いくつか並んでいる独房の内、今は誰も使っていない一番奥の独房へと自分はいれられる。中は思ったほど汚れてはいませんが、お世辞にも綺麗とは言えない有様。うゝむ、これはちよつと……快適な独房ライフを過ごすためにも少し掃除する必要がありますが、うです。

これから数日を過ごす独房の中を見回していると、背後で牢の扉が重い音を響かせながら閉まる。

「今日から七日間、しっかりと頭を冷やす事だ。しかし、まさか貴様が牢に入る姿を見ることになるとはな」

「いやはや、人生それなりに生きてきましたが、牢に入れられるのはこれが初体験ですよ」

って言うか、出来れば初体験すらしたくありませんでしたが。どうせするんだったら、もっとむふふな初体験を健全な一男子として希望します。

「短期間とはいえ、若くして牢屋入りとは人として情けない限りだな」

「冗談でもそう言う事は言わないでください。まあ、正直覚悟はしてましたけどね」

今回の事は関羽の時とは訳が違います。王の生き死にに関わったくらいの大事でしたから、処罰もそれ相応のものが本来なら下されます。そこを自分は先の戦功で相殺し、こうして独房監禁にまで減刑したわけですが。

「報われぬな、貴様も」

「そうでもないですよ。少なくとも、今回の件で自分は一つ、曹操様への義理を果たせましたから」

虎牢関にて自分の命を生かしてくれた恩義。大きすぎる恩義に、報いる事が出来るか正直心配だったので、これで命の貸し借りに関してはチャラですね。いつまでも借りを作つたままでは、自分としてもあまり気分の良いものではありませんから。頭も上がりにくくなりますしね。

「……まあいい。貴様がそれで納得しているのなら、私がどうこう言っても仕方がない」

「おや、徐晃殿がお優しい。こんな自分に、どうこう言ってくれるつもりだったんですか？」

「それだけ言う元気があれば、なおさら必要あるまい。だがまあ……華琳様の命を救ってくれた事には礼を言う。我が君主を救ってくれて感謝する」

「……」

「な、なんだその、口を開けて呆けたような顔は」

「いえ、予想外すぎる目の前の光景に一瞬意識が飛んでました」

あの徐晃が、しかもよりによって嫌悪しているであろう自分に素直に感謝するなんて……明日は槍でも降るんでしょうか？ それとも天変地異の前触れ？ いやもう、なんか山札が上下ひっくり返る勢いでビツクリしましたよ。

「それにしても、普段から仏頂面の徐晃殿の素直な一面を見られるとは……なかなかどうして、牢に入るのも悪いことばかりではなかったと言う事ですね」

「なっ！　だ、誰が普段から仏頂面かつ！」

「だっていつも不機嫌そうな顔をしているじゃないですか。もとは美人なのにその悪癖の所為で台無しだー、なんて言うのは兵の間でも言われてますよ？」

これ本当です。徐晃の部隊の兵たちが言っていた事です。何気に徐晃ファンな兵が多くて、自分も最初は驚きました。まあ、確かに徐晃は自分から見ても美人ではありますからねえ。仏頂面を直して曹操指導のもと化粧とかすれば、大分印象変わると思います。

「びっ！？　き、貴様さては、私をからかって遊んでいるな！」

「いえいえ、そんな事ありませんよ？」

怒り心頭の様子徐晃にここは一つ、自分の純粋な気持ちを込めたナイスなスマイルを……ニヤリ。

「っ!? ぐっ、ぬぬぬううう! 貴様あ、やはりそうかあ! 私が貴様に手出しできぬからと遊んでいるのだな! そして今すぐそのふざけた顔を止める!」

「おやあ、逆効果? 自分、今の気持ちに正直な笑みを徐晃に向けつつもりだつたんですがねえ……くくく。」

「ふざけてなんていませんよ。ただ自分は、徐晃殿の微笑ましい一面にニヤけ じゃなかった。微笑んでいただけです」

「微笑みどころか悪意の笑みにすら感じるわっ! くっ、私の感謝を返せ!」

「そう言わずに。徐晃殿の? 素直? な謝罪は、ありがたく受け取らせてもらいますから」

「ぬっ、ああああああ!! やはり貴様などに礼を言ったのは間違いだつた!」

さらに怒る徐晃に自分は牢の中から変わらずニヤニヤと言う名の微笑みを向ける。別に感謝の一言くらい良いじゃないですか。それに、素直な態度の徐晃は見ててなかなか可愛かったですよ? これぞギャップ萌え! デレまではいかないものの、ツンの中に垣間見えた一瞬の可愛らしさに、自分ちよつとだけ萌えてます。まあ、そんな事を本人に知られたらそれこそガチで燃やされそうなので、口には絶対に出しませんが……。

「そうそう、それでこそ自分の知る徐晃殿。過ぎてしまった事を何時までも後悔して己を責めるなど、あなたらしくもない。確かに己の君主の危機に馳せ参じる事の出来なかった悔しさは分かりますが、

それを何時までも引きずって後々にまで影響を及ぼしては、それこそ臣下としての名折れですよ」

「なっ……」

自分の言葉に、一瞬にして徐晃の表情が怒りから驚愕の一色へと染まる。なぜ自分の心の内を知っているのか、なんて思っているのでしょうか、あれだけ分かりやすくされてしまえば逆に気付かない方がおかしいですよ。何しろ、河東からの帰還から今さっきまで、軽傷とはいえ所々に包帯を巻いた曹操の姿を見るたびに、手が白くなるほど拳を握り締め唇を強く噛んでいたのですから。

「もともと今回の作戦は、このような危険も覚悟の上で行われたもの。あなたが自分を責める必要など全くありませんし、むしろ意味のない後悔に縛られ俯く今のあなたは、見ていて酷く情けない」

今の徐晃は、いつも堂々とし兵たちの先頭に立って歩いてきた彼女にはとても見えません。己の無力さを痛感し、守るべき人の下へと参じられなかった自分を憎み、しかしながらそれを糧にして先に進む事を忘れてしまっている。そう、かつての自分がそうであったように。自分の力の小ささに気付かず、大切なものを守れなかった自分を憎み、果てには後悔と悲しみしか残らなかった自分の様に。

「人なんてものは、出来る事など限られているんですよ。今回はたまたま、あなたの出来た事が曹操様の守護では無く今回の作戦の主目的である豪族の鎮圧で、自分が出来た事が曹操様の守護だった。ただ、それだけの事です。そこに、あなたに向けられるべき憎しみも、責任もありはしません」

「……」

自分の言葉に徐晃がブルブルと肩を震わせる。自分に対する怒りか、それとも徐晃自身に対する怒りか。しかしウジウジと自分を責め続ける徐晃など、見ているこっちがイラつきます。それならばいい、自分が護衛として付いていながらなぜ曹操を危険な目にあわせたのか、と理不尽に殴られる方がよっぽど徐晃らしくて良いです。いえ、別に殴られたいとかそういう意味ではありませんよ？ つまりは気持ちの問題です。

「あなたは曹魏の名将、徐公明でしょう？ そしてあなたは曹魏のために尽くすと誓ったのでしょうか？ ならば必要のない後悔になど縛られずに、曹操様が無事であった事を幸いとして、次こそは自分が守るのだと意気込むくらい的事をして見せなさい。それすらもできないと言つのならば、あなたに曹魏の将を名乗る資格はない」

自分の言葉が終わると同時に独房に沈黙が流れる。その中で未だ小刻みに肩をふるわせ続ける徐晃。しかしそれは長く続かず、ふつと徐晃が小さく息を吐いたの機に、肩の震えが止まる。それを見て自分の顔に小さく笑みが浮かぶの感じながら、あえて視界から外していた徐晃の顔に視線を向けると、そこにはもう、いつもの堂々とした仏頂面があるだけだった。

「まさか、貴様如きにこの私が諭されるとはな」

「それだけ、あなたが腑抜けていたと言う事ですよ」

「ふっ、違くない」

徐晃の顔に小さく笑みが浮かぶ。ほう、なかなかどうして、徐晃も良い笑みを浮かべるのですね。独房に入って得た収穫パート2で

す。

「まあ、長い人生です。一度くらいは失敗を経験しておいた方が良
い事だつてありますよ。自分なんて失敗だらけの人生ですから」

「そんな貴様に私は諭されたのだがな」

「それじゃあ、今からあなたは自分より格下と言うこと……すいま
せん嘘です、ごめんなさい」

ですから守衛用の槍に手を伸ばそうとしないでください、この狭
い独房じゃ確実にヒットの後あの世行きです。

「あまり図に乗るなよ。先程の私は、一時の気の迷いを持っていた
にすぎん」

「そう言うことにはしておきます」

「……ちっ、まあいい。……烈華だ」

「……はい？」

うーん、おかしいですね。今、なにやらアリエナイものが聞こえ
てきたような。きつとあれです、自分の耳が一瞬おかしくなったん
ですね、分かります。これぞ耳の劣化現象、なんちゃって。と言う
訳で、もう一度彼女が何を言ったのか聞き直さなければ。

「すみません、今何と？」

「烈華、私の真名だ」

「……」

あははー、全然聞き間違いでも耳の故障でもありませんでしたよ
こんちくしょう！

って言うか、え、それって徐晃の真名ですよ？ ちょ、正気で
すかこの人。自分、参入する際に真名の交換はしないと先に遠慮し
たんですよ？

「徐晃殿、自分は」

「分かっている。だから、貴様が私に真名を預けなくなった時にそ
の名を呼べ。それ以外で呼ぼうものなら、貴様を殺す」

うええ〜、なんですかその一方的かつ面倒な取り決め。そも真名
を一方的に押し付けるって、普通ならあり得ないと思うんですが…
…。

「別段気負う必要はない。貴様も私の真名は秋蘭が言っていたのを
聞いた事があるだろう」

「他人から聞くのと、本人から聞くのは意味合いが別ですよ！ 全
く……」

いや、これは本当に困った。もしかして徐晃、自分に信頼を寄せ
てくれちゃったりとか、そんな感じなんですか？ くっ、柄にもな
く他人を諭すだなんて事をするからこんな事に……どうしましょう、
罪悪感が半端じゃない。

はあ〜っと自分が大きなため息を吐いていると、それを見た徐晃が口元をニヤリとさせて……ってムカア！！　まさか、さっきの仕返しに自分をからかったのかああああ！！

「じよ、徐お晃おおおお！！」

「はっはっはっ！　私で遊んだ罰だ、せいぜい悶々としながら七日間を牢の中で過ごすが良い」

「あ、待て！」

そう言って満足げな顔をして大きな声で笑いながら、徐晃は独房から立ち去る。

ふっ、くっくっくっ……いいでしょう徐晃、あなたのさっきの笑みは自分への挑戦状として受け取りました。ここから出たら絶対に屈辱二倍返しにしてやりますから、それまでは精々頭を洗って待っていなさい。絶対に自分以上に悶々とする様な状況に叩きこんでやりますから。

ああ、今日から七日後が早くも待ち遠しです。さて、一体どんな手段で行くか、じっくりと考える事にしましょう。

……あれ、なんか自分、徐晃の策に見事に嵌められた様な気がします。

独房談話 壱（後書き）

裏切っちゃうかも宣言を初っ端に曹操にしながらも、何気にその部下たちに気を配ってたりする何平です。そして徐晃への仕返しに悩むあまり、徐晃の悶々とさせてやる作戦に見事に嵌まった何平でもありました。

それでは、次回も宜しくお願いします！

独房談話 弐（前書き）

はがんいっしょう
破顔一笑

顔をほころばせて、にっこりと笑う様子。また、心配事が無くなったり、緊張が解けた時に笑みを浮かべる事。

独房談話 貳

どうも、何平です。

ただ今自分、絶賛独房ライフを満喫中です。いやはや、なかなか良いものですね。静かだし仕事も無い、誰かに追いかけられる事もなければ斬りかかられる心配も無い。なるほど、独房ライフがどれほどのものかと思っていました、いやはやゆっくりと傷の療養に努める事が出来ます。

しかし、一週間寝っぱなしでは流石に体が鈍りますから、傷に障らない程度で筋トレはしてます。今もこうして全身に気を流して地道に筋道の開発を行いつつ、腹筋だの腕立てだので体の方も鍛えます。ちなみに体全身に気を流すと、新陳代謝が活発化するのか傷の治りが早くなる事を発見しましたね。うん、やっぱり気はチート仕様だと、改めて思いました。

それから、お世辞にも綺麗とは言えなかった独房は、掃除道具一式を守衛の人に持ってきてもらって自分で掃除しました。今や見違えるほどに綺麗になった独房、日の光が差さないと寝台と簡易の机と椅子が一式しか置かれていない事を除けば、涼しくて静かとなかなか生活環境としては快適だったりします。と言うか、普段がやたらと騒がし過ぎるんですね。うん、きつとそうです。

それにしても、曹操も計らい方が微妙と言うかなんと言うか……。

まあ、今回の件について、曹操が自分にしなければならなかった事を踏まえれば仕方が無いとは思いますがね。

曹操は軍の、ひいては魏と言う国の頂点に立つ方ですから、当然

その肩書きに沿った責任を持ちます。その一つが、己が定めた法規を破った者へのしかるべき処罰の履行。罪には罰を……これは国が国としての秩序を保つために必ず持つべき理。ゆえに曹操は国のトップに立つ者として、此度の件で自分に独房監禁と言う処罰を与えた。一歩間違えれば兵の命を無駄に散らせることになったかも知れない、無謀な独断専行と言う名の罪に対する罰を。

これだけならば、特に計らいも何も無く、独断専行による軍規違反で頸を刎ねるなりすれば良い。しかし曹操は、自分に罰を与えると言う責任と共にもう一つ、軍のトップとして戦功を上げ帰還した自分を労う義務があります。いえ、義務と言うより役目と言った方が良いでしょう。国主の中には将を使い捨てる手駒と見る輩もいますから。

それはともかく、今回の件で曹操は自分に罰を与えなければならぬが、同時に戦功を労う事もしなければならぬ。その二つの義務を考慮して、そして導き出されたのが、今回の一週間の独房監禁。簡単に言えば、外出禁止の長期休暇ですね。今回の件の反省も兼ねて、罰として独房内でゆっくり頭を冷やししながら、傷の療養に専念しろ、ってなわけです。

一週間と言う期間の間に、見事に処罰と褒美を同梱させるとは……むう、流石は曹操。減刑のためにほとんど相殺されたとは言え、褒美に静かな場所とそこそこの長さの療養期間の提供に感謝ですね、あざーす。

とまあ、結果として自分の処遇はこんな感じで、今日で既に三日ほど生活してますね。兵たちの皆は事情を知ってか、それとも曹操の気遣いか、運ばれてくる食事なんかは普通にまともなので、少し部屋が狭い事と出かけられない事を除けば概ね現状に満足してます。

常時独房を監視している守衛たちとも仲良くなって、他愛ない話なんかで盛り上がったりもしてますから、寂しさを感じる事もないですしね。そして給仕係が可愛い女の子だった事に衝撃を受けた自分です。やべえ、曹操はホントに気がきく。そんな曹操にあざーす二号。何て言うか、今思えば処罰よりも褒美の方が比率高いのでは？

「まあ、別に良いですけど」

って言うかむしろウェルカムです。独房監禁一週間？ ハッ、それに付属してるオプシオンがこんなにも素晴らしいのだったら一カ月でも我慢してやんよ！

……いいえ、嘘です。流石に一カ月外出禁止は色々と堪えます。自分はこの歳でひつきーにはなりたくないです。

とっさに脳裏をよぎった考えに軽く自己嫌悪していると、こちらに近づいてくる足音が聞こえてきた。気になって鉄柵の外へと目を向けると、あらびつくり素敵なサドっ子金髪ツインが。

「言葉を交わす前から失礼な事を言われた気がするのはなぜかしら」

「いえいえ、それは恐らく立派な被害妄想ですよ」

素敵なサドっ子ではなく、曹操がそう言っただけ顔をしかめる。なまじ勘が鋭いと言うのも、ある意味困ったものですね。

「どうも、曹操様。曹操様自ら見舞いに来て下さるとは珍しいですね。仕事の方はひと段落したのですか？」

「ええ。貴方が抜けた穴が予想以上に大きくて苦勞するところもあ

つたけれどね

「それはまあ……」愁傷様です

絶賛独房にて謹慎中の自分には、それくらいしか言っただげられる言葉がありません。って言うかそうなるくらいなら自分に回す仕事をもう少し減らしましょうよ。そうすれば今お困りの事態は速やかに解決しますよ。

「それで、今日ここに来たのは何用で？」

「貴方に命を救ってもらったお礼を言いに来たのよ。まだ言っただけで無かったでしょう？」

「ああ、その事ですか」

納得してぼむっと自分が手を叩いていると、曹操が少し申し訳なさそうな表情で口を開く。

「ありがとう、何平。貴方のおかげで助かったわ」

「客将として当然の事をしたまでです。まあ一応、連合の時に作った命の借りはこれで無しと言う事にはしてもらいますけど」

「そうね。確かにこれで貸し借りは無し、それは私も納得しましたよ」

「……」

「……」

貸し借り云々の堅苦しい話に早くも決着がつき、気まずい沈黙が自分と曹操の間に流れる。その沈黙を、自分は一つ小さく息を吐く事で打ち破る。

「しかし処罰を与えた者に礼とは、これまた矛盾した行動ですね」

「言わないで。あの時は私も平常では無かったのよ」

「ふむ……それは自分の不甲斐なさに怒りを覚えていたからですか？」

そう言った途端、曹操が驚きの表情を浮かべる。

「……気づいていたの？」

「いえ。最初は自分が曹操様の琴線に触れるような事をしたのかと思っていたのですが、どれだけ考えても思い至らなかったのです。ならば曹操様自身の問題かなあ、と思っただけです」

それに曹操は見た目以上に自尊心が高いようですから、自分の下した決断の所為で部下たちの命を危険にさらし、さらには国をも危機に陥れかねない状況にまで発展しそうになってしまった事の不甲斐なさに、情けなさと共にそんな己への怒りも感じているのではないかと予想したただけですが、どうやら凶星だったみたいです。

「貴方に処罰を下して、その後冷静さを取り戻してから思ったわ。貴方が為した事からすれば、馬鹿正直に軍規に当てはめて処罰を下す必要なんてなくても良かったはずなのにつて。ふふっ、本当に……これじゃ貴方に八つ当たりしたも同然ね」

「誰しも感情に突き動かされてしまう事はあります。自分もそう言った事はありましたし。それに軍規は守らなければ駄目ですよ曹操様。特例を認めてしまえば、後に何らかの問題を生じさせかねませんから」

自嘲する様な笑みを浮かべる曹操をそう言って諭す。人は誰しも抑えられない感情に突き動かされてしまう事は多々ある事。それは曹操とて例外では無い。夏侯惇なんかはそれが顕著ではありますが、アレはアレでもう少し感情を抑えて欲しいところですね。いくらなんでも動かされ過ぎです。

「まあ、君主の鬱憤を受け止めるのも臣下の役目。溜めこんだりせず、身近な信頼できる人に頼ればいいんですよ。自分も客将の身ですが、曹操様の下にいる内は甘んじて引き受けますから」

曹操が背負うものは、曹操一人がその小さな肩に背負うにはあまりにも大き過ぎる。霸王として常に皆の先に立つとする心意気は立派です。しかし一人で背負いこんでは、いずれ曹操はその重さに耐えられず潰れてしまうでしょう。ゆえに臣下が、共に国と言う名の重荷を背負ってやるのが大切だと自分は思っています。

なんて事を思いながら曹操の顔を改めて見ると、何故か目をパチクリとさせた後、急にくっくっくっくと笑いだした。

「え〜っと、この場面ってどう考えても笑う所じゃないですよね？むしろしんみりしちゃうような場面ですよね？」

「ふふふっ、そうね、ごめんなさい。それにしても、随分と嬉しい事を言ってくれるじゃない」

「独房の中からなんて、格好の付かない所からですけどね」

先程の自嘲の時とは違う、柔らかい笑みを浮かべながら言う曹操に、自分も肩をすくめて言う。

「そうでもないわ。……それで、そう言ってくれる貴方は、これからもずっと私のそばにいてくれるのかしら？」

「さあ？ それは曹操様次第ですよ。勝負の事、忘れたわけではないですよね」

「あら、あれだけ私に意見しておいて随分と無責任じゃない。私はてつきり、矜持に従って私のそばに居続けてくれる事を決めたからこそその言葉かと思っただけど？」

なんだかいやらしい笑みを浮かべながらそう言う曹操。いやはや、別に自分はそのままで深く考えてませんよ。ただ今この場で思った事を口に出しただけです。って言うかマジでその、狙った獲物は逃がさない視線を止めてください。さつきから鳥肌が立ちっぱなしで困ります。なんか将来的には貞操の危機すら感じますし。

「まあ良いわ。いずれは私のものになるのだから、ここで答えを急かす必要もないでしょう」

「おお、凄い自信ですね」

「自信と言うより願望かしらね。私は関羽と同じくらいに、貴方の事も欲しい」

霸王自らここまで言ってくれるとは、客将冥利に尽きますね。ですが、それくらいの言葉では自分は簡単になびいたりはしませんよ。「何度も言いますが、自分がここに残るかどうかは全て曹操様次第。まあ、曹操様が自分をどのように魅せてくれるのか、期待させてもらいます」

「ええ、期待しながら覚悟しておく事ね」

独房に入って来たばかりの申し訳なさで一杯だった表情はとつと消え去り、何時も通りの覇気を纏った曹操が言う。それに自分は苦笑を浮かべて応える。

「ありがとう何平、おかげで楽しい時間が過ごせたわ」

「それは何より。次に話す時は、外でゆっくりと」

「楽しみにしておくわ。じゃあね」

最後にふつと微笑みを浮かべて、曹操は踵を返して独房から立ち去った。

……。

さて、この後は特にやる事も無いですし。

「……寝ますか」

その場で一度、大きく伸びをして寝台に倒れ込む。長話で疲れましたし、今日はこのまま惰眠をむさぼる事にしますかね。

独房談話 弐（後書き）

独房談話第二弾は曹操との談話でございました。違和感のある所もあると思いますが、そこはどうぞご容赦くださいませ。

それでは、次回も宜しくお願いします。

嵐の前の騒がしさ 壱（前書き）

（羞恥人を殺す）

時に羞恥心は人の心を折る例え。

B Y 何平

このことわざは何平の創作ですであしからず。リアルで使った
ら笑われるよ！

嵐の前の騒がしさ 壱

「うーん、やっぱりお天道様の下は良いですねえ」

よく晴れた早朝、誰もいない中庭で一週間ぶりの太陽の下で盛大に背伸びをする。おお、体のあちこちが盛大にポキポキなってますね。ラジオ体操でもしましょうか？

まあ、それはともかく。独房監禁から一週間、ようやく謹慎が解けて外出できるようになりました。ついでに言うと馬超とやり合った際に出来た傷は完治済み、それに加えて気の扱いも若干上達したりもして、まさに気分はルンルンです。いやまあ、暇つぶしにアレだけ気で遊んでたらこうもなりますよね。知ってます？ 気を指先に集中させて壁を突くと穴が開くんですよ？ これもはやチートの枠を超越して人間兵器と言っても過言じゃない気がしまくりです。そしてかの指パッチン大佐は間違いなく人間兵器。指パッチンで即放火って、それなんてチート？ ただし雨の日は除く。

……。

とりあえずは、テンションの上げ過ぎでとち狂ったこの思考を元に戻すのが先決ですね。深呼吸をして、一通り体をほぐしてつと……。

「……朝っぱらから中庭で、なに変な踊りしてるのよ。この変態」

……体をほぐしながら、朝っぱらから心に痛恨の一撃をもらいました。

「朝一番に顔を合わせて、最初に言う言葉がそれですか……荀？殿」

「あら、本当の事を言って何が悪いの？ 誰もいない中庭で一人で体をねじったり、ぐねぐねさせたり、拳句の果てにとび跳ねたり。何平、あなた七日も独房にいた所為で頭がおかしくなったんじゃないの？」

うっ……確かにラジオ体操なんて無いこの時代に一人で回旋したりジャンプしたりしてたら、そりや変態にも見えますよね。これは確かに自分の落ち度でした。ついでに言うと、これを見られたのが荀？だったと言う事に自分のリアルラックの無さに涙が出そうですよ、本当に。」

早朝の清々しい空気の中、図らずもテンションをがた落ちさせながら、依然変態を見る目を向けてくる荀？の前で体操を終える。

「で、結局何なの？ その変態染みた踊り」

「これは踊りじゃないですよ。そうですね……まあ、簡単に言うなら、寝起きで凝り固まった体をほぐすための準備運動みたいなものです。どうです、荀？殿も一緒に」

「はあ！？ なんで私がそんな変態踊りしなきゃならないのよ！」

「だから踊りでは無いと……まあ良いです。じゃあ、自分はこれで失礼しますよ。そろそろ仕事の時間なので」

荀？の凄まじい拒絶に一つため息を吐いてから、自分は執務室へ向かうために中庭を後にした。

執務室に来たは良いものの、場内が活発になるのにはまだ早すぎる時間帯のためか、久しぶりの執務室には処理すべき書簡の類がほとんど置かれていない。まあ、それも他の文官たちが起き出したのなら、半刻もしないうちに面倒な書簡が積み上げられてしまうのが世の現実と言うものであり、しかも独房での曹操との話から察するに、自分に割り当てられている仕事の量が決して少なくない事が判明してしまっていると言う悲しい現実に思わず内心涙する。

確かに自分は、軍師を除けば文武官たちの中でも政務に関しては並以上の手腕があると自負しています。董卓軍にいた頃は、それはもう詠にこき使われた訳ですし、今の曹操軍がいかに忙しいと言えども何なく対応できる自信はあります。

しかし、いくら対応できると言えども、その分確実に自分の時間は削られるわけで……。ぶっちゃけて言ってしまうと、面倒な仕事はあまりやりたくないと思ってしまうのは、楽を求めてしまう人間の悲しい性とも言えはいいのでしょうかね。

人として色々と駄目な考えを頭を振って追い出し、恐らくは同室である楽進が昨日終わらせきれなかったのだから数冊の書簡を自分の机へと移す。ここ数日、自分がいないがために負担させてしまった量を考えれば微々たる数ではありますが、せめてもの詫びにこれくらいはしたいと思うのが一文官として、また男としての意地ってやつです。

部隊状況報告の銘が張られた書簡を開き、記録と照らし合わせながら報告書の空欄を埋めていく。先の遠征では楽進たち北部組も相当疲弊したらしく、記録にある被害の甚大さに静かに黙禱を捧げる。その中でも、やはり李典隊の被害が群を抜いて酷い。理由は言わずもがな、馬岱の命がけの策による挟撃を受けたから。隊が違つゆえに詳しくは分からない、しかしあの時河東の城にいた曹操を始めとする将の部隊は皆無視できない被害を負っているに違いない事は報告書を見なくても分かります。

本当に、今回の賭けは辛勝……と、言わざるを得ませんね。

少々苦い気分になりながら、手は止めずに書簡を黙々と片づける。日が昇るにつれ城内に活気が満ち始めたのを肌で感じながら最後の書簡に手を伸ばす。と同時に、執務室の扉が開きまだ少し眠たげな顔をしながら楽進が入ってきた。

「おはようございます、楽進殿」

「……あ、おはようございます何平殿。……って、何平殿!？」

挨拶を交わし、ほんの数秒ぼーっと自分の顔を見つめた次の瞬間、いきなり目をカツと覚醒させて驚く楽進。そこまで大袈裟に驚いてくれるとは、喜ぶべきなのか悲しむべきなのか……。

「はい、自分は何平ですが何か？」

自分を見て口をパクパクさせている楽進に苦笑しつつも何時も通りの調子で声を掛ける。すると楽進はハッと我を取り戻し、羞恥心からか若干顔を赤くした。

「え、いやその……何平殿は今日で謹慎が解かれたんですね」

「はい。七日も仕事を押し付けてしまい、申し訳ありませんでした。お詫びと言つてはなんですが、残っていた書簡は勝手ながら自分が処理させてもらいましたので」

「いえ、お気になさらず。何平殿の分は皆で分担して片づけましたから、私自身はそこまで苦勞していません。私の方こそ、力及ばなかつた分の仕事を代わつていただき、ありがとうございます」

丁寧なお礼の言葉と共にペコリと頭を下げる楽進。いやはや、自分の執務室での同僚が楽進で良かったと、今更ながらに思つてしまいます。本当に良い娘ですね楽進は、将来はさぞ良いお嫁さんになると思います。無論、夫の方はほぼ確実に尻に敷かれてしまうでしょうけど。

そんな事を思いながらしばらく楽進と他愛無い話をしてしていると、楽進に続いてまたもや執務室扉が開き、数人の文官が入ってきて手に抱えていた書簡の山を執務机の上に情け容赦なく投下していく。やはりと言ふべきか、遅れを取り返せ、などと曹操の言葉が聞こえてきそうな書簡の量に盛大にため息を吐く。その差は楽進の机の量と比べれば一目瞭然。正直、何処から湧いた！ と叫びたいくらいに。

自分は隠す事もせず露骨に嫌そうな顔を文官たちに向けるも、ここごとく無視され文官たちは足早にぞろぞろと部屋から出ていく。文官たちが立ち去り楽進の方を見れば、楽進が真剣な眼差しを自分に向けながら手を合わせてました。

……うん、ご愁傷様って言いたいんですね、分かります。

楽進と共に席に着き、この仕事の量について曹操に必ず追加手当を請求することを胸に近いながら、何故か重く感じる腕を伸ばして自分は山の一番上の書簡を手を取った。

文字通り山のような仕事を手早く午前中で片付け、追加の仕事を荀？に押し付けられないよう提出は日が落ちてからにと脳内会議で満場一致の結論をはじき出し、自分は意気揚々に執務室を後にする。楽進の方は自分よりも先に政務を終え、警備隊として町の警邏に行きました。もともと楽進は警備隊の方が本職ですから、今回みたいな大規模な戦があった場合を除いて政務関係の仕事量はさほどでもないですね。自分の場合は日によって楽進たち警備隊のサポートに回ったり、部隊の報告書作成に回ったりと仕事の内容が決まっていないので、その日その日で仕事の量は変わりますけど。

まあ今のところは、待遇の改善を要求します！ ってな具合に声を上げたくなるほどの量でもありませんから別段気にする所はありません。多くても全力で片付ければ午前中に終わる程度ですし。無論、それは荀？による雑務の押し付け無かった場合の話で、最近はかなり頻度が少なくなりましたが、今でも時たまもの凄くどうでもいいタイプの雑務が自分に回ってきたりします。

曹操の目を盗みながらも自分に雑務を回す荀？……もはや王佐の

才（キリツ）が王佐の才（笑）です。そこまでする苟？に呆れと称賛がフィフティフィフティな今日この頃。

執務室から続く廊下を進み、城内を抜けて城下へと向かう。その途中、廊下の曲がり角でばったりと出くわした人物が

「げえ、徐晃」

「……それは使う相手を間違えている様に思うのは、私の気のせい
か？」

死角からの登場に若干ぶつかりそうになりながらも互いに体を静
止させる自分と徐晃。ついでに言うと、徐晃のそれは気のせいじゃ
ないと自分も思います。

「むっ、城下に行くのか」

自分の外行きの服装を見て徐晃が言う。今自分が着ているのは以
前曹操たちに強制的に買わされた服。自分は別に支給された服でも
構わないのですが、それだと曹操たちに見つかつた時にまたお小言
を言われかねません。まあ、折角自分のために見繕ってもらったも
のですし、何より自腹で買ったのですから着ないのはもったいない
と言う訳で、外出するときはなるべく私服を着るよう心がけている
のですが、おかげでこうして行き先がバレる様になつてしまったと
言う弊害が発生していたりもします。

「仕事の息抜きに少し。そう言う徐晃殿も城下に何か用ですか？」

「華琳様の護衛として付き添いでだ」

「何か城下で催しても？」

「催し、と言えばそうなるか。長らく徴兵のために出ていた奴らが今日戻ってくるのでな。華琳様自らその出向かいをするそうだ」

曹操自ら出迎えると言う事は、つまりはそれなりの立場、扱いを受けている人物と言う意味ですから……もしかして、別の用事で遠征に出ていた将だったりするのでしょうか。それにしても徴兵に出ていたとなると、なんだかあまり穏やかそうな雰囲気は感じられないです。

「そう言えば、貴様はまだあの三人とは顔合わせをしていなかったか。ならば丁度いい、貴様も華琳様の護衛として付き合え。人手多いに越したことはない」

徐晃の目がキラリと得物を見つけたかのように光る。ヤバい、これは確実に嫌なフラグが立った証拠に他ならない。

「え、あー、出来れば面倒事は遠慮したいので……さらば！」

「逃がさん！」

踵を返して全力で逃げ出そうとした自分の腕に、何処から取り出したのか素早く縄を投げ掛ける徐晃。悲しいかな、現在地たるこの場所は決して広くはない城内の廊下である訳でして……。

「ふんっ！」

「ぶぐらばっ！？」

先に輪の付いた縄は徐晃の見事なスローによって腕では無く自分の首に掛かり、そしてそのまま力を入れた徐晃に引つ張られ容赦なく首が締まる形に。さらにおいてけぼりをくらった首に引きずられるように体が急停止し、ついでに勢い余って足から浮き上がった体が重力と言つ名の無慈悲な理に素直に従い、自分は背中から盛大に地面に叩きつけられた。

「もう逃げられんぞ何平。神妙にしてお縄につけ」

「やるじゃねえか、とつつあん……がくり」

そんなやり取りを最後に、自分は尻を地面に削られながら城下へと連行された……。

城から出ると、城下はいつもよりも人が多くより一層の賑やかさを見せていた。恐らくはこれから出迎えると言つ人物に関係しているのしょうけど、全体的に見て男の割合が多い、いや多過ぎるように見えるのは、自分の目の錯覚では無いと思います。これは楽進達も警邏に苦勞しているでしょうねえ。

通りに溢れかえる人混みをかき分けながら、徐晃と共に曹操と待ち合わせをしていると言つ店に向かう。城から歩いて少しした所にある高級飯店、料理の味にうるさい曹操が認める店だけあって味はお墨付きではあるものの、いかんせん一品の値段が高い。決して薄

給ではない身であつても流石に容易には来れない店ですね。

店の中に入ると、曹操と夏侯淵、夏侯惇の三人に加え、曹操の親衛隊でる許緒と典韋が席を同じくしてお茶をしていた。

「お待たせいたしました華琳様」

「あら、遅かつたわね烈華。何平も加勢をありがとう」

「加勢する事、既に決定事項なんですね……」

にこやかに言う曹操に、遠慮なく思いつきりため息をつく。恐らくは自分が徐晃に捕まった事が分かつたんでしょね。夏侯淵もくすくす笑いを漏らしてますし。親衛隊の二人は不思議そうにしてますね。まあ、あまり話した事もないですから、仕方がないと言えばそうかもしれません。

「はあく、やつぱりここの茶は上手いなあ。……って、何平！ 貴様、なぜこんな所にいる！」

ただ約一名、今頃になって気付いた人もいるみたいですけど……。

夏侯惇が騒ぎ出す前に自分がここにいる理由を説明し、曹操を中に囲むような形で全員そろって店を出る。いつ何時、暗殺者がこの人混みを利用して飛び出してきたても対応できるよう、周囲を警戒しながら先に進む。それにしても、戻ってくるだけでこの混みよう……徐晃の言っていた三人と言うのは、それほどまでに民に人気があるのですか。徴兵に出ていた割には、なんだかミスマツチな感じですね。

一体どんな人物なのか、警戒は怠らずに想像していると、町で一番広い広場に到着する。町の通りよりもさらに人が集中するそこは、前世で言う一種のライブ会場を思い出させる有様で

「「「ほわっほわっ、ほわあああああ！」「」」

そこに集まる男共の暑苦しい声援に、盛大に鼓膜を振るわせられました。

「相変わらず凄い熱狂ぶりね」

「本当に、何が良くて集まるのやら……」

この熱狂の中でも普段通りの余裕の表情を見せる曹操と、訳が分からんと言った様子で頭を横に振る夏侯惇。ちなみに親衛隊の二人はと言うと、

「ほわー！」

「ほっわー！」

大声をあげ、見事に熱狂の仲間入りを果たしてました。

「一体何事なんですか、これ？」

イマイチ状況が理解できずに曹操に尋ねると、曹操はなにか納得した様子で頷く。

「そう言えば貴方にはまだ紹介していなかったわね。まあ、私に聞くよりも実際に見た方が早いでしょう。そろそろ始まると思うから、

前の方に行くわよ」

人が通れるような隙間のない人混みを強引にかき分け、広場の中心を目指して突き進む。途中凄まじいまでの殺気が何度も向けられたりするものの、自分たちの顔を見た瞬間に群衆の方が道を譲る。

まあ、相手が曹操である以上当たり前前の反応だと思いますが、どちらかと言うと先頭に立つ徐晃の威圧感が主な原因じゃないかと思つてたり。

まあ、それはともかく、人混みをかき分けてようやく群衆の最前列にまで抜ける。すると広場には明らかにこの時代の技術を無視したレベルのステージがセッティングされ、ご丁寧に舞台裏に続くと思われる場所やステージの脇などには警備兵の姿がしっかりと見える。まさに現代のライブ会場の名にふさわしい。

そうしてしばらくステージの方を眺めていると、突然爆発音と共に白煙が昇り、空から色とりどりの紙吹雪が舞ってきた。この時代紙は貴重ですから、このステージもの凄くお金がかかってるんじゃないかね。しかしそこまで曹操が力を入れる理由が分からない……。

などと考えにふけっていると、演奏隊による華やかなメロディが流れ始め、これまたどういう原理かカラースポットが照らすステージの上に三人の女性が黄色を基調としたステージ衣装を纏って登場する。その姿を一目見て、あーこれが男共が集まる理由かあ、としみじみ思ってしまった。露出多めのステージ衣装を纏う、傍から見ても可愛らしい美少女三人組。世の男共を引きつけるのに十分事足りると言うものです。

つまるるところ、彼女たちは魏がプロデュースするアイドルユニットなんですね。なるほど、周りの黄色い鉢巻やら羽織やらを身につ

けている人たちは彼女たちのファンと言う訳ですか。これだけの人気ですから、結構な額の興行収入があるんでしょうね。ステージと言ひ紙吹雪と言ひ、セットのレベルの高さに納得。スピーカーみたいなものやカラースポットの様なものは、依然として納得できませんけど。

三人の登場に会場のボルテージが一気にヒートアップする。そしてマイクラしきもを持った三人が、大きく息を吸い込んで声をあげた。

「みんな大好きー！」

「「「てんほーちゃーん!!」「」」

「みんなの妹！」

「「「ちーほーちゃーん!!」「」」

「とつても可愛い！」

「「「れんほーちゃーん!!」「」」

「「「ほわっほわっ、ほわあああああ!!」「」」

流石に耳を塞ぎなくなる爆音の如き男共の声。耳を塞いでもキーンとくる音量に思わず顔をしかめる。これ、立派に騒音と言つ名の公害に匹敵します。いやまあ、確かにここはライブ会場ですから正しい反応ではあるんでしょうけど。

「今日は私たちのために集まってくれてありがとうー! それじゃあ

早速一曲目、いっくよー！」

ファンの声援に応えるようにして歌い始める三人。三人が綺麗な声を重ねて歌うその曲に、不覚ながらも聞き惚れてしまう。なるほど、これだけのファンが付く理由も分かります。

演目通り、順調に進行するライブ。曲が変わることに熱狂もまた激しくなっていく中で、自分はようやく徐晃の言っていた事を理解した。曲の変わり目ごとに行われるステージトーク、その中にさりげなく、本当にさりげなく、魏軍への徴兵を促すような言葉がちらほら聞いて取れる。曰く、強い人が好き、戦う人ってカッコイイなどなど。ほんの少し、動くきっかけになるかならないか程度の言葉ですが、そのきっかけこそが一番大事なものですから、あの三人の言葉をきっかけに徴兵に応じる人が増える可能性は十分にあります。ゆえに徐晃はあの三人組のライブを徴兵だと言ったわけですね。

謎が解け一人でうんうんと納得していると、丁度五曲目が終わったところで、最初にちーほーと名乗っていた女の子がマイクを取ってさらにファンたちを煽る。

「ほらほら、みんなまだまだ盛り上がり足りないよー！ もっと大きな声で！」

「「「ほわっほわっ、ほわああああ！！」「」」

「全然ダメー！盛り上がってない人がまだいるよー！」

そう言ってちーほーが視線を向けた先は、間違いなく自分たちがいる場所。確かに自分たちは周りほど盛り上がりっぱなしですが、それはキャラ的にああ言った熱狂が似合わないからで……ってまさ

か、それを分かっただけで振りまいたね？ 彼女のしてやっつたりのな目がそう語っています。

そして周りを見回せば、ノリの悪い自分たちに向けて非難の目を向けるファンの男たちが。どうやら相手が国主だろうがお構いなしの様子。

「どうしますか？ ここは国主として、一つ熱狂の波に乗ってみます？」

「あ、あんな恥ずかしい真似できるわけじゃない！」

顔を真っ赤にして怒鳴る曹操。その顔を見て、自分の中の悪魔がいたずら心に火をともし。

「そうですか。しかしここでは退いては、王としての名折れだとは自分は思うんですけどねえ。ここに集まった民たちも不満を持っているようですし」

「うっ……」

改めて周りを見渡した曹操がファンたちの強い視線にのけ反る。

徐晃たちの放つ威圧感すら押し返す、これぞまさにファンたちの愛の力（笑）ですね。そして先の恨みを晴らすために、これに便乗しない手はありません。

「ほら、徐晃殿。ここは曹操様の護衛として、あなたもご一緒に」

「ご、護衛とそれとは全く関係ないだろう！ あんな恥ずかしい言葉を大声で言えるものか！」

二人が再起動するのを待たずに、自分はその場で大きく息を吸い込みそして、

「ほうわっ！　ほうわっ！！　ほうわああああ！！！！」

他のファンの男共にも負けない勢いで、先程ファンたちが叫んでいたのと同じ言葉で叫んだ。

「おー！　ようやく盛り上がってきたみたいだけど、まだ少し足りないよ！　ほらほらもう一度！」

心底楽しそうに言うちーほーと思わずアイコンタクト。我が同士に最高の笑みを浮かべながらグツと親指を立てる。

「さあて、曹操様、徐晃殿。約束……ですよね？」

「……分かったわよ、い、言えはいいでしょ言えば！　ほ、ほわー」

「全然聞こえないよー！」

「ほ、ほわー！」

「……ほわっほわあああ！！！！」

ついにヤケになった曹操が叫び、それに同調してファンたちが叫ぶ。余程恥ずかしかつたのか顔を真っ赤にしてうっつと唸る曹操に何故か夏侯惇が鼻血を吹いています。まあ、それは置いて、残るは徐晃ただ一人ですね

「さあ、徐晃殿。さあ、さあ！ さあ！！」

「うぐぐ……ほ、ほ……う、わー」

「全然ダメダメー！ もう一度、さんはい！」

ちーほーさん、どうやらあなたとは上手いお酒が飲めそうです。
いいぞ、もっとやれ！

「う、ううう、ぐすっ……ほ、ほわあー！」

「「「ほわっほわあああ！」「」」

半分涙目で叫ぶ徐晃に合わせ、またもやファンが叫ぶ。それにしても徐晃、まさか泣くほど恥ずかしかったなんて……。徐晃の涙目に不覚にもキュンとしてしまった自分はきっと人として駄目な奴です。

「うんうん！ それじゃあ盛り上がってきたところで六曲目ー！」

「「「ほわっほわっ、ほわあああ！」「」」

羞恥心にやられorzな二人を残し、ライブ会場はさらにヒートアップしていく。

さてさて、二人が復活するの待ちつつ、自分もこのライブを楽しむ事にしようかね。

嵐の前の騒がしさ 壱（後書き）

張三姉妹をようやく合流。と言ってもそこまで重要なキャラにはならない予定。ごめんよ三姉妹。

それでは、次回も宜しくお願いします。

嵐の前の騒がしさ 弐（前書き）

どうもお久しぶりです。三週間ぶりの更新となります。
最近更新速度が亀になりつつありますが、何卒最後まで宜しくお願
いします。

そして前書き「ことわざ&四字熟語ネタ」が切れつつある今日この
頃。そろそろコーナー変更のお知らせかも。

では、ごきげん。

嵐の前の騒がしさ 貳

一刻ほど続いた美少女三人組によるライブがようやく終わりを告げ、広場を満たしていた熱狂も徐々に霧散していく。広場に集結していたファンたちも解散していき、残ったのはステージの解体作業組と三人組に用のある自分達だけ。人のまばらになった広場を改めて見回してみるとその広さがよく分かる。つい先ほどまではこれだけのスペースを人が埋め尽くしていたんですね。いやはや、凄まじい人気っぷりに自分も脱帽です。

ライブが終わった事でようやく羞恥心から解放されたらしい曹操と徐晃がよろよろとつつ立ち直るのを横目で見て楽しみながら、ステージ裏から三人組が現われるのを待つ。二人が完全復帰したしばらくして、先程のステージ衣装とは違う、恐らくはこれが私服だと思われる姿で三人組がこちらへとやってきた。

「遅れて申し訳ありません、曹操様。後片付けに少し手間取ってしまいました」

紫色のショートヘアに眼鏡を掛けた娘が先頭に立ち、後ろにピンク色の長髪の娘と水色のサイドポニーの娘が続いてくる。なんか今更な気もしますけど、何をしたらあんな個性豊かな髪の色になるんですかね。金髪や赤毛はともかくとして。

「別にそこまで待ってないわ。それよりも、三人とも公演ご苦労さま」

「えへへ、曹操様に褒められちゃったね、ちいちゃん」

「もう、お姉ちゃん浮かれすぎ！」

ポワポワとした雰囲気を纏わせながら言うピンク髪の娘に水色髪の娘が言う。この二人が姉妹と言う事は恐らくあの娘も姉妹ですよね。と言うか、さつきから気になってるんですけど、てんほーやちーほーって、どうやら三人の真名ですよ？ しかし、真名はおいそれと他人に教えるものではありませんし、ですが現にファンの方々は普通に呼んでいた……それともこの三姉妹、日常生活でも芸名で呼び合っているとか？

「三人とも積もる話はいくらでもあるでしょうけど、それは後にしてもらえるかしら？」

じゃれ合いが長引きそうだと感じたのが、曹操が有無を言わせない威圧感を纏って言う。二人もそれを感じたのが、素直にじゃれ合うのをやめる。紫髪の娘、れんほーが解体作業組のリーダーらしき男に一言入れているのを待ち、戻ってきたところで三人と合流する。

そして来た時よりかは幾分気を抜きながら、曹操と三人を護衛しつつ城へと向かった。

城に戻ってすぐ、王座の間に自分達を含めた主要な將軍と軍師が召集される。名目上は公演と言えども、徴兵活動と言う軍事行動の一環を含む以上は当然報告の義務がありますし。それに顔合わせに

しても、こうして一堂に集まれば全然問題ないわけですから、そういう意味では一石二鳥ですか。まあ、親睦会やらは何やらは横に置いてくとして。

軍議の際と同じ場所に立ちながら、恐らくは三姉妹の頭脳係と思われるれんほーが曹操に成果を報告するのを他の者たち同様静かに聞く。どうやら成果は上々らしく、興行収入もかなりの額を記録し、徴兵に関してもかなりの若者たちが同行していた兵たちに志願を申し出たとのこと。

ふーむ、これはまた……曹操の軍事力がまた一段と規模を大きくしますね。広大な領土の治安維持と防衛に大きく兵力を削がれるとしても、まだなお強大の一言に尽きる軍事力となりそうです。軍資金に関しても興行収入その他で十分潤っていますし、ますます曹操の勢いには手がつけられなくなりそうです。

「さて、報告はその位にして。そろそろ自己紹介をしてもらっても良いかしら？」

報告が終わったのか曹操が言い、それに従って郭嘉と程？が順に自己紹介をしていく。その途中で分かった事ですが、どうやら三人姉妹はわけあって名を捨て、真名だけで生きていく道を選んだのだとか。どのような理由かは知りませんが、よほどの覚悟がなければできない事でしょうね。なんて事を思いながら、二人が終わるのを見計らって、自分も名乗るために一歩前へと出る。

「何平と申します。以後お見知り置きを」

「本当に相変わらずね。もっと他に言う事はないの？」

呆れ顔で曹操が言う。そう言われなくても、特にこれと言って紹介するようないこともありませんし……。

「じゃあ、好きな食べ物は何より魚です」

「それは教えて意味があるのか？」

夏侯惇が首をひねる。だってもしかしたら、ひよんな事でご飯を作ってもらえる機会があるかもしれないじゃないですか。

「ん〜、趣味は市場を散策する事ですけど」

「それ、ただ単に暇人なだけですよ」

……ほう、そんな事を言いますか荀？さん。

「ああそれから、最近荀？殿にいじめられて困ってます」

「ちょっと！ 人の印象悪くするようなこと言わないですよ！ 誤解されるでしょ！」

「ちなみに最近、荀？殿が曹操様から極秘裏に盗み出した下着の数が十を超えました」

「嘘おっしゃい！ 私は一枚しか盗んでな」

「「「……」」」

「あ……」

自分の失言に気がついた荀？の顔がみるみる青くなっていく。ついでに言つと曹操の荀？を見る眼が厳しい！

「桂花、しばらくの間、閨を共にするのはおあずけね」

「そ、そんなあゝ……」

この世の終わりとばかりに荀？がその場に崩れ落ちる。それにしても、まさか本当に盗んでいようとは。下着泥棒ダメ絶対駄目！

「とまあ、こんな自分ですが、何卒よろしくお願いします」

改めてペコリと頭を下げる。すると三人姉妹の次女、地和が目を細め小さく笑みを浮かべながら自分の方を見る。

「ふふーん、なるほど。あなたの事、なんとなくわかった気がする」

「おや、そうですか？」

などと、とぼけたように言う自分の顔にも、恐らく笑みが浮かんでいるのでしょう。地和以外の二人は怪訝そうな顔をしていますし、曹操たちは盛大にため息を吐いています。

「まあ、真名は残念ながらお教えできませんが、仲良くしてくださいね地和殿」

「こつちこそ、宜しく」

お互いにしっかりと握手をかわす。うん、この人とは上手くやっていけそうです。色々な意味で。

地和との挨拶を終えたその後、残る天和と人和とも挨拶を交わし顔合わせは無事終了。遠征から戻って来たばかりの三人には休息が与えられ、自分たちは残りの仕事を片づけるため各々自分の執務室へと戻った。

執務室に戻った自分は、顔合わせの間に文官たちが持つてきていた政務を早速片づけに掛かる。追加で運び込まれていた仕事の主な内容は、最近仕官してきた新兵たちの訓練に関して。楽進たちが率いる警備隊は城下の治安維持がもっぱらの仕事ではありませんが、仕官したばかりの正規軍に加わるにはまだ未熟な者を訓練するための部隊でもありません。この警備隊で一定の実力を身につけたものは警備隊から正規軍へと配置替えされることになっています。

ゆえに今回、三姉妹の影響で新規仕官者が大量に増えたため、こうして各部隊への割り振りに追われているわけです。まあ、自分は割り振りだけで実際に隊を受け持つわけではないため、存外気楽なものなのですけど。

「ある程度予想はしていましたが、これは想像以上に多いですね」

「はい。流石にこの数は……」

警備隊の隊長を務める楽進も、あまりの数の多さに悩んでいる様

子。

「ん、少し早いですが現在の警備隊配属の者を纏めて上にあげてしまいいましようか？」

「しかしそれでは、警備隊の質が大きく落ちてしまします」

「あー、確かに」

現在警備隊に所属する練度の高い兵たちを纏めて上にあげてしまえば、治安を維持する警備隊の質が大きく下がってしまう。そうなれば、城下の治安維持の方に問題が発生してしまう可能性があるが、すね。

「一番の解決法は、何平殿が部隊を受け持つてくれる事なのですが」

「いや、いやいやいや。それだけは自分、承諾しかねます。これ以上仕事が増えるのは御め んんっ、自分は専属の部隊を持って良い身分ではありませんから」

「……前半本音がだだもれでしたが」

「うっ……」

楽進が呆れをにじませた半眼で自分を見る。うっ、その絶対零度の眼差しが今まで感じてきた視線の何よりも痛い！

「ま、まあ、そんなことせずとも何とかありますって。ほら、もう一頑張りしましよう」

「……」

一つ大きなため息をつき、自分の問いかけに無言のまま事務机に向かいなおる楽進。なんでしょう、部屋の空気が凄く重いです……。

「あのー、楽進殿？」

「……」

「おーい、楽進殿」

「……」

「がくくし」

「気が散るので静かにしててください」

「……はい」

うう、楽進めっちゃ怒ってるよ。って、このやり取り前にもありましたね。

「はあ〜……全く、こっちの気も知らないで」

「何平殿、何か言いましたか？」

「いえ、何も」

目ざとく自分のぼやきにツッコミを入れてきた楽進をいなし、自分も目の前の事務仕事に専念する。自分が部隊を持ってないのは、曹

操との勝負に関わるからだと言うのに……まあ、だからと言ってその事を楽進に伝えるわけにもいきませんが。やれやれ、こればかりは自分が甘んじて受けなければいけない事なんでしょうね。

内心で深くため息をつきながら、何時もより処理のし甲斐がある書簡の山を、自分は楽進と共に黙々と削って行った。

仕事を始めてから数刻して、ようやく全ての書簡を処理し終え、長い時間机に向かっていたために凝った肩をぐるぐると回しながら席を立つ。結局のところ、新兵たちの割り振りは、警備隊の現在の半数を上にあげ、数は増えるもののその空いた所に新兵たちを編入すると言つ事で話が纏まりました。終始楽進は渋い顔をしていましたが、まあ苦労しなさい若人よ。自分も十分若人ですが……。

んんっ、それはともかくとして。この事はやはり曹操の耳には入らねなければなりません。いえ、それは当り前なのですが、今回は特にです。何せ警備隊だけでなく軍隊の方にも影響が出ますから。もつとも、今回の事は軍の方にとっては朗報になること間違いなしでしょう。十分に訓練された兵が補充されるわけですから。まあ、逆に警備隊の方は苦勞増し増しなんですがね。しかし、この決定を于禁や李典が聞いたら一体どんな反応をする事やら。期待半分、心配半分です。恐らくは鬼一とか、人でなし一、とか言われるのでしょうけど。

「それでは何平殿、私は華琳様にご報告に行きますので」

「分かりました。では自分は、李典たちの方に伝えに行きましょう」

「宜しく願います」

そう言っつていくつかの書簡と手に楽進は部屋を出る。さて、自分も二人の事の次第を伝えに行かなければ。こみあげてくる欠伸を噛み殺しながら、自分も部屋を出て李典たちの執務室へと足を運ぶ。そう遠くない道のりの廊下を進み、そうして到着した二人の執務室の扉を開ける。

「お邪魔しますよ、李典殿、于禁殿つておや？」

扉を開け中に入ると、そこはなんと無人。執務机には書簡が少なからず積み残されているものの、それを処理する本人たちの姿がない。どうやらこの時間は政務では無く、警邏の方に顔を出しているのでしょう。まあ、別段急いで伝える要件でもありませんし、件の事については二人が戻って来てからでも構わないでしょう。そう納得して部屋を出る。

「おお、ここにいたか何平」

部屋を出るのと同時に、背後から声をかけられる。声の主の方へと振り返ると、私服姿の夏侯淵がこちらへと近寄ってきた。鎧姿でないあたり、今日の調練は徐晃か夏侯惇が担当しているのですかね？

「こんにちは妙才殿。して、自分に何か用ですか？」

「うむ。何平、お主今時間はあるか？」

「はい、ありますけど」

「そうか。なら、少し手伝ってほしい事がある。構わないか？」

手伝ってほしい事？

……。

ん、大六感的に嫌な予感はないですけど……。

「ふふ、そう警戒しなくてもいい。何も姉者の相手をさせようなどとは思っておらんよ」

その言葉に以前歓迎兼御前試合として夏侯惇と戦った事を思い出す。確かにアレは自分も結構燃えてましたけど、やはり心身共に疲れるので御免です。あの時の摩擦は熱かった……。

「まあ、手伝いと言っても買い物に付き合ってもらいたいだけだ。今回は人手が必要なのでな」

「ああ、そう言う事でしたら良いですよ。むしろ最初からそう言うてください」

「そうだな、次回からはそうするでしょう」

おお、次回も手伝わされることが決定してしまいました。

「さて、そうと決まれば早く行くぞ。事は急を要するのぞな」

ふむ、そうですね。それなら自分も急がなければ……って、あれ？

「えっと、急ぐのは良いんですけど……なんで腕にお縄を頂戴？」

「烈華が急ぐ時はこうすると良いと言っていたのでな」

くそっ！ 公明の縄かつ！ じゃなかった、公明の畏かつ！ しかも他人を通じて発動させるところにそこはかたなく悪意を感じられるぞ！

「あー、別に逃げたりしませんから、って言うかこれ無くても急ぎますから、外してもらっていいですか？」

「私はこのままでも構わないのだが……」

いえ、自分がもの凄く構います。そりゃあもう全力で。

夏侯淵が残念そうな、本当に残念そうな顔で縄をほどいていく。あれ、自分間違った事言っていないはずなのに胸が痛い……。そんな自分を見て夏侯淵が何かを納得したように頷き、

「縄が嫌なら鎖もあるぞ？」

「いえ、遠慮します」

真顔でそう言う夏侯淵に即答しながら、夏侯淵の真顔と曇り無き眼に心の底から恐怖しました……。

紆余曲折を経て、ようやく自分は夏侯淵と共に城下へと繰り出す。そう言えば夏侯淵と二人で城下に来るのはこれが二度目でしょうか。まあ、二人なのは大抵最初だけなのでしょうけど。

「待たせたな姉者」

その予想に違わず、待ち合わせしていたのであろう夏侯惇と自分たちは合流する。

「遅いぞ秋蘭！ 売り切れてしまったらどうする！」

「済まないな。だが、華琳様のためにはどうしても人手が必要だからな」

「おや、曹操様に何か贈り物でも？」

「そつだ。この先にある甘味処の菓子なのだが……」

「ああ、なるほど」

いくらその手の事に疎い自分でも、城下の警邏に当たっていれば見当がつく。つい最近この先に出来た甘味処の菓子は、それはそれは甘く美味であると女性たちの間で人気らしいのだが、どうやら店主に何かこだわりがあるのか、一日数量限定な上におひとり様一つまでと言う変わった販売の仕方をしているのだとか。そして曹操も例にもれずに女性、やはり甘いものが好きなのは変わらない様子。そ

う言えば以前、女の子は遣伝子レベルで甘いものが好きなのだと言語している人がいましたっけ？

まあ、それはともかく。これで自分が呼ばれた理由がはっきりしました。つまりは日ごろ仕事に励んでいる曹操にその菓子を馳走するため、しかし自分たちも菓子を食べてみたいゆえに、菓子を三つ手に入れるその数合わせとして自分が呼ばれた訳ですね。

「いやはや、仲良き事は良い事かな」

「何をぶつぶつほざいている！ 早く行くぞ！」

「姉者、そんなに急ぐと危ないぞ」

もう待つのも我慢の限界と言わんばかりに体をうずうずさせている夏侯惇に夏侯淵と二人で苦笑しつつも、件の甘味処へと向かう。通りを二つほど越えた所に立つその場所には、既に多くの買い物客が長蛇の列をなして並んでいた。数量限定と聞いて本当に買えるのか心配になります、夏侯淵曰く限定と言ってもそこその数はあるらしく、今から並んでもちゃんと買えるとの事。ざっと見ても二、三百は並んでいると思うのですが、いやはや機械も何も無いこの時代にそれだけ以上の数を作る職人さんには脱帽です。

「しかしまあ、並んでいる人のほとんどが女性だとやはり自分は目立ちますね」

「しかもその連れが魏の將軍たる姉者だからな。仕方がないさ」

「そう言うあなたもそうですからね？」

とは言っても、そんな事で揺るぐはずも無いのが女性の強かさと言つべきか、普通なら驚いて若干距離を取つてもおかしくはないだろうに、並ぶ女性たちは例え將軍だろうと関係無しと言わんなかりにぴっちりと列をなしている。

「ふむ、第一の策は不発に終わったか……」

「前々から思つてましたけど、妙才殿つて結構悪ら　いえ、なかなか黒いですよね」

「前者と後者、あまり意味に違いがあるとは思えんが？」

「わざとですから」

「ふつ、私の事をどうこう言う以前に、一度自分がどうなのかを胸に手を当てて聞いてみることを勧めよう」

くつくつくつ、と真昼間の城下で自分と夏侯淵は笑つ。その光景に夏侯惇は冷や汗を流して後ずさるも、やはりと言つべきか並ぶ女性たちは不動であった。心なしか、顔色が青くなっている人がいる様な気がします。

「うーん駄目ですね、素直に並びましょう」

「うむ、やはりそれが一番か」

その言葉に周囲の女性たちが分かりやすく安堵の表情を浮かべる。その中に。だったら最初からそうしなさいよ的な表情も見受けられましたが、さて何のことやら。

今度こそ大人しく自分たちは購入待ちの列に並ぶ。どうやら思っていたよりもこの店の回転はそう遅くはないようで、自分たちが並び始めて半刻程で目当ての菓子を購入する事が出来た。買ったばかりの菓子を手に、夏侯惇が嬉しさ爆発と言った様子で小躍りしている。

「やったぞ秋蘭！ これで華琳様もきつとお喜びなるはず！」

「姉者、嬉しいのは分かるが、はしゃぎすぎて落とさないでくれよ？」

「分かっている。ああ、早く城に戻って華琳様にお渡ししたい！」

「全然分かってないですよね……」

「まあ、アレも姉者の可愛い所と言えばそうなのだが……」

自分たちよりも少し先にいる夏侯惇を、少しばかり複雑な表情でそういう夏侯淵。姉が可愛い半分、心配半分と言ったところですね。って言うか、天下の往来でキャーほーだなんてリアルに叫ぶ人を自分は初めて目にしました。

「にしても、いくらなんでもはしゃぎ過ぎでは？」

とうとうその場でくるくる踊り出した夏侯惇を見て、思わず夏侯淵に言う。つまりは、暗にアレを止めなくていいのかと聞いたのですが、どうやら夏侯淵は心配よりも愛でる方を選びとった様子。うん、目が逝ってますよ目が。

そんな二人の様子に深く嘆息していると、向こうからこちらへと

向かってくる馬車が一台。なんか町中に出すスピードを遙かにオーバーしている様な……って、馬車に乗り手がいない？

「まさか、暴走か？ しかもこの向きだと……まずい、姉者避ける！」

「元讓殿！」

このままでは危険な事に即座に気付いた自分と夏侯淵が、菓子に夢中で油断しきっている夏侯惇に注意を促すも、未だに歓喜し続けている彼女には全く聞こえていない様子。その間にも、夏侯惇の背後から凄まじい勢いで馬車が迫ってくる！

このままでは……轢かれる！

「姉者ああ！」

「くっ、然らば御免！」

なりふり構わず、自分はその場から飛び出す。そして背後から迫る脅威にようやく気付き身を硬直させた夏侯惇を勢いに任せて馬車の進路上から突き飛ばし、自分もそのまま全力で横っ跳びに回避する。間一髪、馬車は自分の横をそのまま通り過ぎていった。

「姉者！ 姉者ああああ！」

夏侯淵がすぐさま、突き飛ばされ向こうに転がっている夏侯惇に近寄る。幸いにして服が汚れただけで済んだ様子の夏侯惇は、いくばくもせずにムクリと起き上がる。

「無事か姉者！ 怪我はないか？」

「あ、ああ。大丈夫だ秋蘭、心配を掛けた」

「例なら何平にだ。何平が姉者を助けてくれたのだ」

「そうか。済まん何平、助かった」

「いえ、ご無事な様で何より」

パンパンと服についた汚れを払いながら、自分もその場から立ち上がる。さて、夏侯惇はどうにか助かりましたけど、問題は向こうに転がっている残骸もとい……。

「まあ、菓子の方は助けられませんでしたけど……」

「ん？ あ、ああ、ああああー！！！！？」

城下に夏侯惇の叫び声が響き渡る。急いで菓子に駆け寄るも、その姿は既に残骸。菓子を入れていた籠はひしゃげ、ばらまかれた菓子は大地の上で無残に砕け散っている。もはや到底食べられるようなものではない。それを見て夏侯惇の肩が震えだす。もしかして怒りのあまり先の馬車の持ち主を斬りに行くなんて考えているんじゃない……。

「う、うう、ううわああああん！」

「……」

と言う予想は大いに外れ、はい予想の遙か斜め上を行きました。

夏侯惇、マジ号泣。滝涙とはこういうものなのですね。

「ああほら、泣くな姉者」

「うづうづわああああ、しゅーらんー!!」

夏侯淵に背中をさすられてさらに大号泣する夏侯惇。うーん、場所が場所なだけにいかなものかと思いますが、夏侯惇が泣く気持ちも分かるためにどうすればいいのやら。まあとりあえず、馬の持ち主は後で警備隊の総力を挙げて探し出した後場合によっては殴ります。

「妙才殿、ひとまず元議殿を城に連れ帰ってあげてください。馬車の件に関しては自分が処理しておきますから」

「済まないな。ほら姉者、いくぞ」

「うええええん、ひぐつ、ぐすつ……」

相変わらず泣きやまない夏侯惇を連れ、夏侯淵は城の方へと帰って行く。それを確認した後、騒ぎを聞きつけやってきた警備兵に手早く指示を出す。馬の確保と持ち主の確認、それらを数人に任せ、自分もその場を後にしようとしたその時、意外な人物と鉢合わせした。

「あら、何平じゃない」

少し驚いた表情を浮かべた曹操が、少し大きめの籠を手にも前に立っていた。

「曹操様、どうしてここに？」

「私はこの先にある甘味処の菓子を買いに来ただけよ？」

そう言っつて籠を開け、中に入った数個の菓子を見せる。

「しかし、あそこは一人一つまでと言う決まりでは？」

「一応、私はこの国の王なのだけど」

そう言っつて曹操が大きくため息をつく。

「つまりは王権乱用と。良いんですか、民の手本たる王がそんなこととして」

「別に順を抜かして買った訳じゃないわ。前々から頼んでおいたものを今日取りに来ただけよ。頼むと言う事に関して、王としての立場を利用したと言うのには違いないのだけど」

「一般の人からは予約なんて受け付けてませんでしょうしね。にしても、曹操様も存外女の子をやっているじゃありませんか」

「あら、私が男に見えるのかしら？」

言い知れぬ覇気を纏いながら言う曹操。ここでふざけたら容赦なく自分が男でなくされそうで怖い……。

「いえ、女の子ですね。それもとびきり美人な」

「……貴方に世辞を言われると鳥肌が立つんだけど」

言いながら腕をさする曹操。むう、失礼な。

「じゃあもつと背中がかゆくなるようなやつを」

「もう良いから。それで、さっきこの辺りから春蘭の声が聞こえてきたと思ったのだけれど？」

「ああ、それは……」

曹操がここに来るまでの事を細やかに説明する。菓子的事、馬車の事、夏侯惇の号泣のことなどなど。それらを全て聞き終えた後、曹操はやれやれと首を横に振った。

「全く、そんな気遣いしなくてもちゃんと節度は保ってるわよ」

「それだけじゃなく、純粹に曹操様に喜んでほしかったんだと思いますよ」

「そうね。それにしても、ちゃんと全員分注文しておいて良かったわ」

何処か嬉しそうな顔をしながら、恐らくは夏侯惇たち重臣全員分の数を用意したのであるう籠を覗き込む。

「うーん、元讓殿が自分のふがいなさにさらに泣きそうな気がしますけど」

「それに関しては春蘭の落ち度だもの。まあ、そこを私が慰めてあげると言うのもまた一興かしら？」

「うわあ、これでまた元讓殿のSSS値が上昇ですか」

説明しよう！ SSS値とは夏侯惇が持つ『好き好き曹操様値』の略称である！ 好き好き曹操様値が何かという質問は聞くだけ野暮ですよ。

「え、えす？ なんなのそれ？」

「簡単に言えば、元讓殿がまた曹操様を好きになってしまっただけのことです」

「今でも十分、春蘭は私の事を愛してくれていると自負しているのだけど？」

「人の感情に際限なんてありませんよ。もっとも、もし際限があるのだとしたら、元讓殿はとっくの昔に沸騰してそうです」

「ふふっ、そうかもしれないわね」

曹操がおかしそうにくすくすと笑う。頭から湯気を上げながら踊り狂う夏侯惇……うん、シユール。

「ま、何はともあれ、これで万事解決しそうで安心しました」

「苦勞を掛けたわね。それから春蘭を助けてくれた事にもお礼を言っておくわ」

「同僚が目の前で、なんて言うのも嫌ですしね。馬車の件は、警備隊の方に任せておいてください」

「ええ、お願いするわ」

「それでは、自分はこれで」

そう言って自分は曹操と別れる。さて、そろそろ警備兵たちばかりに全部任せるのもアレですし、自分も少し休日労働ならぬ休憩時間労働に向かうとしましょう。

おもむろに路上にぶちまけられた菓子をひしゃげた籠に片づけた後、状況を確認しに詰所に向かうため、自分はその場を後にした。

嵐の前の騒がしさ 弐（後書き）

最近昼でも閉じそうになってしまふ自分の目に「ひらげごま」とか
言っでやりたい。それくらいに眠い自分はきつと体内時計が終わっ
てる。

イギリスに研修に行った時は素晴らしく健康的な日々を送れたのに
なあ。

つまるところ、作者の体内時計は常にマイナス9時間なのか……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6486t/>

真・恋姫†無双 ～王平伝～

2011年12月11日18時50分発行